
普通の人が送る日常

未吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通の人を送る日常

【Nコード】

N5693X

【作者名】

末吉

【あらすじ】

このお話は、主人公こと池田連（すごいのは特技だけ！）が、親友の岡田庄一と木村圭、さらにはクラスの有名人である中島元ほか多数「ちよっと、私たちの扱いおかしくない!？」、「そうです!」「何考えてるの?」「ひどい。」が学校内外でお送りするドツタンバツタンの学園コメディ!ちなみに、基本的に主人公は苦労しかしません。「もつと僕を考えて!!」「俺たちの紹介は?」「…なし?」「あはは…。」

ただ今十二月に突入中!

「私たちのことは？」「まあ、いらしている気がするな。」
「そうか。」
「そうか。」

はじまり(前書き)

初投稿なので、なにぶん至らぬところがあると思いますが、よろしくお願いいたします。

はじまり

はじまるよ

注意。

これから始まるお話は、普段脇役みたいな人たちに焦点をあてたものです。あまりにもありふれているので、面白さを保証できません。それでも良いのでしたら、どうぞご覧下さい。あと、世界観がとんでもないことになっています。ご了承ください。

ついでに言いますと、読者たちの『普通』とは違う感覚の人たちなので、おかしいな?と思っても見逃してください。

それでは、『普通の人を送る日常』のはじまりはじまり。(パチパチパチ!)

はじまり(後書き)

感想をよろしくお願いいたします。

一 五月中旬のある日（前書き）

普通って、なんでしょう？

一 五月中旬のある日

『普通』という言葉の定義は『当たり前』。僕はこう思う。
なぜなら、俳優やタレント、お笑い芸人がテレビに出ていること。
これも普通。

僕みたいにも個性らしいものが無い人の事。これも普通。
勝手に人の中心にいる人。これも、彼らにとっては普通だ。
まだほかにも事例をあげられるけど、これらを見ただけで「普通」
の利便性が分かる。

なぜこんなことを最初に述べたかというと、『普通』という言葉
がいかにも汎用性に優れているのかを分かってもらったため。

でも僕は、この言葉が嫌いじゃない。
だって人によって意味に違いがあるのは当たり前だと思っているか
ら。

「……という訳なんだけど。二人ともどう思う？」

「そんな感じだよな。……っていうか、いきなりどうしたんだ？」

「……………それをテーマとして書けば、課題が終わる。」

僕が言ったことに対して、二人がそれぞれの反応を示した。

あ、僕の名前は池田^{いけだれん}連。今年で十五になる中学三年生だ。

自分の身体的特徴は何もない。いわゆる、普通だ。

身長は平均男子よりちょっと低いくらいで、体重は完全に平均。

髪型は特に何もしていない。

体つきも中肉中背。得意なものも苦手なものも何もないという、完
全に『特徴なし』。眼鏡をかけてるわけでもないから、本当に特徴
が無い。

……………毎度のことながら泣けて
くるね、これ。

気を取り直して。

次に、僕の話聴いていた二人の友達の紹介でもしよっか。

僕の話にいち早く感想を言ってくれたのが、僕の友達の岡田庄一^{おかだしょういち}。

僕と同じクラスで、三年間一緒だった腐れ縁。庄一の特徴を挙げるなら、彼もまた「普通」。

ただ、髪型が特徴的で、オールバックにしている。本人曰く「カッコよくな？」だって。

僕に訊かれても困るんだけど。

そして、もう一人が木村圭^{きむらいけい}。彼は二年生のクラス替えで同じクラスになり、友達となった。

彼も普通だけど、特徴的なものがいくつもある。

一つ目。まず無口。

彼は普段寡黙を貫いていて、答える時は必ず間が出来る。その上、無表情。

二つ目。情報がはやい。

どこで聴いてくるのか分からないけど、僕達はその話をする時には既に裏付けが終わっている。本当に、どこで聴いてくるんだろう？他にもあるけど、そろそろ話を戻そうか。

「どうしてって、前に庄一が言ってたじゃん。『普通ってなんだろうな？』って。」

庄一が訊いてきたので、僕は答えた。

「そうだった？」

「……それは本当。」

庄一が首をひねると、圭がつぶやく感じで言った。ちなみに、今は昼食の時間で、僕達は自分たちが使っている教室で食べている。給食っていう制度があったらしいんだけど、今や完全に自分たちで持つて来いって感じになっている。

だから、僕達は弁当を持ってきて、席を移動して、集まって話しながら食べている。

先程の圭の発言で会話が止まり、食べることに集中した僕達は、廊下側が何やら騒がしいことに気付いた。

「ん？」「あれ？」「…？」

そう思つて僕達は廊下側に視線を向けると、何やら言い争っている人達がいた。しかし、

「またあいつらか。本当に懲りねえな。」

「あれがあの人たちの『普通』だよ。」

「……あの二人は犬猿の仲。よつて、その取り巻きの人達も同じ。」
僕達は騒がしい原因が分かったので、再び食べることに集中した。

ちなみに、言い争っているのは清水しみず久実くみさんと寺井てらいすみ董みれさん。二人とも学校内で一、二を争う美少女だ。そして彼女らが喧嘩をする原因が……、

「大変だなあ、あいつ。」

「……リア充死ね。」

「怖いこと言わないでよ、圭。それと、庄一の言う事にも一理あるね。毎回大変だね、中島君。」

僕が言つた中島君である。

彼の名前は中島元。なかしまはじめこのクラスでよくあの二人に絡まれる人。どうして絡まれるのかというと、彼に対する好意を二人とも持っているから。どうして二人が中島君に好意を持っているのかというと、圭曰く『色々あつた。』んだつて。詳細はまた今度ね。

あ、肝心なこと言うの忘れてた。

清水さんは超能力者、寺井さんは魔術師、中島君はそのどちらでもあり、どちらでもない。

……

その君。今『こいつの頭おかしくなったのか?』と思つたる。

本当にいるんだよ。この世界には普通の人もたくさんいるけど、超能力者やロボット、魔術師なんかは当たり前。他のところだと幽霊が実体化してるところがあるんだつて。結構シニールだよね。

閑話休題。

「……これもいつものこと。」

「そうだね。」「そうだな。」

僕達は、最初に見ただけであとは食事をすることにした。すると、庄一がふとこう言ってきた。

「なあ、お前ら。好きな人っているか？」

「は？」

「……………」

いきなり何を言い出すの庄一？と思って、

「何を言い出すの庄一？」

と僕は訊いた。すると庄一は、頭をかきながらこう言った。

「いやな、俺、好きな人ができたんだよ。」

「そうなの？」……………振られるのがオチ。」

庄一が言ったことに対して、僕達の反応はバラバラだった。そして、

「圭。なんだと？」

圭の言葉で庄一がキレそうになった。

「落ち着いてよ。で？庄一、誰の事が好きになったの？」

それを僕が抑えて話を促す。これも普通だ。

庄一は言いにくそうに、

「と、隣のクラスの藤井さんだ。」

「ああ、あのおとなしそうな人か。可愛いといえば、可愛いかな？」

「……………騙されるな。あいつは化粧であそこまで可愛く見せているだけだ。」

「」

庄一の好きな人を聴いた僕達の反応は、またもバラバラだった。し

かも、圭。君、とんでもないこと言わなかった？

圭が言ったことに庄一がまたもキレそうになった。

「なんだと！？証拠見せるや！」

「お、落ち着いてよ、庄一！！みんな見てるから！！！」

ちよつとみんなから注目を浴びたけど、特に何も言われなかった。

良かった良かった。

と思つていたら、圭が一枚の写真を机に置いた。

「……………証拠。」

「これが、か？」

と言って、庄一はその写真を見た。

て言うか、圭。君はその写真をどこで撮ってきたんだい？
そんな僕の心の中のツッコミも知らず、圭は弁当を食べていた。僕も食べてるよ。

写真を見て圭に返した後、庄一は弁当を食べながらこう言った。

「女って、怖いな。」

一体どんな写真だったのだろう？と思ったけど、もうすぐ午後の授業が始まるので、話題に出さなかった。

一 五月中旬のある日（後書き）

続きます。

五月中旬のある日(2)

午後の授業が始まった。僕達の学校は中・高とエスカレーター式なので、受験が無い。

という事で、高校の授業をちよつと先取りするという事になる。でもそれは冬からなので、今は普通に中学三年の授業を聴いている。

この日の午後の最初の授業は、超能力を持つている人以外は自習。僕達の授業は、主に超能力者や魔術師に影響されている。つまり、一日で二回は自習があるという事。

ちなみに、中島君は何故か超能力の人達に連れて行かれた。これもいつものことだ。そして必ず寺井さんが荒れる。これもまたいつものこと。更に言うと、魔術師の時は魔術師に連れて行かれ、清水さんが荒れる。これももはや日常。

それで僕らはというと、

「また荒れてんなあ、寺井さん。」

「……構うなら一人で逝つて来い。俺を巻き込むな。」

「僕もちよつと……。」

「誰がそんなことするか。それと圭。行って来い、の字が違う気がしたんだが、気のせいか？」

「……気のせい。」

現在大人しく自習しています。元々、僕達の席は近いので、こうして話しながら自習できるんだよ。僕達三人とも窓側ね。

自習をしながらも、僕達はおしゃべりを続けていた。

「なあ、久し振りに連の家行こうぜ。」

「そうやって僕のところでご飯食べるんでしょ？」

「それはついでだって。お前のところの方が面白いだろ？」

「……毎度のことながら、連の両親は面白い。」

「息子に言う言葉じゃないよね？それ。」

「で、いいのか？」

「うん……別に問題はないよ。ただ」

「ただ？」

「昼時にピンポイントで来ないでよ？つくるの大変なんだから。」

「……了解した。今度は昼前から行こう。」

「圭。食べるの前提だよな？」

「分かったよ。自分たちで昼食べてからにするよ。」

「それならいいよ。」

これで会話が終了してしまったので、僕は勉強に集中していった。

ちなみに、何故か僕の家で遊ぶときは二人が昼時に来る。しかも、材料を持ってきて。そして、その材料で僕が二人の昼食をつくる。

どうして僕なのかというと、両親が家事や財産管理を一切やらないから。そのせいで、僕は家事全般が得意なんだ。

中でも、料理の腕が他の人曰く「超一流シエフと同じかそれ以上」なんだって。僕は本職の人に勝っていると思わないけどね。

五月中旬のある日(3)

家庭科の実習では、エプロンづくりや三角巾づくりを他の人より手早くかつ綺麗に仕上げたので、先生は啞然としていた。

その上、一年の頃の調理実習では僕が進んで一人の班になって先生に「一人で大丈夫なの？」と心配されたけど、そんな心配をよそに僕は一人で料理を完成させた。どの班よりも早く。

それを見届けた先生やほかの生徒は驚き、僕が料理をしながら使わなくなった器具を片付けていたのを見て、さらに驚かれた。その後、僕が食べていたら先生が「味見しても良い？」と言って僕がつくった料理を食べて、数分硬直した後に「各自づくり終わった後は、食べてから片付けて教室に戻ってね！」と泣きながら走り去っていき、しばらく学校に來なかつた。

それからというもの、家庭科の調理実習の時は、先生が僕に味付けのポイントを熱心に訊きに來る。あとは……班になった人(一年の時は一人、二年の時は庄一と圭、三年も同じ予定。)以外の人が、たまたま料理を食べに來る。そして、食べた後は何かに感動したような感じで戻っていく。どうしたのかな？

これは置いといて。今は自習だ、自習。そう思つて勉強していると、庄一が思い出したかのようにこう言つた。

「そつえばよ、お前らの好きな人つて誰？」

その言葉に、僕達は一瞬固まつた。

「何をいい出すの？」

「……俺はいない。」

そつ言つと、庄一は真面目な顔をして、

「俺だけ言つので、なんか不公平じゃね？」

と言つた。

「あれは君が自分で話題を振つてきたんだよね？僕達は別に言わな

くていいんじゃない？」

「…そうだ、そうだ。」

そう僕達が抗議すると、庄一は「うっ！そ、そうだったな。」と言
ってこの話題は終わった。

そうしていたら、授業が終わった。なので、自習に使っていたも
のを片付けて次の授業の準備をした。

五月中旬のある日(3) (後書き)

感想をよろしくお願いします。

五月中旬のある日(4)

放課後。僕達三人は部活にも何も入っていないので、一緒に帰った。ただ、それは校門前までで、校門を過ぎたらそれぞれ道が違う。

「今日も中島が修羅場ってたな。」

「大変そうだったね。」

「……爆ぜろ。」

圭へのツツコミはスルーして、

「また明日ね。」

「おう。」「……また。」

と言って三人ともバラバラに帰っていった。これもいつもだね。

ちなみに、件の中島君だけど、彼はあの二人のおかげ(せい?)で放課後は三人で何かやっているんだって。圭が言うには『…悪党退治』だって。ま、この詳細も話せたら、という事で。

僕は、いつもの道を歩きながら冷蔵庫に何が残っているのか思い出していた。そして、残っていたもので夕飯の献立がつかれるか考えた。

何パターンか考えて、明日以降の食材がなくなるという結論が出たので、僕はダッシュで家に帰った。

「ただいま……。」

「連、お帰り！！」「お帰り！！」

ドアを開けて呼吸を整えていたら、両親がいつものように来た。

ここで僕の両親の紹介をしよう。

僕の両親の職業は普通の会社員で、家事を全くしない駄目夫婦だ。それでも、会社では個人業績一位、二位を二人で独占しているんだって。以上、両親の説明でした。

「それにしても、どうしたんだ？走って家に帰ってくるなんて。」

「そうね。何があったの？」

僕の表情を見て、両親はそう訊いてきた。僕は息を整え終えてから

言った。

「今日の夕飯で冷蔵庫の中身がなくなるから、明日以降の食材を買ってこないといけないから走って戻ってきたんだよ。」

その言葉で両親は「そ、それはマズイ!」「買ってこなきゃ!」と慌てていたけど、途端に落ち着いた。この後の台詞はもう覚えていたので、僕は先手を打った。

「二人とも、夕飯の前に買い物行くから荷物持ちお願いね。」

「え〜。」

「さつさとしないと夕飯遅れるよ!」

「「イエツサ!」!」

相変らずノリはいいんだから。そう思いながら僕は、荷物を部屋に置いて財布を持って家を出た。

家を出てから。

「連。何買った?」

「とりあえず、肉と野菜と魚と卵、後は調理済みの料理を何個かと、冷凍食品。」

「随分あるわね。」

「冷凍食品と卵以外は商店街で買えるから、先にスーパーに行こうか。」

という訳で、僕達はスーパーに行くことになった。

「……………一般的には、僕が荷物持ちなんだけどね。」

スーパー内にて。

僕が普段から買っている冷凍食品+これがあれば楽になりそうな冷凍食品を買って、卵のところに向かっていると、ばったり中島君と出会った。

「あ、中島君。今日も大変だったね。」

「あ、君は池田君。どうしたんだい?」

「僕は明日の買い出し。君は?」

「僕はお使いだよ。まったく、うちの両親は人使いが荒いんだから。」

「うらやましいよ。家事やってくれるんでしょ？」

「そういえば、買い出しって言ってたけど、両親は？」

「お菓子コーナーにでもいるんじゃない？」

「え？」

中島君の間の抜けた返事が聴こえたので、僕は「また明日ね。」と言つて卵が置いてあるところに向かった。

残された中島君はというと、

「そういえば、池田君つて料理上手いんだつた。食べたことないけど。家でも作っているからかな？董の料理の先生になって欲しいな。」

と呟きながら、本来の目的通りお使いをすることにした。

「二人とも、買い物終わつたから荷物持つの手伝つてよ。」

僕は会計を終えた後、お菓子コーナーに向かったら、やっぱり僕の両親がいた。

両親は、僕の声で名残惜しそうにお菓子を見ていたけど、僕が持っていた荷物を持ってくれた。

「二人とも、商店街いくよ。」

「その代りなにか買つても良いか？」

「そうね。何か欲しいわね。」

貴方達は子供ですか？と思つて思わず口に出しそうになつたけど、これはいつもの事なので、

「商店街でね。」

と言つて僕達は、スーパーを後にした。

商店街にて。

「ヨオ連！何買つてく？ステーキ用の肉か？」

「いやそれじゃなくて。いつものお肉が欲しいんだけど。」

「なんだよ。たまには奮発したらどうだ？」

「それやると両親がそれ以外食べなくなるから。」

「お前も大変なんだな。分かったよ。いつものだな。」
僕は肉屋で買い物をしていた。

ここは、僕が小学生のころから買い物をしている場所。スーパーが出来ても、ほとんどの主婦（夫）はここで買い物をしている。

あ、両親は二人で買い物してるよ。二人で千円なら何を買ってもいいという条件を出して商店街内に放置している。ま、何かあったら携帯電話に連絡してくれるように言ってるから大丈夫。

「毎度あり！また来いよ！！」

「うん！」

と言って僕は、次の店へと向かった。

その後、八百屋と魚屋をまわってそれぞれで買い物を済まして、両親に電話した。

『もしもし、連？こっちはまだ終わってないんだが。』

「どい？」

『駄菓子屋。』

「そっち行くからそこで買い物しててね。」

『動く気はないから。』

と言われて電話が切れた。

これだから、息子の僕がすっかりしないといけないと思っちゃうんだよね。

年相応の悩み事したいなあ、と思いながら、僕は駄菓子屋さんに向かった。

「いらつしゃ・・・連か！久し振りだな！」

「相変わらず口調が男前だよ、ミネルバさん。」

「ははは！お前も相変わらず両親に苦労してんじやない。……お前さんの両親ならあっち側にいるぜ。」

と言って指を指すミネルバさん。僕はお礼を言いながらそこへ向かった。

「この店の名前は『藤井駄菓子店』。この商店街が出来た時からある古株で、改築、増築を経て、三階建てで一階一階のスペースが広い構造になった。なので、駄菓子の種類が凄い多い。今は、千種類ぐらいあったような気がする。そのおかげで、結構色々な所からここに買い物へ来る人が多い。」

ちなみに、ミネルバさんはこの店の一階の店員で、ロボットである。ここで働いている理由は、『こういうところで働きたかった』からだって。

そして向かった先にいたのは、案の定、僕の両親だった。しかも、かごの中には結構な量（しかも安い物ばかり）が入っていた。

「もういいんじゃないの？」

と僕が呆れていると、

「まだだ。あと四百円は使える。」

「そうね。正確に言うなら四百三十円ね。」

と商品の値段を見ながら答える両親。

これを食材の買い物時に発揮してくれないかな。と僕は思った。

今更だけど、我が家の財産管理や家計簿も僕がやっている。

理由は、放って置くとあの両親が変な買い物をしてくる恐れがあるから。

なので、両親の小遣いも僕が渡している。僕？小遣いなんてないよ。家の事で手一杯だから、余裕がないしね。

あ、それでもたまに自分の買い物をしたりするよ？その時は自分で貯めていたお金を使うから、文句は言われないしね。

このことを言うと、庄一たちに「お前、完全に主夫だな。」……納得。校内頼れそうな人一位。」と言われた。圭の最後の台詞が気になったけど。

話を戻そうか。

尚も悩み続けているので僕はこう言った。

「それぐらいでいいでしょ？また今度買い物に来るときに、その四百円繰り越せば。」

その言葉にめざとく両親は反応し、

「それはいい考えだ！」

と言って二人でレジに向かった。……仲はいいんだけどね、あの二人。

そう思いながら、僕は後を追った。

帰り道。

「結構買ったな。」

「そうね。」

「約六百円でそれだけ買えたことに僕は驚いたよ。」

ニコニコ顔の両親と対照的に、僕は驚いていた。

まあ、これも我が家にとっては普通だから何も言わないけど。

そう思いながら僕達は家に帰った。

「……ただいま。」

家に帰ってきてきてまずやること。それは食材を冷蔵庫に移すと同時に、使う食材を冷蔵庫から出すこと。僕は慣れた手つきでそれを行い、両親はテレビを見ていた。缶ビールを開けながら。

もう慣れたので、何も言わずに夕飯づくりに取り掛かった。

ここからの描写を簡略化すると、

夕飯をつくり終え、テーブルに並べ、両親と一緒に食べながら今日の話をし、風呂を沸かした後に食器を洗い、それが終わったら部屋に戻って、財布を戻したり明日の準備をしたりして、それが終わった後風呂に入って、最終的に今日の出費を家計簿に書いて僕は寝た。

これが僕の日常。そんな変わらないものが僕は好きだ。みんなもそうでしょ？

人物紹介 その一（前書き）

今回は、主人公たちの紹介です。

人物紹介 その一

池田連（15）・・・このお話の主人公。一言でいうなら、ものすごい苦勞人。容姿、成績ともに普通だが、家事スキルだけは一般人より上。特に、料理の腕は超一流の料理人をも凌ぐと言われている。そうなった理由は、単に両親がズボラなだけなわけだが。趣味は読書のみ。家事は特技。

岡田庄一（15）・・・連の友達。連とは中学一年のころからの腐れ縁で、とても仲が良い。彼も普通の人だが、髪型をオールバックにしている。とても友達思いで、義理堅い。ちなみに、身体能力がとても高い。

木村圭（15）・・・同じく連の友達。連と庄一とは中学二年のころに知り合い、それから仲良くしている。普段は無口、無表情である。話すときはほとんどが本音である。また、情報通でもあり、連たちが訊いてきたときにはその真偽がわかっている。

連の両親・・・彼らは普通のサラリーマンだが、社内業績は夫婦で首位を独占している。そのせいなのかどうか知らないが、家事を全くやらないし、基本的に変な買い物をしていくことが多い。ただし、最近はそのような買い物をしてこなくなつたみたいだ。

中島元（15）・・・連のクラスメイト。彼も苦勞人。しかし、連には及ばない。とある事情から、警察に協力している。基本的に温厚であるが、友達を傷つけた者に対しては、自身の能力を使って報復をする。ちなみに、彼は鈍感ではあるが、それにはきちんとした理由がある。連たちとは違い能力者であるが、彼の能力は謎である。

清水久美（15）・・・同じく連のクラスメイト。彼女は元の幼馴染であり、彼のが好きである。熱心にアプローチをするが、当の本人は全く気が付いていない。また、彼と同じく警察に協力しており、自身の能力を持って犯人は捕まえている。超能力者で美人。

寺井董（15）・・・同じく連のクラスメイト。とある事件をきっかけに元のこと好きになり、清水とはライバル。また、自身が魔術師なのでそれもあいつって、基本的に清水とは仲が悪い。大金持ちでおしとやか、さらには美人という欠点がなさそうな感じの彼女だが、とんでもない欠点が存在する。

人物紹介 その一（後書き）

人物紹介は、話が進むにつれて挿入していきます。

二 六月下旬のある日（前書き）

嫉妬って、人間が最も陥りやすい感情ですよね。

二 六月下旬のある日

朝。学校の教室にて。

「それにしてもよ、先週と先々週にあの三人いなかったけど、なにがあつたんだ？」

いつものように授業が始まる前に僕達三人は喋っていたら、庄一がそう言った。

「しかも、それまで騒がれていたゾンビ騒ぎもなくなつちまつたしよ。」

「そうだよな。しかもこのクラスに何故か一人増えてるしね。」
僕は頷きながらチラリと廊下側を見た。

そこには、今日新しく転校してきた、レイジニア・ゼロという少女（レイシア人・ネクロマンサー）が早速中島君争奪戦に参加していた。ちなみに、結構美人で、最初の挨拶が『ハジメの嫁のレイジニア・ゼロよ。これからよろしくね。』と笑いながら言った時には、圭を含め複数の男子と寺井さん、清水さんが殺気立っていた。僕は本気で死ぬかと思った。

僕と同じように廊下側を見た圭が、ポツリと言った。

「……………羨ま…何でもない。毒殺したい。」

「いや。素直に羨ましいと言えればいいじゃん。それに、毒殺したいなんて冗談でも言うもんじゃないよ。」

と僕はツツコンでみたけど、圭にスルーされ、庄一は何も言ってくれなかった。

本気、じゃないよね？ね？

と、気まずい雰囲気の流れたところで圭が口を開いた。

「……………詳細が聴きたいなら、放課後にいつもの場所で。」
それを受けて僕達は、

「応。分かった。」「うん、いつもの場所だね。」

と言った。その時に、授業が始まったので僕は教壇に視線を向けた。

一校時目が終わり、僕は次の授業の準備をしながら話していた。「それにしても、レイジニアさんって頭いいね。」

「だよなあ。さっきの時間に指された時だって平然と答えてるもんなあ。しかも正解してたし。」

「そうだね。」

と言いながらレイジニアさんの席を見てみると、人ばかり（主に女子）が出来ていた。

「まあ、珍しいわな。転校生つてのは、いつだって。」

と庄一が言っていたら、今まで会話に参加していなかった圭が口を開いた。

「……いつ殺す？」

「ちよつと待って。誰を殺すのかは大体想像できるけど、そんなことしたら清水さん達に殺されちゃうよ。」

「分かってる。けどな、男にはやらなきゃいけない時があるんだ！」

僕が止めようとしたら、庄一まで話に加わった。そしたら、その話に反応したクラスの男子がこちらに集まって、

「だよなあ。」「なんだお前ら、中島の事殺るのか？」「だったら

俺も混ぜろ。」「俺もだ！」「あいつだけつてのは許せねえしな！」

「そうだそうだ！」

収拾がつかなくなっていた。

僕はもう諦めて、授業の準備をし終わったら寝ることにした。

そんな僕の事は放って置かれて、庄一と圭が中心となって話し合いが始まった。

「おい、いつやるんだ？」

「昼休みでいいだろ。」

「でもどうするんだ？中島に接触するにしても、結構大変だろ？」

「……そこは中島の性格を利用する。」

「あいつはお人好しだからな。」

「でもその後はどうする？接触した後は？」

「そこは即行連行して、人が来ない場所に連れていけばいいだろ。」

「その場所は？」

「俺、いい場所知ってるぜ。」

「よし！次の授業の休み時間は班分けと場所の確認だ。解散。」

庄一がそう言ったと同時に先生が来た。

先生は「早く席に着きなさい。」と庄一たちを注意して授業を始めた。

六月下旬のある日(2)

二校時目が終わった休み時間。僕は途中からしかノートを書いてなかったの、誰にノートを借りようか悩んでいた。本当は、圭か庄一に借りたかったんだけど、終わったと同時に何処かへ行ってしまった。次は魔術師の人たちの授業があるため、僕達は自習。それを利用してノートを書き写したかったんだけど男子はみんないなくなってるし、女子も魔術師の人はいないから、ここにいるのは超能力の女子たちと、レイジニアさん。それと、僕と同じで普通の女子。さてどうしたものかと悩んでいると、

「何か悩み事でも？」

と声をかけられた。

その声に顔を上げるとそこにいたのは

「レイジニアさん？」

そう、レイジニアさんだった。

「憶えてくれたの？やっぱり珍しいから？」

僕が名前を呼んだだけで、レイジニアさんはそう訊いてきた。確かに珍しいけど…

「最初の発言で忘れる人はいないんじゃない？」

「そう？」

そこで不思議がらないですよ。とツツコミたかったけど、僕は最初に言われた一言が気になった。

「ねえレイジニアさん。」

「なに？」

「どうして僕が悩んでると分かったの？」

そう僕が訊くと、レイジニアさんは笑い出した。

「ちよつとお、笑わないでくれる？」

「ご、ごめんなさい……………ちよ、ちよつと思ひ出しちゃって。」

「もつ。」

何を思い出したのかはあえて訊かない。だって、藪をつついて変なものが出てほしくないから。

ひとしきり笑った後、レイジニアさんはこう言った。

「で？何に悩んでるの？」

僕の質問はスルーですか。と言いたかったけど、彼女はまたスルーするだろうと思ったので、言わなかった。そして改めて彼女の容姿を意識してしまった。

そのせいで、

「ちよ、ちよっとさっきの授業の事でね！」

最初と最後がおかしくなった。この気持ち、わからないかな？

すると、レイジニアさんはクスリと笑ってこう言った。綺麗だなあ。

「さっきの授業？どこか分からない所でもあったのかしら？」

「いや、違うんだ。ノートを半分取り忘れてね。」

こうなったら正直に言うしかなかった。そしたら、
「そうなの？それだったら貸してあげるわよ？」

と言って、レイジニアさんは自分の席に戻ってノートを取って来てくれた。

「はい。」

「あ、どうもありがとう。」

僕はレイジニアさんにお礼を言うてから、ふと気になることを訊いてみた。

「ねえレイジニアさん。」

「まだなにか？」

「どうしてこんなことしてくれるの？」

そう訊くと、レイジニアさんはちよっと考えてから、こう言った。

「ハジメのおかげかしら。」

「え？」

「ハジメが『人の気持ちは憎しみだけじゃない！！優しさだってあるんだ！！』って言うてくれたから。こうやって一人でも多くの人

と仲良くなるうとしてるの。」

中島君ってたまにいいこと言うよね。そう思っただけはもう言った。

「何があったか知らないけど、今は楽しいでしょ？」

僕が言ったことにレイジニアさんはちょっと驚いたけど、

「そうね。ハジメのおかげで楽しいわ。」

と言って自分の席へ戻っていった。

僕はというと、レイジニアさんから借りたノートを書き写すことにした。

授業が始まってから十分後、男子連中（魔術師以外）が戻ってきた。

でも、結局は誰も注意しなかった。面倒だから。僕はレイジニアさんのノートを書き写していたから。

レイジニアさんのノートはとも分かりやすかった。字もきれいだし、要領よくまとめられている。僕も一応「綺麗」にまとめているけど、彼女はそれより上だった。

そのおかげで、書き写すのにそう時間がかからなかった。

僕がノートを返そうとしていたら、庄一たちが席に着いたので、僕は自習道具の下にノートを置いて勉強してるふりをした。ノートを広げただけなんだけどね。

庄一と圭が席に着いてから、僕は訊いた。

「ずいぶん遅かったね。」

「ああ。色々決めなきゃいけなかったもんでな。」

「……いつでも決行可能。」

なんだかすごいことになったなあ、と思いつながら僕は一応忠告することにした。

「二人とも、やる気はないの？成功しても失敗しても大変なことになるからね？」

「止めんじゃねえぞ。俺達はもうやるしかないんだ。」

「……男の敵の抹殺での死は本望。」

でも駄目だった。この二人はやる気満々だった。恐らく、このクラ

スの男子は僕を除いて全員が中島君を殺そうとするだろう（比喻でも揶揄でもなく）。

この後の男子の末路が想像できてしまったため、僕は暗澹たる思いだった。

六月下旬のある日(2) (後書き)

男子の暴走がひどすぎる(笑)

六月下旬のある日(3) (前書き)

男子の暴走って、FFF団に似てますよね。

六月下旬のある日(3)

三校時目が終わり、この後の授業が終われば昼だと思いながら僕はレイジニアさんの席へ向かった。ちなみに、他の男子は何処かへ行ってしまった。恐らく最終確認をしているのだろう。

「レイジニアさん。」

「なにかしら？え〜っと、さっき話したのは分かってるけど、名前は覚えていないの。教えてくれない？」

「そうだろうと僕は思っていたので、改めて自己紹介をした。」

「池田連だよ。連でいいよ。」

「そう、レンね。もしかして、さっきのノート分かりづらかった？そう訊いてきたので、僕は必死に否定しながらこう言った。」

「ち、違っよ！とても上手にまとめられていたさ！終わったから返そうとしていただけだよ！」

「あ、そうなの？それならよかった。」

と、安心した様子のレイジニアさん。

いい人に見えるけどなあ、と思いながら僕は、レイジニアさんにノートを返した。

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

用事が終わったので、僕は自分の席に戻って授業が始まるまで待つことにした。明日からの男子の立場がなくなるなあ、と思いながら。

男子が戻ってきたのは、始まる五分前だった。

中島君は、男子の行動にちょっと疑問に思ったみたいだけど、特に気にしていなかった。

僕は心の中で、中島君にごめん、と謝ってから授業に集中した。

その間も、僕はどうしようか考えていた。クラスメイトの奇行(凶行)を、どうやって防ごうかという事を。

まず、女子に言う。これは男子の立場が危うくなるのと同義なの

で却下。

次、というかこれしかないんだけど、僕が何とかするしかない。一番手っ取り早いのは、狙われる本人に告げる事なんだけど、これをやっても結局最初の案と結果が変わらないので考えていない。

僕はノートを取りながらそのことを考えていると、

「池田！！これに答えてみる！！」

僕が指名された。

あまりにも突然だったため、僕は思わず、

「ひゃ！はい！？」

と言ってしまった。

やっちゃったー！と僕は心の中で思った。辺りを見ると、みんながクスクスと笑っていた。

先生も苦笑しながらこう言った。

「池田。考え事でもしてたのか？それより授業に集中してほしいんだが。」

僕は恥ずかしい気持ちになりながらも、

「あ。すみません。」

と言った。

「まあいい。それで？この答えは？」

先生が指した問題を、僕は何とか答えて座った。これっていつも緊張するんだよね。

その時に、庄一と圭が僕に言ってきた。

「なんだよさっきの声はよ。」

「……女子みたい。」

僕は二人に呆れながら言った。

「そのことはいいよ、もう。ていうか、君たちのせいなんだけど。そう言っと、二人とも首をかしげながら先生に視線を戻した。」

全くもう。そう思いながら、僕も黒板に視線を戻した。

どうやって奇行を阻止しようか考えながら。

六月下旬のある日(3) (後書き)

人の執着心って正直怖い。

六月下旬のある日(4)

そして、昼食の時間。

結局、いい案が出ないままこの時間が来てしまった。

もうなるようになれ、と僕は投げやりに思っただけで弁当を出した。

中島君を除いて、他の男子はどこかへ行ってしまった。きっと待ち伏せする気なのだろう。

その中島君はというと、清水さん、寺井さん、レイジニアさんに囲まれていた。

これなら心配いらぬね。そう思って、僕は一人で弁当を食べようとした。

したんだけど……………。

誰かが見てる気がしたので、僕は食べるのを中断して辺りを見渡した。

見ていた人はすぐに見つかった。

中島君が、こちらに助けを求めるように見ていたからだ。

目が合った。

その後の反応が凄かった。

中島君は僕の席の所まで机をよけながら急いできて、女子三人は中島君の行動に取り残されたみたいだった。そして、僕の席について早々中島君はこう言った。

「一緒に弁当食べない!？」

「へ?」

いきなりだった。僕はちょっと驚いたけど、女子三人の方が驚いていた。

でも、中島君の目が必死だった。

どうしてなのか疑問に思ったけど、一人で食べるのも味気ないと思ったので「いいよ。」と言った。

それを聞いた中島君はものすごいホッとした顔で、庄一が座って

いた席に座って、僕と対面する形で弁当を広げた。

僕はその弁当を見て思わず言った。

「結構入ってるね。」

その言葉を聴いた中島君は、ちよつと僕の弁当を見て、

「僕の両親が『たくさん食べて立派になりなさい。』って言うからね。そういう君だっておかずが沢山あるじゃないか。」

と言った。僕は苦笑しながら言った。

「これは単純に夕食と朝食の残り。両親の弁当にも同じものが入ってるよ。」

「そういえば池田君って自分で料理作ってるんだっけ？」

そう僕に訊いてくる中島君は、僕の事を尊敬のまなざしで見ているようだった。

僕は弁当を食べながら言った。

「そうだよ。君は両親がつくってくれるんでしょ？いいね。」

「そうかな？」

そうやって話しながら弁当を食べていたら、

ダン！！×3

僕らは包囲されていた。

「元君？^{まへ}どういうことですか？」

「ハジメ、言い訳を聴こうかしら？」

「元？^{まへ}どういう事か説明してもらおうよ。」

そう言った順は右から、寺井さん、レイジニアさん、清水さん。

どうやら、中島君の行動のせいで怒り心頭のようだ。そして僕はトバッチリ。

中島君は必至に説明しようとして頭を働かせるみたいだ。僕は被害者なので何食わぬ顔で昼食を食べていた。

そして、考えがまとまったのが中島君が言った。

「たまには男子同士で食べるのもいいかな、と思ったんだよ。ほら、いつもみんなと食べてるでしょ？」

その言葉に対して、

「私は今日が初めてなんだけど。」

レイジニアさんが言ったことによって、また考えざるを得なかった。仕方ないのかな？と僕は思いながら中島君を助けることにした。

「僕が誘ったんだよ。昨日スーパで会ったときにね。」

その僕の言葉を受けて、女子三人は中島君に問い詰めるように迫り、中島君はコクコクと頷いていた。

それで女子三人は納得したみたいだ。でも、その後の行動には僕は驚いた。だって…

「ならお邪魔しても良い？」「お邪魔しても良いですか？」「邪魔するわよ。」

と言って僕達の周りの席に座った。って、確認の意味ないじゃん。そうしていたら、いつの間にか僕と中島君の周りに女子三人が囲んでいた。

つ、つらい………。

そう思いながら僕は、昼食を再開した。そうしていたら、ふと信じられない光景が僕の目に映った。

「ねえ元？^{はじめ}これとそれ、交換しない？」

「いいよ。」

「じゃあ。私から行くわよ。はいあ〜ん。」

凄いね。中学三年生にもなると公衆の面前で「あ〜ん」ができるんだね。

あまりにもびっくりしたので、僕はマジマジと見てしまった。

それに気付いた中島君は、清水さんに慌ててこう言った。

「ちよつと久実！？池田君見てるから！いや、誰かが見て無くてもやめてほしいんだけど！？」

それを聴いた清水さんは不満顔で言った。

「いいじゃない。私達の愛が認められるんだから。」

「僕は認められて欲しくないんだけど！？」

中島君。大変だね。

僕は同情しながら自分の弁当を食べていた。そしたら、今まで黙

つっていた寺井さんが、

「は、元君！私の食食べてくれませんか！？」

と言ったら、僕とレイジニアさん以外の箸が止まった。

？どうかしたのだろうか？

レイジニアさんもそう思ったようで、

「どうしたのよハジメ。どうしてスミレの発言で肩が震えているのかしら？」

と訊いていた。

あ、本当だ。よく視ると二人とも小刻みに震えてる。しかも、汗をかいてる。

寺井さんの弁当には何があるのだろうか？

ふと疑問に思ったけど、さわらぬ神になんとやら。僕は追及しなかった。

代わりに、レイジニアさんが中島君に訊いた。

「スミレの弁当は何かあるの？」

すると、中島君はパニックながら言った。

「い、いや、べ、別に！？何も無いよ！？」

それならどうしてさっきは震えていんだい？

簡単に追及出来るくらいのボロが出てきたけど、聴かなかったことにした。

これに業を煮やしたのか、寺井さんが中島君に迫って、

「いいから食べてください！！」

「フゴオ！？」

自分の弁当のおかずを、中島君の口に入れた。
すると、

「ゴフアー！！」

という音と共に、中島君が机に倒れこんだ。

「……………」

僕とレイジニアさんは互いの顔を見た。清水さんは「うわっちゃあ……………」と言いながら天を仰いだ。

食べさせた寺井さんかというと、

「ど、どうですか？」

中島君の様子を気にせず味の感想を訊いていた。

これを見た僕とレイジニアさんは寺井さんに聴こえない様に清水さんを交えて話していた。

「(ちよつとクミ、スミレの弁当でもしかして……)」

「(まずいの?)」

「(まずいもんじゃないわ。もはや兵器よ。ちなみに、あれは手作りよ。)」

「(……どうやったらそんなものができるのかしら?)」

「(意図してつくれるものじゃないよ。)」

「(私に元をとられたくないからじゃない?)」

要するに嫉妬ですか。

それだけでよくあんなものが出るね、と僕は他人事のように思った。

と、何とか意識が回復したらしい中島君が、

「う、うう。い、池田君。君のおかず欲しいんだけど……。」

何故か僕の弁当のおかずを要求してきた。

え?ここで?

その言葉に女子三人も驚いた。なので、

「……どうしてこいつなの!?!」「……」

見事にハモった。……これは泣きたくなるね。

そんな僕の気持ちを知らずに、中島君が言った。

「池田君の……料理は……おいしいんだ。久実と董は知ってるよね?」
それにもかかわらず、

「え?」「そうなんですか?」

疑問で返された。

これが普通の反応だと思っただけ……。

そう思っていたら、レイジニアさんがいきなり、

「レン。これ、もらっわよ?」

と言って僕のおかず（卵焼き）を一つ食べた。

モグモグモグ……………。

レイジニアさんが食べている間、清水さんと寺井さんはじっと見ていた。

僕はというと、

「大丈夫？中島君。」

「いつものことだから何とか……………」

中島君の心配をしていた。中島君の顔がまだ青かったから。

これを見て僕は何もできないと分かったので、大人しく食べようとしたら、レイジニアさんが食べ終わつたみたいで、二人が感想を訊いていた。

中島君はというと、

「そういえば……二人は同じクラスになったことないんだっけ……」

と言っていた。同じクラスになっても、多分僕の事は知られていないと思うよ。

「どうだったの？」

「どうなのですか？」

それを受けたレイジニアさんは、数秒沈黙してから口を開いてこう言った。

「……………おいしいわ。」

「「え？」」

「ね、いったでしょ？」

レイジニアさんが言った時に、何故か誇らしそうにする中島君。僕はというと、

「へえ〜。」

完全に他人事だった。

なので、そのまま食べていると、清水さんと寺井さんも僕のおかず（今度は唐揚げ）を一つずつ、勝手にとって食べた。僕のおかずがなくなっちゃうんだけど。

そして、食べた二人は、

「おいしい！！」

と、叫んでいた。その声で辺りはこっちを見たけど、それも一瞬の事で、すぐに集まっていた人たちの会話を再開させた。

そして、叫んだ二人はというと、

「あなた！どうやったらこんなおいしいものがつくれるの!？」

「よろしければ教えていただけませんか!？」

「お、落ち着いてくれませんか！二人とも!!！」

僕に詰め寄ってきたので、僕はこう言うしかなかった。

六月下旬のある日(4)(後書き)

主人公が一番苦労します。

六月下旬のある日(5)

そうやっていたら、

ガラッ!

「くそっ! 結局来なかったぜ! どこにいったんだ? ……ん?」

「……………いつもならあそこに来ていた。……………何?」

「え?」

庄一と圭が他の男子と一緒に教室に戻ってきた。そして、僕と目が合った。

……………

「さらばだっ!」

と言って、僕はあらかじめ開けておいた窓(風通しを良くするため)から外に出て、ベランダを走っていった。

残された中島君たちは、僕の行動が理解できなかったのか固まってしまい、庄一たちは

「……………連を連れてこおおおい!」

「……………おっしや……………!」

と言って同じく窓から出てきた。……………数人は。

残った人たちは、固まっていた中島君に気付いたみたいで、

「……………標的発見!」

「ヤレ。」

「……………イエッサ……………!」

というやりとりをして、中島君に襲い掛かっていたみたいだった。みたい、とは、僕がその現場を見ていなくて声だけだったわけで、どうしてかというところ、僕は逃げていたからで。それもどうしてかというところ、

あの状況を何も知らなければ勘違いされるよね。

そんなわけで、僕はベランダの端まで走ってから、跳んだ。文字通

り、ベランダから校庭へと。

「冒険するもんじゃないね

!!」

ダン!!」

「~~~~~ッ!!!!」

何とか着地できたけど、僕の両足にすごい衝撃が来た。……後の授業、保健室で過ごせそうなくらい痛かった。

僕を追ってきた男子は、まさか飛び降りるとは思わなかったのか、その場で少しためらったけど、結局教室に戻っていった。

僕は、戻ったとしてこれからどうしようか考えながら教室に戻るうとしたら、

「~~~~~うああああ!!!!」

という声とともに男子が窓から出てきた。僕はその光景を見てこうつぶやいた。

「あゝあ。こうなっちゃったか。明日からどう合わせていこうかな?」

そして、よく視るとその中に圭と庄一がいた。というか、僕と中島君以外の男子が全員、宙に浮いていた。

僕は、その光景を見て『やっぱり僕は普通だな』と思いながら、まだ痛みが引かない足で教室に戻った。

教室に戻ると、未だに男子たちは宙に浮いていた。そして、自分の席に戻ると、中島君が訊いてきた。

「池田君、大丈夫?というか、怪我しなかったの?」

「ベランダから飛び降りる、という発想に驚くのが普通だと思うんだけど。」

「そうかな?」

どうやら、僕が決死で飛び降りたのは中島君にとっては普通だったようだ。

つくづく住んでる世界が違うと思いながら、僕はさっさと弁当を

食べていった。その光景を見た中島君とレイジニアさんは、

「あ！もうすぐ授業だ！」

「ならさっさと食べないとね。その二人も男子にかまってないでさっさと食べなさい。」

と言って自分達の弁当を食べ始めた。その言葉で我に返ったのか、庄一たちをベランダに降ろしてから、二人も弁当を食べ始めた。

こうして、騒がしかった僕達の昼食は終わった。寺井さんの意外な一面と、男子の立場がなくなったことによって。

・・・・・・・・・・・・・・・・明日からどうしよう？

六月下旬のある日(5)(後書き)

男子が暴徒と化しました。

六月下旬のある日(6)(前書き)

ふとした疑問って、すぐに忘れるんですよ。

六月下旬のある日(6)

さて、午後の自習の時間。(要するに、超能力の人達専用の授業) 昼の行動のせいで、早くも男子の立場がなくなりつつある。さらに、清水さん達の警戒心が一層高まったことにより、うかつに中島君に近づけなくなった。

これからの行事でまともされるのかな？

ふとそんなことを考えてしまうこの頃。僕は自習中にもかかわらず、何もやっていなかった。

そしたら、

「連もそう思うだろ？」

「え？あ、ごめん。聴いてなかった。」

「だからよお、このままやられればなし、てのも癪じゃね？」

「もうやめた方がいいよ。これ以上やったら明日からの立場がなくなるよ。」

「……………それでも、やらなきゃいけない時がある。」

すると、圭も会話に参加してきた。その気持ちを他の事に注げないだろうか？常々僕はそう思う。

そんなことを思っていたら、庄一が僕に訊いてきた。

「そっぴやよ、お前どうして中島たちと昼食食べてたんだ？」

「……………答えようによつては対象に入る。」

圭の言葉に、僕は反射的に「なんの？」と言いたくなっただけ、きつと僕にとつてうれしくないものだろう。

さてどう答えたものか。そう思って僕は、考えてからこう説明した。

「一人で食べようとしたら中島君が来たんだよ。一緒に食べない？つて。」

ある程度の事実を言わないで、ありのままの事を言った。なんとなく、そうした方がいいと思っただから。

その説明で、二人は納得したみたいだ。

「昼の時はスマン。」

「……同じく。」

こうやって僕に謝ってくれたから。

「いいよ。それよりさ、気になることがあるんだけど。」

と、僕がそう言うと、

「気になること？中島なら二年の頃から同じクラスだろ？……あ、そうか。連は知らないんだっけ。あいつ、去年は引きこもってて学校にはほとんど来なかったんだ。しかも、来るときは必ずお前が休んでた時。当時の俺と圭はお前たちの関係を疑ってみただけだよ、全く見つからなかったから偶然だと思ったんだよな。」

「……（コクン）」

圭が説明してくれた。あれ？そしたら……、

「どうして中島君は僕が料理上手だっけ知っていたの？」

そう。僕と中島君が入れ違いで学校に来ていたのなら、僕が料理上手だっけことは知らないはずだ。それなのに、どうして知っていたのだろうか？

その疑問は、圭が教えてくれた。

「……当時、クラスの連中が連の話題で盛り上がった時があった。その時に、中島が来てその話を聴いていた。だから知っていてもおかしくはない。」

僕がいけないときにどうい話をしていたんだろう？

そう疑問に思っただけ、触れて良い事はなさそうだったのでかわりに、

「どうして中島君は引きこもっていたの？」

中島君のことを訊くことにした。

これに答えたのは、もちろんというか、圭だった。

「……進級前に起こった、暴走事件を引き起こしたから。」

「ああ。あの事件か。当時本気で怖かったな。今は憎い標的ではないけどな。」

「諦めなつて。……そうなんだ。あそこまで立ち直れたのは色々な意味で凄いね。僕だったら自殺してるんじゃないかな？」

「……それは言える。」

「否定してくれない？」

「まあまあ。」

僕の冗談を本気で肯定した圭。それをなだめる庄一。

きっと、僕にとっての圭と庄一がそうであるように、中島君もまた清水さんと寺井さん（レイジニアさんはちょっと違うかな？）のことを大切な友人だと思っっているんじゃないかと、僕は思う。

そうじゃなきゃ、今学校に来ていないだろうから。

六月下旬のある日(7) (前書き)

今回は、元たちが時系列でいう二週間前に遭遇した事件の、裏事情です。

六月下旬のある日(7)

放課後。僕達はいつもの場所に集合していた。

「久しぶりだね。ここ。」

「そうだな。さっさと行こうぜ。」

「……周囲には誰もいない。」

圭が周囲の確認をしたので、僕達は学校の敷地内の隅にある、地下室へと続く道があるドアを開けて入っていった。

これを見つけたのは圭だった。

本人が言うには、ここに入った時には既にあることは知っていて、何度か使っていたんだって。僕と庄一は友達の証として教えてもらったんだ。

今では、僕達三人が誰にも聞かれない話(事件の裏事情などをする時や、集まってなにかする時に使っているんだ(先生達にも知られていない))。

地下室へと続く道を歩きながら、僕達は話した。(圭は懐中電灯を常備していて、圭を先頭に、僕、庄一の順である。)

「しかし、この地下室って何のためにつくられたんだ?いつも使ってる部屋だって、最初見た時は机と椅子だけだったろ?」

「そうだね。他にも部屋があるみたいだけど、なんか薄気味悪くて近寄れないよね。」

「……昔、ここは軍事基地だったらしい。」

「え?」「マジかよ?」

「……………」

それっきり、圭は何も言わなかった。

しかし、軍事基地、か。僕はなんとなく納得できる気がした。恐らく庄一もそうだろう。

そして、

「……………ついた。」

「毎度のことながら、緊張感があるよな。」

「そうだね。」

と言つて、僕達はいつも使っている部屋に入つていった。

その部屋は、僕達三人が入つても大丈夫なくらいの部屋の広さ。最初は腐つた机と椅子だけだったけど、僕達が掃除や色々を持ち込んでいたために、一人暮らしの部屋と勘違いされてもおかしくない部屋になっていた。

僕達は、自分たちが使っている椅子に座つた。ドアに近いのが、庄一。奥にるのが圭。僕は二人の中間。そして、それぞれの荷物も椅子の近くに置いてある。

「庄一、掃除したら?」

「家に置いといたら、両親に何言われるか分からねえからここに置いといてるんだよ。そういう連は……本当に少ないな。たまには何か買つたらどうだ?」

「僕の財布はそんなに余裕がないんだよ。しかも家計の事で大変なんだから。」

「……完全に主夫。」

「というより、執事が秘書、または使用人だろ。」

使用人は財産管理などしないんじゃない?……と僕は思う。

そんなことより、

「圭。今日の朝言つてたこと聴かせてよ。」

と僕は言つた。圭は頷いてから、説明しだした。

「ん?」

「どうかしたのレイジニア?」

「何か言われそうな気がしたのだけれど……気のせいかしら?」

「そう?」

「……まあいいわ。それより、行くわよハジメ!」

「待ちなさいよ!!!」「待つて下さい!!!」

ここからまた修羅場となる、なかしまはじめ中島元であつた。

「…まず、先週まで騒がれていた、ゾンビの件。」

説明の初めに圭がそう言った。すると、庄一が、

「ああ、あれだろ？誰がやったのか分からない連続殺人。で、現場で目撃されたのはゾンビで話題になったやつ。」

と言ったことに圭は頷いて言った。

「…あの騒動の被害者は、みんな共通点があった。それは、七年前に起こった『レイシア地域連続殺人』の容疑者に挙げられ、結局証拠不十分で釈放された容疑者たちだった。」

レイシア地域連続殺人。これは子供だった僕でも知っていた。

この事件での死亡者は延べ百人超。この事件は特異性が三つある。まず、その死亡者の人数。次に、犯行手段。一人でやるにはだいぶ大がかりな方法だと言っていた。そして最後は、犯人達が特定されたにもかかわらず、証拠不十分で釈放されたことだ。

「でもどうしてそいつらが殺されたんだ？」

庄一は、圭に対して訊いてみた。それに対して圭は、

「……ここから先はオフレコ。」

と言って説明した。

「……七年前のあの事件で、目の前で両親が殺された少女がいた。

その名前は、レイジニア・ゼロ。」

「……？」

なおも説明は続いた。

「…その少女は警察に保護された。そして、犯人の特徴を覚えていた。それが」

「……犯人特定に至ったものか。」

圭の説明の途中で、庄一が口を挟んだ。その言葉に対して、圭は頷いた。心なしか、二人ともいつもより口調が暗い。

それは無理もないことだ、と僕は思った。いつものように事件の裏話を聴いていただけに、こんな悲しい過去を知るなんて。

それでも、圭は説明を続けた。まるで、最後まで説明するのがこ

の事件に対しての供養だというように。

「…しかし、それもむなしくそいつらは釈放された。その時に、少女は絶望したのだろう。この世界に。だから……」

「自分で復讐することにした。」

「…そうだ。しかし、これには協力が必要だった。」

「七年もたつてりゃ、人は変わつちまうからな。」

「……そこで、彼女を誘った人物がいた。それが、クレス・光秀・ヒルハルト。」

ところどころ僕達は口を挟んでいたけど、圭は説明していき、知らない名前が拳がった。

「誰？」

「…表向きは俺達と同じなんの力もない青年。裏では、人を言葉巧みに操るペテン師。そして、裏社会では『クライム・メイカー罪をつくる者』と恐れられていた。さらにいうと、こいつが、七年前と今回の事件の首謀者。」

「…!？」

僕達はまたしても驚いた。こんなにも早く今回の真犯人が出てくるとは思わなかったからだ。

「…クレスは、七年前の事件の後始末を彼女の復讐という形で済ませ、自分は高みの見物をしていた。」

こうやって、若干想像の部分が入るけど、圭の言っていることは正しいと思う。なんたって、情報の整理、収集、気持ちの推測が、圭の最も特徴的なことだから。

「…この騒動が始まったのは、三週間前。中島たちはその一週間後に情報収集と犯人の追跡をしていた。そして、彼女、レイジニア・ゼロと対決し、彼女を捕まえた。その時にクレスの卑劣な攻撃により、中島たちは彼女と引き離され、クレスは消えていった。その後、クレスのアジトを見つけて侵入し、レイジニアを人質にするもあえなく逮捕。現在クレスは刑務所におり、彼女は被害者という事により、学校で経過観察となっている。」

これで、この事件の説明は終わり。にもかかわらず、圭は何か言いたそうな顔をしていた。

「まだあるの？」

「……………今回、とても不思議な現象が起こったらしい。確証はとれていない。」

「珍しいな。お前が確証をとっていないなんて。」

「……………クレス曰く、『世界が崩れた景色を見た。』だそうだ。恐らく中島君の力だろうが、全く不明。過去類のない話だと言っていた。」
中島君の力がなんなのか。それを調べてみたいと圭は思っているんだらうな、と僕は考えた。

これで、一つ目の話は終わった。

「なるほどな。いつもよりヘビーだったが、理解はできたぜ。……………中島の勇姿で惚れたんじゃあ、俺達が勝手に憎んでるだけだな。……………さて、いかにして説明しようか？」

感想としてこんな事を言う庄一。説明する対象は、クラスの男子。言う事は、「俺達の非を認める」こと。

「まあ、庄一ならできるよ。頑張れ。」

「……………クレス並みの話術。」

僕達はそんな彼を応援するだけ。すると、庄一がこう言った。

「おいちよつと待て。連はいいとして、圭。お前も考える。お前も俺と同じなんだからな。」

言われた本人は、

「……………次の話をする。」

話題をそらした。

「次って？」

「……………レイシア地域連続殺人の件。」

「なんで今更？」

と庄一が訊いたら、圭はちよつとだけ笑った表情をつくりながらこう言った。

「いい質問。……………先も言った通り、今回の事件とこの事件はつなが

つていた。まず、真犯人。次が、そこに出てくる登場人物。最後に……人の心。」

「「は？」」
圭が最後に言った言葉に、僕達は揃ってクエスチョンマークを頭に浮かべた。

「どういうことだ？」

そう庄一が訊いたら、

「…順を追って説明する。まず、レイシア地域集団殺人の概要からこの事件は、ある日その地域で同時に人が死亡するという事件が起こった。その日の死亡者は三人。次の日も同様に死亡者が現れる。その数は倍の六人。そうして日を追うごとに死亡者は増えたある日、一人の少女が保護され、犯人たちの特徴が分かり、逮捕した。これで、最初と次の説明は終わった。残るは……」

「最後の、人の心。これはどうして出てきたの？」

圭の説明が最後の方になったので、僕は訊いてみた。

「……その逮捕者で、一人だけ今回殺されなかったやつが居た。なぜなら、そいつは釈放された後に殺されたからだ。」

そう言った圭は、その人に対して尊敬の念を送っていたみたいだった。そして、話は続いた。

「……推測だが、そいつは釈放された後、日記か何かで自分の罪を認めることを書いて誰かに送ったのだろう。そして、自首しようとしたら……」

「仲間に殺された。」

僕がポツリと言った言葉に、圭は頷き進めた。

「それは人の心、罪の意識が存在して、なおかつ勇気のある行動をしようとした人がいた。それを中島達はレイジニアに伝えたのだろう。レイジニアはそれを知って抵抗をやめ、大人しく捕まることを選んだ。」

「なるほど。」

「だから人の心なんだ。」

僕達がそう言っていると、圭は「だからお前達とは仲良くできる。」と言
つてから話していった。

「二人の考え通り、彼女もまた罪の意識に、その時苛まれただろう。
だから、捕まるという行動にでた。これで、すべてのキーワードが
今回と七年前でつながった。」

最後に圭は、「……七年前の事件の動機は、『人が大量に死ぬこと
があったら世界はどうなるか』だったそうだ。」という言葉で締め
くくった。

六月下旬のある日(7) (後書き)

人の思いは強いですね。

六月下旬のある日(8)

僕はその言葉に怒りを覚え、庄一は壁に向かってパンチを繰り出した。

「くそっ！じゃあなんだ！？あいつの実験のせいであんなに人が死んだのか！？そのせいで殺しをする必要のない人が殺しをしたのか！？関係のない人が沢山死んだのか！？」

庄一はそう言いつつ、壁に向かってパンチを撃つのをやめなかった。そのうち、壁に血がついていった。

僕達は、それを止めずに見守っていた。ここで何か言っても無駄だと分かっていたから。

手から血がポタポタと流れ落ちていった時、庄一はようやく落ちて着いた。

「落ち着いた？」

「ああ。包帯かなんかないか？」

「……ここにある。」

そう言つて、圭は包帯を庄一に渡した。

その包帯を巻きながら、庄一は言った。

「…仕方ない。中島をやる計画は止めた。明日は中島と寺井達に謝るか。」

その言葉を受けて僕達は、

「……庄一がそう言うなら。」「これで元通りになるのかな？」
と言った。

それから僕達は、少し喋ってから家に帰った。

「ただいま。」

と言つて、僕は家に入った。時刻は五時くらいだから、両親は帰ってきていない。あの人たちの帰ってくる時間はまちまちで、僕が普通に帰ってくる時にはいる時もあるし、十時くらいに帰ってくる

日もある。そういう時は連絡が来るから分かるんだけど。

「さうってと。自分の部屋に行つてからにしようつと。」

そう言つて僕は、階段を上がつて二階にある自分の部屋に向かった。この家は二階建てで、二階は両親と僕の部屋がある。一階が日常生活をするための場所。

僕は自分の部屋のドアを開けて、中に入った。

「……と言つても、何かあるわけじゃないしね。」

僕の部屋にあるもの。それは、勉強机とベッドと本棚とタンス。床には何も散らかつていなく、綺麗。

ベッドは、シーツの乱れなどなく、綺麗。

本棚には、料理本と小説。それと、家計簿として使つたノート（過去十年くらいでノート三十冊超）が綺麗に並べられている。

タンスには、自分で買った服が綺麗に畳まれて入っている。

そして勉強机は、机の上には何も置いてなく、収納できるところには教科書や書き終わったノートが収納されている。

僕は、鞆を机の上に置いて明日の準備をした。そうでもしないと夜にはできないからね。

それが終わってしまったので、僕はベッドで横になつて天井を見ながら考えていた。

レイジニアさんの過去。今回の事件のこと。七年前の事件のこと。中島君の力のこと。

そして、明日の男子はどうなつてしまふのか、という事。

.....切実だ。

そんな考えが頭をよぎつたので、僕は一階で夕飯の準備をすることにした。気分転換としてじゃないよ？もうすぐ夕飯の時刻だったからだよ？

夕飯の準備が終わつた時、

ピンポン！！

玄関の方からチャイムの音がした。

僕は、宅配か何かかな？と思つて、判子を持つておきながら「は

「いい。」と言って玄関へと向かった。

「どちらさまですか？」

そう言いながら僕は玄関のドアを開けた。そしたら、やはりいうか案の定、宅配便だった。

「こんばんは！コミレ宅急便です！荷物をお届けに上がりましたので、判子をお願いします！」

その人は段ボールの箱を持ちながらそう言った。

僕はその宛先と送り主を確認してから、

「分かりました。」

と言って、判子を押して荷物を受け取った。

宅配人は、「確かにお届けしましたー！」と言ってトラックへ戻っていった。

それを確認した僕は家に入って、リビングへ荷物を持ってきてからそれを開けた。

「これは確か……ああ！やっぱり！僕が頼んだものだ！やっときた！」

その中身は、僕の好きな作家の新作小説だった。商店街にも本屋さんはあるけど、僕の好きな作家は、マイナーすぎて店に置かれていない。注文すればいいんだろうけど、そうするといつ届くか分かるまで本屋に行かなくちゃいけないくなるので、やらないでネットで注文する。

そうすれば、指定した日時に届くし料金は先に払っておけば問題ない（自分で貯めたお金だよ）。

僕は段ボールの箱をいつもより早く片付け、早速読もうとしたけど夕飯を食べてからにしようと思い、本はテレビに近いテーブルの上（テーブルは二つあって、片方はテレビに近く、片方はキッチンに近い。）に置き、一人で夕食を食べた。

六月下旬のある日(9)(前書き)

池田家に訪問者が.....。

六月下旬のある日（9）

食器を片付け終わって、早速読もうとしたら、電話が鳴った。

電話が終わってから風呂沸かさないといけないとなあ、と僕は思いながら電話に出た。

「もしもし池田です。」

「あ、連？」

「父さん？何か用？」

「もうすぐ帰る〜。母さんも一緒〜。」

「分かったよ。風呂沸かして、料理温めて待つてるから。」

「助かるYO！」

そう言われた僕は戸惑ったけど、電話が切れたので言った通りの事をやった。

風呂を沸かして、つくった料理を温めた。ま、たいして時間は必要なかったけど。

それらが終わったので、僕はテレビに近いテーブルに置いてある本を読み始めた。

ちなみに、好きな作家は水蓮さん。この人が書く小説はとても面白いんだよ。認知度は低いけどね。

今までの作品でお気に入りなのは、『虚空の暮らし』。簡単に内容を説明すると、主人公が過ごしていく日常が、本当は誰かの夢の中だった、というお話。

これを読んだとき、僕はこの人のファンになった。

なぜなら、その本の世界観に引き込まれてしまったからだ。

どこからが現実で、どこからが夢なのか。それを考えさせられる本だった。

これを庄一たちに読ませたら、「途中でこんがらがった。」「………凄いい。」と、それぞれ感想を言った。ちなみに、圭も水蓮さんのファンになった。分かる人には判るんだね。

それで、今僕が読んでいるのがその人の新作『日常が変わった日』。圭が新作の情報を教えてくれたおかげで、僕は何度もネットをチエックすることもなく予約できた。そのせいで忘れてたんだけどね。もう一個付け加えると、圭は水蓮さんの情報を調べたけど、僕は教えてもらわなかった。

好きな作家の秘密なんて知りたくないでしょ？って思うのは僕だけ？

ま、それは置いといて。その小説の冒頭を読んでいたら、チャイムが鳴った。

僕は、しおりを挟んで玄関に向かった。

そして、玄関のドアを開けた後こう言った。

「おかえり。」

「「たつ、だいま〜！」」

と言った後、両親がこう言った。

「ほらほら！君も入りなさいって！！」

「そうよ！別に問題ないから！」

「え？も、もしかして『すんごい頼りになる息子』って……」

ん？お客さんかな？そう思ったけど、両親の後ろにるのが誰だか分からなかった。

こんな時間に客を連れてくる方が間違ってるような気がするんだけど。そう僕は思ったけど、たまに庄一と圭が泊まりに来るので、何も言わなかった。

「さつさと家に入ってよ。料理冷めちゃうよ。」

こう僕が言うと、両親は自分で連れてきたお客さんのことなど忘れ、さつさと家に入っていった。それで、残されたお客さんを見て、僕は驚いた。

「え！？な、なんで、寺井さんが！？」

なんと、僕の目の前（両親が連れてきたと思われる）にいたのは寺井董さんだった。しかも、よく視ると荷物を持ってきていた。

僕、最近疲れすぎたのかな？幻覚が見えてるみたいなんだけど、とかやっていたら、寺井さんが口を開いた。

「あ、い、池田君。えっと、その…こんばんは。」

「あ、こんばんは。」

寺井さんが挨拶をしてきたので、僕は反射的に挨拶をした。けれど、僕はそれで終わらせなかった。

「というか、こんな遅くに何の用？親が心配してるんじゃない？」
こう僕が言ったら、

「そうですね…ちょっと頼みたいことがあったので…」
と、寺井さんが言った。

僕に頼みごとって。なんか今までもそうだけど、僕って苦労しかないのかな？とこれからの人生について悲観になりながら、僕は寺井さんに、

「それは家に入ってからにしてくれる？」

と言って家に入らせた。……………今度は僕が狙われそうだと、本気で思いながら。

六月下旬のある日(9)(後書き)

生きるってなんでしょう？

六月下旬のある日(10)

「お、お邪魔します・・・。」

そう言いながら、寺井さんは家に入ってきた。そして、僕はリビングに案内した。

案内してる時、僕は寺井さんに訊いてみた。どうして僕の所に来たのか、ということ。

「でもどうして僕の所?というか、良く場所が分かったね。」
対して、寺井さんはちよつと困った顔をしながら、

「住所は調べましたけど、この近くまで来て分からなくなりました。オロオロしてたらあなたの両親が『君、もしかして迷子?だったら家にくればいいさ。すごい頼りになる息子がいるから。』と言ってきて、私を案内してくれたんです。」
と言ってきた。

すごいね、僕の両親は。もしかすると犯罪者とも仲良くなれるんじゃないかと思う。いや、犯罪者だと知らないで仲良くなってそう
だ。

そう思いながら、僕達はリビングに着いた。すると、

「相変わらずおいしいなあ!」

「そうね!」

料理を食べている両親がいた。……ビールを片手に。

僕はその光景を無視して、寺井さんをテレビに近いテーブルにあるソファに座らせて話を聴くことにした。

「で?どうして僕の所に?」

「あ、それはですね……。」

寺井さんが話をしようとしたら、電話が鳴った。

「ちよつと待ってて。」

そう言っ僕は電話に出た。

「もしもし池田です。」

『あ、池田君？僕だけだ。』

「中島君？何か用？」

この時僕はどんな用か分かっていた。だってこんな時に中島君が電話してきたってことは…

『うん。ちよつとね。そこに董がいるんじゃないの？』

「あ。やつぱり？」

『やつぱり、って……そこにいるんだね？』

「うん。というか、よく僕のところだって分かったね？」

『帰りに董が「池田君に教えてもらおうかな……？」って言ったから。』

「へえ〜。」

寺井さん、行動早すぎ。と、僕がそう思っていたら、

『董は決めたら行動するのが早いからね。』

と、中島君は言った。僕は訊いてみた。

「それで？これからは？」

『うん……。ま、いるのが分かればいいよ。あとは僕が何とか言つとくから。』

「そう。……って、え？もしかして、寺井さんを泊めろって事？」

『そういうことになるね。』

「普通、判明したら連れ戻すんじゃない？」

『だって、僕の命がこれからも危うくなりそうじゃない。そんなことしたら。』

「……………」

分かってはいたんだけどね……………。

『頼むよ！これからの僕の命が懸かっているんだ！』

悪党退治より身近な脅威。僕はこの時どちらが危険なのかすぐに察知できた。

「……………分かったよ。それだけでどうして僕の所に来たのか大体わかったから。」

『ありがとう！〜！』

「でも明日僕が大変な目に遭いそうなんだよね……。」
『あ………。それに関しては何とかするから。また明日。』
「うん。」

はあ。なんだか変なもの引き受けちゃったな。そう思いながら、僕はリビングに戻ったら、

「じゃあ董ちゃんは、連とはクラスメイトなんだな！」

「はい、そうですけど……。」

「ねえねえ。すみちゃんって、好きな人いるの？」

「え！？そ、それは……。」

酔った勢いで質問してるだろう両親と、それに律儀に答える寺井さんの姿があった。

僕はこめかみに手を当てながら言った。

「何やってるの？二人とも？」

そしたら両親が、

「なにつて、仲良くしたいから質問してるだけだが？」

「そうよ？」

と、ビールを片手に言った。

………明らかに酔っているね。

そう直感した僕は、二人を二階に強制的に移動させた。

六月下旬のある日(10)(後書き)

こんな両親どうですか？

六月下旬のある日（11）

「ごめんね、寺井さん。あんな両親で。」

「大丈夫ですよ。それに、楽しそうじゃないですか。」

両親を二階へと強制移動させた後、僕と寺井さんは改めて話をすることにした。

「ところで、誰が電話してきたのですか？」

「え？ああ。中島君から。」

そう言うと、寺井さんの顔が曇った。

「でも大丈夫じゃないかな？中島君は「連れ戻す気はないから。」って言ってたから。」

僕がそう言うと、

「また迷惑をかけちゃいました……。」

寺井さんは落ち込んでいた。それを見た僕は、

「『落ち込むな。落ち込む暇があるなら進め。後ろではなく、前へ。気が重いかと思うな。進むとは過去を忘れることではない。過去から学んで前へと行くことだ。』」

「え？」

僕が言った言葉に、沈んでいた寺井さんは顔を上げた。

「これは僕の好きな小説の言葉だね。タイトルは『海の家』。僕が落ち込んだ時に読んでたりするんだよ。」

「それ……作者の名前、水蓮というんじゃないですか？」

「え？」

寺井さんが作家の名前を当てたことに、僕は驚いた。

「どうして知ってるの？」

「私も読むんですよ。それに、私の母ですから。書いてる人。」

にっこりと笑う寺井さん。笑ってる顔がきれいだなあと思いながら、僕はさらっと言われた事実を聞き逃さなかった。

けど、

「その話をしたいけど、今は寺井さんが来た目的について話をしようか？寺井さんは料理を教えてもらいに来たんだよね？」

「ようやく話を戻すと、寺井さんは驚いた。」

「元君はじから聴いたんですか？」

「いや。僕の所に来るんだつたらそれ位しかないから。」

それくらい僕だつて知つてるからね。

すると、寺井さんは僕に頭を下げた。

「お願いします！私に料理を教えてください！」

初めから引き受けるつもりだったので、

「いいよ。」

と、あっさり言った。そしたら、寺井さんが嬉しそうに、

「ありがとうございます！！！」

と言つて僕の手をつかんだ。

僕は女の子特有の空気と手を握られた感触のせいで、ものすごい焦った。そして、

「じゃ、じゃあ、お風呂に入ってからにしようか。」

そう言うしかできなかった。

寺井さんがお風呂に入っている間、僕は食器を片付けて、明日の下準備をする準備をして、二階に上がつて今は使われていない部屋に寺井さんのための布団を敷いたりした。その後、僕は自分の部屋に戻り、今日届いた本を本棚に置いて風呂に入る準備をしてから一階に戻った。

一階に戻った時、寺井さんはお風呂から上がっていた。

「いいお湯でした。」

「そう？二階にある名前のない部屋が寺井さんの寝室だから。そこに荷物を置いてからにしてね？僕はお風呂に入ってくるから。」

「す、すみません。何から何まで……このお礼は必ずしますので。」

「そう言つて寺井さんは二階に上がった。僕はそのまま風呂に入り」

行った。風呂に入る前に洗濯物をしながら。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、
両親の服どうしよう？

風呂から上がって、着替えてからリビングに戻った。

そしたら、寺井さんがいた。パジャマにエプロン姿という奇妙な姿
で。

僕はツッコミをせずに、

「じゃあ、僕の手伝いで覚えてもらおうか。」

と言って、料理を始めた。

して思ったこと。

寺井さんは真面目にやればできる。

「これでいいですか？」

「ああ、うん。これで明日の朝の下準備は終わりだから、もう寝よ
うか。」

「はい。」

いいお嫁さんになるなあと思しながら、僕も二階に上がった。

六月下旬のある日(11)(後書き)

次回、主人公のちょっと変わった日常が出てくるかな？

六月下旬のある日(12)(前書き)

すみません。次の話で出てくることになりました。

六月下旬のある日（12）

次の日。

いつもの時間（午前五時半）に起きて、着替えないで下へ向かった。そして、リビングへ行って冷蔵庫を開けて、今日の朝食と昼食の弁当用のおかずを作り始めた。

それをやっているとき、寺井さんが起きてきた。

「おはようございます。早いですね、池田君。」

「ああ、おはよう寺井さん。」

そう言っただけは料理を作っていた。そしたら、

「あれ？これにクエン酸とか入れないんですか？」

と寺井さんが訊いてきた。

……え？クエン酸？

「寺井さん。料理にクエン酸入れないからね。というか、化学薬品なんていれないからね？」

そう言うと、寺井さんが逆に驚いた。

「え！？料理に化学薬品入れないんですか！？」

「当たり前だよ！？」

もしかして味付けの意味を間違えてるんじゃないのかな？その時僕はそう思った。

僕の言葉で寺井さんはショックを受け、「そ、そうだったんですか……」と言った。

これで何とか中島君の命は救えるかな？と僕は思いながら、自分の弁当と朝食をつくった。

いまだに落ち込んでいる寺井さんに、僕は弁当を渡しながら言った。

「はい寺井さん。これ君のお弁当。今度から薬品を入れずにつくればいいよ。そうすれば中島君も喜ぶだろうから。」

その言葉で、寺井さんは顔を上げて

「……ハイッ！」

と言った。ウンウン、やっぱり寺井さんは笑顔が似合うね。

その後、僕と寺井さんは朝食を食べ、寺井さんが食器を洗い、僕は洗濯物を干していた。

その時、両親が起きてきた。

「昨日はそのまま寝ちまった。……おはよう。」

「そうね。……って、会社に遅刻は出来ないわね。」

そう言っつて、両親は朝食を食べてから洗面所に向かって行った。

僕は洗濯物を干し終えたのでリビングに戻ったら、寺井さんが食器を洗い終えて片付けまで終えていた。

その光景を見て、僕は泣きそうになった。

そんな僕を見て、寺井さんは驚いてこっちに来た。

「ど、どうしたんですか!？」

「い……いや……な、なんでも、ないよ。ただ」

「ただ?」

「こっやって手伝ってもらったのは、初めてだなあと思って。」

その言葉に寺井さんはさらに驚いた。

「そ、そうなんですか?」

「うん。両親は僕にまかせつきりだし、変なもの買ってきそうになるし、たまにまともな買い物したと思っつたら見事に裏切られるし……」

寺井さんが絶句してる中、僕はとりあえず言った。

「家の事が大変だから自分の事なんか考えられないし、どこか遠出しようにも両親が真面目にやれるか心配だし、間違っつてへんなもの持って来たらそれこそ大変だから。」

そう僕が言っつと、寺井さんが泣きそうになっていた。

「す、すごい苦勞をなさっつているんですね。」

そう言いながら、どこからか取り出したハンカチで涙をぬぐっつていた。その光景を見て、僕はこっ言っつた。

「言いたいことは分かっつてるね?父さん、母さん。」

「え？」

寺井さんが僕の見ている方向を見ると、そこには両親が立っていた。

「そんな風に私達を見ていたのか……ちょっとだけショックだな。」

「そう思われても仕方ないんじゃない？」

「もうすぐ会社。」

僕がポツリと言うと、

「連！言い訳はしないが、とりあえず戸締りはしといてくれ！」

「あなた、弁当忘れてるわよ！！」

「なに！？」

と両親は慌てて準備して、会社に行ってしまった。本当はまだ時間があるのに。

両親が言った後、僕はそんなことを思いながら笑った。

そして、ひとしきり笑った後、

「僕達も学校の準備しないとね。」

と言って二階に行った。

リビングにて。

「あれ？池田君、行かないんですか？」

僕が制服ではなく私服なのに、寺井さんは疑問に思ったようだ。

僕は詳しく言う必要はないと思っているので、

「今日は遅れていくと連絡はしてるから。」

と言ってはぐらかした。

なおも疑問に思っていたみたいだけど、寺井さんは「行ってきます。」と言って学校へ向かった。

僕は椅子に座って、チラシをじっくりと見て財布の中身の確認と、戦場へ向かう準備をしていた。

教室にて。

「董。どこいったの？あなたの両親から昨日、電話があったのよ？」董はどこに居るのか知らないのか？』って。「」

「あ、ごめんね、久実。色々あつて……」

「ま、いいけどね。」

と言つて清水は自分の席へと戻つていった。しかし、

「あいつら、懲りないのかしら？」

昨日のメンバーが中島の下にいるのを見て、清水は寺井を連れてそつちに向かつて行つた。

「おい中島。」

「え！？な、なに？岡田君？」

「……話がある。」

「木村君も？」

「俺もだよ。」「俺もだ。」「ていうか、昨日お前を襲おうとした奴ら全員だな。」

「みんな、どうしたの？」

「実はな……」

と庄一が言おうとしたら、

「ちよつと男子！！あんた達、昨日の今日でまたやろつてわけじゃないわよね！？」

「そ、そうでしたら、ゆ、許しませんからね！」

清水と寺井が割つて入つてきた。

「ちようどいい。清水に寺井も聴いてくれ。」

そう庄一が言つたので二人は

「は？」「え？」

と、間の抜けた声を出した。

状況を飲み込めていない中島は、

「なに？みんなどうしてそんな真剣な表情なの？」

庄一たちの表情が真剣なことに疑問を持った。

そこで庄一は中島達に頭を下げてから、こう言つた。

「昨日の事、あれは俺達が悪かつた。首謀者は俺と圭だ。煮るなり焼くなり好きにしてくれ。」

それに続いて圭が頭を下げ、他の男子の中には土下座をする奴もい

た。

そして、

「……すみませんでした!!!」

と言った。

謝罪された本人たちといつの間にか話に加わっていたレイジニアは、

「どうするの？ハジメ。」

「うん。僕には被害はなかったから、別にいいよ。昨日の事は。」

「相変わらず甘いね、元め。」

「いいじゃないですか。でもこれに懲りたら二度とやらないでくださいね？」

そう結論付けたという。

「分かった。一応男だ。それならいい。」

「……約束する。」

その結論を受けて、男子全員は約束した。そして、先生が来る前に自分の席に戻った。

その時に、レイジニアと中島、清水は席が一つ空いていることに気付いたが、気にしなかった。

先生が出席確認をしている時、

「あ。今日は池田の奴遅れるんだった。理由が『家庭の事情で』だそうだ。何か知ってる奴いるか？」

と言ったが、誰も答えなかった。庄一と圭はもちろん知っていたが、言う気はなかった。

一校時目が始まる前。

「許してもらえたな。」

「……連は今頃何してると思う？」

連がいない、という事は多々あるので、二人は特に気にしていない。二年の時が一番ひどかったと庄一は思っている。

「さあな。そんなことよりあいつが来た時に、あいつがノートを写せるようにこれからの授業を受けようぜ。」

「……だいぶお世話になっているから、それくらいなら問題はない。」
「
そう言っつて、二人は授業を受け始めた。

六月下旬のある日(12)(後書き)

友達思いの二人・・・かな？

六月下旬のある日(13)(前書き)

な、長い……。

六月下旬のある日（13）

「まだ開店時間には早いけど、そろそろ行くころかな。さっさとしないと負けそうだから。」

そう言っただけは、戸締りをして家を出た。

そして、ついた場所はおなじみのスーパー。開店前なので人が少なかったけど、何人かの主婦たちはもういた。

この人達も狙ってきてるのかな？と僕は思いながら、その集団に近づいた。

「おや？久し振りじゃないか、あんた。学校はどうしたんだい？」

「久し振りですね。今日はいつものようにサボってきましたよ。」

「堂々と言えるもんじゃないでしょうに、全く。」

「学校より、今はこっちの方が大切なんですよ。あ、久し振りなんでお手柔らかに。」

「手加減なんかしないよ。前にそれやって大分かつさらわれたからね。」

「そうね。子供だと思って油断してたわ。悪いけど、前回の様にはいかないから。」

近くにいた主婦の人が知り合いだったので、僕は話しかけてみた。

そしたら、その隣も知り合いだったので、僕は喧嘩腰になってしまった。

「そう言う貴方達こそ、前々回はものすごくおとなげなかったじゃないですか。」

「何言っているんだい。あれが普通なんだよ。」

「そうよ。あなただって、そう言いつつ結構な買い物してたじゃない。」

そうやって話していると、自然に何を買いに来たのかという話になった。

「今日は何を買いに？」

「あたしは醤油と油。それに鶏肉と卵かな。そっちは？」

「わたしは野菜を中心に鶏肉を買いに。あなたは？」

「僕ですか？僕はですね……………牛肉と野菜、魚と卵、あと醤油も。」

「結局、あんたとはやるってことだな。」

「そうですね。負けませんわよ。小さな主夫さん。」

「僕も負けませんよ。」

そう言つて、僕達は今か今かと待ちわびていた。

ちなみに、開店時間は九時。その三十分ぐらい前に来ている人数は僕を含めて十人弱。この人達の狙いは、開店直後に行われる不定期・非公式のタイムセール。だから僕も学校をサボってまで来ているという訳だ。

それを知っているのは、庄一と圭のみ。特に圭にはこのタイムセールの情報を教えてもらっている。本当にいい友達を持ったよ。

同時刻、教室。

庄一と圭は、黒板に書いてることをノートに書き写していた。

圭に至つては、先生の話で必要なことも書いていた。

その授業が終わり。

「いつになく集中したな。」

「……………友のためだから。」

二人はそんなことを言っていた。なんだかんだいって、友達を大切に思っている二人である。

そんな二人に、近づいてくる人がいた。

「ねえ、レンつてどこにいるの？遅くなるって言ってたけど、何かに巻き込まれてないかと思って。」

「ん？レイジニアか？連に何の用だ？」

「…連なら心配はいらない。」

近づいて来たのは、レイジニアだった。それに気付いた二人は、いつもの口調で言った。

そうしていたら中島も来て、レイジニアの援護をした。

「いや、心配するって。どこに居るのが教えてくれない？」

それに対して、庄一たちは頑固だった。

「去年も似たような感じで連はいなかったけど、誰も訊かなかったぜ？今更なんだ？ヒーロー面か？」

「……理由は分かるが、本当に今更。本人にも口止めをされているから、何も言えない。」

明らかに喧嘩するようにも取れる言葉だった。

それに対して、いつの間にか寺井と清水まで来ていた。

「そんな言い方は無いんじゃない！？」

「そうですね！酷いじゃないですか！」

二人はそのままこの話に混ざった。しかし、

「あー、やめだ、やめ。こんな話しても時間の無駄だ。さっさと授業の準備しようぜ。」

「……あいわかった。」

「それはいつの時代のセリフだ？」

と言って、二人は授業の準備を شدした。

結局、残された四人はというと、

「まったく、なんなのかしら？あんな態度で答えるなんて。」

「先ほどの態度とは大違いですね。」

「そうね。レンが遅れてくる理由を訊かれた時のあの二人の態度が、朝とはだいぶ違っていたわね。……ハジメはどう思っているの？」

「……え？あ、うん……。あのさ、このことはもうやめない？きつと訳があるんだよ。それに」

「それに？」

「二年の頃の僕は、ほとんど何もしてなかったのと同じなのは、事実なんだからさ。これ以上は何も訊かない。これで良いという事にしようよ。」

「元もとが言いつなら……。」「分かりました……。」「
と言って二人は引いたが、

「でも、どうして二人はあんなに攻撃的になったのかしら？」

レイジニアは疑問に思った。

それに答えたのは、話を聴いていた庄一だった。

「ああ？お前ら、友達のプライベートを細かく知ってなきや駄目なのかよ？そんな奴と友達になりたいなんて、どうかしてるんじゃないのか？」

その言葉で清水と寺井はまた怒りそうになったが、中島が

「そうだよな。詳しい事なんて知らなくても友達になれるもんね。」
と言ったため、二人は閉口した。そのかわり、

「よくわかってるじゃねえか。」

「……………仲良くできそうだ。」

庄一と圭は中島の事を褒めた。

なんとなく面白くない二人はレイジニアの方を向いたが、彼女は彼女で「確かにそうね…」と言っていたので、さらに二人は面白くなかった。

それから、まあお約束というか二時間目の授業が始まりそうになったので、各々の席に着いた。

こんなやりとりがあったことをもちろん知るはずのない連は、ただいま

「だらっしゃ　　！！！」

タイムセールスという名の戦場を絶賛駆け巡っていた。

『次は、卵だ！なんと一パック三十円！！一パック三十円だよ！
一人一パック限定だ！早い者勝ちだ！』

というアナウンスを全部聞く前に、僕はその売場までダッシュしていた。

ここまでの取りこぼしはゼロ。あとはこの卵と最後の醤油のみ。

僕、これ終わったら家に帰ってゆっくり寝るんだと思ったけど、学校があるので寝ることもできないし、そんな考えしてる暇があるならとにかく卵のパックをとらないといけない。

そう考えながら、僕は卵のパックが二つ残っているのが見えたので、手を伸ばしてひとつをとった。もう一つは、開店前に話をしていた人がとった。

感慨に浸る間もなく僕は卵を買い物かごに入れて、すぐさま醤油のタイムセールスが行われる場所へ向かった。

この場所で鍛えられたおかげで、基礎体力はもちろん、走りがはやくなったし、状況判断を素早く、的確にできるようになった。

そのおかげでだいぶ体育の成績が良くなったけどね。ま、『2』が『3』になっただけなんだけどね。

話を戻そう。

今は醤油の売り場へ向かっている。ただし、僕の後ろには何十人もの主婦たちが走ってきている。正直怖い。これで体力が持たないと完全に終わってしまう。

そして、もうすぐ売り場に着くという時に、

『最後は醤油だ！一リットルの醤油一本百円だ！お一人様二本まで！もってけ泥棒！！』

というアナウンスがした。

その言葉と同時に、僕達はラストスパートをかけた。一歩抜きんでているからって、最後まで気を抜くことは許されない。その上、レジまで行かなきゃ買い物が終了したとは言えない。おまけに、家まで帰るのにも体力が必要だからそれにも残さなきゃいけない。

だけど、僕にそんな余裕なんてあるわけもなく。真っ先に売り場につき、そのまま二本かごに入れ、僕はそのままレジに向かった。今度は走らずに、歩いて。

「ありがとうございますー！！」

僕はレジを出て、レジ袋に買った物を入れて、スーパーから出ようとした。すると、

「やっぱり手加減なんか不要じゃないか。店が開く前に言った物、全部買ってたじゃないか。」「そうですね。でも、私達も本気でやってましたよね。」「

「あ、二人も終わったんですか？」

開店前に話していた二人と出会った。どうやら、二人も会計を終わらせて帰るところらしい。

「まあな。何とか全部買えたぜ。」

「私もなんとか。」

と言つて、戦利品の入ったレジ袋を見せてきた。僕はそれを見て、

「やっぱりすごいですね。僕もまだまだですね。」

と言っしかなかった。そんな僕を見て、

「何言っているんだい。中三でこの戦場を平然と駆け回った上に、自分で宣言した食材を全部買うなんてよ。」

「将来は立派な主夫になれますよ。それが、執事にもなれますね。

どちらにせよ、あなたとはこれからも仲良くして損はなさそうですね。」

「そうだな。あたし達の太鼓判じゃ貧弱かもしれないが、誇れよ。

将来が楽しみだ。」

二人は僕の事を褒めてくれた。

褒められてうれしくないとは思わなかった。何事でも褒められると嬉しいよね。

「ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。二人とも。」

「そうだな。これからもよろしくな。」

「よろしく。」

そう言つて、そのまま僕達は帰つていった。

時刻は十一時。もうすぐ昼だ。弁当を家で食べてから行くのかな？

その頃庄一たちは。

「まだ三校時目が……。二校時目は自習だったから楽だったな。連は五校時目からか？」

「……今頃は終わっているはず。ただし、来るまでの準備などにより、昼休み以降から登校するのが傾向。」

「そうなるよ、まだノートは取り続けなきゃいけないよ。」
「……普段お世話になっている。テスト前のノートとか、家に行くたびに料理を作ってもらったりとか、他にもいろいろ。」
「そうだなあ……じゃ、集中しますか！」
「コラ岡田！静かにしろ！！」
「やべっ！……すみません！」
「よし。ついでに、この問題を答えろ。」
「――が頑張っていた。」

六月下旬のある日(13)(後書き)

やっぱり、変わってますよね。

六月下旬のある日（14）

「ただいまー。……あゝ、疲れた。今度はどうやって攻略しよう？」
対象はもちろん、タイムセール。

僕は、家に帰ってきたので考えようとしたけど、

「また今度でいいか。」

と呟きながら、買ってきたものを冷蔵庫へ入れ、学校へ行く準備を
しました。といっても、制服に着替えるだけなんだけどね。

着替え終わって。

この後はいつも通り普通に登校するだけなんだけど、タイミング
があるんだよね。

どうしよう？と思ったけど、構わず学校へ行くことにした。いつも
昼ごろに学校へ行ってるから庄一たちに迷惑をかけてるんだよね。

僕は、疲れがたまっていると自覚しながら学校へ向かった。

弁当はちゃんと持ってきてるよ？

三校時目が終わり、四校時目が始まった。

「あいつ、こんな時に限って学校へ来そうな気がするな。」

「……同感。」

そして、それが現実になった。

最初に見つけたのは、庄一だった。

「ん？」

「……どうした？」

男子は校庭で行っていたので、校門がよく見える。なので、校門前
に人がいることも分かる。

「連が来た。」

「……何？」

庄一のセリフに、圭も校門を見た。

ちなみに、今回の体育はソフトボール。庄一と圭は同じチーム。

守備も外野。なので、それなりに校門の方へ目を向けられる。

「……………本当だ。」

「あいつ、無理して来てそうだな。」

圭が確認したので、庄一は心配そうにした。そんなことをやっている、

「岡田！いつたぞ！」

という声とともに、ボールが飛んできた。フライの形で。

庄一には特に何も力はない。だが、

「あらよつと。」

簡単にボールをキャッチした。そして、

「ほら一壘！」

と言って、一壘へと直接投げた。ちなみに、庄一はライト、圭はセンターを守っている。一壘を守っていた人は、その球を取りこぼさずにキャッチした。しかし、球威が強過ぎたのか、キャッチしてアウトにした後、手が痛くなったとかで保健室へ行くことになった。

「……………加減は？」

「したさ。やつぱり、連かお前じゃないと本気で投げねえよ。」

「……………それは俺達に死ねと？」

「そうじゃねえよ。」

と言っていたら、校門を開けてトコトコと歩いてくる人がいた。それが連だった。

連は、体育の授業中だというのに自然体で歩いていた。たまに球が飛んでくるのにもかかわらず、ちよつと足を速めただけで簡単に避けられた。

すでに始まっているので、先生が連の所へ行き、「お前、さつさと着替えてこいよ、って言いたいが、大丈夫か？昨日までは元気だったのに何があつたんだ？」と訊いて、連が「疲れがたまっていたのか寝坊しまして。ついさつき起きたばかりなのでそう見えるんでしょうね。」と言って先生から離れて校舎の中へ入っていった。それを見ていた庄一は、

「庄一！お前、一墨守れ！」
という声を聴いていなかった。

四校時目の体育の授業中に来た僕は、最初に職員室へ行って担任の先生に報告して（丁度空いてる時間だった）、自分の教室へ行き、もうすぐ終わりそうだと時計を見て思ったので、そのまま教室に残ることにした。

さて、残ったのはいいけど……………

「なにしよう？」

勝手に庄一たちの机を漁るのは悪いからノート写せないし、誰もいないから何もできない。

こうなったら……………

「本でも読もう。」

昨日買った水蓮さんの新作『日常が変わった日』。これを学校へ持ってきていたので僕は読むことにした。

数分後。

結局、ちよつとしか読めないで授業が終わった。まだ冒頭なのに。

僕はおとなしく弁当の準備をして自分の席で待っていた。

そうしていたら、そろそろと女子が来てしまった。それを見た僕は、

（ちよつとお

！！！！）

と思って、反射的にベランダに出た。そしたら、そのまま意識を失った。……………って、あれ？さっきので体力切れ？そう思うことなく、ベランダで倒れてしまった。

連が教室にいることを知らない女子は、教室の前に来た。その時に教室から物音がしたので、全員ドアの前で止まった。

「だれかいるのかしら…………？」

「もしかして、不審者かしら？」

「開けてみませんか？」

寺井の提案で、清水はドアを開けた。しかし、窓が一つ空いている

だけで、そこには誰もいなかった。

「逃げた・・・？」

「だとしたら物凄い手練れじゃないかしら？」

「みなさん、何かとられてるものが無いか確認してください。」

レイジニアと清水は教室にいた人間がどこに行ったのか疑問に思つて、寺井は何か盗まれたものが無いかを女子のみんなに呼びかけた。女子全員が自分の荷物を確認していると、男子が戻ってきた。

「そういうや、結局連のやつ授業に出なかつたな。……ん？」

「……無理もない。授業時間が少なかつた。……何かあつたのか？」
庄一と圭が先頭になつていたので、まず二人がその状況を見た。そして、残りの男子も次々と教室の状況を確認した。そして中島が清水に訊いた。

「ねえ久実。何があつたの？」

すると清水は、

「私達が教室に戻つて来た時に、物音がしたから誰かいるのかと思つてドアを開けたら誰もいなくて、何か盗まれているものが無いか確認してるところよ。」

と状況の説明をした。

その説明で中島は悩み、庄一と圭はピンときた。

「圭、ひよつとすると・・・」

「……多分、それで合つてる。」

二人は誰にも気づかれないうちに話してから、そのまま自分たちの席、つまり窓が開いていた席の近くまでいった。

その光景を見た中島達は疑問に思いながらもついでにきた。なぜだか、この二人についていった方がいい、と思つたからだ。

窓まで近づいた庄一は、いきなり窓の外、ベランダを覗き込んだ。そして、

「圭、どうする？保健室まで連れてくか？」

と圭に確認し、圭は、

「……起きなければ連れて行くしかない。」

と、ベランダを見ないで言った。

訳が分からない四人は、中島が代表して訊いた。

「誰かいたの？もしかして、久実が言っていた人？」

対して、庄一は歯切れが悪そうに言った。

「あゝ、不審者でもなんでもないから心配するな。ただ単純に力尽きただけだろう。」

その後、誰が起こすかでジャンケンをして圭が負け、圭がベランダに行ったのを見て清水が質問してきた。

「誰がいたのよ？」

その質問にも歯切れが悪そうに答えた。

「あゝ、うゝ、答えなきや駄目か？」

「当たり前でしょ？」

そうしていたら、

「……起きろ。両親がタヌキの置物を買ってきてるぞ。」

「……」

「……起きない。庄一、保健室。」

「やっぱりか。面倒なことしやがって。」

そう言つて、清水の質問には答えずにベランダへ向かった。清水は怒りそうになったが、中島が何とか制し、収まった。

そして、庄一たちがベランダから戻つて来た時にクラス全員が理解した。この騒動の犯人を。

「分かったか？という訳で、こいつを保健室へ連れてくから。圭、弁当持ってきてくれ。」

「……連のは？」

「……一応持ってきてくれ。起きるかどうかわからねえけどな。」
そんなやりとりを行った後、庄一は連をおんぶして、圭は三人分の

弁当を持って、教室を後にした。

残された全員はしばらく呆けていたが、はつとして全員弁当を開きだした。

しかし、中島達はというと、

「でも、どうして池田君が倒れていたの？」

「体育の途中に来たけど、池田君、とても疲れてたように見えたよ。なにかあったのかな？」

「それに、遅れてきた理由も分かりません。」

「ここは訊くしかないのでしょうか……朝の件もあるから訊きづらいわね。」

「とりあえず、どうしようか？」

この件について考えていた。

六月下旬のある日(14)(後書き)

疲れた体に鞭打つて、人間としてはやっちゃいけないですよね。

六月下旬のある日（15）

保健室に着いた庄一たちは。

「過労による軽い貧血ね。一応魔法をかけといたから、六校時目には間に合うんじゃないかしら？」

「ありがとうございます。美沙紀先生。」

「いいのよ。保健室を担当してるから、当然よ。……それにしても、中学三年生の疲れ方じゃないわね。一体何をすればこんなに疲れるのかしら？疲労と心労が、どっちも同じような感じになるなんて。」

「……そこまでは分かりません。」

圭がそう言つと、美沙紀は笑つて「そうかもしれないわね。」と言つた。

そして、そこで二人は弁当を食べ始めた。

「教室で食べてほしいのだけれど、仕方ないわ。」

それを見た美沙紀は苦笑して自分の弁当を食べ始めた。

ここの保健室の先生は藤原美沙紀。魔術師である。といつても、彼女の得意魔法は『回復』。だからこの職業に就いたみたいだ。年齢は二十代前半。保健室の先生とは思えないぐらいスタイル抜群なので、彼女見たさで保健室へ来る生徒も多く、また、先生に告白先生も多い。

しかし、彼女はそれをことごとく断っている。理由は『ピンとこないから。』。

庄一たちがテーブルで弁当を食べ、美沙紀は自分で使っている机で弁当を食べていた。連はベッドで寝ている。

時々、庄一たちが美沙紀に目を向けたりすると、美沙紀もそれらに気付きにつこりと笑う。その笑顔に二人は赤くなり、弁当を食べるスピードが速くなった。

そうしていたら、

「……ん？保健室？ということとは、寝ちゃってたの、僕？」

連が起きて、状況を確認していた。そのことに先生は驚き、庄一と圭は弁当を食べるとを止め、連がいるベッドの所へ行った。

「少しは休んで来いよ、連。」

「……倒れるなら家で休んでからでいい。」

「二人ともありがとう。……それにしても、なんだか体が軽いんだけど、なにかした？」

庄一と圭が、連にそう言うと、連は先程の疲れがなくなっていると感じ、何をしたのか訊いてきた。それに答えたのは美沙紀だった。

「無理しちゃだめよ。疲労回復の魔法をかけただけだから。疲れがとれたとしても、六校時目までは安静にしてね。」

それに対して、連は上半身を起こして三人にお礼を言った。

「ありがとうございます。」

それを見た庄一と圭は一安心して弁当を食べ始め、その時に連の弁当を本人に渡した。

連はそれを受け取った後、庄一たちのいるテーブルへ行き、自分の弁当を食べ始めた。

「仲がいいわねえ。」

と、美沙紀先生が、僕達と一緒に食べている姿を見ていった。

それに対して、僕達は笑っただけで何も言わなかった。というか、先生なのに際どい服装ですね。

そうこうして食べていたら、保健室にまた人が来たみたいだった。それを見て先生は、

「今日はいつもより少ないわね。」

と言って僕たちを驚かせた。いつもほどのくらいの人数が来てるんだろう？と疑問に思ったけど、面倒なので考えなかった。

そして入ってきた人たちを見て、僕達は驚いた。

「中島達か。さっきの件か？」

「……朝と同じことを訊くなら、黙秘と強硬手段に出る。」

「朝？さっきの？二人とも、何言っているの？」

庄一と圭の言うことに、僕は全く覚えがなかった。さっきって、僕が倒れたことと関係があるのは確かだろうけど、さ。

それを受けて清水さんはこう言った。

「……さっきの件の真相が分かったわ。池田君。あなたは学校へ遅れて、そのまま教室にいたところで私達が来て窓から逃げた。その時に疲れてたのか、そのまま倒れた。そうでしょう?」

「うん。そうだよ。」

僕がそう答えたら、清水さんが謝った。

「ごめんなさい。」

「え?」

「私の早とちりのせいで、あなたの印象が悪くなったみたいだから。」

「そうなの?」

と僕が訊くと、二人とも首をかしげた。それを見て何が気に入らなかつたのか清水さんは、

「そう!だから謝るわ。ごめん。」

と言った。頭を下げられるのには慣れていないので、

「別にいいから!頭を下げなくて!」

と僕は言った。それで許してもらえたと思ったのだろう。さっきとは打って変わってこう言ってきた。

「そう?ならここでお弁当食べてもいいかしら?私達も。」

僕に訊かないで美沙紀先生に訊いてよ。と言いたくて先生を見たけど、無視された。

ここの管理はあなたがしてるんですよね?とすぐさま思った。

僕が何も言わないのを肯定ととったのか、中島君たちも座らせてこのメンバーで昼食を食べることとなった。

席順は、僕から時計回りに行くと、レイジニアさん、清水さん、中島君、寺井さん、圭、庄一の順。庄一は何やら不満顔だったけど、それを気にせず食べ始めた。

黙々と食べていると、中島君が僕に訊いてきた。

「遅刻の理由って、寝坊？」

「時間があつて二度寝したらもう十一時半くらい。そのまま慌てて準備してって感じたね。」

「あれ？でも先生には『家庭の事情で』って言ってたんだよね？」

「ああ、あれね？いろいろあるんだよ、僕の家はね。」

そう言つたら、中島君は何も訊かなくなった。

再び沈黙。

すると、寺井さんの表情が気になったのか清水さんがこう言った。
「董。なにやら晴れ晴れとした顔だけど、どうかしたの？」

「え！？な、なんでもないですよ！？」

寺井さんって隠し事苦手なのかなあと思いながら、僕に飛び火しなければいいなあと思つて食べ続けた。

寺井さんの態度が気になったのか、レイジニアさんも会話に加わつた。

「思えば、朝から態度はおかしかったわね。それに、昨日家にいなかったんでしょ？どこにいたのかしら？」

それに対して寺井さんを援護したのは、中島君だった。

「僕の家だよ！」

中島君……君は男だね。みてよほら、寺井さんは顔を真っ赤にしてるし、レイジニアさんと清水さんは完全に怒ってる。僕達はどうと、

「ま、いつものことだな。」

「あれ？便乗しないの？」

「……今朝の約束。」

傍観を決め込んだ。

だって、あの中に入る時点で自殺行為だからね？そして、それが分からないほど僕達は馬鹿じゃない。なので、おとなしく観てることにした。

口論はヒートアップしていった。

「嘘よ！昨日、元はじに電話した時『家には来てないよ。』って言って

たじゃない!!」

「そりゃそうだよ! 董が『誰にも言わないで。』って言ってたんだから!」

と、ここで、レイジニアさんがあることに気付いたみたいだった。

「ねえ、スミレ。」

「なんですか?」

「あなたの弁当とレンの弁当、ところどころ同じような気がするのだけれど……気のせいかしら?」

おおっと! これはマズイ!! そう思ったけど、うかつに口を挟むと自爆しそうなので、我慢した。そしたら、清水さんが冷静になった。

「そうね。よく見たら池田君のお弁当と董のお弁当が似てるわね。」その言葉で寺井さんはオロオロしだし、中島君は緊張した面持ちで、僕は気にせずお弁当を食べていた。今までの授業のノートを写さないといけないからね。

そして、

「ねえ董。そのお弁当のおかず、食べていい?」

と清水さんが言った。対して、寺井さんはどうしようか悩んだみたいだけど意を決したらしく、

「駄目です。」

ときっぱり断った。それには清水さんも驚いたみたいだけど、何も追及しようとはしなかった。

そろそろみんな食べる終わる頃に、圭が思い出したかのようにこう言った。

「……そういえば」

「どうかしたの?」

「…連。昨日あの小説、届いた?」

「うん。まだちよつとしか読んでいないけどね。」

「お前ら好きだなあ。」

「あの小説って?」

僕達が小説の話題で話していると、レイジニアさんが訊いてきた。

僕が答えようとしたら、圭が先に答えた。

「……題名は『日常が変わる日』。作者は水蓮。それほどメジャーではないが、売り上げは合計二十万部突破。一部熱狂的ファンの間だと、デビュー作品である『虚空の暮らし』の初版は一冊四十万くらいで取引される。……何でもない。」

「……………」

圭の詳細な説明はいつもの事だから僕達は慣れたけど、中島君たちは驚いていた。

「圭。最後の何でもないは意味ないよ。」

「アウトだ。」

「……………分かってる。」

だったら言わなくていいんじゃない？と言いたかったけど、済んだことだから気にしない。

他の四人は驚きから戻って……来たみたいだけど、口を開こうとしない。

そうこうしてる内に五校時目が始まりそうになったので、

「おい行くぞ、連！圭！」

「先生、ありがとうございます！」「…失礼した。」

「池田君、激しい運動は控えなさい！」

僕達が保健室を出る時に、美沙紀先生からありがたい言葉が。

あとの時間は自習と授業だから問題ないでしょ。そう思って僕は教室まで歩いて行った。

その後の授業は、自習の時に一校時目と三校時目のノートを写し、授業の時は普通に受けた。

放課後は、寄り道もせずに家に帰り、洗濯物を畳み、夕飯を作り、寺井さんの荷物は中島君と一緒に寺井さんが回収しに来た。夕飯を食べた後は、風呂を沸かし、家計簿をつけ、両親が帰ってきて夕飯を食べ、食器を洗い、風呂に入って、寝た。

……………色々あったけど、立場がなくならなく

てよかったと思いつつながら。

六月下旬のある日(15)(後書き)

今回で、六月下旬のある日の話は終わりです。次は、ちょっとした
閑話でもしますか。

閑話 とある休日 池田連編その1 (前書き)

これからちよくちよく入れます。

閑話 とある休日 池田連編その1

休日。僕にとってそれは安らぎの時間。だけど、必ず体が休まるという事ではない。

僕の朝は休みだろうと関係なく午前五時半に起きる。

「ふあゝあ。今日は休みなのになあ。でも両親は仕事だからなあ……」

そう呟きながら、僕は着替えて一階に下りる。

一階に下りたあと、まずリビングに行き、僕は冷蔵庫から昨日の夜に下準備した両親の昼食用の料理を作り始めた。それが終わると朝食を作っていた。

昼食は弁当箱に入れ、朝食はキッチンに近いテーブルに並べていた。いつものことだ。

この時午前六時。僕は次に洗濯物を干しに行った。

干している最中、両親が起きてきた。

「おはよう、連。」

「今日も早いわね。」

二人ともパジャマ姿で起きてきた。髪が寝癖でひどいことになっているのを見て、会社ではすごい人なのになあ、と僕は思った。

洗濯物を干し終えて、三人で朝食を食べた。本当はもう一人いるのだけれど、どこかへ行ったきり家に戻ってきていない。無事だっ
てことはわかってるんだけどね。

朝食を食べ終え、僕は調理に使った器具と一緒に食器を洗い、両親は顔を洗いに行った。

「行つてきまゝす。」

そう言いながら、両親は家を出た。

両親を見送った後、僕は家の部屋を掃除することにした。これが

らのことを考えながら。

「え〜っと、今日は買い物以外は特に予定ってなかったはずだから……。お？もしかして、久しぶりにのんびりできる時間が発生した！？やった！」

僕は掃除をしながらそんなことを言った。それと同時に、そういった時間っていつからなかったんだろうと記憶を探ってみた。

そしたら何とびっくり！中学一年の夏休み以来、そういった時間が一切なかった！

その事実には泣きそうになりながらも、僕は掃除していった。

「あ〜終わった、終わった。これでゆつくりできる〜。」

掃除し終えた僕は、ソファに寝転がりながらそうつぶやいた。

こうやってだらけるって幸せだなあ、と絶対ほかの人が見たら驚く格好で寝転がっていたら、急に電話が鳴った。

チツ。誰だよこんな時に。そう思いながら、僕は電話に出た。

「もしもし？」

『よお、連……………って、こわっ！不機嫌オーラが電話越しに感じるぜ。』

「それがわかってるなら用件を言ってくれないかな、庄一。」

『わ、わかった。圭が新しいゲームソフトを体験した感想を言ってくれて。報酬は出すそうさ。』

「ベータテストだね？だったら圭の家で……………って、駄目か。圭は内緒にしてるんだっけ。」

『そう。で、俺の家はゲームなんて買つといたら怒られるんだよ。

頼む！お前の家でやらしてくれないか！？』

「……………ハア。いいよ、まったく。そのかわり、昼食は何も作らないからね。」

『助かる！じゃ、今から圭に電話してお前の家に集合させる！じゃ！』

そういつて、庄一は電話を切った。

閑話 とある休日 池田連編その2

庄一が電話を切った十分後、インターホンが鳴った。誰だか見当はついてはいたけど、

「はい。どちら様？」

と、わざとらしく玄関に向けていった。そしたら、

「来たぞ〜。」

「・・・開けてくれ。」

庄一と圭の声がした。

ま、分かってたけどね。そう思いながら、僕は玄関のドアを開けることにした。

「お邪魔します。」「・・・邪魔する。」

玄関を開けたら、二人が入ってきた。僕は若干不機嫌な気持ちを隠せないまま、上がるよう促した。

リビングにて。

「連、悪かったって。だから機嫌直せって。」

「・・・このゲームをやれば、ストレス解消になると思う。」

「たまの休みなんだから、ゆっくりしたいんだけどなあ。それと、基本的に僕ゲームやらないんだけど。」

「・・・だから、連にやってもらおう。このゲームは、ストレスがたまっている人向けのゲームだって言った。」

「ふ〜ん。」

そうやって圭が僕に見せたゲームのタイトルは、『鬱憤晴らし』。

その名のとおり、ストレス発散させるためのゲームらしい。

その言葉を聞いた庄一は、

「あれ？そしたらどうして俺は呼ばれたんだ？」

そうやって首をかしげた。すると、圭がもう一本のソフトを取り出した。

「これは？」

「・・・新作『地獄めぐり』。」

圭曰く、間違つて地獄に落ちた主人公が、門番たちや地獄に落ちたものたちと戦いながら、現実へと脱出する話。

「俺はこれをやれと？」

「・・・そう。」

そのやり取りを聴きながら、僕は圭が持ってきたソフトをゲーム機に入れた。どんなゲームができるのか、ちょっと楽しみだった。

閑話 とある休日 池田連編その2 (後書き)

まだ続きます。

閑話 とある休日 池田連編その3

数十分後。

「どりゃあー!!ぶつとべー!!」

「連つて、普段どれだけストレスたまってるんだろっな?」

「・・・ここまでとは思わなかった。」

すっかりはまった僕を見て、庄一と圭はそうつぶやいていた。

いや、すっかりするね。こんなゲームでないかな?」

などと思っていたら、どうやら試作品が終わってしまったらしい。

これで終了します、という字幕が出てしまった。

せつかく調子乗ってきたのになあ。

残念に思いながら、僕はソフトを取り出した。

「・・・感想は?」

「すっかりはまったよ。完成したらやりたいね。ただ、ちょっとゲ

ームの内容が物足りなかったかな?」

「・・・それは参考にしとく。」

そう言つて、圭はソフトを受け取り、僕は封筒を受け取った。

「よし。次は俺だな。」

そう言つて、庄一は『地獄めぐり』のソフトをゲーム機に入れた。

それからのことは、あまり思い出したくない。唯一いえる事は、

やり終わった庄一がそのソフトを壊そうとするのを、僕たちが必死

に止めに入ったということぐらいかな。

そして、お昼。僕はあらかじめ昼は作らないといつたので、

庄一と圭はコンビニで買ってきたみたいだった。僕は、冷凍食品を

解凍して食べることにした。

「手抜きだな。久しぶりに見た気がする。」

「・・・いつもは客がいると作ってくれる。余程のんびりしたいと

見る。」

そりゃそうだよ。たまの休みなんだからね。僕だってゆっくりした

いんだ。

そう思いながら、僕は昼食を食べていった。庄一と圭も食べていった。

「昼食を食べ終え、これからどうするか話し合うことにした。」

「これからどうする？」

「……帰る？」

「そうしてくれるとうれしいんだけど。」

「何かあるのか？」

「買い物ぐらいで何も無いよ。ただのんびりしたいだけだよ。」

「……本音がダダ漏れ。」

圭にだけは言われたくないんだけど。

そう思ったけど、僕は何も言わずに先に進めることにした。

「で、どうするの？」

「……俺は帰ってから報告する。」

「じゃあ俺は、家まで散歩するか。」

ということ、二人は帰っていった。

二人を見送った後、僕は三時まで寝ていた。というか、気づいたら三時になっていた。

僕は買い物に行かないとやばいと思い、財布を持ってスーパーに向かった

閑話 とある休日 池田連編その3 (後書き)

まだ続きます。

閑話 とある休日 池田連編その4

スーパー店内にて。

僕は中島君とばったり会った。

「やあ、池田君。どうしたの？買い物？」

「そういう中島君は、またおつかい？」

「そうなんだよ。全く、うっかりで買い忘れたものを息子に買いに行かせないでほしいんだけど。」

そう言いながらため息をつく中島君。

「それぐらいならいいさ。それじゃ。」

「え？あ、うん。じゃ。」

僕の言葉に疑問を感じたのか中島君は首をかしげたけど、僕はそんなことを気にせず、買い物が続けていった。

スーパーで買うものを買ったので、店を出た。そして、次に商店街へ向かった。スーパーが家から遠く商店街が家から近いので、スーパーから商店街へ行くと帰り道が楽になる。

「へいらっしやい！どれにする？連！！」

商店街について真っ先に向かった店が、八百屋。こっちのほう野菜が安いから、僕はここを利用している。たしか・・・小学一年生からここで買い物をしていた気がする。食材を買いに。

僕は並んだ野菜を見ながら、今日と明日に使う野菜を選んでいった。

「まいどあり！」

ちよつと涙目になりながらも、八百屋のおじさんは笑顔を絶やさなかった。

ちよつと値切りすぎたかなと罪悪感を覚えながらも、僕は次の店へ向かった。

買い物を終えて僕は家へと帰ろうとしたら、ミネルバさんがと誰かが喧嘩してるのが見えた。

まだ人だかりはそんなにできていないから問題はないけど、これから人だかりができそうな予感がしたので、僕は止めることにした。「ミネルバさん、どうかしたの？」

「あ、連じゃないか。いやな、こいつが私に訳の分からないことを言ってくるから反論したら聴く耳持たない、って感じで突っかかってくるんだよ。どうにかしてくれないか？」

そう言っ指差した先にいたのは、

「あ、レン！こいつに近づいてはダメよ！すごい邪悪なアンドロイドなんだから！」

「レイジニアさん？どうしてここに？」

そう、レイジニアさんだった。しかも、ちよつと臨戦態勢な状態で「そんなことは関係ないわよ！こいつは」

「レイジニアさん。ちよつと落ち着いて。ミネルバさんはこの駄菓子屋で働いてるだけだから。前に似たようなものを見たのかな？」

僕がそう言つと、レイジニアさんは二の句が継げなくなった状態で、ミネルバさんを見た。確認をする意味合いが強いみたいだ。

その視線に気づいたミネルバさんはこう言つた。

「あたしに似た奴が居たつていうのは本当だろうな。なんとつて、百体くらい作られたからな。」

「そ、そうだったの。……ごめんなさい、人違いであんなこと言つて。」

ミネルバさんの言葉を受けて、レイジニアさんは素直に謝つた。それを聞いたミネルバさんは、

「いいつてことよ。あたしは気にしてないから。」
そう言って快活に笑つた。

ミネルバさんは大人だなあと思ひながら、僕は「これで終わったことだし、帰るね。」と言って帰ろうとしたら、

「ちよつと待つてくれないかしら？」

レイジニアさんにつかまつた。

「なに？レイジニアさん？」

「ちよ、ちよっと頼みがあるんだけど。」
そう言ってレイジニアさんは僕を引っ張っていった。

閑話 とある休日 池田連編その4 (後書き)

もうしばらく辛抱してください。

閑話 とある休日 池田連編その5

「どうしたの？一体？」

レイジニアさんに引つ張られて裏路地に連れてかれた僕は、当然の疑問を口にした。

そしたら、レイジニアさんがちょっと恥ずかしそうに言った。

「そ、その、ちょっと買い物に付き合ってもらえないかしら？」

「え？どうして？」

そう僕が訊くと、恥を捨てたのかレイジニアさんがこう言った。

「食料がなくなったからよ。」

その言葉があまりにも堂々としていたので、僕はちょっとだじろいでそんなになる前に食料買えよと素直に思った。レイジニアさんの言葉はまだ続き、

「だから、ちょっと手伝ってもらえないかしら？連って、料理うまいから。」

そう締めくくった。

僕は、深く考えないで「うん、いいよ。」と言って手伝うことにした。

「まず何から買うの？」

「まずは……やっぱり肉かしら？」

そうレイジニアさんが言ったので、僕は精肉屋に案内した。

「いらっしや……って、連と……彼女か！？」

「違うよ！？同じクラスのレイジニアさん。買い物を手伝ってるだけなんだよ。」

「ちえ。面白くねえな。……まあいい。で、嬢ちゃん。何がいい？」

精肉屋のおじちゃんがレイジニアさんにそう訊くと、彼女は何種類かの肉を買っていった。ちなみに、どこで覚えたのか知らないけど、レイジニアさんは値切りができるようだった。

そんなことを各店で行った結果。

「結構安いわね、ここ。」

「結構大量に買ったね。」

レイジニアさんは買い物上手でした。これって僕の手伝い必要ないんじゃない……？

そう思っていたら、

「ありがとうね、レン。」

「え？」

レイジニアさんにお礼を言われた。

「どうして？」

「だって、あなたのおかげでスムーズに買い物できたもの。それに、あなたとの買い物、楽しかったわ。」

そう言いながらレイジニアさんは笑った。その笑顔がとても魅力的だったので、ちょっと心臓の鼓動が早まった。

「あら？顔が赤いわよ、レン？」

「あ、赤くなってるないよ！」

僕がそう反論しても、レイジニアさんは笑って何も言ってくれなかった。

結局、僕の弁解を聞かずにレイジニアさんは帰っていった。まったく。

家に帰って冷蔵庫に食材を入れ、夕食を作り出した。（洗濯物はスーパーへ行く前に込んだ）夕食を作り終えたら、自室へ戻って家計簿を持ってきた。そして、家計簿を書き始めた。使ったお金はチキンと書かないとね。

家計簿を書き終えたら、ちょうど両親が帰ってきた。

「「ただいま。」」

「お帰り。」

僕が弁当を洗っている間、両親はいつものようにビール片手に夕食を食べていた。そして、僕が風呂を沸かしに行って戻ったら、両親

は酒盛りをしていた。その中で、僕は夕食を食べていった。

両親が風呂に入ってる間、僕は食器を洗って片づけたあとに朝食と昼食の下準備をしていった。

それが終わったら、僕も風呂に入って寝た。

今日はいつもよりゆっくりできてよかったなと思いつつながら

閑話 とある休日 池田連編その5（後書き）

次から三章、夏休み編です。

三 夏休み（七月下旬～八月末日）

夏休み。僕達がとても待ち望むもの。この夏に彼女つくるぜ！
と言っていたクラスの男子がいるほど、浮かれる人が多いもの。

そんな中、僕達はというと……………。

「あつちいゝ。本当にここに来る必要があるのか？圭。」

「……………必要。毎年ここに来てから。」

「それにしてもさ、圭が誘うなんて初めてじゃない？」

圭に誘われて、デントツというところに来ていた。

名前ぐらいは聞いたことはあるんだ。確か……………。

……………

「……………デントツ。俺達が住んでいるところから新幹線で二時間の場所。ここは情報が飛び交う地域。電子機器を取り扱う店が数多くある。それはこの世界の中では一番の数。さらに、近くには海があるので、貿易地域としても名が高い。ちなみに、泳ぐことが可能なので、観光欲が泳いで帰ることが多い。美人も多い。」

「マジで!？」

「無駄に細かい説明ありがとうね、圭。」

「……………無駄じゃない。」

失礼。細かい説明ありがとう、だった。

「それにしても、こんなところに何の用なんだ？」

もつともなことを庄一が訊いた。

ちなみに、僕達の服装は半そで半ズボンで帽子をかぶっているという、普通の服装。目立ちたいと思わないからね。

あ、両親は仕事のはず……………だけど、心配だな。なんたって泊りがけで来てるんだから。僕がいなくてちゃんとできるのかな?と思ったりする。

泊りがけって言うのは、圭が誘ってきたときに言ったこと。ただで何泊も泊まれるから行かないかと圭から提案された時はどうしょ

うか悩んだけど、庄一に「たまには羽を伸ばすのも悪くはねえだろ？」と言われ、行くことにした。両親には言っている、何とか自分たちでやってもらいたい。

「……定例会。」

庄一が訊いたことに圭が答えたのは、簡単なものだった。

「定例会？という事は圭ただだよ？参加するのは。」

「……そう。だけど、今年があっちから『友達も連れて来ていい。』
と言ってきた。」

「だから俺達を誘ったんだな？」

庄一の言葉に、圭は頷いた。

「それにしても、どうして僕達呼ばれたんだろ？」

「さあな。でもただで泊まれるんだ。行っても損はないだろ。」

「交通費は自腹だよ。」

「そうだけどな。」

とやっていたら、

「……ついてこい。」

と圭が僕達を促し、僕達はおとなしく従った。

三 夏休み（七月下旬～八月末日）（後書き）

感想をお待ちしております。

夏休み（七月下旬～八月末日）（2）

「ついたわね。」

「いい天気ね。」

「そうですね。」

「なんで僕がみんなの荷物持たなきゃいけないの……？」

連たちがデントツに着いた後、中島達も同じく到着した。

「久しぶりの休みなんだからつべこべ言わない……！」

「でもハジメの言う事はもつともね。じゃあ、私の荷物返してくれない？」

「はい、レイジニア。」

「あ。私のも……」

「はい、董。」

「……………」

一人だけ荷物を持たせている罪悪感か、それとも優しくない女だと思われるのが嫌なのか 絶対に後者だろうが 清水は、

「やっぱり自分で持つわよ……！」

と言って、自分の荷物をひったくった。

「どうしたの、久実？いきなり。」

「いいじゃない！あんたに持たせたら盗まれそうだから自分で持つことにしたの！」

恥ずかしさを誤魔化すように、清水はそっぽを向いて言った。

急に態度が変わった清水を見て不思議に思ったが、中島は考えることをしなかった。

「じゃ、行こうか。」

中島の言葉で、みんながついていった。

このあと、ひと騒動起きることを知らずに。

「……………着いた。」

「だいぶ歩いたが、目の前にあるビルは何階建てだ？」

「……四十階。」

「この名前、何？『ヒューマニーステーション』って。」

「……この名前。基は貿易会社だったが、今では本社を別の所へ置き、ここはホテルとして活用されている。交流の場でもあり、会場でもある。俺の名でここを使うと、何重もの本人鑑定が行われる。」

「へえ〜。」

「って、庄一。危うく流そうとしてたけど、結構凄い事だからね？」

「……入る。」

と言って、圭が先に入ってしまったので、僕達も後に続いた。

「……いらつしゃいませ。」

僕達が入ったら、スタッフの人たちが出迎えてくれた。そして、圭の顔を見たら血相を変えてみんな散り散りとなった。

「……あれ？」

ちよつとみなさ〜ん。置いてかれると困るんですけど。

そう思っていたら、フロントの方から一人の壮年の男が出てきてこっちに来て僕達の前に来た。その人が圭に向かってこう言った。

「久しぶりだ、圭君。本当に友達を連れてきたのかい？」

「……一年振り。そっちがいいと言った。それに、前々から一緒に来させようと思っていた。」

圭との会話を聴いてると、どうやらこの人は圭の知り合いで、定例会に出る人みたいだ。

その人が僕達に気付いたみたいで、自己紹介してくれた。

「初めまして。池田連君に岡田庄一君。私の名前は黒曜甚平。このホテルのしがない雇われ店長で、圭とは知り合いみたいなものだ。よろしく。」

「よろしくお願いします。」

「よろしく。」

僕達の名前は、おそらく圭が話したか、自分たちで調べたのかのどちらかだろう。だから、僕達は自己紹介をしなかった。

黒曜さんは、「とりあえず、場所を移そう。」と言って、圭が普段使っている部屋へと案内してくれた。使っているというよりは、割り当てられている部屋と言った方がいい、と圭は言っていたけど、部屋に案内される間、僕達は黒曜さんと話した。話した内容は他愛もない世間話だけど、友達同士の噂話というよりは、どれも裏付け、確証がある話だった。

圭はどんな人達とつるんでいるのか、僕は興味を持ったけど、知らなくても良いと思ったので本人に訊かなかった。

「着いた。ここが圭君の使っている部屋だ。」
と言って黒曜さんが案内してきた部屋は、中学三年生が絶対に使わないという以前に、大人になっても使う機会がないんじゃないかと思う部屋だった。

なんと三十五階の一室、しかもかなり広い、いわゆるVIP用の部屋。三十五階以降は、こういう部屋がなく、しかも一階に部屋が二つしかない。一泊するのに何百万もかかるんじゃないかと思ったら、急に膝が震えだした。高所恐怖症でもないのに。

庄一を見ると、同じく膝が震えていた。恐らく、圭が毎年こんな部屋を使っているのに驚きすぎたのだろうね。

一方圭は、「……毎年毎年、ここで一人だったから凄い暇だった。」と言っていた。あと、「……慣れると真新しさがなくなって、つまらなくなつた。」とも。

黒曜さんはお辞儀をしてから、
「では圭君。定例会はいつも通りに。他のお二人は、ここにいるかホテル内を出てください。」
と言って去っていった。

僕達、ここに来たのは初めてなんだけど……。
そう言いたかったけど、何も言ってくれないだろうから言わなかった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（2）（後書き）

友人の知らない一面を知った時、あなたはどうしますか？

夏休み（七月下旬～八月末日）（3）

黒曜さんが部屋を出て。

僕達は、この後どうするか話し合うことにした。

「このあとどうする？」

「…道案内する？」

「それでも良いと思うよ。」

「定例会はいつから始まるんだ？」

「…午後七時から一時間。それを二十七日間。」

「長いね。」

「…そのうち、全員が集まるのは十日間。」

「なんだか面倒だな。その間はここにいてるって事だろ？」

「…そう。だから一年でここが詳しくなる。」

「結局、どうしよう？」

それで悩む僕達三人。すると、面倒になったのか庄一が、

「だ　　！！こうなったら海行くぞ、海！！」

と言い出した。僕達はというと、

「もう昼だよ？」　「…昼食べてから？」

バラバラだった。しかし、これで決定したようで、

「昼食ったら海！！用意していくぞ！！」

と庄一が言った。

ヤレヤレ。

昼食は、圭曰く「穴場」と言われる場所で食べた。場所はホテルのすぐ近く。外食なんて久し振り、その上友達となんて初めてだったけど、とてもおいしかった。この味を忘れなくなかったので、手帳を取り出してメモしてたら、店長らしき人が僕のメモを見て驚いていた。なんて驚いていたのか訊いてみたところ、「使っている材料、隠し味を全部言い当てられた。」からだって。手順は教えても

らったよ。いくら何でも手順が分からないと駄目だからね。

その店を後にして、僕達は海へと向かった。といっても、ホテルがもともと海に近かったんだけどね。

そんなわけで、

「海だ　　！！」

「落ち着きなよ、庄一。」

「…定番。」

水着に着替えて砂浜にいた。

ま、男二人の水着姿なんて簡単な描写だよ。

僕以外が自前。僕だけ学校指定。買う余裕なんてなかったからね。

「なんでお前、学校の物なんだ？」

「仕方ないじゃん。今の僕の財布には、水着を買うなんて選択肢なんてないんだから。それに、今まで買う必要を感じなかったから。」

「……節約ここに極まり。」

「ん？じゃあお前、ここに来るまでの金とかは？」

「僕が貯めてたお金。まだあるけど、帰りの分とかお土産とかで一文無しになりそうだ。」

「あくまで家の金は使わねえんだな。ある意味尊敬するぜ。」

「……苦勞人。それでこそ、池田連。」

「帰ったらどうしよう？」

「それより、泳ごうぜ。」

「…賛成。」

「そうだね。」

そんな会話をして、僕達は海へ向かって砂浜をかけていった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（4）

「しまったな……パラソルでも持ってくるんだった。」

「……日よけが無い。」

「本当だね。」

海で泳ぐのに飽きた僕達（ちなみに、上に服を着ています）は、砂浜で休むことにしたんだけど……パラソルを持つてくることを忘れてたため、休もうにも日差しのせいで休んでる気がしない。

「どうする？」

「借りたいけどお金が……。」

「……海の家でも行く？」

僕達が悩んでいると、圭が建物を指して言った。僕達もそれを見てみると、百メートルくらい先に「海の家」と書かれた看板が建物に立てかけられていた。

「なら行くか。あそこの方が外にいるより涼しいだろうし。」

「そうだね。」

「……同感。」

話がまとまったので、僕達は海の家へ行くこととなった。

海の家に着いた僕達。でも、結構な人だかりが出来ていた。

「何かあったのか？」

「……訊いてみるか？」

「そうだね。誰が行く？」

そう言つて三人でジャンケンをしたら、僕が負けた。弱いなあ、僕。

「空いてたら席取つてこいよ。」

「……頑張れ。」

分かつてるよ、まったく。そう思いながら、僕は人だかりの中へ行くことにした。

人混みを分けて移動するのならバーゲンセールなどで習得済みなので、それを使って先頭まで行った。行く間に、「あの子たち、結

構レベル高いな。」「ここじゃ見たことないな?」とか聴こえたけど、気にせず進んだ。

ぼっかり空いてる空間があったので、もうすぐだと思って人を押しつけていった。

そしてその空間を見ると、

「いらっしやいませー!海の家へようこそ!」

「ど、どうぞよろしくお願いします!!」

「入らないなら他の人の邪魔よ。何処かへ行つて。」

見覚えのある三人が店の前にいた。え?あの三人つてもしかして……。

「清水さんに寺井さん、レイジニアさんだよね?どうしてここに?いや、その前に。あの三人がいるってことは中島君もいるってことだね。これは……入りづらいなあ。」

どうしてこうも接触率が高いんだろう?僕達、圭の付添なのに。そう思っていたら、電話が鳴った。

「もしもし。」

『どうした?店入れたか?』

「いやあ、中島君たちが海の家で働いてるんだよ。」

『マジで!?!なら入ろうぜ!驚く顔が見たいから!』

「え!?それ本当!?!」

『じゃ、俺達もそっち行くから。頑張つて席取つとけよ!』

「ちょっと!……切られた。もう行くしかないのかな。」

「庄一に強引に決められたので、僕は勇気をもって行くことにした。」

「いらっしやいま……って、ええ!?!どうしてここに!?!」

「どうして池田君が!?!」

「私たちの事、つけてたの?」

「まっさかあ。できるわけないじゃん、そんなこと。偶然だよ、偶

然。それよりさ、店に入りたいたいんだけど、いい？」

「え、ええ。いいわよ。何名様で？」

「三人。」

「ではこちらへどうぞ。」

と言って、清水さんは僕の事を案内してくれた。なんだか緊張するなあ。

「こちらでお待ちください。」

と言って、清水さんは戻っていった。僕はというと、案内された席で、一人ポツンと座っていた。

さりげなくお店を見渡してみたけど、そんなに人が入っていない。僕を含めて五人くらいしかいない。

さっさと来ないかな、二人とも。そう思いながら待っていたら、水をテーブルに置かれた。

「どうぞ。」

「あ、どう」

も。と言おうとして顔を上げたら、

「中島君だ。」

「……………人違いです。」

何も隠していないのに、人違いだと言われた。

もうツツコム気が無いので、僕はおとなしくスルーした。そして、まだかなあ、と思いつながら水を飲んでいたら、

「しっかし、なんだかいい気分だな。こう案内されると。」

「……………同意。」

「あんたたちはどうしてここに来たのよ？」

そんなやりとりをしながら、庄一と圭が清水さんに案内されてきた。他の人達はどうかやら気おくれしてるみたいで、店に入ろうとしな

かった。

「よっ。」

「…待たせた。」

「僕が一番苦勞した気がするんだけど。」

合流した僕達が交わす言葉。

夏休み（七月下旬～八月末日）（4）（後書き）

いろいろとヤバイ気がします。そこは無視して結構です。

夏休み（七月下旬～八月末日）（5）

それを見た清水さんは、

「あんなたちは何しに来たの？」

と訊いてきた。僕達は、

「旅行。」「……秘密。」「三人で観光。」

結構バラバラなことを言った。

「親と一緒にじゃないの？」

「お前らはどうだよ？」

清水さんの質問に、庄一が質問で返した。お互いに譲らないって、この事かな？

そうしていたら中島君が来て、

「久実。どうするの？お客さんが入ってこないよ？」

と言ってきた。それに興味を示したのは、庄一だった。

「どういう意味だ？」

中島君は余程切羽詰まっていたのか、事情を説明しだした。ま、要約すると……

デントツに来て、ホテルにチェックインした四人は、海へ遊んでいた。

そして荷物を置いた場所へ戻ると、お金だけ盗まれていた。

困った四人は海の家を見つけ、働かせてほしいと頼んでOKを貰った。

だけど、人が来ないのでいろいろ試してみたけど、効果が無かったと、言う訳だった。

その話を聞いた庄一は、

「よっしゃあ！！手伝うぜ！」

一人張り切っていた。それを聞いた僕達は、

「また勝手に決めて……。」

「……これが岡田庄一。困った人は見逃せない。俺達も同類。」

「そうだけどね。」

呆れながらもやる気満々だった。それを聞いた中島君は、
「助かるよ!!」

と思いつき喜んでいた。清水さんは「やれやれ・・・」と首を振っていた。

「よっしゃ！これから役割分担行っぞ!!」

決めたことを率先してやるのが庄一の特徴なので、仕切るのはもちろん、まとめるのもうまい。

「調理はもちろん連！店の人と一緒にやってくれ！」

「分かったよ。」

「店内はウエイトレス！女子三人はこっちでやってもらっ！」

「勝手に決めないで欲しいんだけど。」

「俺と中島は外で声掛け！圭はレジ！以上！」

「...了解した。」「分かったよ。」

清水さん以外は賛成して、『海の家再興作戦』（僕命名）が始まった。

「おい。今日はあの店、いつもと違うんだってよ。」

「どういふことだ？」

「普段は爺さんと婆さんが経営してるだろ？」

「ああ。」

「今日はここらじゃ見ない中学生が手伝っているんだってよ。」

「マジで!？」

「しかも店の中に入った友達が言うには「店内が華やいでいた」んだってよ。」

「え？なに？美人でもいるの？」

「しかも、一流コックが調理しに来てるんじゃないかっていう噂だぜ。」

「マジで!?!あそこにそんな人雇う余裕あったのか？」

「とにかく、行ってみようぜ。」

「
そつだな。
」

夏休み（七月下旬～八月末日）（5）（後書き）

リーダーシップって、大事ですよね。

夏休み（七月下旬～八月末日）（6）（前書き）

もう三十話超えてたんですね……。

夏休み（七月下旬～八月末日）（6）

庄一が役割分担をした通りに移動してから、十分しか経っていない。それなのに、

「次！特製そば三つに、かき氷四つ！！」

「分かったよ！おじいちゃん！かき氷よろしく！！」

「分かったわ。四つじゃな？」

「そう！」

結構繁盛していた。

庄一と中島君が、声掛けという名目でロコミをしていったので、半信半疑の人たちが最初に入店。

それを迎えるのが清水さん、寺井さん、レイジニアさんの三人（ちなみに、水着ではありません）。

そして、注文された料理を作るのが、僕とこの店の経営者のおじいさんとおばあさん。

それを食べてお客さんが驚き、ロコミが本当だという事を理解。

圭のレジが正確かつ手早いので、お客さんの流れが止まる事は無い。

という訳で、開始十分ですんごい繁盛していた。

そして、始まって二時間で食料の在庫がなくなり、店を閉めざるを得なくなり、待っていた人に謝りながら海の家今日の営業は終了した。

店が終了した後、おじいさんとおばあさんに感謝され、僕と圭と庄一はお金はいららないと言ったらますます感謝され、中島君たちには感謝と約束のお金、それと僕達が受け取らなかったお金の何割かを渡して、帰っていった。

それを見送った後、歩きながら、

「疲れたあゝ。ホテルに戻ったら飯がうまそうだ。」

「これくらいなら、あと六時間ぐらいでも大丈夫かな？」

「……普段の忙しさと比べてる？」

「うん。」

「お前の家庭って一体……。」「
と言っている傍ら、

「すごいね、あの三人。」

「そうね。認めざるを得ないわね。」

「本当ですね。まさかガラガラだった店をあそこまで繁盛させるなんて。」

「本当に普通の人のなの？」

と言っている人達がいた。

そのまま歩いていたら、ふと中島君が訊いてきた。

「三人はどこに泊まってるの？」

対して圭は、珍しく間髪入れずに答えた。

「四人と同じヒューマニーステーション。」

その答えに四人は驚き、僕は平然としていた。圭が黒曜さんと話していたのってこれの事だったんだ、と理解しながら。

驚きから覚めたのか、清水さんが最初に感想を言った。

「貴方達三人を見ていると、どうにも普通の意味が分からなくなるわ。」

それを聞いた庄一は、

「はっ。普通なんて人によってとり方が違うんだよ。って、連が言っただぜ。」

何故か僕の言葉を引用していた。ちよつと待つてよ。なんで僕の言葉？ そう思ったけど、他の人たちが何故か納得したように頷いていたので、僕は逃げたくなった。

こんなことをやっていたら、中島君がこう提案してきた。

「ねえ、友達にならない？」

「は？」「え？」「…？」「何いつてるの、元？」「いいわね。」

「そうですね。」

中島君の提案に、僕は疑問形で、清水さんは言外に否定で、レイ

ジニアさんと寺井さんは肯定した。

中島君がなおも続けた。

「だって、学校でも最近よく話すし、今日も手伝ってもらったからさ、友達にならないかなって。」

その言葉に、僕達三人は顔を見合わせ、声をあげて笑った。

その反応に、食いついてきたのはやはりというか清水さんだった。

「なんで笑ってるの？」

「だ、だってよ……」

「……い、今更」

「友達って……」

僕達三人が腹を抱えて笑っているのを不思議に思ったのが、中島君が訊いてきた。

「駄目だった？」

僕達三人は合図も何もしていないのに揃って言った。

「……もう友達だと、俺達は思ってるよ。」

その言葉に中島君は「じゃあ僕の事は元よこって呼んでいいからさ、君たちの事は何て呼んだらいい？」と訊いてきた。

「俺は庄一でいい。」

「僕は連でいいよ。」

「……俺は圭。」

この言葉で、元よこは

「よろしくね、庄一、連、圭！」

と言って笑った。そして、全員で一緒にホテルへ向かった。

「じいじのって、いいよね。」

夏休み（七月下旬～八月末日）（6）（後書き）

よく考えると、中学生が店の再建って難題ですね（笑）。

夏休み（七月下旬～八月末日）（7）

ホテルまでの道中。

「え、連つて一人で家事を全部やってるの？」

「そうだよ。親が全くしないから困ったものだよ。」

「だからあんなに料理がうまいのね、レンって。」

「ちなみに、家の財産管理とか一人でやってるんだってよ。こいつが一人いりゃあ、家の事は完全に任せられるな。」

「私達と同じ中学生なの……？」

「……連の武勇伝は尽きない。」

「本当にすごいですね。」

何故か僕の話で盛り上がった。

「ちよつと待って。なんで僕の話？他の人も良いでしょ？」

「じゃあ、俺の話題でもいくか？自慢じゃないが、人と仲良くなるのには自信があるぜ。」

「……話術も達者。」

「そうか？」

「あんた、それで人の事たぶらかしたりなんて……」

「してねえよ！するわきゃねえだろ！」

「でも体育の時のあの運動神経凄かったよね。ノーバウンドで一塁。」

「あれぐらいなら造作もねえよ。」

「とるのが普段僕達だけど、本気で投げられると痛いんだよね。」

「……最初の頃は一週間くらい痺れた。」

「どんな球を投げるのよ？」

「ただのストレート。ただ球速がね……」

「どのくらいなんですか？」

「……正確に測ってみたが、百四十七キロ。高校生並み。」

「昔親父が野球やってたからな。それで俺も野球選手になろうと思

つていたわけだ。今の夢は違うけどな。」

「本当に、普通の意味が分からなくなってきたわ。」
と、こめかみを抑える久実さん。

あ、僕達、清水さんの事を「久実さん」、寺井さんの事を「董さん」と呼ぶことにした。「俺の話題はこれくらいか？」

「…次は、俺？」

「まあ、話の順番でいったらそうだけどね。」

「そうね。私達がどこに泊まるのか知っていた理由が、分かるかもしれないわね。」

「……仕方ない。」

久実さんの言葉で圭は観念したようだった。

「……俺は情報収集が趣味。ここに来たのも、似たような理由。ただし、提供者は秘密。守秘事務があるから。ここでは、俺はちよつとした有名人だったりする。」

「情報収集つて、どんなものを？」

「……気になるニュースの裏とか、噂の真偽、さすがに国家機密には手を出さない。あとは……個人情報。これらは他の人には内緒。」

「本当に中学生なの？」

「更に、圭は人の気持ちを推測できるからね。想像で言ったその人の感情が合っていたりするんだよ。」

「サイコメトラーですか？」

「…違う。サイコメトラーは対象者に触れて気持ちを知らるのに対して、俺は対象者のその時の気持ちを想像するだけ。想像だから、合ってる保証はない。」

「でも、すんなりと納得できるぜ。お前の想像。」

「随分信頼してるのね、あなたたち。」

庄一の言葉に、レイジニアさんがそう言った。だから僕はこう言い返した。

「そう言う皆も元の事まことを信頼してるじゃん。そこから派生してるのか知らないけど、三人とも仲がいいじゃん。」

僕がそう言つと、久実さんが「違つわ。」と言つた。

「違つわ。」

「? そうなの?」

「そうよ。」

「え? でも、ライバルと書いて親友つて、よく言つてでしょ? そんな感じじゃないの?」

「うっ!」

僕の素直な質問に、久実さんは言葉を詰まらせた。

庄一と圭は、「連の質問攻めつて、素だよな。」「……そう。連は天然。」と言つていて、それを聴いた元たちは、「久実が何も言えなくなつてゐるつてすごいね。」「そ、そうですね……」「そ、そうね……」「? 二人とも、顔が赤いよ? 日にでも焼けた?」と言つていた。

元のアレはともかくとして、

「どうしたの、久実さん?」

黙つたままの久実さんに話しかけた。

すると、開き直つたように久実さんが言った。

「そうね。い・ち・お・う、仲は良いわよ、私達。」

「だよね。」

これで、圭の話題が終了。早かつたね。

「やっぱり連の話題の方が続くな。」

「… そうだな。苦労話で一日はいける。」

自分たちの話題の終わりがはやかつたことを知つて、僕の話題が一番続くという二人。

何か釈然としないなあ。

そう思つていたらホテルの前まで来たので、

「今日は楽しかつたぜ。」

「… 新鮮だつた。」

「仲良くなれてよかつたよ。」

と僕達はいい、元たちは

「僕も君達と仲良くなれてよかったよ。」

「連君。今度料理教えてくれませんか？」

「あ、それなら私もいいかしら？」

「私もいいかしら？料理のレパートリーが少ないから。」

と言った。……どうでもいいけど、どうして僕に料理を教えてもらいたいんだろう？

心の中で首を傾げながら、僕達は別れた。

夏休み（七月下旬～八月末日）（7）（後書き）

これからこの人たちが仲良く（？）やっています。

夏休み（七月下旬～八月末日）（8）

自室。

僕達はトランプをしていたら、夕食の話になった。

「そついや、夕飯つてどこで食べるんだ？俺達。」

「そついえばそつだね。」

「……ここか、外、またはホテルの食堂。」

「いつもはどこだ？」

「……ここ。」

「今回は？」

そう僕が訊いた時、丁度よくノックの音がした。

「ここで食べるのか？」

庄一の質問に、圭は頷いて肯定した。

「……開ける。」

そう言つて圭はドアを開けに行き、僕と庄一はトランプを片付けていった。

「夕食をお持ちしました。」

そう言つて、従業員の人が夕食をテーブルに並べた。

「ありがとうございます。」

「……毎度のことながらありがとう。」

「いつも同じ人なのか？」

圭の言ったことに対して、庄一がツツコミを入れていた。

それを聴いて、その従業員の人が答えた。

「はい。私はこの部屋を担当しております。名前は詩音、と申します。これからよろしく願います。」

詩音、と名乗つたその人は、物腰が柔らかかそつな女性だった。しかも、とても綺麗な人で、年齢が想像しづらい。二十代後半と言われれば納得できる顔立ちだし、落ち着いた雰囲気は三十代と言われともまた、納得できる気がする。

「それでは、こちらで全てとなります。何か御用がございました場合、備え付けのボタンを押してください。」

そう言つて、詩音さんは部屋を出ていった。

詩音さんが出て行つた後、僕達は夕食を食べながら話した。

「しかしよ、偶然つて怖いな。遭わないと思つていた元たちと遭遇するんだからな。」

「そうだね。しかも、同じホテルでしょ？ここまで偶然が続くと、明日以降も遭遇しそうじゃない？……この料理、ちよつと味づけが雑じゃない？」

「…それはあり得そう。だから、世の中何が起きるか分からない。

……その報告は今日の定例会でさせてもらう。」

「いや、いいよ、別に。僕の個人的な感想だから。」

「お前の個人的感想つて、一流コックのダメだしと同義だよな。」

「そうなの？」

「……気付かないのはいつものこと。」

圭がポツリとそんなことを言つたけど、僕は聴かなかつたことになつた。

「まあいいか。それより、明日からどうする？ここの案内してくれるんだろ？」

「……いいけど、十日あれば大体の所は案内できる。」

「あと二十六日でしょ？十日で案内が終わるんだつたら、残りの十六日は？」

「……バイトでも、する？」

圭の一言に、僕達は食事の手を止めた。

「なに？」

庄一が不思議そうに圭に訊いた。

「…やるかやらないかは、二人の自由。」

「そうじゃなくて、バイトなんてできるの？」

そう僕が言つと、圭が納得したらしく、話を進めた。

「…俺の名前を出せば、いくつかのバイトはできる。例えば、料理

店だったりこのコンビニだったり。時給は店側が決めることになるが。」

その言葉に僕と庄一は顔を見合わせたけど、

「いや、いい。」

「結構だよ。バイトは。」

丁重にお断りした。

「…そう?」

「いいとは思うけどよ……。」

「それなら宿題やった方がいいかなあ、って。」

と僕が言ったら、庄一と圭は驚いた。

「どうしたの?」

「そついや、俺も持ってきたんだよ。やる気はなかったけど。」

「……俺も。」

みんな持ってきてるのならさ……

「残りの十六日は宿題でもやらない?」

「ま、それがいいか。」

「…やらないと成績が下がる。」

という事で、案内が終わったらここで宿題をやることとなった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（9）

七時になったので、圭は定例会に行き、僕達は部屋で過ごすことにした。

「なあ、」

「なに？」

僕は本を読んでいて、庄一がゲームをしていた時、庄一がふと言ってきた。

「お前つて、好きな人いる？」

「え？」

まさかまたその話題が出てくるとは。

「どうして？」

「いやな、最近変な噂があつてな。」

噂？

「それつて？」

「圭が言つてたんだけどよ。最近というか、夏休み前までに連の事が好きな人が結構いるんだつてよ。」

「え〜？」

うっそだ〜。僕なんてただの少年だよ？圭みたく情報処理が得意なわけじゃないし、庄一みたいに運動神経良くないし、元はみめたいに力はないし。

「お前、心当たりがないつて顔してるな。」

そんな僕を見て、庄一はため息をついた。

「どうかしたのだろうか？」

「元はもめそうだが、どうして鈍い奴らが多いんだろつな。」

「そう言つ庄一だつてモテるじゃん。」

「は？」

君もじゃないか。鈍いの。

「僕も噂で聞いているよ。圭の經由じゃないけど。」

「信憑性に欠けるんだが。」

「いいじゃない。確か……隣のクラスの朝月さん。最近庄一のこと訊いてるらしいんだよね。他の女子からさ。どんな人なのか、とか、好きな食べ物は、とか。」

「朝月……？ああ！道端で不良に絡まれてた女子か！でも助けただけだぞ？そんなことあるのか？」

「あるんじゃない？」

これで会話が終了。でも僕には気になることがあった。

「ねえ庄一。」

「あん？」

「どうして僕が好かれるの？庄一は分かるけど。」

「そこかよ。まあいいけどよ。……お前が好かれるところってのは、人柄もそうだけど、家事が得意ってところだな。」

「みんな出来るでしょ？」

「そうだけだな。……何というか、家事スキルが人より優れてるだろ？」

「人並みだと思う。」

「そこで即答かよ。」

僕はそう思うから。

「もういい。つまりだ、誰にでも人懐っこくて家事ができるのが、女子にとって憧れなんだろうな。」

「へえ。」

庄一の結論に、僕の感想はそんな感じだった。

「それって、圭の考えだよな？」

「そうだけだな。」

それで僕達の会話は今度こそ終了。

その後、一人ずつ風呂に入ったら圭が来て、圭も風呂に入った後三人で会話して、それぞれのベッドで寝た。

そんな感じで日にちは過ぎて……………。

「なんだかあつという間だったなあ。」

「…収穫はたくさんあった。」

「結構な頻度で元たちと会ったね。」

「そうだな。」

「……鉢合わせという形が多かった。」

帰りの新幹線の中、僕達はそんなことを言っていた。

「それにしても、元と久美さん。ぎこちない雰囲気だったけど、何かあつたのかな？」

「…全体的にぎこちなかった。」

「あいつらに何があつたんだろうな？」

「…調べる？」

「それはいいよ。なんとなく触れてはいけない気がするから。」

「俺もだ。さわらぬ神に何とやらだ。」

「…分かった。個人的に調べる。」

「…いや、やめとけよ。」

これにて僕達の夏休みの大部分が終わった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（9）（後書き）

次回、池田家全員集合！

夏休み（七月下旬～八月末日）（10）（前書き）

池田家最後の一人が登場します。

夏休み（七月下旬～八月末日）（10）

家に帰ってきて。

「ただいまー。」

そう言つて家の中へ入ると、見慣れない靴が置いてあつた。

「誰か来てるの？」

そう言いながらリビングへ行くと、こんな言葉が返つてきた。

「あ。お帰り。久し振り、連。」

その言葉と、目撃した人を見て、僕は驚いた。

「え！？な、渚お姉ちゃん！？いつ帰つてきてたの！？」

「うー、連が友達と旅行へ行った次の日。両親から電話があつてさ。

『暇？』つて。忙しいと言つたら、『助けて〜。』と泣きついてき

たから仕方なく戻つてきたんだよ。ついでに、しばらく休みを貰つ

たから、ここでこうしてるってわけ。」

「あ、ごめん。お姉ちゃん。」

「いいつてことよ。いつもは連がやっているんだからな。」

と言つお姉ちゃん。

紹介するのを忘れてた。

池田渚。僕のお姉ちゃん、女優。タレント名は『凧』。この世界で凄い人気がある女優で、今までで出演した映画は六本、ドラマは十本を超える。そのどれもがDVD化しているので、良く家に送られてくる。……サイン入りで。

ちなみに、結婚はしていない。理由が『あの両親の面倒をみられそうない男がいないから』だつて。確かにそうだね。

僕に姉がいることと、僕の姉の正体を知っているのは庄一と圭だけ。ま、圭が僕の事を調べてきたときに、驚いてポツリとこぼしたのが原因なだけだね。

「それにしても、」

僕を見て、姉さんが何故か悩んでいた。

「どうしたの？」

「それにしても、連。見ないうちに大きくなつたなあ。しかも料理の腕も上がったんだろ？私が両親に飯をつくつたら、『連の方が凄い美味しいよ。』って言われてさ、ちよつと悔しかったな。」

「そう？」

久し振りの姉弟きょうだいの会話。家族全員が揃つたのっていいよね（両親は仕事みただけだ）。

「というわけで。帰ってきて早々で悪いけど、夕飯つくってくれない？」

「え〜？僕はお姉ちゃんの料理が食べたいんだけど。」

「私は連の料理が食べたいんだ。つくってくれたっていいじゃん。」

「え〜〜〜〜。」

姉の理不尽な要求に、僕はささやかな抵抗を試みた。

「冷蔵庫に何が入ってるのか把握してないんだけど。」

「そんなもの良いから。残ってるもので自分の得意料理でも作って。」

「……これが弟という立

場か……！！

しかし、それで反抗するほど僕は子供じゃないので、おとなしく作ることにした。

姉が帰ってきたことが、変な波乱を巻き起こすことを知らずに。

「久し振りだねえ〜、連。帰ってきて良かったよ！」

「そうね。渚も戻って来たし、久し振りに家族水いらずね。」

「本当においしくなつたな！昔もおいしかったが。」

「帰ってきて早々この仕打ち。理不尽だ……。」

結局、料理をつくることになった僕は、冷蔵庫の中にあるものでつくり、つくり終わつたら両親が帰ってきて、今のような状況。

久し振りに家に帰って来たけど、僕ってこういう状況しかないのかな？

と、いつの間にか両親と一緒にビールを飲んでいる姉が、おとなしく食べていた僕にこう訊いてきた。

「そっぴや連。」

「なに？」

「連って、彼女いるの？」

その言葉に僕は料理を食べている手を止めた。

「お姉ちゃんは？」

「私はまだだな。まだ二十になったばかりだから、もうちょっとゆっくり選ぶさ。そっぴや連はどうなの？いないの？」

「うん。」

「そっ。いないの。」

「うん。」

「分かった。」

何が分かったんだらう？

そう思ったけど、おとなしく食べていった。

両親と姉がビールを飲んでハジケ出したころ。

僕は自分の部屋で色々とやっていた。学校の準備、服の片付け、本の整理、僕の財布の状況確認。と言っても、夏休みまだ四日あるんだけどね。

この旅行で結構なお金使ったなあ。そう思いながら、僕はどうやってお金を貯めようか考え出した。

風呂に入った後。僕は自分の部屋、じゃなくて、元姉の部屋に来ていた。

どうしてって？僕が訊きたいんだけど。

部屋に入ってまず気付いたことは、部屋が汚いという事だった。

「お姉ちゃん。相変わらず部屋が汚いね。この分だとあっちの方も汚いだらうね。」

「うるさいね。自分が分かっていたらいいんだよ。」

「そんなじゃ、彼氏できてもすぐ別れそっぴやだね。」

「……………」

その言葉に何も言い返せなくなったお姉ちゃん。

僕は簡単に片づけをしながら、要件を訊いた。

「で？僕に何の用？言っとくけど、家の事で手一杯だから。」

お姉ちゃんは頭をかきながらこう言った。

「あゝ、ちよつと相談事があるんだ。だから休みでここに戻ってきたんだ。」

「あつそう。……これ、捨てていい？」

「それはダメだ。……実はな、今度またドラマに出演することに決まったんだ。」

「ていうか、お姉ちゃんの夢ってもう叶ってるだよ。よかったよかった。」

「話を聴く気があるのか？……そのドラマの役が先生役なんだ。で、役作りをしようにも教える生徒がいんじゃないじゃ話にならない。」

「僕にその生徒役を？」

「そう。」

簡単に片付けをやってる間にそんな話をしていた。

僕が生徒役ですか……暇だからいいんだけどね。そう思いながら、

「いいよ。どうせ暇だから。」

と言ったら、姉ちゃんは笑顔でこう言った。

「そうか！助かる！！」

という訳で、残りの夏休みはお姉ちゃんの役作りの相手をしていました。たまに庄一と圭も

交じってやっていたよ。今年はいつもと違う夏休みで楽しかった。

夏休み（七月下旬～八月末日）（10）（後書き）

感想をお待ちしております。

人物紹介 その二（前書き）

今回は新しい人たちでも。

人物紹介 その二

レイジニア・ゼロ（15）・・・とある事件を引き起こしたネク
ロマンサー。改心の余地ありというので、元たちと同じクラスに転
校してきた。一応外人だが、元たちの言葉は理解できている。例に
よって美人で、元のが好き。最近はレンに家事について教わる
うかどうか思案中らしい。

黒曜（？）・・・情報屋。ヒューマニステーション
の雇われ店長。結構圭とは仲がいい。

定例会の場を提供する傍ら、自身も情報屋として出席している。最
近は圭の友達が面白い人たちだと思って、いろいろと調べているら
しい。

詩音（？）・・・ヒューマニステーション三十五
階の専属スタッフ。圭以外の客に対しては意外と平静な態度で接し
ていることは、黒曜しか知らない秘密である。そして、詩音自身も
知らない。

池田渚（20）・・・タレント名『凧』。世界で有名
な大女優で、十五の時にデビュー。それからというもの、池田家には
自身が出演したドラマや映画のDVDをサイン入りで送ってくる。
モテるが、彼氏なし。一応家事はできるが、部屋の掃除は苦手。

ミネルバさん・・・ロボットで駄菓子屋店員。何を問
違ったか男口調の言語プログラムを入力されたまま人間世界に出て
きた。ちなみに、商店街で結構人気がある。

人物紹介 その二（後書き）

……これくらい、でしたっけ？

閑話 とある休日 岡田庄一編（前書き）

今回は、岡田庄一の休日。普段彼はどんな休日をおすごししているのでしょうか……？

閑話 とある休日 岡田庄一編

俺主体で書くのは初めてじゃねえか？なんていうメタな発言は置いていて。

よっ！俺は岡田庄一。連の親友だ。今日は俺のちよつとした休日を見せてやるぜ。

俺は休みだと午前九時に起きる。なぜなら、休みの日は誰も俺を起こしに来ないからだ。ゆっくり寝られるぜ。いつもなら結構早いんだぜ。

俺は一階へ降りてリビングで朝食を食べ始めた。その時、家には誰もいなかった。きつと仕事に行ってるのだろう。大変だな。

朝食を食べ終え、食器を片づけてから、俺は外に出た。家にじつとしてられない性分だからだ。

しばらく散歩していると、遠くに見覚えのあるやつがいた。よく目を凝らしてみると、どうやら走って逃げているみたいだった。

俺はこれに巻き込まれたら面倒だと直感し、路地裏に素早く隠れ通りをチラ見した。傍から見たら変な奴に見えるんだろうな。

逃げてる奴はだんだんこっちに近づいてきたので、顔がよく見えってきたって……

「元！？また何か面倒なことに巻き込まれてんじゃねえだろうな！？」

元だった。俺はどうするか悩んだが、あいつなら何とかやるだろうと思いきのまま隠れることにした。

そして、どうやら足音が遠ざかっていったみたいだ。その時追っている奴らをチラッと見たが、どうもいつもの女子三人組じゃなく、どっかの不良だった。きつと人助けをした見返りだろう。

俺は路地裏から出て、通りをまた散歩しだした。……携帯電話を手に持ちながら。

閑話 とある休日 岡田庄一編（後書き）

短いですが、続きます。

閑話 とある休日 岡田庄一編その2

「はあ、はあ、はあ……」

「もう逃げらんねえぞお、小僧。」

「俺たちの邪魔しやがって、ただじゃおかねえぞ。」

「くっ！」

行き止まりに追い詰められた元と、それを囲む不良たち六人。元は能力を使うかどうか悩んでいたら、

ドカツ！バキツ！

「おいおい。おとなげねえな、あんたら。一人相手に集団かよ。」

「だ、誰だ!？」

「……え？」

反対側からヒーローのように参上してきた庄一がいた。その前には、いましがた殴られたと思われる不良たち二人がのびていた。

「よう元。助けに来たぜ。」

「……どうして？」

俺は不良たちのことを無視して、元と会話した。どうやら、俺がここにいるのが不思議らしい。

そんなことを無視して、俺は話を続けた。

「今度は何やったんだ、一体？」

「え? いや、あははは……」

それなのに、どうにも気まずそうに答えてくれなかった。

俺が無視したのが気に食わなかったのか不良の一人が、

「無視してんじゃねえ!」

と言って俺に殴り掛かってきた。うわ、突っ込んでくるとかマジありえねえ。

それをひらりと躲すときに、俺はそいつの腹に一発入れた。それだけで、うずくまって動けなくなっていた。弱いな、こいつ。

一方不良の集団(といっても六人だけ)はそんな俺を見て、

「ば、化け物かよ!?!」

と言って倒れてる奴らを回収して逃げて行った。その後ろ姿を見ながら、

「これに懲りたら二度と不良やるんじゃないぞ!」
と言った。

閑話 とある休日 岡田庄一編その2 (後書き)

もう庄一主役でもいいんじゃないか……？

閑話 とある休日 岡田庄一編その3 (前書き)

もう四十話になりました。

閑話 とある休日 岡田庄一編その3

「ありがとう、庄一。」

「いいってことよ。本当は無視するつもりだったからな。」

「何気にひどいこと言っただけ？」

不良たちが去っていったあと、俺と元は二人で歩いていた。といっても、互いに特に買うものがないため、散歩してる状態なのだが。

「それにしてもよ、どうして追われてたんだ？」

俺は疑問に思っていたことを元に尋ねた。すると、急に元の声のトーンが落ちた。

「不良たちに絡まれていた人が嫌そうだったから助けたんだけどね。能力を普段使わないから何もできなかったんだ。」

「それって、まだあのことを引きずってるのか？」

その言葉に、元は一瞬動きを止めた。

「……たぶんね。久美と董のおかげでちよとは癒えたけど、まだかな。」

その言葉を聞いた俺は、上を向きながらこう言った。

「人間だれにでも傷はある。お前だけが特別深い傷を持ってるとってわけじゃねえんだよ。」

「え？」

まさか俺がそんなことを言うと思わなかったのか、意外という目で元は俺を見てきた。言っちゃワリイかよ。

俺は気にせず続けた。

「傷を持ってないで生きてる奴なんてそうそういねえし。もしそんな奴が居たら、そいつはきつと赤ちゃんだけだ。傷を持つから痛みがわかる。傷を持ってても痛みがわからないなら、そいつは人間じゃねえ。」

そこまで言うと、元が俺にこう言った。

「庄一って、すごい考え方してるんだね。」

「……つて、連が言ってた。」

「ちよつと損した気分だよ！」

「かくいう連も、小説の引用だって言ってた。」

「いい話が台無しだよ！」

そう言いながら、地団太を踏む元。おい。目立ってるぞ。

俺は仕方ないと思いつながら、

「元、空を見るよ。」

といった。そろそろ首がつかれそうだ。

言われた元は、首をかしげながらも上を向いてくれた。そして、

「うわあ、広いし綺麗だ。」

まるで初めて見たような感想を言っていた。俺も空を眺めながら、

「いつまでもウジウジしてるんじえねよ。空なんて雨降ったと思っ

たら晴れたりするだろ？過去のことに縛られるのも結構だが、前を

見て進んだらどうだ？」

と、恥ずかしいセリフをいつの間にか言っていた。連の奴からうつ

ったかな？

その言葉を聞いた元は少し驚きながらも、

「もう逃げないと決めたから大丈夫だよ。それに、一人で背負い込

むつもりなんて今の僕にはほとんど無いからね。」

といった。今更だが、俺たち立ち止まってるから通行人の邪魔なん

だよな。

そう思った俺は、再び歩くことにした。

閑話 とある休日 岡田庄一編その3 (後書き)

続きます。

閑話 とある休日 岡田庄一編その4

歩いていたら、正午になった。結局一緒に歩いてきた俺と元は、どこかで昼を食べることにした。

「どこで食べるんだ？」

「庄一は？」

公園のベンチに座りながら、俺たちは昼をどこで食べるか話し合っていた。

「俺は……コンビニで買えばいいかな。金かからねえし。」

「僕もそうしようかな？最近財布が厳しくなってきたから。」

「ふ〜ん……………じゃ、コンビニ行こうぜ。」

「そうだね。」

これを話し合いと言えるのか少し疑問に思ったが、気にせずコンビニへ行くことにした。

「いらつしゃいませー。」

「いらつしゃ アウチー！」

店に入るなり、一人おかしな奴が居た。

「この店、大丈夫かな？」

「気にするな。どうせいつものことだ。」

ちなみに、俺たちが来たところはスーパーの近く。本当は俺の家からちよつと遠いのだが、どうせ散歩だ。のんびりするぞ。

「ありがとう アンデルテー！」

「ありがとうございましたー！」

会計を済ませて店を出るとき、そんな声をかけられた。たまに利用するが、この店ホント大丈夫だろうかと思わずにいられない。

「ま、面白いんだがな。」

「よく来るけどクビにならないのが不思議なんだよね。」

確かに不思議だなと思いつつながら、俺たちは公園のベンチに座って昼食を食べた。

食べている途中、誰かが声をかけてきた。

「あら、元に……庄一じゃない。珍しいわね、こんなところにいるなんて。しかもその組み合わせで。」

「ん？」

「あ、久美。どうしたの？」

清水久美だった。久美はその長い髪をかきあげながらこう言った。

「暇だったから散歩してたのよ。それで元と出会えたんだから、私たちは赤い糸で結ばれてるんじゃないかしら？」

その言葉を聞いた元はこう反論した。

「この公園の近くじゃないか、久美の家は。偶然というよりは、僕を見かけたから来たんじゃないの？」

「さすが元ね。正解。」

そうあっさり認めた久美。もうちよつと粘ろうぜ。

そう思いながら昼食を食べていたら、久美が俺に向かってこう言ってきた。

「ちよつとどいてもらえないかしら？」

「まだ座るスペースあるだろ。そっちにしろ。」

「それじゃ私と元が二人きりにならないじゃない。」

なんだこいつ。わがままにもほどがあるだろ。

俺は急いで食べ終え、こういった。

「ふざけんじゃねえぞ。そんなに二人つきりになりたいのなら別な

日にしろや。」

「なんですつて？」

そう言つて、俺と久美はにらみ合いとなった。それを見ている元は緊張してるみたいだった。

そして、何か言う前に声をかけられた。

「あれ？久美さんに元に庄一？どうしたの？こんなところで一触即発な雰囲気醸し出して。」

その声の主を見て俺達は驚いた。

「連？」「連よね？」「お前こそ何をやってるんだ？」

確かに連だった。しかも、その周りにいるのが子供たちばかりだったのだ。そりゃ驚くつて。

俺の質問に、連は答えた。

「えつとね、ふらつと散歩に出かけたら見知った主婦の人たちがいてさ。その人たちと話していたら子供たちの面倒を見てくれないかって言われてね。戻ってくるまで面倒を見ることにしたんだ。」

ざつと見た感じ、九人ぐらいいはいるんじゃないか？そいつらを顔色一つ変えずに一人ひとり面倒を見ていく連。どこまで苦勞人なんだ、お前。

そう思っていたら、おそらく連の光景を見た久美がこう言った。

「……………連を見てると、今の私たちがいかにくだらないうことで喧嘩してるのかわかるわね。」

それに便乗して、

「そうだな。俺はあいつの手伝いでもするか。どうせ暇なんだからじゃ、お前らは仲良くやれよ。」

と言って俺はその場を離れ連のところへ行こうとしたら、

「行くわよ、元。」

「え？僕も？」

「そうよ。あたしたちが結婚して子供ができた時の予行練習だと思つて、連の手伝いをするわよ。」

「それはいいけど……………僕たちまだ付き合つてすらいないからね！？」

という声とともに一緒についてきた。

意外と友達思いなんだなと思いつつ、俺は子供の世話をしている連に近寄つてこう言った。

「なあ、連。俺達にも手伝えることないか？」

連は子供の世話をしながらこう言った。

「じゃ、庄一は遊びたそうにしてる子供たちの相手。久美さんと元はこの子。」

こいつの指示は本当の的確だから驚くんだよなあ、と思いつながら「

分かった。」と言って俺は子供たちと遊んだ。

元と久美は、連が預かったと思われる赤ちゃんの世話を二人でしていた。なるほど。あいつは色々とお膳立てをしてるわけか。仲良くやってるみたいだ。

午後二時になって、子供たちの親が迎えに来た。連は、お世話をしたお礼に色々と渡された。

親と一緒に帰る子供たちを見送っていたら、連がまず俺に近づいて、「みんなありがとうね。庄一はこれがいいね？」

と言って俺に差し出したものは、お金だった。

「いいのか？お前がもらったものだろ？」

俺はお金を受け取りながら連に言った。おお、すげ。

対して、

「いいんだよ。僕も手伝ってもらったんだから。はい、久美さんに元。」

そう言いながら、元と久美にも同じく渡した。

二人はしぶしぶ受け取りながら「ありがとう。」と言った。

で、俺はさりげなく連の手元を見てみたら連はお金を持っていなかった。

「おい。お金は？」

俺がそう訊くと、

「ん？あるよ。ポケットに。ちょっとしたレシピを教えてもらったから別にいいんだ。それじゃ。」

と言って連は帰っていった。

残された俺たちは、

「じゃあな。」

「またね。」

「そうね。」

と言って帰った。楽しかったけどな。

閑話 とある休日 岡田庄一編その4（後書き）

次回、岡田庄一編終わります。

閑話 とある休日 岡田庄一編その5

「ただいまー。」

と言って家に帰ってきたのが午後四時。その時にも両親は帰ってきておらず、俺は洗濯物をこんだ後、自室で寝ることにした。

俺の部屋は、俺から見ればきれいに整理されてるのだが、ほかの奴らからだと言われると言われる。母親から、常日頃から『部屋の掃除をしなさい。』と言われるほど。ちなみに、連と圭は俺の家にそんなに来ない。圭の家も同じく。だって連の家が色々都合がいいから。

「これみたら連の奴、絶対に掃除すると言い出しそうだなあ。」
そう言っただけ息をつきながら、俺はちょっとした部屋の整理をすることにした。

部屋の掃除をしていたら、いつの間にか母親が帰ってきていた。
あんまり進まなかったがな。

夕飯ができたといわれ、俺は一階へ降り、母親と一緒に夕飯を食べた。親父が遅くまで帰ってこないのは通例なので、我が家の夕飯は二人のみである。

特に会話もなく夕飯は進み、食べ終わったら俺が食器を洗って片づけた。これは小五くらいからやっていることで、今では結構慣れた。

風呂から上がると、親父が帰ってきていた。俺は、「おかえり。」
と言って二階へ上がった。

片付けがままならない部屋で、俺は普通に寝た。親父とどうやって仲直りしようかと思いつながら。

閑話 とある休日 岡田庄一編その5 (後書き)

次回は何かいいでしょうか？閑話？それとも……

四 九月上旬のある日

「夏休みが終わってすぐに体育祭か。秋は行事が多くてなんだか楽しいな。」

「体を動かせるからでしょ？僕は多くて気が滅入るよ。」

「…体育祭は来週から三日間。クラス対抗。一人三競技以上に出る。」

「庄一は？」

「俺は今年こそ全部の競技に出るぜ！」

「…庄一が出ると、一位が確定する。」

「多分、競技の出場制限されるんじゃないのかな？」

夏休みが終わって、僕達は来週に行われる体育祭について話していた。

僕達の学校では、学年別クラス対抗の体育祭が行われる。初日に行うのが一年生で、二日目、最終日が僕達三年。最終日だからって、初日と二日目に行かなくてはいいい、という訳ではない。初日も二日目も、僕達が準備の手伝いをしなければならぬ。最終日は一年と二年生がやってくれるんだけどね。

で、一日しかないのに、競技の数が多い。一日だけだったら四つぐらいなんだろうけど、僕達の所では八個ぐらいある。鬼だよな。

それに、毎年毎年競技が変わる、という事が無い。なので、考える必要性が無いという訳だから、その分練習できるんだ。毎年同じだと飽きるんだけどね。

その競技は、百メートル走、障害物競走、パン食い競走、大玉転がし、綱引き、騎馬戦、借り物競走、男女混合リレーの八つ（大玉転がしと騎馬戦と綱引きはクラス全員参加、男女混合リレーはクラス代表）。走るのばかり。

最後に、この体育祭では超能力や魔法などが使用するのを許可されているので、例年怪我人が沢山いる。僕達みたいな普通の人たち

が主だっている。なんでもありつてことだね。

「そう考えるとき、庄一ってすごいよね。」

「なんだ？いきなり。」

「魔法などが飛び交う中、生身で一位を取る。もはやこの学校の伝説。」

「うんうん。」

「そういうものかあ？」

なんだかわかっていない庄一。ちなみに、昼食の時間。元はじたちはどこかで一緒に食べてるんじゃないかな？雰囲気はまだおかしかったけど。

と、そんな僕の考えを知ってか知らずか、庄一が思い出したように切り出した。

「そういや、結局あいつら、ぎこちないままだな。」

弁当を食べながら、圭が便乗して言った。

「……何かハプニングがあったと推測。さらに、学校内でもあの四人のぎこちない雰囲気についてはすでに広まっている。」

「圭のせいじゃないでしょ？」

「……俺は噂を広めはしない。噂の操作と調べるだけ。」

「ま、俺達でどうこう出来やしねえけどな。」

そう庄一が締めて、僕達は弁当を食べることに集中した。

四 九月上旬のある日（後書き）

これから更新が遅れるかもしれません。

あと、新しく投稿します。『考える人』か、『アイドルツ！』のどちらかか、その両方かもしれない。温かい目で見守ってください。

九月上旬のある日(2)

五校時目。

僕達のクラスというか、他のクラスは、クラス会を開いていた。

議題？そんなの『参加する競技決め』しかないよ。

ということだ、

「え、参加したい競技がある人は手を上げて競技名を言ってくだささい。」

議長である委員長こと、久実さん。大変そうだな。

と、一人の生徒が手を上げた。それはもちろん……

……

「俺、全部やるぜ。」

「あんだ、それ本気で言ってるの？」

庄一その人である。その本人はというと、

「当たり前だろ。去年は六種目しか出れなかったんだ。全部やりた
い。」

物凄い自信である。ふと思いついたように、董さんがこう言った。

「そういえば話題になりましたね。何の能力を持たない人が六種目
で一位をとったって。」

「そういえばそうね。あの時は私達がいなかったから分からなかつ
たけど、あんだだったの？」

「おう。個人種目しか無くて助かってるぜ。」

そう言いながら胸を張る庄一。その時のクラス内は「ああ、こいつ
はすごかったな。」「魔法で身体強化してもぶっちぎるんだから。」

「借り物競走なんてあつという間に持ってきてきちゃってたよね。」と、
過去の庄一の武勇伝を語っていた。

これを聴いた久実さんは、

「全種目に出るのはいいけど、勝てるの？」

と訊いてきた。それに対して、庄一は心外だと言わんばかりに肩を

すくめ、

「やると言ったら貫くさ。」

と言った。かつこいいね。

それを聞いた董さん、久実さん、レイジニアさん以外の女子は、
なんだか熱っぽく観ていた。

・・・庄一を。

それを聞いた久実さんは、

「できなかつたらクラス全員に飯、おごりね。」
容赦なく言った。

「うお！それはきついが絶対負けねえ！！」

対する庄一も、負けじと言った。

一人は決まったので、他の人たちの競技を決めることにした。
で、

「なんでパン食い競走に人が集まってるわけ……？」

と、久美さんが頭を押さえながら言ってるように、パン食い競走に
人が集中して、他の競技にそんなに人がいなかった。

久実さんの疑問を解消するように、圭が手を上げて言った。

「……一年の頃からこの競技の倍率が高い。理由は、単純にパンが
美味しいから。ちなみに、去年は他クラスのパンまで食べて失格に
なった人がいる。」

それを聞いた久実さんは、一瞬僕の事を見てからこう言った。

「じゃ、この中から決めるわよ。くじで。」

その言葉で皆おとなしくなり、志望した人はくじを引いて誰が出場
するか決まった。

あ、僕？僕は障害物競走にしか出ないよ。大玉転がしと騎馬戦と
綱引き以外には。

だって、バーゲンセールやタイムセールの経験を生かすには、ここ
しかないんだもん。でも一位は取れなかったんだよね。

さて、あぶれた人は空いてる競技に移った。仕方ないけどね。

「これで、全員決まったわね。じゃ、来週の体育祭、絶対優勝する

わよ!」

『おお

!』

久実さんの一言で、クラスは一丸となったのかな? ノリはいいんだけどね。

さてさて、僕は僕でやらないとね。

九月上旬のある日(2) (後書き)

頑張っています。

九月上旬のある日(3)

さて放課後になりました。

「一緒に帰ろうぜ。」

「…庄一。連は無理だと思う。」

「あ、ごめん。庄一。」

「あ、そういえばそうだったな。すまん。じゃ、俺達帰るから。」

「…頑張れ。」

「じゃあね。」

いつもなら三人で帰るんだけど、今回は違う。なぜなら、僕にとって大変面倒なことがあるからだ。

「さて、職員室へ行こう。」

と言って、人がまだいる中僕は職員室へ向かった。

はずなんだけどね……………

「ちよつといいかしら、連。」

「その前にロープをほどいてくれない？」

校舎の裏側。僕は久実さんに拉致られていた。

説明すると……………

職員室へと僕は歩いていった。その時に一本のロープを見つけたので、誰が落としたんだろう?と思いつつながら拾ったら、突如としてロープが僕を縛ってここまで連行してきた。しかも、誰も人がいなかった。助けを呼ぶにも無理だった。

で、連行された場所に久実さんがいたからこれは久実さんの仕業だな、と理解できたわけ。

僕の要求に、久実さんは「そうね。逃げる気はなさそうだし。」と言ってロープをほどいてくれた。

僕は、とりあえず久実さんの話を聴かないと引き下がってくれなさ

そつだと思つたので、訊いてみた。

「僕に何か用なの？」

すると、久実さんがこう言つてきた。

「あなた、料理得意よね。」

「多分。」

質問の意図が分からなかつたので、僕はそう答えた。分かつていてもそつ答えたけどね。

そつ答えると、久実さんは「自覚が無いのかしら…？」とぼやいた後、こう言つた。

「最近さ、元とどうも面と向かうのが出来ないのよ。」

いつも強気なこの人がこんな弱音を吐くなんて。そつ思いながら、僕はとりあえず思いついた言葉を言つた。

「意識してるからじゃない？」

「うっ！」

僕の指摘で、久実さんが赤面した。可愛いなあ。

でもどうして僕なんだろう？そつ思いながら、僕は言つてみた。

「もしかして…：…何とか面と向き合いたいから、お弁当を作つて一緒に食べようとしてるの？」

「な、なんで分かつたのよ！？」

当てずっぽうで言つたのに、まさか当たるとは。

久実さんもやっぱり恋をしてる人なんだなあと思ひながら、話を聴くことにした。

「べ、別に元のためじゃないわよ！ただ董の料理がおいしくなつてきてるし、レイジニアだつて何かと頑張つてるからよ！」

ツンデレ、つてこの人の事だよね？なんとなくそんなことを思つた。

そんな僕をよそに、久実さんは続けた。

「私だつて、色々とやつてるわよ。料理だつて家事だつて。元と一緒にいるのも私の方が長いんだから。」

そついえば、久実さんと元つて幼馴染なんだよね。と今更なことを

思う僕。

「それなのに元はじめたら、私の気持ちも知らないであの二人と仲良くしちゃって。それだけならいいけど、董とキスしそうになっただけ……私なんてしたこともないのに。」

なるほど。夏休みに起こったのはそれだったのか。と、ぎこちな
い雰囲気の原因が分かった気がした。

「だから、」

「だから？」

久実さんが言おうとした時に、ちよつと僕は口を出してみた。

「……あの二人に負けたくないのよ！」

ま、分かつてはいいたけど。そう思いながら、僕って便利屋か何かを間違われているのではないだろうか？と今更思った。

久実さんの話を聴き終えた僕は、

「だったら二人きりの時にでもせまってみたら？」

なんとなくアドバイスをしてみた。ま、料理を教えるでもよかつた
んだけどね。

「な、何言ってるのよ!？」

僕の言ったことに、久実さんは赤面しながら慌てて言った。

「なにつて、ちよつとだけ大胆になればいいんじゃないかなって……」

「そ、そんなことできるわけじゃない!!」

ひよつとして、久実さんつてウブ?

自分の事を棚に上げて、僕はそう思った。

「大丈夫!一歩踏み出す勇気があればできるっつて!」

「なによそれ!？」

え、上手い解決方法のような気がするんだけどなあ。

と、ここで何かに気付いたのか、久実さんが訊いてきた。

「連。あんたさ、もしかして料理を教える気が無いんじゃないの?」

「はっはっはっは、そんな訳ないよ。」

「だったらどうして私の目を見て言わないの?」

どうしてでしょうね？わかりません。

と、久実さんが何かをあきらめた感じで、

「もういいいわ。あなたの意見を一応参考にするけど、ありがとう、
とは言わないわよ。」

と言って帰っていった。

言ってるじゃん、ありがとうって。

そう思いながら、僕は職員室へと向かって行った。大変だよねえ、
と思いながら。

後日。

「ねえ久実？」

「なに元？」

「どうして腕を組んで一緒に登校してるの？あ、あの、色々当っ
てるんだけど……。」

「どうしてでしょうね？」

「あ！ずるいです久実さん！元君と腕を組みながら歩くなんて！！」

「あなた、抜け駆けしてるんじゃないわよね？」

「いいじゃない、これぐらい。」

登校中、腕を組んで歩く元と久美さんの姿を目撃した董さんとレイ
ジニアさんによって、いつもの雰囲気に戻った。

僕はというと、

「……………という事があったんだよ。」

「お前も大変だな。家の事と、体育祭の事があるんだから。」

「……………無理はするな。」

「ありがとうね。」

「それにしても、あいつら、元に戻ったんだな。」

「…何があったんだ？」

「さあね。」

「知ってるのか？」

「…誰にも言わない。それが俺。」
「聴く気満々だね。でもこればかりは言えないよ。」
「秘密にされると訊きたくなるな。」
「…多少手荒い手段を使つても訊きだす。」
「それが友達に対する行動!？」
休み時間になると、僕は二人から逃げ、二人は僕の事を追つた。
それを見ていた久実さんは、笑っていたような気がした。

「久実、どうしたの？」
「あの三人は相変わらずだなつて。」
「久実さん！ちよつと元君はしめに近すぎませんか!？」
「ハジメ、あなたからも言つたらどうなの？」
本当に、助かつたわよ、連。
元はしめが大変な思いをしている中、久実はそんなことを思っていた。

九月上旬のある日(3) (後書き)

次回、体育祭の結果とそこで起きたひと騒動をお送りします。

九月上旬のある日(4)

三年の部、体育祭の結果。

僕達のクラスが一位だった。ま、その理由が、庄一が全個人種目で一位をとったから。有言実行とは恐れ入るね。

騎馬戦は僕、圭、庄一、元はでつくった。一番上が何故か僕になった。元の能力と、庄一の無尽蔵な体力、そして役に立ったか知らないけど僕の指示で騎馬戦も一位。

お昼休みは、これまた何故か僕が庄一と圭のお弁当までつくることとなった。それを見た庄一と圭の両親は「本当にすみません。」と頭を下げてきた。

元はたちはというと、そんな僕を見ながら誰の弁当を食べさせるかで、もめていた。それを見ていたのが、董さんと久美さんのご両親。元の両親は仕事で来れなかったんだって。

なんだか仲がよさそうに見えるけど、父親の方は険悪。雰囲気こそよさそうに見えるけど、実際は互いに娘の自慢しかしていない。大変だね。それとは裏腹に、母親の方は会話も雰囲気も良かった。

僕の両親？来てないよ。あの人たちは仕事で忙しいから。あ、お姉ちゃんも仕事だよ。

で、なんだか元はたちの方で僕の話が拳がったらしく、元はが僕の事を手招きしていた。

それで行ってみると、何故か歓迎された。

「君が池田君かい？」

「ハア……。」

どうして僕が呼ばれたのか、全く見当がつかなかった。庄一と圭はおとなしく成り行きをみていた。僕がつくった弁当を食べながら。

酷いね、全く。友達の事を放置かい？

「話には聞いているよ。」

「すみません、誰だか分からないんですけど。」本当は知ってます

けど。

「ふん。普通の奴にも知られていないのか。やっぱり俺の方が上だな。」

「なんだと！じゃあ、お前も話してみるよ！」

「君は私の事を知ってるだろ？」

「いえ。知りません。」嘘です。本当は知ってます。

「お前も知られてないじゃないか！」

「うるさい！」

と、対峙してる父親二人。さて、戻ろうか。

そう思っ僕は戻ろうとしたら、元はしめに足を捕まれた。

「なに？」

「いいじゃない別に。ちよつとだけでいいからさ。」

「ちよつとは過ぎてるけど……。」

「僕を助けると思ってさ！」

「頑張つてよ。」

と言っ戻ろうとしたら、元はしめが耳打ちしてこう言ってきた。

（本当に助けてよ！僕だけでこの状況は大変なんだって！！）

（僕を巻き込まないで！僕はそんなに関わりを持っていないんだから！）

（君の話で盛り上がってるんだから、本人の登場してもらいたかったんだよ！それに僕も助かる！）

（何が？）

（ツツコミが足りなかつたんだよ。正直僕一人でこのメンツはきついんだ。）

（ふん。）

「二人とも、何こそこそ話してるの？」

元めいばの話を聴いた僕は、無視して戻ろうかと思ったら、久実さんに話しかけられた。

終わつた……。

そう思いながら、おとなしく座つてこの場にいることにした。

「別に。なんでもないよ。」

「そうだね。」

と言ってる僕達二人。

「そうなの？でもごめんね、わざわざ呼んじゃって。」

と、久実さんは言った。僕はもう逃げる事を諦めていたので、

「いいよ。それより、関係ないのにこの場に呼んでくれてありがとう。」

と言った。ちなみに、これは両親がよく誘われた時に言う言葉で、小さかった僕は一緒にいたため憶えていた。

そう言ったら、久実さんがこう言ってきた。

「関係なくはないわよ。あなたの事はよく会話で出てくるもの。」
「どういう話をしていれば、僕が話題に上がるのだろうか？」

なんとなく思ったけど、別にいいかと思った。

その輪に混ざる感じで、そのまま一言も話さないで食べようと決めたら、いきなり話を振られた。

九月上旬のある日(5) (前書き)

体育祭編、これにて終了。早すぎましたか？

九月上旬のある日(5)

「そういえば、レンの両親は？」
「仕事。」

必要なことだけを言えば大丈夫だろうと思っていたら、

「レンの両親って何をやってるの？」

と訊かれた。レイジニアさんに。そうやっていたら、董さんが話に加わった。

「随分楽しそうな両親でしたね。」

僕は、あちゃあ、とものすごいやばい感じがした。

董さんの言葉に元が固まって、久実さんとレイジニアさんは何かに気付いたみたいだった。

「ねえスミレ。」

「なんですか？」

まるで分っていない感じで、董さんはレイジニアさんの質問に耳を傾けた。そしたら、久実さんが訊いてきた。

「どうして連の両親の事を知ってるの？」

その言葉で、自分が言ったことの不味さを理解したようだ。董さんはテンパって「え！？そ、それは、その、えつと………」としか言わなくなった。

その際に僕は戻ろうとしたら、今度はまた父親たちに捕まった。

「江田君。」

「池田です。」

「間違えるとは最悪だな。そうだろう？家田君。」

「言いたくありませんが貴方も間違っています。」

この人達ボケてない？

僕は何となく憐れみの視線を送ることにした。

近くでは久実さんとレイジニアさんが、董さんを詰問していた。

「ねえスミレ？どうして知っていたの？」

「そうね。遭う機会なんてなかったでしょ？」

「み、道端でばったりと会ったんです！」

「へえ〜。そうなの？」

「でもそしたら、以前レンと同じような弁当の中身だった説明がつかないのだけれど？」

「そ、それは……」

「あの時は有耶無耶になったけど、気になるわね。あの時はどうしてかしら？」

「え、えつと……」

僕は、こっちはこっちでもう駄目だと思った。

元はというと、

「ちょっと待つてください！!!どうして僕が!?!」

どうも母親方で何やら言われたようだった。

そして、僕の視線に気付いた父親の方は、

「なんでさつきから憐れんでいるんだ？」

「そうだな。」

よくわかってない感じで聴いてきた。

「いえ……」

僕は視線を背けながらそう答えた。

つ、疲れる……………。

元に同情出来た瞬間だった。

そう思っていたら、ついに董さんが言ってしまった。

「あ、あの時は連君の家に行っていました！」

この時の反応。

久実さんとレイジニアさんは「やっぱり……」と言っていて、元は「ごめん、連。」と言っていて、母親の方は「あ、そういえばそんなことがありますね。」「そうだったんだ。大変だったわね。」と言っていた。問題は父親の方。

僕に最初に話しかけてきた人が怒りに震えていた。

あ、そう言えばこの人、董さんの父親で会社の社長だったよなあ

と思いながら、弁当を手早く片付けて、逃げた。

とつさの行動に庄一と圭を含めて他の人たちの注目を浴びたけど、そんなのは気にしていられない。だって生死を分かっただもの。

そして、

「きくさくまー!!!」

という声と共に、なんだかすごいプレッシャーが全体を包んだ。多分、これが魔法を発動させる前準備なんだろうと思った。

これで皆がパニックを起こして、一斉に逃げた。僕はその逃げ惑っている人達の中で、足を止めた。そして、両親がどうやって業績トップを独占しているのかを思い出した。

「連ー！俺また一位取ったぞ！」

「へえ〜。」

「前々回は私が一位だったのだけどね。」

「そうだったね。」

「なんだ連？嬉しそうじゃないな？」

「いや、良く取れるなあ〜って思ってるよ。」

「成績が凄い秘訣か！教えてやるぞ！」

「あなた。連が話を聴いていないわよ。」

「聴いてるけど。」

「そうか！なら、教えてやる！それはな、仲良くなることだ！こっちから仲良くなれば自然とあっちも心を開く！方法はなんだってかまわないぞ！犯罪行為で仲良くななんてできないけどな！」

「へえ〜。」

「あなた。半信半疑の様よ？」

「ま、いずれ分かるさ。」

「……………これが走馬灯じゃないと祈りつつ。」

僕は近づいていった。弁当箱を開けながら。

こうやってると、なんだか僕って主人公みたいだね。ふとそう思った。

そして、とうとうプレッシャーを発している父親に近づいてしま

った。何をやっているんだろうね？僕は。

「なんだ？やられに来たのか？」

「いえ、僕死んじやいますよ。ま、それよりこれ食べて落ち着いて下さいな。」

「む？」

と言つて、僕は自分の弁当のおかずを一つ、董さんの父親に食べさせた。

そうやって食べてる間、逃げ出した人たちは戻ってきていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

理由は、食べてる間にプレッシャーが弱まっていったからだ。ふう。危なかった。

そして、ゴクリという音がした後ちよつとだけ間があった。僕は自分の弁当を今まで通り食べているよ。

うくん、ちよつと味づけに失敗したのかな？ちよつとだけ薄いや。

と自分の料理に評価していると、周りから「おい、なんであいつ平然としてられるんだ？」

「肝が据わってるのか？それともただのバカか？」「最近思うんだが、連の料理食べた人つてたいてい感動するよな。」「……たいていじゃない。全員。」「そうだっけ？」「あれでカテゴリが『普通』つておかしいわよね。」「一般人に分類できない気がするわね。」

「すごいなあ、連は。」「本当ですね……。」「なんだかあいつの顔がにやけて来てるぞ？」「本当ね。」「あら？」とまあいろいろ言われていた。

僕はまぎれもなく一般人です！と主張したかったけど、言う気にはなれなかった。

その間がなくなった時に董さんの父が言った言葉がまあ、想像通りだよ。庄一と圭も言つてたしね。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うまい！！」

それを言つた時はそこにすでに怒った顔はなく、感動したような顔をしていた。あゝ良かった。

それを見た人達は、食べ終わって片付けをした僕を見た。その視線を受けながら、僕は感動から戻ってきていない寺井父にこう言った。

「落ち着きましたか？」

その言葉に感動から戻ってきたのか、

「・・・ああ。すまなかつたな。取り乱して済まない。」

と言ってきた。対して僕は、

「気にしません。僕の両親より問題がありませんから。」

と言って、自分で地雷をあえて踏んで自分で落ち込んだ。

そんな雰囲気、昼は終わった。もう思い出したくない・・・。

ちなみに、この騒動は何事もなく流されたけど、噂で「三年生の一般人は普通じゃない人が多い。」というのが流れた。僕のせいじゃないんだけどね。

あ。パン食い競走のアンパンをつくったのは僕だよ。だからみんな必死に食べようとしていた。うちのクラスは全員が食べた。だからこの競技、うちのクラスみんな一位だったんだ。

そしてなぜか、アンパンが余ったことによりアンパン争奪戦が発生した。

・・・みんなを巻き込んで。

最初にアンパンをとったのは庄一で、四個ぐらいとっていった。

そして、食べている間に一個を寺井父がとっていた。保護者までも巻き込んだんだよね。

最終的に争奪戦はバトルロワイヤルみたいになって、騒ぎが収まったところには、色々な意味でカオスなことになっていた。南無。

閑話 とある休日 木村圭編（前書き）

三人の中で一番ミステリアスな人、木村圭。彼の休みの過ごし方とは一体……？

閑話 とある休日 木村圭編

「……………今回は俺、木村圭の休日を紹介する。といっても、面白いものはないだろうけどな。」

午前七時。俺は休みの日でもこの時間に起きる。起きてまずやることは、着替え。次に、パソコンの起動。

パソコンが起動するまで、俺はリビングに下りている。

「おはよう、圭。」

「おはよう。」

「おはよう。」

上から、父、母、自分の順であいさつをして、朝食を食べ始めた。食べている間の会話はほとんどない。そういった意味では、連の家族がある意味うらやましいと思う。

「……………両親のズボラさがなければ。」

朝食を食べ終え、俺はすぐさま自分の部屋に戻った。そして、パソコンに届いているメールを一つ一つチェックしていった。それをする理由は、情報屋の人たちからの情報を整理、分別などをするからだ。以前はかなり手間取ったが、今では音楽を聴きながらでもできるようになった。

今日（届いたやつは全部昨日）の分をすべて終わらせたときの時刻は、午前九時。これからの予定を見ると、十時から家の近くの裏路地と書いてあった。

俺はそれがどんな用だったかを思い出し、普段の持ち物を持ってリビングに下りた。

「行ってきます。」

「何してるかわからないけど、気をつけなさいね。」

「分かってる。」

母は専業主婦なので、いつも家にいる。父は結構は会社の部長。

家を出た俺は、集合場所に行った。ちなみに、両親は俺が何をしているのかを知らない。そのうえ、両親は俺が何をしているのか訊いてこない。答える気はないが。

俺は集合場所へ着いた。着いた時間は午前九時半。三十分くらい暇なので、俺はいつものように暇つぶしをすることにした。といっても、簡単なパズルゲームしかやらないが。

閑話 とある休日 木村圭編その2

三十分後。

「やあ、圭。君は律儀だね。感心するよ。」

「・・・楽しいことを見つけたのか？」

「どうしてそう思うんだい？」

「・・・なんとなく。」

待ち合わせ場所に情報屋の一人が来た。

彼の名は柊宙（つばしゆう）。それ以外の個人情報を知ること、この業界ではタブーとなっている。見立てでは、年は三十前くらい。顔立ちがいいので、たぶん、ホストとかで情報を収集しているのだろう。

「・・・何の用だ？」

「前に言っただじやないか。ちょっと面白い情報が耳に入ってきたから、その真偽はともかく君に聞いてほしいって。」

「・・・それで俺がほかの奴らに発信すると。」

「そう。僕たちの取り決めだからしょうがないんだけどね。ま、近いからという理由もあるんだけどね。」

そう言いながら肩をすくめる宙。様になっているな、相変わらず。

「・・・で、その情報は？」

「実はね、本格的に動き出したみたいなんだよ、『フランクス』が。」

「・・・なに？」

宙の言葉に、俺は耳を疑った。フランクスだと？あれはもう活動していないんじゃないのか？

俺は驚きを隠して訊いた。

「・・・本当か？」

「本格的といっても、まだ活動はそんなにしていないみたい。きっと来年からだろうね。」

「・・・分かった。報告しとく。他には？」

「あとは……君の学校の生徒、中島元といったかな？彼、狙われてるらしいよ。」

「それは報告しなくていい奴だな。ありがとう。」

「どういたしまして。これぐらいかな？……あ。そうそう、池田連君の料理を食べてみたいんだけど。」

「……それは学際のクラス出し物が喫茶店だったら。」

「それだったら食べれるね。ありがとう。これ、いつものだから。」

「じゃー！」

そう言って、宙は路地裏の奥へ行った。そこから自分の場所へ戻るのだろう。

俺は渡された封筒をバックの中へ入れ、路地裏を出て歩き出した。

閑話 とある休日 木村圭編その2（後書き）

補足・・・・・・フランクスはバンドグループで、六年前に活動を休止。かなり伝説的なバンドで、ファンの中では悲しむ声がたくさんあった。

閑話 とある休日 木村圭編その3 (前書き)

五十話を達成しました！他二作品の更新も頑張りたいと思います。

閑話 とある休日 木村圭編その3

歩くこと二十分。俺は偶然にもある人物と出会った。

「お久しぶりです。木村様。」

「……久しぶり、詩音。今はホテルじゃないのだから、様はいらない。後、敬語も。」

詩音だった。いつものかっこうとは違い、オフのせいか美人度が増してる気がする。

「そう。なら、これでどうです？圭。」

「……それで構わない。それにしても、どうしてここに？」

俺は、詩音がここにいる理由がわからず訊いた。

詩音は隠す気がないのか、正直に答えてくれた。

「店長が、『しばらく三十五階に泊まる人がいないから、休んでいいよ。』と言っていたのですから。次に泊まりに来る客が二週間近くあるので、私は実家に戻ってきたというわけです。」

俺は意外と近場に詩音の実家があることに内心驚いた。

「そういう圭はどうしたのです？」

質問に答えたのだからこちらも質問していいよね的な雰囲気醸し出しながら、訊いてきた。

俺も特に隠す必要がないので、

「……散歩。ただぶらりと歩いてるだけ。」

と答えた。その前に行っていたことは言う気にはなれなかった。

俺がそう答えたら、

「じゃ、一緒に散歩してくれませんか？久しぶりなので、街並みが変わって戸惑ってしまいました。」

と提案してきた。俺は特にこの後の予定はなかったので、

「……分かった。」

と了解した。

色々なところ（といってもそんなに行っていないが）に歩いていき、そのたびに俺はその場所の説明をしていた。ただ、それは新しい場所ぐらいなので、それ以外は普通に会話を楽しんだ。

例えば、

「圭は学校ではどんな生活を送っているのですか？」

「・・・夏休みに一緒にいた友達と勉強したり、遊んだりしている。」

とか、

「圭の好きな食べ物はなんですか？」

「・・・ハンバーグ、焼き肉、刺身など。」

「子供っぽいものがありますね。」

「・・・うるさい。」

とか。

そうしていると、お昼になった。

「どこで食べますか？」

「・・・昔からある店。日食。」

「まだあるんですか、あの店。」

というところで、日食に行くことになった。

閑話 とある休日 木村圭編その3 (後書き)

圭の休日って三人の中で一番のんびりしてそうですね。

閑話 とある休日 木村圭編その4

日食。正式名、日暮食堂。この店は一番歴史が古く、創業百年くらいになる。それくらいなら結構な有名店になってるのだが、とある理由でそんなに有名ではない。値段は、学生でも十分に出来る金額なので、結構行列ができたりする。

俺たちが着いたとき、まだ開店して間もないのに人がたくさんいた。

「……並ぶ？」

「いいですよ。」

そうして待つこと十分。俺たちの番が来た。

「いらっしやい。……ん？圭か。珍しいな、女連れなんて。」

「……大将。知り合い。あと、ふざけで言わないほうがいい。詩音がかわいそう。」

「そんなことないですよ、圭。お久しぶりです、大将。詩音です。」

「おお！詩音ちゃんかい！懐かしいねえ。ま、座って座って。とりあえずカウンター席に座ってくれということなので、俺と詩音は座った。そしたら、隣から声をかけられた。

「よう、圭。隣の人は……ヒューマニーホテルの従業員だよな？どうしてここに？」

「……庄こそ。」
声をかけてきたのは庄一だった。どうやら一人で来ているらしく、のんびりと食べていた。

「久しぶりにここで食べたいと思ってきたんだよ。そういうお前は？」

「……詩音さんと偶然会ってから、行動を共にしている。」

「ケツ。羨ましいこつて。」

そう言っつて庄一は水を一気飲みした。

何か癢に触るようなことでも言ったのだろうか？

そう思ったが、今は注文のほうが先なので、考えないことにした。

俺と詩音は同じものを注文し（この時庄一が「仲好いな、ちくし
よう」と言っていた）、料理が来る間は三人で話していた。

「そっいえば、もう一人はどこにいるんです？」

「連のことですか？あいつなら家で昼食を食べてると思いますよ。
金がないとかで。」

「・・・外食なんてほぼしない。それに、自分で貯めているお金以
外は自分で使わないと決めているから、基本自炊で過ごしている。」

「すごいですね。」

「あいつの武勇伝ならいくらでも話せますよ。なんたって苦労して
ますから。」

「本当に中学生なんです？」

「・・・俺たちと同じ、中学三年生。」

「健気な子ですね。」

そうこうしていたら、俺たちの料理が運ばれてきた。庄一はすでに
料理を食べ終えており、「少し休む」とか言って、水を飲んだりし
ていた。

食べていたら、大将が突然話しかけてきた。

「圭。池田連の友達なんだろ？」

「・・・なにか？」

この時すでに、庄一は会計を済まして店を出て行った。

なおも続き、

「頼みがあるんだ。ちょっとだけでもいいから、そいつを店で働か
せたいんだ。」

と言ってきた。俺はそのことに疑問を持って訊いた。

「・・・どうして？」

「仕事。」

その一言で、大将が何を言いたのか俺には理解できた。つまり、ち
よっとの間店を空けるから、連に店のことを頼みたいということら

しい。

「何日くらい？」

「二日あれば大丈夫だと思うが、休日を二日もつぶしてやってくれるか？」

「……たぶん、やらない。」

「だよなあ。ま、一日は休みにすればいいか。とりあえず一日だけでもいい。頼んどいてくれ。」

そんなことを話していたら、詩音が話に混ざってきた。

「どうしたのです？」

「ちよつとした日常会話だよ、なあ？」

「……（コクリ）」

そんなやり取りの後、俺たちは昼食を食べ終え、店を後にした。言い忘れていたが、大將は情報屋、その中でもトップクラスの人物である。日食が有名店にならない理由は、大將自らが情報操作をしているからである。その理由が、「地域との交流を大切にしたいからだそうだ。」

閑話 とある休日 木村圭編その5

その後、俺と詩音はまた散歩を شدした。その途中、CDショップに立ち寄りたり、詩音の買い物に付き合ったりした。

そして、この町に一つしかないスーパーへ行くことになった。

「……何か買い物でも？」

「ええ。両親に夕飯を作りますので。」

そういう会話の後、スーパーに入った。

そこで買い物の手伝いをしていたら、当然というか偶然というか、連と出会った。

「どうしたの？ま。普段ほとんどこんな時間に来ないのに。って、もしかして、詩音さん？」

「久しぶりです、連君。本当に一人で買い物してるのね。」

「……手伝い。」

「ふん。……あ！やばい！さっさと買わないと！長居してたら姉さんに怒られる！じゃ！」

そう言つて、連は早歩きでどこかへ行った。その時に、「詩音さん。野菜や肉、魚は商店街のほうで安く買えますよ。」と言った。

連を見送つて、

「忙しそうですね。」

「……あれが普通。」

「そういえば、さつき連君が何か言つてませんでした？」

「……商店街での買い物の方が安いと言つていた。」

という会話で、俺たちは商店街へ向かった。だいぶ歩いたせいか、足が疲れてきた。

商店街での出来事を省略し（あえて言うなら、連の言った通り結構安く買えた）、帰路についた。というより、詩音を送っていくという意味合いが強かったが。

詩音に礼を言われちよつと照れくさいと思いながらも、俺は自分の家へ帰った。

家に帰ると、母が寝ていた。時刻は午後五時。俺は母を起こす気になれず、自分で夕食を作り、食べ、片づけて、自室へ向かった。

パソコンを起動してる間、今日の出来事を日記に書きとめた。しかし、宙の言っていたことは、別なものに書き留めた。

パソコンが起動したとき、母が俺の部屋に来た。

「おかえり。」

「ただいま。夕飯は食べたから。」

「そうなの？ 圭は優しいんだから。じゃ、お母さんとお父さんの分を作ればいいのね？」

「そう。」

そう言ったら、母は部屋を出た。俺は、すぐさまインターネットでいつものサイトに行き、今日の朝やったことをサイトにアップした。そのついでに、宙が言っていたことも報告書としてサイトに書き込んだ。

それがきちんとできたことを確認した俺は、パソコンの電源を切り下へ降りて風呂に入り、父と少し会話して、寝た。寝るときに、今日の出来事はデートというのではないかと考えて、少し寝られなかった。

閑話 とある休日 木村圭編その5 (後書き)

次は多分、第五章かもしれません。

五 十月下旬～十一月中旬（学園祭までの準備）学園祭四日間と後片付け（前

学園祭編です。この間に、ちよくちよく閑話を挟みたいと思います。

あと、新キャラ登場します。

五 十月下旬～十一月中旬（学園祭までの準備～学園祭四日間と後片付け）

「え、来月中旬に行われる学園祭での、クラス内出し物を決めたいと思います。」

九月に行われた体育祭が終わり、テストやらで大変だった十月。

僕達は、次の学園祭の出し物について話し合っていた。

「誰か～案ありませんか？」

と言っているのは、ご存じ久実さん。何故だかダレていた。

僕は話し合いに耳を傾けている程度で、普通に空を見ていた。今日も空がきれいだなあ。

と、そこで僕は何かがかつちに来てるのに気付いて席を立ってしまった。みんなに注目されたのにもかわからず。

「ど、どうかしたの!？」

と、久美さんが言っていたけど、僕は気にしなかった。いや、気にしていられなかった。

だって……………。

「こつちに来てる……………」

「ハア!？」

と、みんなが驚いて窓の方を見た。そして、

「なんか来てる!?!」

と言ってみんな廊下の方へ移動してしまった。僕はというと、

「おい!俺らも行くぞ!」

「…逃げないと。」

「伏せるだけで何とかなるかもしれない。」

「ハア!？何言ってるんだ!死んじまうぞ!」

「…無謀!」

「だったら、僕一人だけここにいるよ。」

「…ああ、もう!俺も残るぜ!」

「…俺も。」

「二人とも……じゃ、今から伏せて!!」

「おう!」「……了解!」

と言って、三人とも窓の下に行き、身をかがめた。

そして、

チユド

ン!

!!!!!!!

という音がして、僕らの上を通り過ぎて教室に着地した。その時に、机などが教室の外へ出てしまった。

「ゲフツ!ゲフツ!大丈夫か!？」

「ゴホツ!ゴホツ!だ、大丈夫。」

「……問題ない。」

と、僕達三人はお互いの無事を確認した。良かった大丈夫みたいだ。

「それにしても、」

と言って、庄一は着地点の方を見た。僕達もつられてみた。

「それにしても、誰だ?こんな事した馬鹿は?」

そうしていたら、着地点から人の声がした。

「あつれ、おかしいな。どこで計算が間違っただら?ちゃん

と出力計算したのに。」

.....

「……出来てねえよ!!」「……」

僕達は思わずツツコミを入れてしまった。

そしたら、廊下から人が戻ってきた。そして、

「あんた達!!どうして逃げなかったの!？」

「そうですよ!危ないじゃないですか!」

「ていうか、誰なの?ここに着地したのは?」

「三人とも、大丈夫?」

と、元^{はじめ}たちが言ってきた。

その声に、庄一がキレた。

「お前ら、能力あるのにどうして逃げたんだよ!!」

その言葉にみんなが黙った。

「使ってればこんな事にはならなかったんじゃないのか!? どうして何もしなかったんだよ!」

「庄一!!」

庄一が怒りをぶつけていた時、僕は庄一に呼びかけた。

「なんだ連! 今俺は…」

「庄一! 君のその言葉は差別だ! 能力があるからって、さっきの状況で判断できた!? 僕達だって伏せることしかできなかったじゃないか! それにまだ子供だ! この状況で逃げたくなる!」

僕の言葉に、庄一ははっとした。氣付いてもらえたのだろうか?

「………すまなかったな、連。ついカツとなって………」

「僕じゃないよ、庄一。謝る相手は。」

「ああ。」と言って、元たちはじめに向き直ってからこう言った。

「すまなかった。俺は心の中でお前たちの事を差別していたみたいだ。」

その言葉を受けて、元たちはじめはバツが悪そうにして言ってきた。

「す、すみません。」

「逃げたことは言い訳できないわね。あんたが謝ることじゃないわ。」

「………こつならなかったために今まで頑張ってきたんだけど………ごめんね。」

「ごめんなさい。」

さてお互いに謝り終わったので、次に、こんなことをしたのは誰かと思い、煙が晴れた場所を全員で見たら………。

ロケットを背負っていた女の子がいた。

「あれ? どうして私の事みんな見てるの?」

その少女は、僕達に見られている訳が分からないのか首をちょこんと傾げた。

僕達は一斉に、

『誰だよ。お前。』

と言っていた。

人騒がせな人だと、僕は思った。

十月下旬～十一月中旬(2)

「はじめまして、私の名前は花音。藤木花音です。今日からこのクラスに転校することになりました。よろしくお願ひします。」

「ぶっ飛ばした机のせいで、先生に叱られてきた藤木さん。あの後、クラス会はどこへやら、真っ先に先生が来て事情を説明し、藤木さんを連行していった。」

僕達はというと、残っていた机と椅子を並べてみたけど数が足りなくて、校庭にぶっ飛んでいったものは壊れて使い物にならなくなっていた。なので、全員が机と椅子なし、要するに床に座った状態だった。

それからしばらくして、藤木さんが連れられてこの教室へ来て、さっきの自己紹介をした。

その紹介を聞いた一部の男子が、「おい、ロリだ。」「いい……。」と何やらバカなことを話していた。

僕達三人はというと、

「それにしても、よく見てたな。あいつが飛んでくるところ。」

「ああ、それね？単純に、話だけ聞いてて空を見てたら何かが起こりに近づいてるなあ、って感じたよ。」

「……偶然でもすごい。」

「そうだな。結果的に見たら、お前のおかげで怪我人がいなかったじゃねえか。」

「そうだね。」

「……(コクン)」

固まって話していた。だつて座ってるんだもん。

それで先生がこう言ってきた。

「あ、彼女はこれでも天才科学者で発明家だそうだ。仲良くするように。それと、机と椅子は明日には何とか手配するから。あと学

園祭の出し物決めとけよ。」

そのあと、先生は教室を去っていった。え？これで放置？

その代わりに、久実さんが教壇に立ってこう言った。

「さっきのせいでも有耶無耶になりそうだったけど、学園祭の出し物を決めたいと思います。意見在りませんか？」

すると、一人の女子生徒が手を挙げた。

「はい、倉持さん。」

倉持さんって、超能力を持っている人だっけ。と、どうでも良い事を考えていた。

「喫茶店でもやりませんか？」

指された倉持さんは、喫茶店をやるうと言った。その言葉を聞いた他の人達は……

「喫茶店か……」「でもいいんじゃない？」「そうね。楽しそう。」

賛成ばかりだった。でも、この流れだと僕は自然と調理係になりそうな気がする。

「喫茶店ね。ま、無難な所ね。他の意見は？なかったらこれにするけど。」

結局、これしか意見が出なかったので僕達は喫茶店になった。

言い忘れてた。

僕達の学校の学園祭は、一般向けに開放されている。開催期間は四日間。クラスの出し物は、もう金をとること前提。そのお金は募金という形で貧しい所へ寄付される。

で、話を戻すけど、喫茶店と決まったはいいいけど、新たな問題が浮上した。

僕達三人と元まじ以外の男子が「コスプレ喫茶やろう」と馬鹿なことを言っ、頑として譲らなかつた。

女子たちは反対したけど、何故か最終的にコスプレ喫茶に決まってしまった。誰かが入れ知恵でもしたのかな？

その次に役割分担。これは久実さんがやる……はずだったのに、何がどう転がったのか庄一にお鉢が回った。

その後がもうスムーズに決まっていた。

調理係のリーダー決めは簡単。一斉に僕の名前を言ったから。

監督も簡単。このまま庄一。

接客係は元、董さん、レイジニアさん、久実さんを中心うちのクラスの綺麗な人とカツコイイ人が選ばれた。あ、転校して間もないけど藤木さんも接客だよ。

教室の内装チームは庄一を中心にやっていくこととなった。

伝票などの会計は、圭を含めて数名。最初人数を聞いた時「少ない？」と思っただけど、圭の事だから大丈夫だろう。

その次にメニユー決め。これが大変。

喫茶店の代表的なメニユーを挙げていったら多くなったので、どれにするかで一悶着あった。

最後に店名。あれやこれや言ってる間に授業が終わりそうだったので、庄一が「じゃ、店名は、『喫茶・レイデン』で。」と言って強引に決めた。それでみんなは納得した。

締めの一言に庄一が、

「おら、やるぞみんな！泣き言言わないで必死に働け！以上！」

と言ってみんなにヤル気を出させた。凄い人だ。

十月下旬～十一月中旬(2) (後書き)

庄一のリーダーシップはすごい。

十月下旬〜十一月中旬(3)

それから、僕達は喫茶店の準備をしだした。

僕は、調理係として選ばれた六人と一緒に圭から出された金額をもとに、決まったメニューの試作品を作っていた。調理室を貸切にして。時々、僕がつくってる間に「池田君って、本当に料理上手いよねえ〜。」「なんかレベルが違い過ぎて、参考にできないって感じだよねえ〜。」「俺、あいつに教えてもらおうかな?」「無理無理。教えてもらってもお前じゃ参考にできねえよ。」「なんだと?」
とまあ、なんだか物騒な話が聴こえる。正直、みんなで頑張ろう、
と言いたい。

ちなみに、接客係の衣装は圭がデントツから取り寄せた。しかも、
無料で。

そのことに他の人たちが驚いたけど、本人は気にせず自分の仕事を
をしていた。

内装は、庄一がその手に詳しくそうな人にすべて任せたいだ。
適材適所だね。

あ、藤木さんはみんなと打ち解けたよ。色々と迷惑かけてるけど
ね。

で、藤木さんの目下の観察対象は、言わずもがな元である。

どこへ行くにも元もとについていくので、久実さん達があの手この手
で藤木さんを引き離している。最初に「花音」と呼んだのは元もとだし
ね。

そうしてるうちに日は過ぎて、ついに文化祭初日を迎えた。

庄一が、みんなに向かってこう言った。

「これから四日間、俺達は商売をする。中学生だからって怠けるな
よ!商売は戦だ!行くぞ!」

「おお

!!!」

こうして、学園祭が始まった。これから、僕達の知らない所で起

「このことを知らずに。」

「庄一、そのセリフをどこで覚えたの？」

「ちよっとドラマのセリフを言ってみたくてな。」

「…ドラマ「商戦スピリット」から。」

「よく知ってるね。」

「俺も驚きだ……………」

「…（プイッ）」

十月下旬～十一月中旬(3)(後書き)

次から学祭が始まりますが、閑話を入れるかもしれません。

閑話 とある休日 寺井董編（前書き）

今回は寺井董さんのお話でもどうぞ。時系列でいつと、学園祭本番前の休みの日です。

閑話 とある休日 寺井董編

こんにちは。今回はちょっと恥ずかしいんですけど、私、寺井董の休みの日の過ごし方を、紹介したいと思います。

私は、休日でも平日でもきまつて朝五時には起きます。なぜなら、それが毎日の習慣となっているからです。

朝起きて着替えを自分でし（他人にやってもらうほど、お嬢様ではありません）部屋を出ると、毎日三人のメイドさんがいます。私の専属です。家にいるときはいつも一緒に行動しています。

「おはようございます、お嬢様。」
そう言ってお辞儀を、真ん中の人がしました。

「おはようございます、未来さん。今日もお早いですね。」
私にお辞儀をしてくれたのは、堂本未来さん。この家のメイド長で、年齢は見た目で二十代くらいの人。いつも無表情で無愛想っぽいけど、実は人形や裁縫が大好き。昔一人で寝れないときは、未来さんの部屋で寝たりしてたんですよ。

「お嬢様、いつも早いですね。私まだ眠いんですけ・・・ふあ
あ。」

「ま、真帆。お嬢様の前で盛大にあくびしないの。」

「だって、まだ眠いんだもん。美帆だつてあくびしてたじゃん。」

「そ、それは・・・！」

未来さんを挟んで会話をしている二人の少女。あくびをしていた人の名前は松村真帆さんで、それを注意したのが松村美帆さん。

二人は、最近この家で働くことになったメイドさん。同じ名字から分かるとおり、彼女たちは姉妹。それも、双子の姉妹なんです。

お姉ちゃんは美帆さん。気が弱くて引っ込み思案、そして人見知りという欠点はあるものの、大変優秀な人なんです。

妹さんの真帆さんは、お姉さんとは正反対の性格の持ち主です。

でも、仕事をたまにサボって未来さんに怒られます。

私は、そんな三人を見てこう言いました。

「では、いつものようにお願いします。」

それを聞いた三人は、

「……かしこまりました。」

と言って、私の後を付いてきました。

閑話 とある休日 寺井董編（後書き）

次回もこれでいくと思います。

閑話 とある休日 寺井董編その2

「これぐらいで体をお休みになられたほうがいいですよ、お嬢様。」
「そ、そうですね。ちよつと休みますので、朝食の準備をしてきてください。」

「かしこまりました。では美帆と真帆を置いていきますので。」
そう言つて、涼しい顔をして未来さんを部屋を出て行きました。

「大丈夫ですか？お嬢様？」

「毎日大変ですね、魔術の修行だなんて。」

座り込んでしまった私に、美帆さんと真帆さんが駆け寄ってきて、お水とタオルを渡してくれました。言い忘れていましたが、美帆さんと真帆さんは私より一歳年上だそうです。

「ありがとうございます。」

そうお礼を言つて、私はタオルで汗を拭いて、水分補給をしました。私たちがいるのは修練場です。朝起きてからは毎日とっていいほどここで、未来さんと修行をしています。

未来さんの実力はトップクラスなので（私の知る限りでは）、私は素直に教えてもらっています。時折、元は未来さんみたいな人が好きなのかなあと思ったりしちやいます。強くてかつこいいですからね。

そんなわけで（実際の理由は違いますけど）、私は未来さんに師事してゐるのです。

と、私が休んでいたら、ふと真帆さんが訊いてきました。

「そつえばお嬢様、もうすぐ学園祭ですね。」

「そうですね。私たちのクラスは喫茶店をやるんですよ。」

私がそついうと、真帆さんが、

「本当！？お嬢様はどっち側ですか！？接客ですか！？調理ですか！？？」

興奮気味に訊いてきました。しかし時計を見ると七時になりそうだ

ったので、

「それはまたの機会です。今は未来さんたちが作った朝食です。」
「といって、私は部屋を出て行きました。正直言うと、真帆さんが訊いてきたとき恥ずかしくて答えられなかったんです。だって、コスプレで接客なんですから。」

「ごちそうさまでした。」

私はあの後食堂へ向かい、未来さんが作った朝食を食べました。これからの予定はなかったため、何をしようか悩んでいたなら、お母様が来ました。

「おはよう、薫。」

「おはようございます、お母様。」

私のお母様は社長夫人であると同時に、作家でもあります。ペンネームは「水連」で、売れっ子ではありませんが、ファンは多いんですよ。ただ、私のクラスに二人もいるとは思いませんでしたけど。

お母様が椅子に座ったら、ほかのメイドさんが朝食を運んできてくれました。それを食べてるとき、お母様が私に言いました。

「そういえば、今月学園祭ですね。」

「はい。」

「私たちも行きますよ。丁度休みが重なりましたので。」

「そうなんですか。」

「また体育祭のようにならないかなければいいのですけれど。」

それを聞いた私は、思わず苦笑してしまいました。あの時は、連君の判断がなかったら大変なことになっていただろうと思いますからね。

お母様が食べている間、私はお母様とお話をしていました。そして食べ終わったら、私は食堂を出ました。

これから何をしようかと悩んでいたなら、携帯電話が鳴りました。発信者を見ると、『中島元』の文字が。

私は、高鳴る心臓を何とか抑えながら、電話に出ました。

「も、もしもし!？」

『あ、董?これから何か予定があったりする?』

「まったくないですよ!」

『え?あ、うん。それならいいんだけどさ。』

ちよつと緊張しすぎたみたいですね。元が若干引いてしまってます。

「そ、それで、何かご用ですか?」

落ち着いてから、私は訊きました。

『今からいうところに来てくれないかな?ちよつと大事な話があるんだ。』

その言葉で、私の鼓動は一瞬で、さつきより速くなりました。

だ、大事な話!?!も、もしかして……こ、告白!?!

と思っていたら、

『あ、そうそう。久美たちも行くから。十時には集合ね。』

と言って電話を切られました。その時、一瞬で私のテンションは下がりました。

しかし、これでへこたれてなんかいられませんので、私は素直に行くことにしました。

でも、肝心な用件が何なのか判りませんでしたね?

閑話 とある休日 寺井董編その3 (前書き)

はたして、元が呼んだ用とは一体？

閑話 とある休日 寺井董編その3

午前九時四十分。私は元が指定した集合場所へ行きました。そこにいたのは、元と久美と花音さんでした。

私に気づいた元が、手を挙げながらこう言いました。

「おはよう董。大丈夫だった？」

私はさっきのことを思い出しましたが、その仕返しをする気はなかったので、

「今日は用事がなかったので大丈夫です。」

と言いました。その様子を見た久美が、

「元？そろそろ、どういう訳で私たちを呼んだのか言ったらどう？」と訊きました。花音さんも不思議に思っていたようでした。

「そうそう。どうして私たちを呼んだの？」

それに対し、

「レイジニアが来てからね。」

と言ってはぐらかしました。最近、元のはぐらかし方がうまくなっている気がするのは、気のせいでしょうか？

十時五分。ようやくレイジニアさんが来ました。もちろん、私たちは当然のように文句を言いました。

「遅いじゃない、レイジニア。寝坊でもしたの？」

「まさか。ハジメに起こされなきゃ、私より遅れてくるあなたに言われたくないわ。」

「レイジニアさん。遅かったじゃないですか。五分過ぎてますよ。」

「ちょっと道に迷ってしまったのよ。ここで生活しても、ここら辺にはほとんど来ないから。」

「私のGPS、貸す？」

「結構よ。それでまた迷子になりたくないから。」

私たちの文句をいつもの毒舌で返したレイジニアさん（久美だけ）は、元に向いてから、私たちと同じことを訊いた。

「それで？一体何の用なの？」

それに対して、元はこう答えました。

「さて、みんな揃ったわけだし、行こうか。」

そう言った後、元は歩きだしたので、私たちはあわててついて行き
ました。

本当に、何の用があるんでしょうか？

「着いたよ。」

歩いて十分。私たちは元が立ち止まった店を見て、驚きました。

「ここって……」

「いわゆるコスプレ衣装を売ってる店よね？」

「最近では貸し出しもやってるんだよ。」

それを聞いた私は、なんでみんな知っているのか不思議でなりませ
んでした。

と、ここで久美が訊きました。

「どうしてここに用があるわけ？」

すると元は、こう言いました。

「ほら、僕たちのクラス、コスプレ喫茶じゃない？それで衣装を決
めることになったじゃん。で、庄一が僕たち以外の注文は訊いたか
ら、お前らは実際に店行って何着るか決めてくれて言われて。こ
の場所は圭が教えてくれたんだよ。なんでも、この店で貸し出しの
注文をすると、デントツにある本社から送ってもらえるんだって。」
その言葉を聴いて、私たちは庄一君の意図と、圭君の情報網に感謝
しました。

そのあと、

「あれ？でも、庄一が『一人ずつ行けよ。間違っても、全員で行く
なよ。』って言ってたけど、どうしてだろう？」

といった元に対して、私は（多分ほかの人たちもでしょうけど）ち
よっただけ殺意を抱きました。

閑話 とある休日 寺井董編その3 (後書き)

元の鈍感、マジでヤバス(爆)。

閑話 とある休日 寺井董編その4 (前書き)

ページ数自体は少ないんですけどね。

閑話 とある休日 寺井董編その4

店に入って、私たちの衣装選びが始まりました。元は、「僕の衣装はもう決まってるらしいから、結構だよ。」と言って店の中を散策するみたいです。

そうしてる間、私たちの中で密かな戦いが始まりました。

それは、「誰が元を誘惑できるか。」という戦いです。もっとも、衣装を選ぶのを手伝ってもらったり、楽しくお話しできるかというのもありますが、ここでの課題はいかに衣装で元をときめかせるか、ということですよ。

ただ、困った事が発生しました。

衣装が全部ディスプレイ表示になっていることです。各コーナーごとに衣装の名前と値段があるのですが、実物ではなく映像なのです。これでは試着してみてももらうことができません。

そう思ったので店員さんに聞いたところ、どうも、今着ている服の上に映像を映すという形で、試着ができるようでした。

なので、私はあちこちを見て回っていました。その時に、久美が元を呼んだのを見ました。

「ねえ、これなんてどうかしら？」

彼女は、ネコミミと言われるものとセーラー服を試着していました。元は関心を示しませんでした。それにムツときたのか、

「じゃ、これなんてどうかしら？」

と言って、スーツ姿になりました。といっても、ズボンではなくミニスカートでした。

その恰好を見た元は、顔を赤くしてそっぽを向いていました。その時に花音さんが、

「これどうかな？」

と言って、どう見てもいつもと変わらない格好でいました。元は反射的に「いいんじゃないかな!？」と言ってしまいました。悔しい

気持ちでいっぱいになったので、私も真剣に衣装を選んでいきましたが、全く見つかりませんでした。

レイジニアさんも決まったらしく、残るは私だけだったので、これといったものが見つからなく、大変困り果てました。そこに元が来て、

「どうしたの、董？決まってるの？」

と話しかけてきました。私はまた足を引っ張っちゃったなと思いつつ、頷きました。

そしたら、

「だったら、これなんてどう？絶対似合うよ。」

と元が選んでくれました。それが、巫女さんの衣装でした。私は嬉しさ半分、やるせなさ半分でそれに試着したところ、元がじつと私のほうを見て「ほえ。」と言っていました。

これは私に見とれているってこと！？と内心で半狂乱になりながら、これに決めました。

衣装を決めた事を庄一君にメールして、私たちは店を出ました。

それから、みなでお昼を食べました。もちろん、日食で、です。

レイジニアさんと花音さんは初めてらしく、楽しみに並んでいました。

そして私たちの番になったので店に入ったら、聞き覚えのある声で出迎えられました。

「いらつしやませー！」

「あれ？この声……。」どこかで聴いた様な気が……。」

「どこだろう？」「もしかして。」

「まさか……。」

そう言いながら調理場へ視線を向けると、ある人がいました。それは……、

「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」

「さっさと座ってよ。他のお客さんの迷惑になってるから。」

連君に注意され、私たちはおとなしく指定された席へ行きました。それにしても、どうして連君がここで働いているのでしょうか？

それはみんなが疑問に思っていたことらしく、

「あれ、レンよね？」「そうね。」「池田君、この息子なのかな？」「違うよ。普通の家庭だよ。」「

と口々に言っていました。

それはさておき、私たちは注文する料理を決め、店員さんに言いました。それから三十分後。

私たちが頼んだ料理全部が来ました。人ばかりで待たされると思っていたのに、それほど待たされなかったことに、私たちは驚きました。

頼んだ料理を食べ終わった後、みんなで会計を済まし、店を出ました。店を出るまで、連君が休んでいる姿を見ませんでした。

「いや、連があそこで働いてるなんて驚いたね。」「

「というより、なんであそこで働いていたのかを不思議に思わないの？」「

「元と同じで不思議だね。次は池田君を研究対象にしようかな？」「

「それにしても、あいつに休憩時間とかあるのかしら？」「

「どうなんでしょう？」「

日食からの帰り道、そんなことを話していたら、

「ん？お前ら、日食からの帰りか？」「

「・・・連はどうだった？」「

庄一君と圭君に会いました。ふたりとも、どうも日食で連君が働いていることを知っているみたいです。

それに反応して、久美がこう言いました。

「そういうあんたたちはどうしてここに来たのかしら？まさか、連をさらに忙しそうにする気？」「

対して庄一君は、

「お前たちみたいなのはしねえよ。俺たちは単に手伝いをするために来たんだよ。」「

と言いました。圭君も、「……連は有給。俺たちは無給。」と言いました。

そして、店の裏口へ入って行きました。友達思いな人たちだと、今更ながら思いました。

閑話 とある休日 寺井董編その5 (前書き)

六十話突破しました！

閑話 とある休日 寺井董編その5

庄一君たちが日食に入るのを見送った後、私たちはそのまま歩いていきました。が、足取りは重く、ゆっくりとした動きに見えたでしょう。

そこで元がポツリと言いました。

「・・・連には学園祭でも頑張ってもらうんだしね。助けてあげたいね。」

それに反応して、私たちはハツとしました。確かに、学園祭では連君が一番苦勞する立場にあるのですから、それまでの負担を軽くしなければいけないですね。それに、私たちも接客としての仕事が叔母得られるので一石二鳥になりそうです。

そう思つて、私は「助けにいきませんか？」と言つたら、店のほうから「本日はもう閉店します！」という声がしました。

え？今の私たちの会話はなんだつたのでしょうか？

と、みんな呆氣にとられていたら、しばらくして庄一君たちが来ました。

「助かつたよ、二人とも。あゝ、これから家でも家事をやらなくちゃ。」

「俺、そんなに働いてないぜ？お前、休みなしで開店からずっと働いてたんだろ？」

「そつだよ？あれくらいなら、いつもよりちよつとつらい程度かな？」

「・・・お前の家での苦勞が目には浮かぶ。それで、お金は？」

「あ。うん。・・・うわ！結構たくさん入ってる！・・・つて、みんな、どうしてそこで立ち止まつてるの？」

ちよつと封筒の中身を確認した後人影に気づいて前を向いたら、私たちがいたので訊いてみた、つていう感じで連君が訊いてきました。私たちはちよつと気まづくなりながらも、適当にはぐらかしまし

た。

そして、みんなで話しながら一緒に帰りました。

みんなと別れて一人になった時、前から車が来ました。

「お嬢様。迎えに上がりました。」

「ありがとうございます、源さん。」

執事長兼運転手である源さんが私を迎えに来たので、その車に乗りました。

家につくまで、私は源さんに今日の出来事を少し話しました。源さんは、私の話を楽しそうに聞いてくれました。

家についたら、未来さんたちが出迎えに来てくれました。そして、自室へ戻り一人でのんびりと過ごしていました。途中、元に言われたことを何度か思い出して顔を真っ赤にしましたが、誰も見ていなかったのです、からかわれることはありませんでした。

夕飯の時間になり、私は食堂へ行き、夕飯を食べました。ただ、連君の料理を食べたので、ちょっと物足りないと思いました。

それからは、お風呂に入って、柔軟をして、ベッドに入って寝ました。いつもより楽しく過ごせてよかったと思いました。

閑話 とある休日 寺井董編その5 (後書き)

次回は話をもどそうと思います。

十月下旬～十一月中旬(4)(前書き)

戻ってきました。学園祭初日です。

十月下旬～十一月中旬(4)

学園祭初日。

僕達のクラスの出し物『喫茶・レイデン』は開始して早々、人がたくさん来た。ほとんどがうちのクラスの生徒の保護者だったけど、生徒の兄弟も来ていた。なかでも、相も変わらずの娘バカの父親二人が来ていたので、もう面倒くさかった。接客はしていないけどね、僕。

ちなみに、タイムスケジュールってものがあるんだけど、僕にはそれが無い。それはなぜか。

料理が一番うまいから、だって。酷いね、全く。庄一や圭だって休憩時間あるのに。

というわけで、これから四日間はずっと作る側でどこにも行けないんだ。正直悲しい。

そう考えながら、僕はさっきから料理を作っています。手伝ってもらっているんだけど、最終的には僕がやることになっているので、もう大変。

「次！イチゴパフェにナポリタンを一つずつ！」

と元の声がしたので、僕は、

「了解！」

と言って、他の人たちに指示した。

あ。コスプレ喫茶というわけで、接客係の人はみんなコスプレしています。

元は女装。女子から似合っていると高評価。やるせなさはありません。うだけどね。

久実さんは秘書。これを見た父親が、一瞬意識を失ったらしい。かなり様になってるよ、と言ったら、久実さんは「そうかしら・・・？」と言っていた。

董さんは巫女さん。他のクラスの男子が群れてきたため、寺井父

が体育祭と同じようなことを起こしそうになった。これに関してはもう面倒になっていただけ、料理を急いで作って董さんに運ばせ、寺井母が食べさせて静まった。

そしたら、何故か僕が呼ばれ仕方がないので行ったら、寺井母から「ありがとうございます。」と言われ、名前を訊かれたので答えたら、「このお礼はいずれしましょう。」と言って寺井父と一緒に教室を出て行った。お礼なんていいのに。

レイジニアさんは貴族の娘。外見と雰囲気のおかげで全くおかしくはなかった。元が「深窓の令嬢みたいだ。」と言ったら、恥ずかしそうにしていた。青春っていいですね。

藤木さんは白衣を着て保健室の先生。白衣はいつも着てるからコスプレとは言わないんじゃないかと思っただけど、他の男子が「いい。」と言ったので、何も言わなかった。そして、他のクラスの男子が「ロリっ娘が白衣着てる！」と一斉に来た。並ばせたよ？もちろん。

男子は面倒なので省略。だってほとんどタキシードなんだもん。場面を戻そう。

今は調理に集中だ。そう思いながら、注文された料理を作っていく、接客係の人に渡した。その時に、元たちと藤木さんがいなくなっていたので、「どうしたの？」って訊いたら「藤木さんがどこかへ行ったらしい。」と言ってきた。大丈夫かな？と思っただけど、気にしてられないので、考えないことにした。

十月下旬～十一月中旬(4)(後書き)

またちよくちよく入れるかもしねません、閑話。

十月下旬～十一月中旬（5）（前書き）

連の両親が学校行事に登場しました。さてさてどうなることやら。

十月下旬〜十一月中旬(5)

お昼時。

僕達のクラスはさらに忙しくなっていた。なぜかというと、料理とウェイターの評判が学校全体に流れていたからだ。そのせいで僕の昼食時間が全くと言っていいほどないんだ。沢山人が来てくれるのはいいんだけど、僕は空腹状態になりつつあります。し、死ぬ・・・。

で、いつの間にか戻ってきた元たちはどこか焦っていたように、僕は見えた。でも、僕には何もできないので気にしないことにした。こっちが大変だったこともあるけど。

その時に、知ってる声が聴こえた。

「いらっしやいませ！何名様ですか！」

「二人で空いてるところ、ありますか？」

「ではこちらへどうぞ！」

「しかし息子の学園祭に来るなんて初めてだな。」

「そうね。渚に言われたから初めて有休とったものね。」

「そういえば、渚は？」

「明日来るんじゃないかったかしら。あの子も忙しいみたいだから。」

「そうか。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

な、ん、で、あ、の、二、人、が、い、る、ん、だ　　！！

僕は心の中で絶叫した。でもちゃんと料理は作ってるからね。

そして、料理を作り終わって渡して、次の料理をつくっていたらこんな声が聴こえた。

「お、庄一君じゃないか。タキシードが似合ってるね。」

「こんにちは。珍しいですね、息子の行事に来るなんて。」

「たまには行こうかなって思っていたのよ。」

「って、なんでスーツなんですか？」

「いけないか?」「いけないかしら?」

「いえ、別に……。」

スーツで来てんのかあの二人　!!　そう思いながらも、僕は料理を作っていた。

それでも、両親の声が聴こえてきて、

「なあ母さん。何頼もつか?」

「そうねえ。じゃ、いつもの頼もつかしら。」

と、かなり無茶な注文をしてきた。これは家庭でつくってるものでいいの?　と思ってその続きを聴くことにした。

「すいませーん。」

「あ、はい。ご注文はお決まりでしょうか?」

「えーっと、オムライス二つで。」

「かしこまりました。」

いつものって、喫茶店での注文の奴かよ

!!

と、僕は心の中でツッコミを入れていた。それでも、他の人の注文の方が先なので、注文順につくっていき、両親の料理の時にちよつとした細工をした。両親なら、多分気付いてくれるだろうと祈りながら。

細工をしたオムライス二つを、ウェイターに渡さず、自分で持つて行った。調理係の人達にちよつと仕事を任せてるよ。このオムライスは、ちよつと自分で渡さないといけないものだったから。

「お待たせ、二人とも。」

と言って、僕は二人分のオムライスを二人の前に置いていった。

「お、連。お前が運んでくるなんて、あっちの方は大丈夫なのか?」

「そうよ。」

「二人が珍しいから、僕も珍しい行動をとってみたんだよ。」

「そうか!」

と、ちよつとだけ話して、僕は戻った。その時に僕は、「頼んだよ。」と言った。

その時に両親は何を言ったか知らないけど、きつと「任せとけ。」

だと思う。それから、両親はオムライスを普通に食べ、会計するときには「何人が連れてっていい？この学校の事分からなくて。」と言って、元たちを連れていった。庄一はちよつと困った顔をしたけど、すぐさま許可した。助かるね。

ちなみに、僕の両親は普通のサラリーマンとOL。だけど、あの人たちの人心掌握術と、推理力、観察力は一般人とは思えないものがある。何処かでスパイでもやっていたのかと思うぐらいだ。だから、営業成績の一位と二位を入社以来独占し続けられている。大事な取引だと、僕の両親が必ずと言っていいほど参加しているみたいだ。

ま、何が起きてるかは圭に訊くとして、今は集中集中。

十月下旬～十一月中旬(5)(後書き)

両親は両親でいろいろと可笑しいですね(笑)。

十月中旬～十二月下旬(6) (前書き)

一
万PV突破しました！ありがとうございます！
これからもよろしくお願いします！

十月中旬〜十一月下旬(6)

結果。

藤木さんが元たちと戻ってきたころ(午後二時)には、僕達の店は材料切れで終了していた。

「え、もう終わってる。ほとんど活躍してないのに。」

その光景を見て、藤木さんはそう愚痴をこぼしていた。

それを聞いた庄一は、

「どうしていなかったのか訊きたいところだが、今はそれどころじゃないな。圭、今回の収益は？」

と圭に確認した。それを受けて、圭は何やらリストを取り出してペラペラめくり、あるところで止めてから言った。

「……総利益で十万円くらい。」

その言葉でクラス全体が沸き上がったけど、続く言葉で静かになった。

「…材料費などを引くと、七万くらい。これを、明日の材料費に上乘せすれば、今日のようなことにはならない。」

そう言つと、一人の男子生徒が手を挙げた。

「どうした？」

「明日からどうするんだ？正直、ここまでとは思わなかったんだが。」

その言葉に庄一は、唸っていた。

「ああそうだな。明日からの営業方針を考えないといけないんだな。何か意見は？」

庄一はそう言ってみんなから意見を求めたけど、誰も言わないで沈黙していた。

すると、今まで何も言わなかった藤木さんが、

「だったら、営業時間を学園祭が始まって少し経ってからにすれば？そうすれば、私もきつと活躍できそうだし。」

と言って、元の周りを回っていた。

その言葉で全員が納得し、庄一が「それで行くか？」とみんなに意見を求め全員が賛同したため、

「明日から藤木が言った通りに時間をずらす！スケジュールの調整は各自で行え！明日も多分忙しくなるぞ！気合い入れていこうぜ！」と、庄一がみんなに言った。すると、一人の女子生徒が庄一に訊いてきた。

「これからどうすればいいの？」

「終わったから自由だ！……と言いたいところだが、明日の食材の搬入時間について話し合いたいから、連。残ってくれ。それと、圭。お前もだ。」

女子生徒の質問に、庄一はそう答えた。僕だけ大変だなあ。

庄一の言葉を皮切りに、みんなは思い思いの場所へ向かって行っただけだ。僕と庄一と圭、それと、なぜか藤木さんと元たちが残っていた。どうしてだろうか？

僕と同じことが気になったのか、庄一が元に訊いた。

「お前らはどうしてここに？残る意味は無いだろ？」

それに対して元が答えようとしたら、代わりにレイジニアさんが答えた。

「確かに意味は無いけど、気になることがあるのよ。だから残ってるわけよ。」

その答えに「ふん。」と庄一は相づちをして、僕と圭に向けてこう言ってきた。

「連。明日の食材搬入は？圭。材料費の方だが、このままで大丈夫か？」

「うん。明日の仕込みがいつもより遅くできるけど、今日と同じ時間で。」

「…問題はない。時間がずれるので、今日と同じ量でいける。」
そう僕達が言うと、

「ならこの話は一旦終わり！！俺達も他のクラス観に行こうぜ！」

と、庄一が張り切っていた。そんな感じで僕達三人は教室を出ようとしたら、董さんに止められた。

「待ってくれませんか？ちょっと訊きたいことがあるんです。連君に。」

「ん？連にか？」「……？」「訊きたいことって？」

董さんが言ったことに対して、僕達の反応はバラバラだった。庄一と圭はなんだか分かっていないようだった。僕はというと、なんとなく分かっていた。

「はい。あのですね……」

と、董さんが訊こうとしたら、

「どうしてレンの両親は、カノンの居場所を調べられたのかしら？私達でも判らなかったのに。」

レイジニアさんが、董さんの言葉を奪うように訊いてきた。

僕はそれに対して何と答えようか悩んでいたら、久実さんがこう言ってきた。

「貴方の両親に訊いても『息子の頼みに応えた、しがないサラリーマンとOLだよ。』と言って帰っていつちゃったのよ。」

それを聴いて僕は、それで正しいんだけどなあ、と思った。なので、「普通のサラリーマンと普通のOLだよ。確か、宮野商事で二人とも働いてるよ。」

と、正直に言ったんだけど、庄一と圭以外は信じてくれなかった。

「本当に？」

「本当だって。」

レイジニアさんが確かめてくるので、僕は頷いた。すると、藤木さんがどこからか取り出してきたパソコンを眺めていた。そして、

「あ、本当だ。池田君の両親、本当に宮野商事で働いてる。しかも、この人達が商談に出ると成功率が百パーセント！どうしてこんなことが可能なんだろう？気になる。それに、池田君の家事スキルの高さも気になる。フツ。このクラスの人達は不思議がいっぱいだな。エヘヘ。」

と言っていた。

彼女はどこからその情報を持ってきたんだろう？

僕はその時そう思った。

そして、その情報を聴いた元たちは、ますます疑惑の目を向けてきた。

「本当に普通のサラリーマンなんですか？」

「商談成功率百パーセントって、人間業じゃないでしょ？」

「すごいね。」

「本当に一般人なのよね？」

正確には、元以外の女子が疑惑の目を向けてきた。失敬な。僕達の家族は確かに一般とは言い難いだろうけど、普通の人となんら変わりはないからね。

そう言いたかったけど、僕は代わりにこう言った。

「家ではだらしがないんだよ。」

そう言ったら、董さんは納得したようだ。

十月下旬〜十一月中旬(7)

まあ、家に泊まったからなんだけどね。それを見た久実さんがこう言った。

「そういえば、董は連の家に行ったことがあるんだっけ？」

「そうですね。まあ、正確に言うなら家に泊まったのですけどね。」
その言葉で皆が固まった。同時に、僕と元は冷や汗が流れた。この汗はなんだろうね？

と、ここで更に董さんは、僕にとって爆弾のような言葉を紡ぎだした。

「凄かったですよ。連君のご両親は。私の事を案内してくれたのに、食事が冷めると言われただけで私の事を置いてくのですから。でもそれまでの間の会話は楽しかったですよ。連君の話題ばかりでしたけど、楽しかったです。」

もう、駄目だ、ね……………。

「さらばだあ！！」「じゃー！！」「きゃっ！！」

「逃がすかあ！！」「…詳しく訊かせる！」「待ちなさい！」「詳しく話さないよ！」「面白そ〜。私も混ざる〜。」

僕と元は、董さんを引っ張って全速力で逃げだした。それを、残りの人たちが追ってきた。

ていうか僕、一人だけ休憩が無かったですけどね？でも、いつもくらいしか疲れが残ってないから、大丈夫だろうね。

そう自分に言い聞かせて、元と一緒に逃げていった。

「どうしようか！？」

「とりあえず人混みに紛れよう！」

「あ、あの。そんなに引っ張られると痛いのですけど。」
逃げながら、僕達はこれからについて話し合い、方針が決まったのでそれに従った。

結局、僕達三人があこの五人から逃げられるわけなく(ていうか僕

が真っ先に捕まった)。捕まった僕達三人は、四人に囲まれて尋問を受けていた。

「どういうことだ？連。」

「…内容によつては逆バンジーをやらす。」

「ハジメ？どうして嘘をついていたのかしら？」

「董、体育祭に言っていたことの続きと行こうかしら？」

「」「」「」

こ、怖い……。教室に連行されて周りを囲まれるって、本当に怖い。

ずっと黙つたままの僕達に痺れを切らしたのか、庄一が藤木さんに訊いた。

「なあ藤木。自白剤とかないか？後遺症が残らない奴。」

対して藤木さんは、隅っこでパソコンをいじりながらこう答えた。「あるけど、持ってきてないよ。今あるのはこのパソコンだけ。」もしあつたら僕達に飲ます気だったな。

その時の庄一の落胆ぶりを見て、僕は確信した。友達にも容赦ないね、全く。

さて、自白剤を飲まされるのも嫌だし、正直に話しますか……の前に、確認だけしようかな。

「そこまで話を聴きたいの？」

「当たり前だ。」「…愚問。」「当然よ。」「どうして隠していたのか気になるからね。」

僕の質問に、みんなはそう答えた。その答えに、僕は観念した。

「分かったよ。何があつたのか話すから。」

そう言つて、僕はあの時の事を正直に全部話した。ところどころ、董さんと元が話に混ざりながら。

話が終わつて。

「董の料理の味が急においしくなったのって、連のおかげだったのね。」

「董さんにそんな弱点があったのか……」

「…よく生きていたな、元。」

「よく言ったわ、レン。」

皆がそれぞれ思ったことを言った。褒められるのは嬉しいけど、なんだらう、嫌な予感。

そう思っていたら、庄一と圭が僕の両肩をつかみながらこう言うてきた。

「さてと、」

「…覚悟はいいか？」

「あのね？家に帰ったら帰ったらで僕がきついんだよ？今そんなことしたら、家事が全部滞っちゃうよ？明日学校に来れなくなるよ？」
そう言うてるのにもかかわらず、

「行こうぜ、連。」

「…行こうか。」

二人はやる気満々だった。そして、僕を連れていこうとしたら、先生が来た。

「どうかしたんですか？」

「池田。ちよつと来てもらいたいんだ。悪いが、借りてくぞ。」

と、僕の意味に関係なく、先生は僕の事を連れていった。

残された人達は、

「どうしてあいつが？」

「…さあ？」

「なにかしたのかしら？」

「もしかして、今日のうちのクラスの繁盛ぶりについての話じゃありませんか？」

「そしたら、責任者であるシヨウイチが呼ばれるんじゃないかしら？」

「そうだよな。」

と話し合っていた。その会話を聴いていたのか知らないが、藤木がポツリと呟いた。

「…明日の営業に影響があるかもしれないよ。池田君抜きになるかもしれない。」

その言葉を聞いた圭が、庄一に訊いた。

「……庄一。そうなったら、どうする？」

「そうなったらって？」

「……連抜きになった場合。」

その言葉で、この場にいた藤木以外の人が動けなくなった。

「ありえなくはないな。あいつの料理の腕は中学生とは思えないし、反則だと言われれば反論できない。話の内容次第では、明日の営業方針を考え直さないといけない。」

そう庄一が言うと、他の人達は何も言わなくなった。

そして、連が教室に戻って来た時に、庄一たちが詰め寄ってきた。

「ど、どうしたの!？」

僕は、先生に『迷子になつていたのでから名前を訊いたら、お前の両親だったんでな。引き取ってもらいたかったんだ。』と言われて、両親を校門前まで送つていっただけなんだけど、なんだかみんな険しい。どうかしたのだろうか？

そしたら、庄一が訊いてきた。

「先生がお前を呼んだ用つてなんだ？」

隠しても意味はないので、正直に答えた。

「両親を引き取りに行つたんだよ。」

『は？』

僕の答えに、隅っこにいた藤木さんまでもがポカンとしていた。

「お前の参加制限じゃなくてか？」

「どうしてそんなことになったのか知らないけど、単純に迷子になつて職員室へ行った両親を校門まで送つていっただけなんだけど。あ。でもそんな話が拳がつかみただけど、生徒を一人だけ制限するのはおかしい、という意見があったからそんな事は無いって言うてたよ。」

庄一が訊いてきたので、僕はありのまま話したら、一斉に溜息をつ

かれた。僕のせいじゃないんだけど。
そんなことをしていたら初日が終わってしまった。僕、他のクラス
見てないんだけどなあ。

十月下旬～十一月中旬（7）（後書き）

最後の最後で締まらない、連の両親でした。それと、学園祭初日が終了。二日目の前に閑話でも入れるかもしれません。ご了承ください。

対談 アイドルツ！×考える人×普通の人が送る日常（前書き）

今回はちょっと趣向を変えてみました。

対談 アイドルツ！×考える人×普通の人が送る日常

「さて始まりました。第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじゃない？ラジオオ！！イエーイ！」

「なんなの一体？」「なんなんだ、これ？」「僕、どうしてここにいるの？」

「ゲストはこの方たち！『アイドルツ！』から、主人公八神つとむ！」

「おいこら。ちゃんと説明しろ。」

「次！」「無視かよ。」

「『考える人』から同じく主人公、風間大輝！」

「あ、どうも。」

「最後に、『普通の人を送る日常』からも主人公、池田連！」

「これはなんなの一体？」

「以上、この三人をゲストとしてお送りします！ちなみに、D」は私、末吉がやります！」

「いい加減説明しろ。」

ドカツ！バキツ！ドオオン！

しばらくお待ちください

「いたた………。これくらってよく生きてるね、あそこの人たち。」

「八神君、だっけ。今日はよろしくね。僕は連でいいよ。」

「だったら俺はつとむでいいぜ、連。」

「じゃ、僕は大輝でいいよ！」

「ふう。気を取り直して。じゃ、早速いってみよう！」

「説明しろ。」ドゲシツ！「グフォツ！」

「しばらくお待ちください」

「……というわけ。分かった？」

「なるほど。つまり、」

「単純に思いつきで書きたかったやつなんだね？」

「……ハイ。」

「……ハイ……」

「なあ末吉。さっきから大輝がしゃべらねえんだが、大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫。単純に考えてるだけだから。」

「それはそれでどうかと思うけど……」

「さあ本当に気を取り直していつてみよう！最初のコーナーは……ズバリ！インタビューコーナーだ！」

「単純に質問が送られていないだけだろ。」

「末吉さん自体、ただの思い付きでこれ書いてるんだからさ。質問コーナーがないのは当たり前だよ。」

「大人だな、連。末吉。お前も見習え。」

「できたらいいですね……」

「遠い目をするな。」

「なるほど！つまりこういうことだったのか！」

「何を考えてたんだろうな、大輝は。」

「知りませんよ。」

「作者だろうが。」

「作者が何でも知ってると思うな！」

「逆ギレするな！」

「ストップ二人とも！今はそんなことしてる場合じゃないでしょ！話を進めなきゃ！」

「連君。君は本当にすごいね。」「そうだな。」「や、やばい。ちよつと涙が……。」「」

〜作者が泣き出したため、一時中断します〜

「さあ！いつてみよう！」

「切り替え早えな。」「タフだね。」「どうしてだろう？……………」

「はっ！」

「さて、記念すべき第一回の上に最初の質問！まずは……………」

好きな食べ物は？」

「ベタ感マックスじゃねえか。」

「うるさいな。で？どうなの？好きな食べ物あるの？」

「誰から訊くんだよ？」

「そうだな〜。ここはあんまり話さない大輝からいつてみよう！」

「え？僕は……………ハンバーグに、牡蠣に、ケーキに……………」

〜十分後〜

「……………ドリアに、カルボナーラに、キャビアくらいかな？」

「おい末吉。知ってたか？」

「え？知らなかったけど？」

「キャビアって、高級食材で世界三大珍味だよな？」

「うん。両親が送ってきてくれた時があったんだよ。あれはよかったなあ。」

「……………この庶民の敵が！！」「……………」

「えええ！どうしてみんな一斉に言うの！？」

「ゴホン。じゃ、次はつとむだ！はい、好きな食べ物は！？」

「俺か。俺はそうだな……………あえて挙げるなら、マスターの賄飯か？」

「マスターって、誰？」

「つとむのバイト先の店長だよ。結構ちゃっかりしてるところあるよね。」

「そうだな。あの野郎、俺が非番の時に来ると割引なしで会計するんだぜ？ちゃっかりしてるだろ？」

「へえ〜。でもそれって、その時の契約内容になればやる必要はないんじゃない？」

「まじでかつ！・・・いつきに紹介してもらったバイトだからな。契約内容は詳しくは知らないんだ。」

「そりゃまた。」

「いい人だね。」

「けどな、それ以上に俺が大変な目に遭っているんだぜ？例えばよ、雪山に何の準備もなしに遭難させられたし、どこか知らない山奥に放置させられて一週間で脱出しろとか・・・」

「これからしばらくはつとむのトラウマ話がされています」

「・・・ほかにもあるぞ？」

「もういいよ！お願いだからやめて！」

「そうそう！話がだいぶずれてきちゃったじゃない！ほら末吉さん！進めて進めて！」

「分かったよ！では次は連！好きな食べ物は何？」

「僕の好きな食べ物はカレー！」

「定番だね、連は。」

「普通すぎるね。」

「放っておいてよ！」

「末吉。その辺にしとけ。連がうずくまっちゃった。」

「ごめんね、連。悪気はなかったんだ。」

「いいんだよ、末吉さん。僕はどうせ普通なんだから・・・」

「ああ！連がなんだかねガティブに！」

「どうにかしろよ。作者なんだから。」

「分かったよ。」

「連が戻るまでしばらくお待ちください」

「よっしゃ！これで「はやくしろ。次だ、次。」わかったよ……
……では次！三人の共通点は？」

「「家事ができる。」」

「ですよね。」

「ていうか、お前自体は料理そんなにできないだろ？」

「完全に願望だよな。」

「人ってどうしてそんなことするんだろ？」

「うるさい！別にいいじゃないか、高望みしても！」

「気を取り直して。次行け、次。」

「うわひどっ！」

「作者が立ち直るまでしばらくお待ちください」

「さあ、次行こうか……」

「大丈夫？末吉さん？」

「最初っから飛ばしすぎだ。疲れるだけだろ。」

「もうやけっぱちじゃなかった？」

「問題ない！行くよ！質問！一番面倒だと思ってることは！？」

「学校生活。」「両親の世話。」「学校生活。」

「わゝお。話的にはアウトの答えいただきましたー！連を除いて。」

「ん？今何か言わなかったか？」

「別に」。さて、理由は何となく想像できるから置いて。次！

「連以外は高校生んだけど、そこんとこどう思ってる？」

「別に？俺は、中学生だろうが高校生だろうが大変なことばかり関わっているからな。どうとも思っていないぜ。」

「僕は中学生のほぅがいいなあ。そっちのほぅが楽しく遊べたから。」

「僕は……どうなんだろう？先のことを考えてないから」

なあ。」

「そうなのか？」

「うん。」

「じゃ、最後！将来の夢は？」

「平穏な暮らしがしたい。」「サラリーマンになる。」「世界を放浪したい。」

「切実な答えが一人、まじめな答えが一人？そして、ただの願望が一人？」

「誰だか見当はついたが、それはないんじゃないか？」

「ま、いつか。次のコーナー行ってみよう！」

「これで終わりじゃないのかよ！？」

「次のコーナーは……『苦労話を分かち合おう！』です！」

「タイトルだけで内容がわかるな。」

「もうちょっとひねったら？」

「そんなことはどうでもいいから！ささ、張り切って話してみよう！」

「じゃ、誰にする？」

「末吉さんからいいじゃない？僕たちを作る時の苦労話をしてみてよ。」

「私？そうだね……まあ、苦労というわけではないけど、思いついたら忘れないうちに書き留めようとするでしょ？それをそのまま書いてたら、いつの間にか止まらなくなってるね。他の作品のやつを考えるのと並行してやることが、苦労してるところかなあ。」

「そうか。だったら俺のところさっさと進める。」

「僕のところもね。」

「分かってるよ。じゃ、次は……大輝！」

「僕！？うん、僕は……昔のことなんだけどね。」

「ふむふむ。」

「昔、両親が僕を置いて海外に出て行ったところかな。その時は波風の家に世話になっていただけだね。そのころの僕、まだ小さかったからさ、色々と覚えるのに苦労したよ。」

「子供って、普通は連れて行くものじゃねえのか？」

「なんでも、波風が僕と別れるのが嫌だったらしく、それだったらということ、僕を置いて行ったみたいだよ。」

「すごいね、大輝の両親は。」

「じゃ、次はつとむだ！」

「俺か。そうだな……。ああ、あつたぜ。確か、小学生のころだな。いつきの付き添いで言えば聞こえはいいが、実際は俺のことを強引に連れて行ったわけだ。」

「大変だね。」

「それで俺は誰の誕生日だったかしらないで、パーティに連れて行かれた。しかも、俺だけ私服だぜ？どう考えても目立つわ、なにやら子供はいるけど誰もかれもがドレスやら着てるわで場違いだとすぐにわかったんだ。だから俺はいつきに、家に帰せと言ったら『いいじゃん。別に。』と言われて一蹴された。」

「可哀想だね。」

「それで仕方なく外を眺めてたら、変に金持ち思考のお坊ちゃんが俺のところに来てよ、俺のこと散々変なこと言うんだぜ？俺は気にしなかったけど。ま、その反応に怒ったのか俺のことを殴ろうとしたんだろうな。」

「そういうのって、たいてい男だよね。」「そうそう。」

「そしていざ殴りかかろうとしたら、どうやら主催したやつが来たらしくよ。殴るに殴れずそのままそのまますいつのほうに行ったんだ。あの時我慢するのが苦労したなあ。」

「それでどうなったの？」

「うん。そこらへんは思い出せないな。」

「ま、そんなことはどうでもいいさ！次次！」

「じゃ、僕だね。僕は一杯あるよ。例えば……………」

三十分後。

「末吉。てめえ、連に苦労しかさせてねえのか？」

「もつやめさせようよ。連が変な空気まとい始めたから。」

「そ、そうだね……………つとむ！任せたよ！」

「はあ！？」

「殴れば何とかなるから！」

「……………分かったよ。連、元に戻れ。」

ドカッ！

「……………いてっ！……………あ。ごめんごめん。」

「さて、次は何するんだ？」

「えつとね……………大変言いにくいんだけど、終了の時間が近づいてるんだよ。だから、今回はこれまで！」

「……………はあ！？」

「まだ二つしかやってねえぞ！」「そうだよ！」「どうしてさ！」

「色々あったじゃない！色々と！そのせいで時間が足りなくなっ
たんだよ！」

「馬鹿じゃねえか！」

「二回目をやるかどうかは気分次第！あとは、質問が来ればやるか
もしれない！以上！第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじゃない
ね？ラジオでしたー！」

「勝手にしめるんじゃないか！！」

「これから一緒に買い物行かない？近くに安いところあるんだよ。」

「本当！？ちよつと部屋が綺麗すぎて何かほしいなあと思っていた
ところなんだよ！」

「……………俺も行っていいか？」

「いいよ！」「うん！」

「D」は私、末吉！ゲストは池田連！八神つとむ！風間大輝でした
！アディオス！」

対談 アイドルツ！×考える人×普通の人が送る日常（後書き）

これで質問が来れば願ったりかなったりです。

閑話 とある休日 黒曜甚平編（前書き）

ちよつとサブキャラに焦点を当ててみました。

閑話 とある休日 黒曜甚平編

みなさん、お久し振りです。覚えていますか？黒曜甚平です。今回はわたくしの休日を紹介いたしましょう。

わたくしは、毎朝六時には起きます。わたくしは一人暮らしなので、家は一戸建てです。あ、デントツ内にあります。

起きたあとは、朝食を作り、新聞を取りに行き、新聞を読みながら朝食を食べます。これは習慣となっているのですよ。

食べ終わった後は食器を片づけ、パソコンを起動させます。昔はこの家にも家族がいたのですが、今はいません。理由は秘密ということ。

パソコンが起動したあと、メールをチェックします。圭君に送ったメールに対しての、返信があるかどうかの確認です。

この日はなかったのですが、かわりに変なメールが届いていました。

『どうも、柊です。久しぶりに会えませんか？ちょうどデントツに私用で来ていますので。』

わたくしはこれを見て、どうしようか悩みました。今日は休みの日なので特に問題はないのですが、相手が柊だということが問題だったからです。

柊宙。わたくしから見れば駆け出しの情報屋なのですが、言葉巧みに相手の情報を探るといふ業界の取り決めのグレーゾーンを、何のためらいもなくやってのけるといふある意味異端な人物だからです。

しかし、わたくしは会うことにしました。どうせ相手側のほうが遅刻するのだろうと思いつながら。

「すみません、黒曜さん。僕のメールに答えてくださって。」

「そう思っているのなら、遅刻はしないほうがいいぞ。柊。圭君と会ったときだつて遅刻したんだろ？」

「ははは。やっぱり隠し事はできませんか。」

「で、何の用なんだ？」

私がそう訊くと、柊は「場所を変えましょう。」と行って移動した。で、場所を変えた先がなんと海だった。確かにこの季節なら人はいないだろうが……。

柊の真意を量り損ねていると、移動させた本人はこう言った。

「黒曜さん。最近、圭の友達のこと調べているんじゃないですか？」

「……それがどうしたんだ？」

「僕に実害がないからいいんですけどね。それはほどほどにしたほうがいいですよ。」

「?どうしてだ？」

私がそう訊くと、柊はためらいながらこう言った。

「そうですね……。確かめていないのですが、ある情報を耳にしたんですよ。」

「情報だと？」

私も常に網を張っているが、柊が確証のない情報を私に話すということは、おそらく私が知らない情報なのだろうと推測し、耳を傾けた。

「実はですね……圭の学校でもう学園祭が始まっているのですよ!」

「ああ!無言で帰らないでください!ちょっとした冗談じゃないですか!」

「で？」

これ以上無駄な話をしたら今度こそ帰るぞオーラを辺りに出しながら、私は先を促した。

柊はそんなオーラを感じ取ったのか、真剣な顔になってこう言った。

「私も偶然聞いた話なんですけどね。圭のクラスメイトに、中島元つて、生徒がいるじゃないですか。」

「ああ、そうだな。そのこがどうしたんだ？」

「その子の能力についての新情報があるんですよ。裏はとれていませんがね。」

「!？」

私は驚いた。圭が私たちに「中島元の情報をくれ。」という頼みをしてから三年が経とうとしている。その間一切進展がなかったからだ。

「……それは、圭君は知っているのか？」

「いえ、知ったのはデントツに来る間です。仕事で行った場所の人たちの話を聞いていたらそんな情報があったんですよ。」

「それを私に話してどうするんだ？」

「あなたから圭に話してください。私は仕事で忙しいので。」

そう言つて、柊は私にその情報を教えてくれた。

その情報とは、『中島元の能力は昔にも存在した。』ということである。それが意味することは私には少ししかわからないが、圭にとっては有益な情報となるだろうと思つた。

「柊。ありがとう。」

「いえいえ。これからは遅刻しないように気を付けますよ、黒曜さん。」

私がお礼を言うと、柊はそういつて砂浜を歩いていき、しばらくして消えてしまった。

それを見届けた後、私は柊の情報が本当かどうか確かめるべく、家に帰つた。

閑話 とある休日 黒曜甚平編（後書き）

これは……ネタバレになりますかね？

十月下旬～十一月中旬)8(前書き)

二日目です。結構短いです。

十月下旬〜十一月中旬(8)

二日目。

言わずもがな、時間をずらしたのにもかかわらず、繁盛ぶりは変わらないというか昨日より賑わっていた。元の両親が、息子の女装姿を見て写真を撮っていた。可哀相に。

藤木さんは、今日は何事もなく教室にいたり宣伝に行ったりした。そして、僕の両親が来た。なぜか、見るからに偉そうな人を連れて来て。

あ、僕は調理係をやっています。休憩なし。いまどきどんな労働条件だよ。

「池田君、どうしてこんな所を商談場所へ指定したんだ？」

その見るからに偉そうな人は、席に座ってから両親に訊いた。

ストップ！なんだかすごい言葉が聴こえた！本当に！？

対して、両親はいつもと変わらぬ口調でこう言った。

「別にどこでやっても良いと思いますよ？家の中でも出来ますし。

肝心なのは参加している人だけだと思いますよ？」

「なるほど。君たちはあくまでここでやりたいわけか。まあいいだろう。」

「アザーツス。」「ありがとう。」

なんだろう。この竹を割った感じのフランクリーさは。

ちなみに、今このクラスにはまだたくさんのお客さんがいます。

そのうちの一つのテーブルに両親たちが座っているの、周りが静かになっていた。こっちはいつも通りにやっていますけどね。

面倒なので簡略するけど、このあと僕がつくった料理を偉そうな人が食べ、感動というより顔が完全にニヤけて、すぐさま商談が成立した。そして、両親が「連によるしくっ！」って言って連れてきた人と一緒に帰っていった。あとで董さんから聞いた話によると、あの人は結構な偏屈社長で、あそこまで商談があっさり決まる事は

無いんだって。改めて両親の凄さが分かったよ。

それから、学園祭の終了時間まで人が途切れることは無かった。皆が帰って、僕と藤木さんだけになって。

「池田君、大丈夫？」

「あ、藤木さん？まあ何とか……。」

「明日も頑張ろうね。」

「うん。」

そう言った時に、藤木さんの顔が一瞬だけ切ない表情を出していた。けどそれも一瞬の事で、「じゃ、帰るね。」

と言って藤木さんも帰っていった。僕も帰った。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その2 (前書き)

閑話 本編 閑話という順で今回はお送りしたいと思います。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その2

その情報を調べていくうちに、わたくしは別な情報を知りました。中島元が狙われていること、そいつらの目的がその子の能力だということ。そして、そいつらも中島元の能力が、昔存在していたことを知っているということ。

わたくしはこれを今すぐ圭に報告するべきか悩みましたが、証拠を固めていったほうがいいと思い、報告するのをやめました。それで、証拠を固めにまずは柊がその情報を聞いたという場所へ向かいました。

場所は本当にデンタツの近くにある集落だった。そこを訪れた時、入り口近くから人が出てきた。

「だれだ？」

「誰だ、とは私のほうが訊きたいのだがな。君は？」

「私はこの集落の番人だ。ここに何しに来た？」

「『魔法でも超能力でもない能力』。」

私がそう言うと、自らを門番と名乗ったやつはピクツ、と反応した。

「それを調べに来たのか？」

「ああ。」

私が頷くと、そいつは悩んだ後、「そこから動くなよ。」と言って集落へ入ってしまった。

「動くな、か……。」

そう呟きながら、私は言われた通り動かなかった。

自称門番が戻ってきたとき、私の顔を見て驚いた。

「本当に動いていなかったのか？」

「君が言ったのだらう。」

そう私が返すと、そいつは驚いた様子だった。

驚きから戻ってきた後、そいつはこう言った。

「長老から許しが出了。はいれ。」

あまりにも簡潔だったが、特に反対する理由がないのでおとなしく従い、集落へ入った。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その3

私は集落の中をしばらく歩きまわったが、人があまりいないことが気がかりだった。しかし、人の気配はした。

「ということはどこかに隠れているのだろうかと思っていたら、

「君か。『あの力』を調べに来たのは。」

という声とともに、私の目の前に数人現れた。

突然のことに驚きながらも、私は頷いた。それを見た現れた数人の中の一人がこう言ってきた。

「ふむ。あなたは『あの力』について調べに来たのですね、本当に。」

「

「さつきから『あの力』といっているが、一体なんだ、それは？」

そう私が訊くと、

「分からないのじゃ。」

真ん中の人がそう答えた。どうやら、長老だろう。

「分からない、とは？」

「言葉通りじゃ。分かることと言えば、その力を持つ者はどうやら『ある意思』から選ばれているらしいとしか言えんのじゃ。」

「ではなぜ選ばれるということがわかるんだ？」

「それは代々受け継がれている、わが書庫にあった本に書かれていますから。」

なぜあるのか、という疑問が出てきたが、何も言わなかった。そのかわり、

「その本を見せてくれないか？」

と言ったら、

「それは無理じゃ。それを許可していいのは、『あの力』に関わりつつも、悪用しようとする者のみじゃ。ただし、本人以外とする。」

と返ってきた。

なるほど。私はそのかわりが薄いと見破られていたのか。それ
だったら仕方がないと思いつつ、私は長老たちにお礼を言い、集落
を出た。

「なんだ、教えてもらえなかったのか。」

「ああ。どうやら、事情があるみたいだ。」

「じゃあな。」

「ああ。」

最後に門番に挨拶をして、私は家に帰ることにした。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その3 (後書き)

あの力の謎はいまだ解明されず……………。

十月下旬～十一月中旬(9)(前書き)

昨日は諸事情があって更新できませんでした。

十月下旬〜十一月中旬(9)

三日目。

評判が評判を呼んだのか、売り上げが止まることを知らなかった。それに比例して、忙しかった。慣れてるけどね、僕は。

そして、正午ごろに僕の姉が来た。

「いらっしやいませ！何名様ですか？」

いつものように、というか一番近かった元がお客さんを迎えていた。その時に、

「四名だ。あんた、男なのに似合ってるね、その恰好。」

と言って、連れの人と一緒に空いてる席へ行ってしまった。

「へ？」

元は、女装したと一発ではれたことに驚いていた。その声を聴いて、僕はその人が誰だか分かってしまった。他のウェイターに任せられないと思ったのか、庄一がその席にメニューを置きに行った。

「こちらがメニューになります。どうぞ、ごゆっくり。」

「ん？あんたは連の友達か。どうだ？あいつは上手くやってるか？」

「そつちがそうなら別にいいよな。ああ、やってるぜ。あいつのおかげで繁盛してるようなものだ。」

「それ以外にもあるんでしょ？・・・ま、いいや。決まったら呼ぶから。」

「こつちも暇じゃないからそれで構わない。」

と言って、庄一はその場を離れた瞬間、

「ああ。決まったわ。」

と言って料理の名前を挙げていき、庄一が慌てて書き留めていった。姉さん達の料理が出来たので僕はウェイターに渡そうとしたら、「連に運ばせる。」と庄一が言ってきた。仕方がないので、僕はまた運ぶことにした。

「お待たせしました。それでは。」

と言って仕事に戻ろうとしたら、

「やっぱり美味そうだなあ、連。なあ、今大丈夫か？」

姉さんがそう言ってきた。姉さん達と一緒に座ってる人は、僕が知らない人ばかりだった。多分、テレビ（主にドラマ）を見ないからなんだけど。

だって、現に周りの人たちが「あの人って、凧さんに似てない？」

「その周りにいるのって新しくやるドラマの出演者に似てない？」
って言ってるから。

「姉さん。今悪いけど手が離せないんだ。帰ってからでいい？」

「うーん。だったら、終わったらで。」

「僕ずつとここ。四時くらいにならないと終わらない。」

「それなら家で話すわ。」

これで会話終了。これで僕は自分の仕事に戻った。

姉さんの事は料理をつくってる間に訊かれたけど何とかはぐらかした。

藤木さんは、今日も無事で活躍していた。良かった。

三日目が終了し、今回も僕と藤木さんが残っていた。また昨日と同じですか。参ったね。

帰りの支度をしながら、そっぴや姉さんって何の用があったんだろっ？と思っていたら、藤木さんが話しかけてきた。

「昨日も私達一緒だったね。」

「そうだね。」

帰りの支度をしながら、今の体の調子を確認しながら、僕はそう言った。

「これって偶然かな？波長が合っているのかな？」

ぴょんぴょんと、僕の周りを跳ねている藤木さん。それを苦笑しながら、

「偶然だと思っよ。藤木さんは文化祭の前はいつも早かったでしょ？」

と僕は言った。すると、藤木さんは照れた感じでこう言った。

「え？見てたの？あははは。よく見てるね、池田君は。」

「僕だけじゃないよ。」

「え？」

僕の言った言葉に、藤木さんはちよつと驚いていた。人に見られてないと思っていたの？君は。

「多分だけど、元たちも見てたよ。藤木さんが一人でさつさと帰るところ。だって仲良くしようとしていたもん。元たちが一番ね。」

そう僕が言つと、藤木さんは「そっかあ……。」と言つた後、

「あのね、池田君に聴いて欲しいことがあるんだ。」

と言つてきた。その表情は、どこか淋しそうなものだった。

「どうぞ。」

それを気付いた僕は、気付かなかったふりをして話を進めるのを促した。

「私ね、本当は元の事を調べるためにこの学校に来たんだ。でもね、元の事を調べていくにつれて、元の事を段々考えるようになってきたんだよ。」

「それって恋だよな？」

「はう！池田君に断定されちゃった！」

そう言つた藤木さんの顔は、真つ赤だった。可愛いなあ、全く。

「でもね」

さつきまで真つ赤だったのが嘘のように、再び表情が元に戻つて話が進んだ。

「でもね、学園祭が始まった時にこう言われたの。『中島元を連れていく。』って。その時から私はどうしようか悩んだ。でも、断つたら私が危なくなる。そして、考え出した答えが……元を守る。つまり、抵抗するつてことにしたの。」

これで話が終わったみたいだった。僕はというと、今までの流れを整理している傍らで思ったことを口に出していた。

「どうして僕に？」

それに対して、藤木さんはにっこりと笑ってこう言った。

「へへっ。誰でも良かったんだけど、最近池田君が最後まで残ってるから。」

その答えに納得する傍ら、僕は一つ訊きたいことがあった。

「藤木さん。訊いても良い？」

「なに？」

「いつなの？」

その質問に対して、

「あの人たちが行動を開始するのが、学園祭最終日の終わり。だから、私は自分の持てる力で抵抗するの。」

と答えてくれた。僕は、「ありがとう。そしてまた明日。」と言って藤木さんが教室を出て行くまで待って、家に帰った。

十月下旬～十一月中旬(9)(後書き)

閑話か、本編か。
とても悩みます。
質問待っています。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その4 (前書き)

思いつきとは恐ろしいですね……………。

閑話 とある休日 黒曜甚平編その4

私は集落の中をしばらく歩きまわったが、人があまりいないことが気がかりだった。しかし、人の気配はした。

「ということはどこかに隠れているのだろうかと思っていたら、

「君か。『あの力』を調べに来たのは。」

という声とともに、私の目の前に数人現れた。

突然のことに驚きながらも、私は頷いた。それを見た現れた数人の中の一人がこう言ってきた。

「ふむ。あなたは『あの力』について調べに来たのですね、本当に。」

「

「さつきから『あの力』といっているが、一体なんだ、それは？」

そう私が訊くと、

「分からぬのじゃ。」

真ん中の人がそう答えた。どうやら、長老だろう。

「分からない、とは？」

「言葉通りじゃ。分かることと言えば、その力を持つ者はどうやら『ある意思』から選ばれているらしいとしか言えんのじゃ。」

「ではなぜ選ばれるということがわかるんだ？」

「それは代々受け継がれている、わが書庫にあった本に書かれていますから。」

なぜあるのか、という疑問が出てきたが、何も言わなかった。そのかわり、

「その本を見せてくれないか？」

と言ったら、

「それは無理じゃ。それを許可していいのは、『あの力』に関わりつつも、悪用しようとする者のみじゃ。ただし、本人以外とする。」

「

と返ってきた。

なるほど。私はそのかわりが薄いと見破られていたのか。それだったら仕方がないと思いつつ、私は長老たちにお礼を言い、集落を出た。

「なんだ、教えてもらえなかったのか。」

「ああ。どうやら、事情があるみたいだ。」

「じゃあな。」

「ああ。」

最後に門番に挨拶をして、私は家に帰ることにした。

家に帰ったわたくしは、パソコンを起動させてとあるサイトを見た。そのサイトは、私たち情報屋が普段交流の場として使っているサイトである。

わたくしはパスワードと会員番号を入力して、そのサイトを閲覧した。

この通り、セキュリティを解除していかねばいけませんので大変面倒なのですが、これくらいやらないと誰でも閲覧出来てしまうのです。

わたくしとしては、これ以上にセキュリティを強化しても問題ないと思いますが。

話を戻しましょう。

わたくしはサイトの報告欄をみながら、ふとこんなことを考えました。

ひよつとすると、わたくしたち情報屋でも知ることができない、

『何か』があるのではないかと。

そしてそれは、とんでもない情報なのではないかということ。

十月下旬～十一月中旬)10(前書き)

今回、新キャラ登場です！

十月下旬～十一月中旬(10)

家に帰って僕を待っていたのは、いつもと変わらぬテンションの両親と、それを眺めながら夕飯をつくっている姉さんと、昼に僕達のクラスに来ていた人だった。

僕は二階に上がって着替え、リビングへ降りた。そしたら、夕飯が並べられていた。

「よっ。おかえり。」「おかえり。」「お帰りなさい。」
僕を見た時、一斉にそう言ってきた。ん？一人多いよ？

「姉さん、誰なの？この人。」

僕は、僕のクラスに来ていた人が誰なのか最初に訊いた。そしたら、その人本人が自己紹介してくれた。

「初めまして。私の名前はレミリア。レミリア・ジャンヌって言います。年はあなたと同じ年です。」

と言って、着ていたドレスの端をつまんでどこかの社交界なんかで観る挨拶をしてくれた。様になってるね。

改めてレミリアさんを見ると、美人だった。髪はレイジニアさんみたいな金髪だけど、目の色が緑色をしていた。それらを含めて、顔立ちは凜としていた。

「おい連。レミリア見てないでさっさと食べる。」

どうやらマジマジと見ていたようだ。レミリアさんはちょっとだけ顔を赤らめていた。

それを見た僕はちょっと気まづくなったので、おとなしく姉さんに従うことにした。

それで夕飯を食べていたら、姉さんがこう言ってきた。

「連。あの時、私が話したいことがあるって言ったよな。」

「そうだね。」

僕は姉さんがつくった料理を食べながら頷いた。両親は、ビールを片手に料理を食べていて、レミリアさんはそれを見ながら食べてい

た。あれ？これって新鮮だ。

「なに感動してるか知らないけど、話つてのはレミリアの事よ。」

「え？なに？しばらく泊まらせるって？」

「お前の推理力と観察力は親譲りだな。話がはやくて助かるが。」

「姉さんのその演技力も親譲りだと思っただけだ。」

「そんなことはどうでもいいんだ。ここにしばらく泊まらせる理由だが、今度やるドラマの撮影がこの近くだったからな。それでだ、レミリアは本来ならホテルに泊まるはずだったが、何を思ったのか私の実家に泊まりたいと言い出してな。なし崩し的にこうなったわけだ。ま、撮影は一ヶ月くらいかかるから、それくらいなら大丈夫でしょ？」

うん。もう決定事項になってるね。姉さんの言葉を聴きながら、僕はそう思った。

「父さん達は？」

「『賑やかになりそうだからいいよ。』って言ってたわ。私も出来る限りするから、いい？」

どうやら最終的な決定は僕に任されるようだ。……………ん？

「姉さんさつき、『一ヶ月くらいなら大丈夫でしょ？』って言っけなかつたっけ？」

「大丈夫でしょ？」

「それってもう決定してることにならない？」

「あ。そうね。」

今更のように気付く姉さん。わざとでしょ？

というわけで、

「レミリア。」

「なんですか？ 風さん。」

「しばらくはここで過ごして良いそうだ。」

「ありがとうございます。」

見事レミリアさんがここに居候することになりました。

僕は普通に過ごしてるだけなんだけどなあ。

ま、なるようになわっていいぞ。

閑話 とある休日

黒曜甚平編その5 (前書き)

今回も短いです。

わたくしが一通りサイトを巡回した後、時計を見たら午後三時でした。一人暮らしなので食事は簡単なのですが、今日は自分で作ったものを食べようと思いつき、買い物へ出かけました。

デントツで食材を買うところは色々あるが、私がおススメするところはやはり楔商店街だな。あそこは品がいいし、種類も豊富、それに値段が安いのもポイントだ。

こういうコメントをすると、歩き回っていたのか？という質問が出てくるだろうが、実は私はここ出身でね。このことなら結構詳しいのだ。

という自慢は置いて。

私は楔商店街で食材の買い物をしていった。たまに、この商店街の店で貴重な食材が売られていることがあるから、私はほぼ毎日ここにきている。

食材を買い終えた私は、家に帰って夕飯を作り始めた。

夕飯を作り終え、それを食べ終えた後、わたしは特にやることはなくテレビを見ていました。

そこで、ふと考えだしました。

圭君の友達は、みんな楽しく毎日を過ごしているんだな。とくに、池田連君。あの子はいつも楽しそうだな、と。

わたくしは、テレビを消して風呂に入り、風呂から上がったら寝ました。

その中で、わたくしと私は今日の出来事をそれぞれ話し合っていました。どうも、それぞれ貴重な体験をしたらしく、充実した休日となった。と互いに結論付けました。

閑話 とある休日

黒曜甚平編その5 (後書き)

次は誰の閑話を書きましょうか？

十月下旬～十一月中旬（11）（前書き）

二万PV突破しました！感想がほしいです。待っています！

十月下旬～十一月中旬（11）

学園祭最終日。

失速することを知らないのか、僕達の喫茶店は繁盛していた。多分、売り上げが過去最多だろう（学校内という意味）。

そして学園祭が終わって、僕達は教室にいて打ち上げをした。その時に、元たちと藤木さんがいなかったけど、みんなは気にしなかった。僕達も気にしなかった。

「いや、この学校で過去最高の売上だってよ！嬉しいぜ、全く！」
「…連のおかげ。」

「流石に、みんなのようにはしゃぐ気力はないよ。今は。」

「そっぴゃ、元たちは？」

「…藤木さんもない。」

その二人の質問に、僕はベランダから空を眺めながらこう言った。

「今頃、どこかの組織をつぶしてるんじゃない？」

「？」「…？」

僕が言った言葉に、二人は首を傾げたみたいだった。でも圭は調べるから、きつとすべてを知るだろうね。

空を眺めながら、僕はそう思った。

「ただいまあ。」

打ち上げが終わって家に帰ったら午後七時。靴が一人としてないの、家には誰もいないのだろう。

僕はとりあえず風呂を沸かした後に両親の夕飯だけ作り、本を読んで風呂が沸くのを待ち、風呂に入って自室へ戻り、明日の準備をして寝ることにした。洗濯とかは明日やろうと思いつつながら。

翌日。今日は片付けがあるので登校日。昨日はやく寝たせいか、今日は早く起きた。両親たちが帰ってきたのかを確認すると、僕は洗濯機を回しながら朝食をつくっていった。

朝食をつくり終えて、僕はちょっと一息入っていた。

朝食を一人で食べ、洗濯物を干していたらいつもの時間になったのか、両親が起きた。その後には姉さんとレミリアさんが起きた。

四人が食べている時、僕は二階へ行って制服に着替えていた。着替え終わった時、時間にまだ余裕があったので、僕はリビングで休憩することにした。

リビングに降りてのんびりしようとしたら、

「おい連。食器洗うの手伝って。」

いきなり姉さんの暴言を聴くこととなった。僕は反論しても無意味だと知っているので、何も言わずに手伝うことにした。レミリアさんも一応手伝ってたよ。

それが終わったので今度こそ休憩しようとしたら、

「なあ連！俺のワイシャツってどこだっけ？」「早くしなさい！」

両親（正確には父親）が困っていた。僕がいつもの場所に置いてあるよと言ったら、急いで行ったみたいだった。

やっと休憩できると思ってソファに座ったら、レミリアさんが隣に座った。

「あなた、毎日こんな生活をしているの？」

「まあね。ただ、今日はいつもより早く起きたし、昨日みんなの帰りを待たないで寝ちゃったから。」

と、僕はレミリアさんと話していた。そしたら、姉さんが口を挟んできた。

「お。レミリアから話しかけるなんて初めてじゃないか？ていうか、二人で会話してるところなんて見たことないわね。」

「！？」「そうだね。」

レミリアさんは驚いて、僕は冷静に姉さんと話していた。いや、驚いてるだけなのかな？顔を真っ赤にしている。そんなことを気にせず、僕は姉さんに訊いた。

「姉さん。今日は撮影あるの？」

「うん？一応あるけど、確か午後からだよね？」

「そうですね。それまでは自由時間です。」
そして、少し三人で話していたらいつも登校する時間になりそうだった
ので、僕は鞆を持って学校へ向かった。

十月下旬～十一月中旬（12）（前書き）

学園祭の話は関係なくなりました。

十月下旬〜十一月中旬（12）

「さあやるぞ！さっさと終わらせてさっさと帰ろう！」

「「「おおー！ー！ー！」」」

庄一の一言で、僕と圭と元以外の男子はみんなやる気を出していた。女子もやりますからね。

片付けの中で、僕は元と一緒にだったので話しながらやっていた。

「藤木さんもちゃんと戻ってこれたんだ。よかったよかった。」

「ありがとね、連。君の言葉で助けに行くことが出来たよ。」

「お礼なんていらないよ。僕は教えただけで、藤木さんを助けたのは元なんだから。」

「そうかもしれないけどね。あ。花音が最近、連の家庭を調べたいとか言い出していたんだけど……。」

「元の研究でもおとなしくして欲しいな。」

「それ、久実たちには言わないでよ。最近花音と僕と一緒にいると、ロリコンだとか言ってくるんだから。」

「ははは。大変だね。」

「まっただよ。」

そうこうしてるうちに、僕達の割り当てられた場所は終わった。他の所はもう少しで終わりそうだったので、僕達はまだ話すことにした。

「そう言えば、連。君、董のお母さんから何か言われなかった？」

「え？確か……。お礼がどうのこのこの、だった気がする。」

「今日か明日にでも来るんじゃないかな？董がそんなことを言っていたから。」

「家の掃除してないや。」

「あと、なぜだか僕の両親が『池田君を見習いなさい！』って言うてただけど、何か心当たりはある？」

「……………なにもないよ？」

「今どうして目を逸らしたの？しかも話を聴いてみたけど、連がだ
いぶ偉大な人に聴こえたんだけど。一人で家の事をすべてやるとか、
家庭内の実質的な大黒柱は連だとか、家計簿をつけているとか。そ
れって、本当？」

「それ位は普通だよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

あれ？元が黙っちゃった。どうしたんだろう？そう思っていたら、

「反抗したいとか思わなかったの？」

と訊かれた。反抗…反抗ねえ……………。

「ないよ。そんなことしたら今頃家が大変なことになってるよ。」

僕がそう言ったら、元が慰めるような眼で僕の事を見てこう言って
きた。

「これは一回花音に調べてもらった方がいいかもしれない気がする
ね。」

「冗談だよ？と言って僕が訊いた時には片付けが終わっていた。

終わったので、僕はいつものように帰ろうとしたら、庄一や圭、元
たち（藤木さん含む）までついてきた。大所帯だよ、困ったものだ。

ちなみに、庄一と圭は恒例の打ち上げ、元は「さっきの言葉が本
当か確かめたい」、久実さんと藤木さん、レイジニアさんは「どん
な家で生活をしているのか気になるから」、董さんは「お母さんが
家に来るかもしれないから」だっさ。僕の家って、特別なものが
なにも無いんだけどなあって…………あ。忘れてた。今、レミリアさん
と姉さんがいる。どうしよう。

十月下旬～十一月中旬（12）（後書き）

次回、ひそかな打ち上げは成功するのか!?

なんて、どこかのアニメの次回予告みたいな感じにしてみました
次回予告です。

ややこしかったですかね？

十月下旬～十一月中旬（13）（前書き）

打ち上げと称したちよつとした騒動。連にそろそろ優しくしたいです
ね。

十月下旬～十一月中旬(13)

「ただいま。」「お邪魔します。」

結局、僕の家までみんなついてきてしまった。その声につられたのか、姉さん達が玄関に来てしまった。そして、姉さんが口を開いた。「お帰り、連。早かったな……って、なんだこの人数!? 見知った二人と女装してたやつは知ってるが、後の人達は誰なの!？」

「落ち着いて! それに、別に問題は無いでしょ? 以前両親が会社の同僚を二十人くらい連れて来た時よりは。」

後ろで、「二十人って……。」「知らなかった。」と、「ええええ!!!」という声が聴こえた。姉さんはいと、

「あれは確か五年前に私が家を出て行くころだったな。……ま、あの時よりはマシだな。」

落ち着きを取り戻していた。姉さんが家を出て行った理由は、女優として仕事があったから。

突飛な両親のかなりの無茶ぶりを経験してきた僕達。たかだか七人では驚きません。

そして、その光景を見ていたレミリアさんは「やっぱり姉弟ね。」と言っていた。

あまり驚いていない庄一と圭は、すぐレミリアさんに視線を移してから、こう言った。

「圭。俺、幻覚でも見えてるのか? エミリーさんが見えるんだが。」

「…幻覚ではない。本物。」
「エミリーって、レミリアさんのタレント名かな? 素直に僕はそう思った。」

当然、元たちもレミリアさんに気付き、結局、僕が一人で尋問を受けることとなった。

なんで、こんな目に……!!

僕の姉とレミリアさんの説明を聴いたみんなの反応は、驚いていたと言えなかった。

もうすぐ昼だという事で人数分の昼食をつくらないといけなくなったから、僕だけで買い出しに行くことになった。今日だけで食費が大変だなあと思いながら。

商店街で昼間から値切りまくって買い出しを終え、家に帰ってきたらみんな思い思いに過ごしていた。久実さんと董さん、藤木さんは姉さんと話しており、レイジニアさんはレミリアさんと話しており、庄一と圭と元はゲームをしていた。おい。

何を言うのも面倒になったので、僕はおとなしく昼食をつくることにした。それに気付いた久実さん達が手伝おうとしてくれたけど、姉さんが「あんたたちにできる事は無いよ。」と言って引き下げさせた。そりゃあ、そうだろうけど。

ちなみに、料理を作っている間、何故か女子の視線が凄かった。キッチンに近いテーブルに女子はみんな座っていたので、僕の事は見える。どうしてなのか気になったけど、気にしないことにした。考えるのが面倒だったので、料理はみんなが一緒に食べれるものにした。で、つくっている間にまた人が来たみたいだった。姉さんが玄関に行ってくれた。

そして、姉さんが連れてきた人を見て、レミリアさん以外は驚いた。来た人はなんと、董さんのお母さんだった。

「お母さん！どうしてここが分かったのですか！？」

「それはね、前にあなたがここに来たからよ。」
というわけで、一人増えました。なんでも、体育祭と学園祭のお礼がしたかったから、だって。

姉さんとレミリアさんは分からなかったみたいだけど、庄一が説明してくれた。

料理を作り終わったので、僕は皿に料理を移し、二つのテーブルにそれぞれ同じ料理を運んだ。男子がテレビに近い方、女子がキッチンに近い方。見事に固まったね。

食べている間の会話、男子の場合。

「それにしても驚いたよ。連のお姉さんが女優だったなんて。」

「俺はエミリーさんが居た事に驚いたんだが。」

「…同感。」

「僕は董さんのお母さんが家に来たことに驚いたんだけど。」

「それもそうだけど……………」

「いつからだ？」

「一昨日からだよ。姉さんがしばらく泊まらせたい、って。」

「…………どうして？」

「本人の意思なんだ。」

「詳しく訊いてねえのか？」

「普段話をしないから。」

「それにしても、本当だったね。」

「なにがだ？」「…………」「え？」

「連が一人で家事をやってるの。」

「そんなことか。」「…今更。」「あはは。」

女子の場合。

「それにしても、池田君に会いに来たのに大女優とお会いできるなんて。嬉しい誤算ですね。」

「社長夫人であり、作家であるあなたにお会いできて光栄です。」

「はじめて池田君の料理食べたけど、すごい美味しいね。こちらのレストランで食べたなら物足りなさを感じそうだね。」

「前にも食べたことあるけど、それよりおいしくなっていないかじら？」

「そうね。もしかして、学園祭の調理がほとんど一人だったからじゃないかしら。」

「料理教室を開いたら生徒が沢山来そうですね。」

「あの、皆さん。」

「なに？エミリーさん、でいいかしら？」

「レミリアでいいですよ。」

「そうそう。私の事だつて渚でいいんだよ。」

「そう。なに？レミリアさん？」

「皆さんは、超能力とかありますか？」

「私はあるわよ。」「私は魔術師です。」「私はネクロマンサーよ。」

「私は普通のか弱い女性だ。」「私は…普通の人ですね。」「私は天才科学者だよ。」「

「そう言うレミリアは？」

「私は…魔術師なんです。」「

「へえ。」「私と同じですね。」「

「そうなの。」「何回かみたことあるな。」「

「そうなんですか。」「身近に結構いるんだねえ。」「

十月下旬～十一月中旬(13)(後書き)

報告です。十月下旬～十一月中旬の話が終わったら、連たちの過去話をしたいと思います。ご期待ください。

十月下旬～十一月中旬（14）

そしている内に食べ終え、姉さんが食器を洗って片付けている間に、僕は自分の部屋に行つて家計簿を持って一階へ降りた。

一階へ降りた時。すでに姉さんとレミリアさんは仕事へ行つたらしく、二人の姿はなかった。

「どこ行つてたの？」

「どうせ自分の部屋だろう。」

よくわかつてるね、庄一。そう思いながら、僕は空いていた椅子に座つてさっき買ったも食材の領収書を、家計簿に書き留めていった。結構な量を買つたから大変だなあ。

そうやって家計簿をつけていたら、みんなが僕の周りに集まっていた。

僕は、動かしていたシャーペンを止めてこう言った。

「どうかしたの？」

すると、代表してなのか庄一が言った。

「いや、客が来てるのにも通りだなあとと思って。」

「暇な時にやらないと、すぐにできなくなるからね。」

僕はそう言つて、再び家計簿をつけ出した。うーん。ちょっと出費が多いかな？久し振りに赤字になりそうだ。ま、今回は仕方ないかな？

そう思いながら続けていたら、董さんのお母さんがポツリと漏らした。

「すごいわねえ。私もやったことはあるけど、ここまでマメにやれなかつたわ。」

それに反応して、圭が言った。

「…連はこれを十年もやっている。もはや習慣。」

そういえば、前に僕の事調べてたんだっけ。そう思いながら、作業はやめなかつた。

家計簿をつけ出してから二分。そんな時間がかからなかったね。

終わったので、ノートを自分の部屋へ戻そうとしたら、みんなに立ち塞がれた。

「どこへ行くの？」

「どこって……自分の部屋だけど？」

当たり前のことを何で聴くのか、僕の事には判らなかつた。そしてら、レイジニアさんがこう言った。

「なら、一緒に行ってもいいかしら？」

「どうして？面白い物なんか一つもないよ？ね、庄一。圭。」

「面白いというか……」「……中学生の部屋じゃない。」

僕が庄一と圭に話を振ると、二人はそんなことを言った。失礼な。単純にものが無いだけだよ。

庄一と圭の話でますます興味を持ったのか、みんなが僕の部屋に行きたいと言い出した。断つても面倒なので、仕方なく許可した。本当に面白い物なんてないのに。

二階へあがって、僕の部屋の前に来た。

「ここが僕の部屋だけど、みんないっぺんに入れないよ。」

「入らなくても見えるだろ。」

と、庄一の鋭いツツコミ。そうだけどさ。

そう思いながら僕はドアを開けて部屋の中へ入っていき、いつもの所へ家計簿を置いた。

ドアを開けたままにしておいたので、元たちが入ってきた。

初めに感想を言ったのは、久実さんだった。

「凄いわね。きちんと整理整頓されてるわ。物が散乱してないわね。」

それに続いて、

「この本棚、きちんと整理されています。ちゃんと、どこに何があ
るのか分かりやすく整理されています。……あ！お母さんの本が置
いてあります！」

「あら嬉しいわね。こんな身近にファンがいたなんて。」

「ハジメの部屋とは大違いね。」

「そうだね。僕の部屋が凄く汚い部屋に見えるよ……って何言わせるの！」

「自分で言っただよ。」

「……庄一は見習うべき。」

「うっせ。捨てたくても捨てられないんだよ。」

と口々に言っていた。そして最後の言葉を聴いて、

庄一、それはダメだよ。と、庄一以外がそう思った。

と、ここで董さんのお母さんがこう言った。

「そういえば、私はあなたにお礼をしにきたんです。それなのに昼食をごちそうしていただいて、ありがとうございます。」

僕は頭をかきながら、董さんのお母さんを見てこう言った。

「いえ、お礼だなんてそんな。たいしたことはしていません。」

「さて、本来はこれまでのお礼をしに来たのですが、今回も含めて三回のお礼をしないとイケませんね。」

あ、スルーされた。董さんを見ると、「お母さん。私を泊めてくださったのですから、四回ですよ。」「あ、そうですね。」と何やら増やしていた。そんなものが目的じゃないんだけど。

「さて、四回分のお礼をしないとイケないのですが……そうですね。全部あなたが決めてくれませんか？」

スルーされたまま、強制的に話を進められた。

四回、か……。意外と多いね。と、なると……。

僕は簡単に四回分を使える方法を思いついたので、本棚からお気に入りの本を四冊とってこう言った。

「これにサイン書いてくれませんか？一冊で一回分。計四回分です。」

すると、董さんのお母さんが何やら考えた後にこう言った。

「本来ならお断りなのですが、仕方ありません。いいですよ。」

そして、僕が渡した本四冊にサインしてくれた。やったね。

一階へ降りて、僕達はみんなでゲームをした。基本的に庄一、圭、

元、久実さんの四人で、僕達はそれをキッチンに近いテーブルで眺めていた。

三時になった時、みんな帰っていった。みんなの表情を見てみると、どこか満足したみたいだった。僕としても嬉しいけどね。

十月下旬～十一月中旬（15）

夕飯の買い物から帰ってきた後すぐに家計簿をつけ、夕飯をつくっていった。

そして夕飯を作り終え、洗濯物をたたんで自分の分を運んでいった。それが終わったら、テレビを見ることにした。暇なもんでね。テレビを見るのも飽きたので、僕は両親たちを待たずに食べることにした。

僕が食べ終わって食器を片付けていると、両親が帰ってきた。帰ってきて早々に両親は弁当箱を流し台に放り出してきて、僕は何も言わずに弁当箱も洗いだした。

両親が夕食を食べていると、姉さん達が帰ってきた。僕はソファに座って本を読んでいた。

両親と一緒に姉さん達も夕食を食べながら、僕達はみんなで今日の出来事を話した。

僕は友達が家に来たことを、姉さん達は仕事のことを話した。途中で、姉さんと両親が僕に愚痴しか言っておなくなった時、僕は話をほとんど聞き流した。あと、姉さん達につられてなのかレミリアさんも言ってきたけど、それを同じく聞き流したら姉さんに「相談くらい真面目に聴け。」と怒られた。僕には愚痴にしか聴こえなかつただけだなあ。

夕食を食べ終えた両親たちは、各々適当にやっていた。風呂に入ったり、明日のスケジュールを確認したり、台本読んだり。僕はひとりだけ後片付け。理不尽だね。

後片付けが終わったら、洗濯機を回してから風呂に入った。僕が最後なのはいつものことなんだよね。風呂から上がってから自室に戻ろうとしたら、レミリアさんに止められた。

「あの、レン。」

「なに？レミリアさん。」

リビングでは、両親と姉さんが三人で酒盛りをしていた。片付けしてくれるかな？

「レンって、本当に大変なんですね。これを毎日？」

「姉さんが出て行ったあとが大変だったけどね。」

レミリアさんの質問に、僕は苦笑しながら答えた。姉さんが出て行ってからの数週間。僕にとっては仕事のバイトより重労働だった。やったことないけど。学校で寝るのは当たり前。酷い時には学校を休んで寝ていた。病院に行ったら、『その年で過労って、何をすればなるんですか？』と訊かれたこともあった。適当に誤魔化したけどね。

僕がそう答えたら、レミリアさんは驚いてこう言ってきた。

「えっ！？渚さんもこんな事をしていたんですか!？」

「うん。といつても、洗濯と料理ぐらいかな。」

「他の事はレンが……?」

「うん。」

僕の答えに、レミリアさんは「すごいね、レン。」と笑って言うてくれた。その笑顔を見て、僕は顔が赤くなった。だって可愛かったんだもん。レミリアさんの笑顔。

そんな僕の顔を見て、レミリアさんも顔が赤くなった。あれ？どうしてだろう？

レミリアさんの顔が赤くなった理由を考えようとしたけど、それより先にこの気まずい雰囲気は何とかしないとイケない、と思った。でも、何を言えいいのか分からなかったので、

「お、お休み。」

と言って、いそいそと自室へ戻っていった。それを聞いたレミリアさんは、

「あ。は、はい。お休みなさい、レン。」

と言った。まだ話をしたかったのか何か言いたそうだったけど、僕はそのまま自室へ戻って寝ることにした。

十月下旬～十一月中旬(15)(後書き)

次、閑話を書くとしたら誰がいいでしょうか？

十月下旬～十一月中旬（16）（前書き）

レミリアが連のことを好きになった理由の回想から始まります。

十月下旬〜十一月中旬（16）

「はう。まだドキドキする。」

連が二階へあがっていったのを見届けた後、レミリアは階段に座って赤くなつた頬を両手で押さえていた。

「今でも嘘のようだよ。レンの家にいることが。」

そう言った後、レミリアは深呼吸をした。しながら、思い出していた。

四年前。レミリアは渚と初めて共演した。その時に、渚に「あんなを見てると弟の事を思い出すよ。」と休憩中に話しかけられたことがあった。

『弟、ですか？』

『そう。連、って言うんだけどね。あいつに親の事全部任せてきちゃったんだよ。』

『そうなんですか。』

そこから、渚は休憩時間のほとんどを、連について話した。それは、姉が弟を自慢するようなものだったが、不思議と気にならなかった。

撮影が終わり、帰ろうとしてる渚にレミリアはこう言った。

『また共演したら、レン、って人の事をまた話してくれませんか？ それに対して、渚は振り返って笑いながらこう言った。』

『いいぜ。そのかわり、あんたも自分のことを話さないよ。』

虚を突かれたレミリアは、呆然と立ち尽くしていた。

それから、共演する度に連の話を聞いた。話を聴いてるうちに、連の事が気になっていった。その理由は、渚の話を聴いてると、連は苦勞してるはずなのにいつも楽しそうに過ごしている風にとれるからだど、本人は思っていた。

しかし、そのうち段々と連の事を想像しだし、頭から離れなくなつていった。インタビューで『好きな人は？』と訊かれた時、とっさに『凧さんの弟』と言いそうになった。

これが何の感情なのか渚に訊いてみたところ、『恋じゃね?』とあっさり言われた。

そう言われて、嘘だと思う自分がいる反面、納得してる自分がいた。それ以来、連の事が好きになった。

そこまで思い出して、レミリアの顔がまた赤くなった。

「明日も朝と夜は一緒に居られるからその時にいっぱい話そう!」

赤くなりながらもそう決意して、レミリアも寝ることにした。

学園祭の片付けが終わって一週間後。僕達三人はいつもの場所にいた。

「学祭終わったな。」

「それから二日後に、どっかの犯罪組織が壊滅したっていう報道があったんだよね。」

「……これからその話をする。が、その前に」

ん? 圭が僕の事を見る。顔に何かついていたのだろうか?

「……ちよつと実験をする。」

と言って、僕に箱を渡してきた。

なんだろう? と思って箱を開けると、その中から煙が勢いよく噴射してきた。

「うあああ!!ゴホッ!ゴホッ!」

噴射されてからすぐに、僕はその箱を投げた。その箱は煙を噴射しながら壁に激突し、いきなり爆発した。

「……ここでやらないで欲しかった。」

「ゲホッ、ゲホッ!なんだこれ!? 前が見えねえ!」

「庄一! ドア開けてよ!」

「分かった!」

という声と一緒にドアが開く音がして、煙が外へ出て行った。

煙が全部出て行ったあと、僕と庄一は圭に詰め寄った。

「僕に何渡したの!」「いつもの事だから分かっているつもりだが、ちゃんと説明しろよ!」

僕らの言葉に、圭はいつもの口調でこう言った。

「…連に渡したのは試作品の新作、逃げれる君（仮）。箱を開けると煙が噴射し、箱を何かにぶつけると爆発する音と共に煙が出てくる。これくらいの場合なら二分で周りが見えなくなる。いつものところからの依頼。」

薄々感じていたけどね。そう思っていたら、圭がさらに言った。

「…結果は上々。依頼料を二人に渡しておく。」

そう言っつて、圭は僕達に封筒を渡してくれた。これが、僕の自分用のお金の収入源。

僕達は封筒の中身を確認しないで、圭の言葉を待った。

「…分かつてる。まずは、発端である藤木花音の転校から。その目的が、元の能力の解明。学園祭の時期に転校してきたのは、単に調整が出来なかつただけらしい。」

ちゃんとスケジュールの調整しようよ。

「…学園祭までの間、元の後を追っていたのはそれが理由。しかし、元は普段能力を使わないため解明できなかった。そして学祭初日。開店直後から花音はいなくなった。それは、仲間からの指示を受けるため。その指示が、学祭最終日に元を誘拐するというものだったらしい。」

そこからは僕も知っている。指示を受けた藤木さんはそれにシヨックを受けてしばらくどこかをさまよっていた。それを、両親が場所を特定して元たちが迎えに行った。その時に、元をその組織に渡さないと決めたらしい。

「…そして、学祭最終日の夜。花音は一人で組織へ赴き反対した。当然、組織は反逆罪として花音を捕らえたのだが、元たちが組織の場所へ行き、攻撃した。結果、その組織は壊滅。花音は被害者という事で保護。組織の人間は全員逮捕された。これが学祭での一幕。ただ、一つだけ分からないことがある。」

「珍しいな。圭でも分からないことがあるのか。」

「…ああ。元たちがどうして組織の場所を知ったのか。それと、元

「私たちはどうして花音がそこにいることを知ったのか。」

「と言つて、圭は僕の事を見た。」

「……知ってるだろ？」

「相変わらずそういう勘は鋭いんだから。僕の話も誰にも言わないですよ。」

「そう前置きして、僕は話した。」

「学祭三日目が終わった時に、明日の準備とかをし終え帰る準備をしてたら、藤木さんもいてね。その時に話を聞いたのを、最終日の打ち上げ前に元たちに話したんだ。場所も藤木さんから教えてくれたから、ついでに話したんだよ。」

「そうか。だからお前、あの時ああ言ったのか。」

「……ありがとう。これで納得がいった。これ、提供料。」

「そう言つて、圭はもう一つ封筒を渡してくれた。僕は、それを受け取らないで圭に訊いた。」

「でも圭。元的能力つてなんなの？」

「……分からない。けど、昔の文献で似たような能力を使った人がいたらしい。黒曜から聞いたから、これは確かな情報。」

「……つてことは、元的能力つて遺伝じゃないのか？」

「……分からない。」

「庄一の言葉に、圭は首を横に振りながら答えた。」

「元つて本当に不思議だなあ。僕はこのやりとりを見てこう思った。それから、僕達は明日の確認をして家に帰った。」

十月下旬～十一月中旬（17）（前書き）

八十話行きました。早く過去編に行きたいので早めに更新して
います。

十月下旬～十一月中旬（17）

それから、僕達は明日の確認をして家に帰った。

「ただいまあゝ……って、誰もいないよね。」

家に帰って僕は、みんな仕事でいないことを思い出した。

そして、いつもの事をやった。

その日の夕食は、みんなが一緒だった。ま、僕が待ってたからだけだね。

「珍しいよな。みんなで食べるなんて。」

食べ始めた時に、姉さんがこう言った。それに両親が同意した。

「そうだよな。レミリアさんも入れると初めてじゃないか？」

「違うわよ。レミリアちゃんがここにしばらく泊まる事が決定した時もこうだったでしょ？」

そして、食べながら今日の出来事を話し合った。家族団らんつていいよねえ。

その時、レミリアさんが僕にこう言ってきた。

「レンの料理って、やっぱりおいしいですね。」

僕は顔を上げて

「そう言ってもらえると嬉しいよ。」

と言ったら、レミリアさんは顔を赤くした。おかしい。笑って言うただけなのに。

「どうかしたの？」

僕が訊くと、レミリアさんは慌ててこう言った。

「べ、別に大丈夫ですよ!？」

それを見た姉さんは、何やらしたり顔だった。どうしてだろうか？そのあとは、何事もなく夕食が進んだ。だけど、レミリアさんの顔が赤くなっただけだった。

昨日と同じで、僕一人で後片付けをした。レミリアさんは食べ終わったら自分が使っている部屋（姉さんと相部屋）に走っていき、

姉さんが後を追った。両親は、「もしかして、連のこと……」
「きつとそうでしょうね。」と言っていた。どうしてだろう、凄
い気になる。

それから、僕が寝るまで姉さん達の姿をみなかった。

「なんで私あんなこと言っちゃったんだろう?」

自室のドアに背をもたれかけながらレミリアは言った。その顔はド
ラマや映画の顔ではなく、完全に少女の顔だった。

すると、ドアをノックする音が後ろから聴こえた。レミリアは慌
ててドアから離れた。ドアが開いた先にいたのは、

「どうしたんだ、レミリア?いきなり逃げて。」

「な、渚さん。」

池田渚だった。渚は意地悪い笑みを浮かべながら言った。

「あれか?食事中に連の笑顔を見たからか?」

「~~~~~!」

「やっぱり。」

図星のせいで顔を真っ赤にしたレミリアを見て、渚はため息をつき
ながら言った。

「レミリア。あいつは今家の事を中心として自分の事は全部後回し
にしているから、誰に好かれようが絶対断るぞ。」

その言葉に、レミリアはうつむいてしまった。そこへ、さらに渚は
追い打ちをかけた。

「いいか?これは連の姉として忠告よ。諦めなさい。あなたじゃ連
を振り向かせられない。」

その言葉で、レミリアは膝を抱えて泣いてしまった。渚は、今はレ
ミリア一人にした方がいいと思い、部屋を出ようとした。しかし、
泣きながらレミリアが言った言葉に、渚は立ち止った。

「……………ヒック……………でも……………それでも……………私は、あの人の事が好
きです。たとえ……………振り向いてくれなくても、この気持ちを諦めら
れませんか!」

その言葉を聞いた渚は、レミリアに近づいて肩を叩いてこう言った。「そうかい。なら、その気持ち忘れるんじゃないぞ。あいつを振り向かせたいなら、遠くから見守ってるだけじゃ駄目よ。これは姉としてのアドバイスだけど、たまには積極性も大事よ。」それを聴いて、レミリアは膝を抱えながら顔を上げた。その顔には、涙の跡があった。

「……………分かりましたっ!!」顔を上げて、レミリアはそう言った。泣いていたことを忘れさせるような笑顔で。

次の日。

僕はいつもの時間に起きた。レミリアさんの事が気になったけど、僕にはどうしようもできないから考えないことにして一階へ降りた。リビングに降りた僕は、見慣れない光景を目撃した。というか、全く新鮮な光景だった。

「あ。おはようございます、レン。」

その光景とは、レミリアさんがキッチンにいたことだった。人の見るなんて何年振りだろうね。

「おはよう、レミリアさん。……………どうしたの？今日も仕事があるなら、まだ寝ても良いんじゃないの？」

「レンだって学校があるじゃないですか。」

あれ？言い負かされちゃった。そう思ったけど、気にせず五人分の弁当の準備を始めた。下準備は終わってるから調理するだけで終わり。簡単だね。

何事もなく朝食をつくり終え、僕は洗濯機を回しに向かった。昨日はやってなかったからね。

洗濯機を回してる間に、僕はリビングに戻ってレミリアさんと一緒に朝食を食べた。

「それにしても、今日はどうしてこんなに早く？この時間に起きてるのは主婦と新聞配達の人ぐらいだよ。」

食べながら、僕はレミリアさんに訊いた。すると、レミリアさんはこう答えた。

「ふふっ。内緒です
とてもいい笑顔で。」

(続)

人物紹介その3（前書き）

勢いが、勢いがありすぎて・・・。。。
すみません。後半滞るかもしれません。

人物紹介その3

董の両親……父親がある会社の社長で魔術師、母親が小説家で普通の人。父親の方がもう完全にバカ親。救いようがないくらい重症。対して、母親の方はのんびりマイペース……というわけでなく、おっとりしているだけである。夫婦仲は結構良い。

久美の両親……父親が超能力者で警察署勤務、母親が主婦で同じく超能力者。董の父親と同じで、重度のバカ親。董の父親とエソカウトすると、必ず双方とも娘の自慢話をするため、母親方と娘方は恥ずかしさで他人のふりをよくする。ちなみに、そういうことがあるのは父親間だけで、母親間だと仲良くおしゃべりしている。

レミリア（15）……渚に頼み込んで連と一緒に暮らしている女優。タレント名『エミリー』。彼女は魔術師であるが、たまにしか使わないのでたまにしか練習していない。連を好きになった理由は渚の話を聴いたから。今は、どうやれば連との距離が縮められるのかを考えている。が、仕事の方に集中しないといけないので、連と一緒にいたいという願いがほとんど叶っていない、ある意味不運な人。

長老……柊が仕事で、黒曜が私用で訪れた集落の長老。常に数人の男を引き連れている。元の能力についてのヒントを知っているみたいだが、あまりにも変わった条件で黒曜たちは訊けなかった。

門番……長老に集落の門番を任された者。多少無謀なところがあるが、根は優しく、親切である。身体能力は高い。

藤木花音（15）・天才少女。とある組織に所属していた。その組織の目的が、中島元の能力の解明。そのために元の後について回っていたが、その時に元の優しさを知り、組織からの指令と恋心に挟まれたが、自分の気持ちに素直になることにして組織に反抗した。しかし、それによって捕まったが、元たちが救ってくれた。最近、連のことを調べたいという好奇心に駆られているらしい。身長の話は、彼女にはタブーである。

人物紹介その3（後書き）

次は過去編でお会いしましょう。あ、これで終わりませんよ？

過去編（中学一年～二年）（前書き）

ついに過去編が始まります。色々引っ張りたいと思います。

過去編（中学一年～二年）

十一月のある日。いつもの三人で外を散歩していた時のこと。

「あゝ、結構冷え込んできたな。来月になったら雪でも降るか？」

「…分からないが、降るとしたら十二月中旬以降だと思う。」

「そうだね。でも、このくらいの寒さならまだ耐えられるでしょ？」

ほかのところだとものすごく寒くなるところだってあるんだから。」

「そうだな。」……無論。」

そう言いながら歩いていたら、感慨深そうに庄一がつぶやいた。

「もうすぐ高校生か。そういえば、俺と連が初めて会ったのは中一のころだったよな。」

「あゝ、そうだね。僕と庄一は一年のころから同じクラスで、圭は二年生の時からだもんね。」

「…俺は一応二人の中学一年のころも調べていた。だけど、話が聴きたい。」

「俺は、圭がどうして俺達と一緒にいるのか話が聴きたいぜ。」

二人がそう言ってきたので、

「じゃあさ、外は寒いからどこか話ができるところ行かない？」

そう僕が提案したら、頷いてくれた。

というわけで、場所をどうするか話し合った結果、僕の家ということになった。

………どうしていつもこうなるんだろう？

僕の家へ向かう途中、なぜか元たちとばったり会い、何をするか訊かれ正直に答えたら自分たちも行くということで、いつものメンバーで僕の家に向かった。

ただ、元たちは何をしていたのかと訊いたら、「ちょっと話を聴きに。」と言っていた。どうやら、警察署で話を聴いていたのだろ
うね。

「ただいまー。」「くくくくくくお邪魔します。」「「「「「
もはやこの家は人が良く集まる場所となっていた。みんな、ここ好
きだね。」

僕たちがリビングに行ったら、姉さんとレミリアさんがいた。

「仕事は？」

「今日はなし。だよな？」

「ええ。」

ふくん。そうなんだ。と適当に思いながら、僕たちは椅子とソファ
にそれぞれ座った。

開口一番は、久美さんだった。

「ねえ、あんたたちの過去を話してくれるんだったわよね？」

それに文句を言うのは、庄一だった。

「俺たち三人だけで話すつもりだったんだがな。」

「……思い出話は花が咲く。」

庄一の後に行った圭の言葉は放っておいて。

「じゃ、話そうか。まずは僕と庄一が初めて会ったときからだね。」

それから、僕は話し始めた。………っというか、い
つの間にか姉さんとレミリアさんも聴き手になっていた。まったく、
困ったものだ。

四月中旬のある日（入学式の次の日）

僕がこの中学校に入学して二日目。正直まだ緊張している。だって、ほとんどが知らない人だから。

学校に登校し自分の席に着いた僕は、一人で今日の予定を確認していた。他の人はクラスの人たちと話していた。

いいなあと思いつながら予定の確認を終えた僕は、とりあえず校舎の構造と設備の場所を確認していた。そしたら、声をかけられた。

「よう。今何してんの？」

その声に反応して、僕は顔を上げた。そこにいたのは、どこにでもいそうな普通の人ぽかったけど、髪型をオールバックにしていた。

一見してミスマッチのような気がしたけど妙に似合っていたので、僕は感心しながら言った。

「なにつて、学校の施設の位置確認と校舎の構造確認。」

それを聞いたオールバックの人は、

「お前、さらつと言ってるがそんなことしねえぞ？」

と驚いていった。そうかな？僕は迷子になりたくないからやってるけど。

「ま、そんなことはどうでもいいか。お前、名前は？」

「自己紹介の時に教えてあげるよ。」

オールバックの人の質問に対して僕はそう答え、始まるまで待った。というか、家の仕事が最近大変になったから疲れが……

そのまま、僕の意識はなくなったみたいだった。簡単に言うと、寝てしまった。

僕は、頭を殴られて起きたようだった。あたりを見ると、僕をみ

んな見ていた。黒板を見たら、自己紹介という文字が見えた。

そっか。まだ学校だったのか。そう思いながら、僕は自己紹介をした。

「どうも。池田連です。趣味は読書くらいしかありませんが、一年間よろしくお願いします。」

そして席に座ったら、どうやら僕が最後だったようだ。先生が話をし、これから部活の案内とか施設の案内とかするから移動するぞーという話になった。僕たちはそれにおとなしく従って、最初に学校の施設を見て回った。僕は覚えたから別に問題なかったんだけどね。

それが終わったら僕たちは体育館に行き、部活動の説明会を聞いた。ただ、基本的に魔術師や超能力者に対して勧誘してるのと同じなので、僕はその話の間ずっと寝ていた。

説明会が終わり、僕たちは自分たちの教室に戻った。そして、先生が来るまで思い思いの人と話していて、僕は帰る準備をある程度済まして寝ていた。もうすぐ帰れるからね。

先生が来るちょっと前に、僕は起こされた。起こしたのは、さっき僕に話しかけてきたオールバックの人だった。

「何か用？」

僕は眠たい目を擦りながらその人に訊いた。そしたら、

「お前、部活入るのか？」

と訊かれた。僕は全く入る気がなかったので、

「全然。入る気なんてこれっぽっちもないよ。」

と言ったら、その人は「ふん。」と言って僕の席を離れていった。別に悲しくはないけどね。

再び寝ようとしたら先生が来たので、僕は寝ることができなかった。

先生が明日の連絡事項とかを言って、その日の学校は終わった。毎日こんなのだったらいいな。

次の日。僕はいつものように昨日の内に下準備をした朝食と昼食を作っていた。そして作り終わったら、洗濯物を干しに行った。それが終わったら、僕は両親と一緒に朝食を食べた。

本当は姉さんがいるんだけど、姉さんは僕が十歳の時に『オーディションに受かったから事務所の近くに引っ越すわ。私がない間一人で家事をよろしくね。』とか言って出て行った。最初は押し付けたな、とか思ったけど、送られてくるDVDを見てみると実に生き生きとしていたので、頑張っつてねと思えてくるようになった。

朝食を食べ終えた後は一人で食器を片づけて、学校へ向かった。これが毎日繰り返されている。小学生の時は負担がありすぎたのかよく病院に行っていたので、中学生になって間もないけど病院の世話にならないようにと、心の中で歩きながら誓った。

学校について、僕は自分の席に座って今日の授業を確認した。その時に、昨日のオールバックの人が話しかけてきた。

「なあなあ、昨日の『レーコーン』面白かったよな？」

レーコーンとは、最近話題のバラエティ番組のこと。ゲストの人たちと様々なことに挑戦する番組なんだよ。

僕は授業の確認をしながら、

「テレビは見ないんだ。」

と言った。するとその答えに驚いたのか、

「ってことは何？おまえんち、テレビないの？」

と訊いてきた。

「あるよ。ただ忙しいだけ。」

そう答えながら、僕は授業の確認を終えたので寝ようとした。しかし、

「どうしてそんなに忙しいんだ？」

と訊かれた。

僕は若干鬱陶しく感じたので、無視して寝ることにした。それに

しても、どうしてあの人は僕に話しかけてくるんだろう？

中学一年生の授業なんて寝てもたいして問題ないと判断していたので、僕はほとんどの授業を寝ていた。ただ、体育の授業に関しては普通にやっていた。その体育の時間。ペアを組んでキャッチボールの練習だったので、僕は当然のようにあぶれた。なので、僕は先生と一緒に見ていた。

その時、僕はオールバックの人がすごいと思った。

彼が投げるボールは捕る側にはとても捕りやすく、また、ちょっと捕り辛いボールを投げられても難なくキャッチしていた。周りからは、「庄一やつぱすげえな。」「さすがは岡田選手の息子だ。」という声が聞こえた。庄一っていうんだ、あのオールバック。周りの話を聴いていた僕の感想は、そんなものだった。あと、見た限り感じたことは、彼は本気で投げていないくらいだった。どうしてなのか分からなかったけど、別にそんなことはどうでもよかった。ただ、見るだけなので本気で眠かった。

体育の時間が終わり、昼食の時間（昼休み）になった。

僕は周りが輪になったりして食べているのを見ながら、一人で弁当を食べようとしたり。そしたら、いつも話しかけてきた彼が来た。

「よう。一緒に食べないか？」

弁当を持ちながら、彼はそういった。僕はそれに無言で対応したらそれを肯定ととらえたのか、彼は他の人の席の椅子に座って、弁当を広げて食べ始めた。

しばらく無言のまま食べていたけど、彼が話しかけてきた。

「なあ池田。」

「なに？」

「お前ってどうしてそんなに淡泊なんだ？」

そう訊かれたとき、僕の箸は止まった。そういう態度をとった覚えはないけど、傍から見ればそう見えるんだなと、その時思った。

少し考えてから、僕は答えた。

「……………緊張してるから、かな。」

「そうなのか？」

「多分ね。」

そう言った後、僕は彼に質問した。

「庄一、だっけ？」

「それは名前だな。覚えてなかったのか？……って寝てたもん
な、お前。」

弁当を食べながら、呆れた庄一。うるさい。疲れてるんだからしよ
うがないじゃない。

「でさ、庄一はどうして体育の時間本気で投げなかったの？」

そう僕が訊くと、庄一は驚いた顔をして、つかんでいたおかずを
落としそうになった。

「どうかしたの？」

「いや……気づかれないと思ってたんだが、まさかこんなに早く気
づかれるとは思わなくてな。驚いていたんだ。どうしてわかった？」

気になったようで、庄一はどうしてだか僕に訊いてきたので、僕
は説明した。

「どうしてって、だって肩を慣らすって感じで投げてたじゃん。そ
れに、」

「それに？」

「楽しそうじゃなかったもん。投げてる時の庄一の顔。」

僕がそう言うと、庄一は啞然としていた。どうも、本人は気づいて
いなかったようだ。

僕はこれで説明は終わりという感じを出して、弁当を食べていっ
た。

それから一秒にも満たないうちに、庄一が戻ってきたこう言いな
がら弁当を食べるのを再開した。

「……お前、一人でいる間ずっと見てたのか？」

対して、なんともないという風に僕は言った。

「ずっと、ってわけじゃないよ。先生と一緒にキャッチボールして
たから。」

「だとしたらなおさらすごいぜ。そんなに見てないのにズバリと言
い当てるんだからな。」

「って、ことは本当なんだ。」

「ああ。体育だと本気になれねえんだ。ていうか、本気出すとほか
の奴らが怪我するんだよ。」

「それは大変だ。」

「だろ？」

そうやって話していたら、いつの間にか僕たちは仲良くなっていた。

過去編(2)(前書き)

三万PV突破!..ひとえに皆様のおかげでございます。

過去編(2)

五月中旬のある日(いつもの日常風景by家庭科実習)

「よう。元気か、連?.....つて訊くまでもねえか。」

「.....ん?あ、庄一。元気だよ、一応。」

その日の二校時目が終わって、庄一が僕に話しかけてきた。相変わらずのオールバックで。

「ん?どうかしたのか?」

「え?いや、別に。」

「そうか?」

僕の視線に気づいたのか庄一が僕に訊いてきたけど、僕ははぐらかした。どうしていつもオールバックなの?つて聞きたかったけど、そこは訊かないことにした。

あ。あの後、というか四月から今までかけて色々とあって、僕と庄一は互いに名前と呼ぶ仲になった。詳しく話してもいいけど、それを語ると長くなるので別の機会にでも。

それで、庄一と話して分かったこと。それは、彼は誰とでも仲良くできるということ。

学校が始まって一カ月。まだまだぎこちない雰囲気はあるけど、小学校から同じ人同士での会話や、ここで新しくできた友達での会話をするときのぎこちなさが消えていた。

対して庄一は、そんなぎこちない雰囲気を持たずに人と接している。結果として友達が多い。対称的に、僕は学校に来てから寝てばかりなので友達が少ない。というか、全くないといっても過言ではない。ま、それほど欲しいとは思っていなかった。僕は気にしなかったけど。

そうやってボーっとしていたら、庄一がこう言ってきた。

「なあ、お前どうしてそこまで眠いんだ？徹夜でもしてるのか？」
その言葉にあくびを噛み殺しながら僕は言った。

「徹夜？僕は徹夜なんてほとんどしたことないよ。僕にも色々あるんだ。」

そんな僕を見た庄一は、

「ふうん。ま、野暮なことはきかねえよ。」

と言って次の授業の準備をしに行った。一方僕は、それを見てから授業の準備をして、また寝た。

そんなことが続いたある日。家庭科の実習があるという話を、庄一から聞いた。

「へえ〜。エプロンづくりなんだ。」

「へえ〜って。さては寝てたな？」

「うん。」

「お前ってやつは……………」

何やら呆れていたけど、僕は気にせず話の続きを聞いた。

「いつやるの？」

「明日だよ。先週言ってただろうが。……………って、寝てたんだっただな。」

「ふうん、明日か……………」

「生地は？」

「は？」

「だから、エプロンの生地だよ。」

僕の訊いた意味がいまいち分かっていないのか、庄一が、

「それって先月に頼んだ奴じゃないのか？確か二週間前に渡されたはずだろう？」

と言ってきた。え？僕、初耳だよ？

驚いた僕の顔を見て、庄一は顔を引きつらせて訊いてきた。

「な、なあ。連。お前もしかして……………注文してないのか？」

僕は記憶を探りながら言った。

「どうなんだろう？寝ていたから、記憶が全くと言っていいほどないんだよ。」

「じゃ、先生に訊きに行こうぜ。」

そう提案してきたので、僕は頷いて、放課後に家庭科の先生に訊きに行くことにした。

放課後。僕と庄一は職員室に行き、家庭科の先生のところへ向かった。

「あら？岡田君と……あ！池田君！あなた、明日の実習どうする気ですか！？」

僕たちが先生のところに行つて訊こうとしたら、先に先生から言われた。やっぱり買つてなかつたんだ。

「あの、先生？僕……やっぱり買つていなかったんですか？」

「そうですね！あなただけ何も注文しなかつたので、どうするのか訊きたかつたのですけど、いつも寝ているから訊きづらかつたんですよ！？」

「すみません……。」

僕がそう言つと先生が、このままだと明日の実習に参加できないけど、どうする気？と訊いてきた。なので、

「今日中に自分で買つてきます。」

と言つて職員室を後にした。

職員室を出てしばらく歩いていたら、庄一が訊いてきた。

「これからどうするんだ？」

僕は考えてから、

「何言つてるの？買つてくるんだよ、材料。」

と言つた。その言葉に庄一は呆れていたけど、「ま、頑張れよ。」と言つて校門前で別れた。

家に帰つてから、僕は自分の財布を持って商店街に向かつた。今

日は食料の買い出しではなくエプロンづくりの材料を買いに来たので、いつもの道を行かなかった。

商店街に行く間、僕はエプロンに必要な材料を頭の中で思い出していた。でも、それよりどんなエプロンを作ろうか考えないといけないと思ったので、材料を思い出すのを後回しにして、デザインを考えていった。

商店街に着いて、僕は色々な生地を売っている店に入った。

「いらっしやい。おお！連か！？久し振りだな、いつ以来だ？」

「小学三年生以来じゃないかな？姉さんと一緒に来たのが最後だった気がする。」

「そうか。．．．．．ところで、渚のやつ女優やっているんだって？ドラマを見たけど、あいつの演技すごかった。すっかりファンになっただぜ。」

「そう。．．．．．ところで、エプロンを作る材料を買いに来ただけだ。」

僕がそう言うと、店の人が「そうかそうか。でも、なぜ今更？」と訊いてきた。

家庭科の実習で作るから、と言ったら納得してくれた。

「さて、どれにするんだ？」

そう言っで見せてくれたものは、ほとんどが同じ色だった。

「どうして同じ色しかないの？」

と僕が訊くと、

「色はお前さんの好み。ただ、材質がどれも違うんだ。ちなみに、エプロンを作りたいならこれがおススメだ。」

と言って一つの生地を前に出してきた。僕はそういうのにこだわりのないため、その店員さんが言ったものを買った。寸法は、店の人がやってくれた。その分のお金はかからず、生地代だけで済んだ。ふう。

次に、裁縫道具などは家にあるので、僕はボタンを買いことにした。生地を売っている店の隣だから、そんなに手間はかからなかつ

た。

「いらつしゃ・・・連！久しぶり！元気にしてた？」

「あ。千亜妃さん。お久し振りです。一応元気にやっています。」

「最近渚から連絡あるの？」

「いえ。その代わりにDVDが送られてきます。サイン入りで。」

「そうなんだ。」

僕がボタン屋に入ったら、店員さんである遠藤千亜妃さんが応じてくれた。

遠藤千亜妃さんは、このボタン屋の一人娘で姉さんと同期。小・中と同じで、高校も一緒になるのかと思ったら、姉さんが女優になっってしまったことに驚いていた一人だ。現在は高校生三年生で、彼氏なし。高校を卒業したら、家の仕事を手伝うとか。

明るくていい人なんだけど、どうして彼氏がないのか本当に不思議。前に訊いたら、私より渚の方が目立ってたから、と苦笑しながら言っていたつけ。

「で？何の用なの？」

「あ、家庭科の実習でエプロンづくりをするのに材料を注文するのを忘れたので・・・」

「だからこうやって買い物をしていると？」

「はい。」

僕がそう言つと、千亜妃さんが笑いながらこう言ってきた。

「やっぱりあなた達、姉弟ね。・・・分かった。どれがいいの？」

そう言つてショーケースを見せてきたので、僕は何個か選んで買った。

帰り際、千亜妃さんに「今度来たら渚の思い出話してあげるわよ！」と言われた。その時の彼女がともうれしそうに見えた。

次の日、実習の時間の少し前。

「え？マジで買ってきたのか？」

「うん。おかげで四千円くらい消えたよ。また待つしかないか。」

「よ、四千……って、待つってどういうことだ？」

「あ、気にしないで。こつちの話だから。」

そう庄一に言ったけど、まだ気になっていたようだった。

そして、授業が始まった。

先生は、僕が本当に買って来たことに驚き、それから注意事項とやり方を教えていたけど、僕はそれを無視していた。だって、デザインを描いていたから。

先生が、「それではみなさん始めてください。」と言った時、ちょうど僕のデザインが完成。すぐさま僕も作り始めた。

他の人たちが縫い合わせに苦戦している中、僕は生地をデザイン通りに切っていく、エプロンのパーツを作っていた。

それを見ていた先生がこつちへ来て、

「池田君。君、そこから作ってるの？」

と訊いてきた。それに対して僕は、

「あとは、生地を切る前に糸を通しておいた針を使って縫うだけです。あ、ボタン留めもやらなきゃ。……というわけで、しばらく話しかけないでください。」

と言って、エプロンづくりを再開させた。ただ、僕のことを見ていたほかの生徒は、「あいつ、自分で買って来たんだろ？」「それなのに俺達より早くねえか？」「すごい。まるでどこかの仕立て屋さんみたい。」と口々に言っていた。その言葉は聞こえていても、僕は黙々と縫っていった。

先生は僕の雰囲気の話しかけられず

というよりその場にい

ること自体耐えられなかった。その場を離れ、他の生徒の出来栄えを見に行った。

そして授業が終わる五分前に、

「大体の仮縫いは終わったね。次はミシンで……って、もう終わり？久し振りに裁縫したからつい熱が入っちゃったな。」
と、僕は背伸びをしながら言った。ふう。いい気分転換にはなった

ね。

しばらく背伸びをしていたら、ふと周りが僕を見ていることに気が付いた。

「あれ？どうしたの？」

そう僕が訊くと、みんなが作業を止めて僕に寄ってきた。

「な、なにになに！？」

そう言ってる僕を囲んだ後みんなが一齐に、

「次の家庭科の授業でどうやればうまくなるのか教えて！！」「
と言ってきた。……先生も含めて。

あの、先生？あなた、教師ですよ？どうしてあなたが生徒に教えを乞うているのですか？

そう疑問に思いながら、また、どうしてこうなったか知らないまま、僕は頷いてしまった。

これ、自分のやつ作りながらできるかな？正直に、そう思った。

昼休み。僕と庄一はいつものように弁当を食べていた。そして、当然さっきのことを話していた。

「お前、すげえじゃないか！あの短時間にどうやれば、あそこまで出来るんだ！？」

「庄一、さっきからその話題ばかりだよ。他にないの？」
弁当を食べながらそう言ったら、

「お前がどうしてあそこまで出来るのか、聴くまで話す。」

真顔で庄一にそう言われた。僕にとってそれは、もはや罰ゲームでしかない。

仕方がないので、僕は正直に話すことにした。

「いい？これは他の人には喋らないでね。絶対だよ？」

「分かった。」

「僕があそこまで裁縫ができるのは、家でやってたからなんだ。といっても、最近縫物なんてやってなかったから、腕が落ちたか心配だったんだけど。」

「どうして縫物なんてするんだ？それなら母親がやるんじゃないのか？」

「……そうなんだけど。ちょっと訳有りで自分でやってたんだよ。雑巾とか縫ったことあるし、服のほつれとかやったことあるし、カーテンの穴が空いてる所を縫ったりしたし。」

そんなことを言ったら、庄一がポカンとしていた。そんなに驚くようなこと、言ったかな？

その後しばらくは互いに無言で弁当を食べていたけど、庄一がさっきの話の感想を今更ながらに言った。

「……連つてすごいな。」

その言葉を、僕は苦笑して受け流した。

過去編(3)(前書き)

四万PV突破しました!!ありがとうございます!!

過去編(3)

「………つて、感じかな？ねえ庄一。」

「そうだな。あんときのお前、結構クールだったな。」

「緊張してたんだよ。」

僕と庄一の話が一区切りしたので、皆の方を見た。そしたら、大半の人が呆れており、花音さんとレミリアさんが尊敬というかそういう類の眼差しを向けていた。

最初に口を開いたのは、姉さんだった。

「連。あなたまだあの癖抜けてなかったの？」

「へ？あ、え〜つと………」

姉さんに言われたことに僕が焦っているのを見て、レイジニアさんが訊いてきた。

「ねえレン。あなたのお姉さんが言っていた『あの癖』って何なの？」

それに対して、僕は視線を宙にさまよわせながら、

「あははは。な、何のことだろうね〜？」

とはぐらかそうとしたら、姉さんが暴露した。

「こいつは知っている人、もしくは仲がいい奴以外に対して結構クールになるんだ。入学式からしばらくの間はな。だから、最初のほうは基本的に誰とも喋らないんだ。」

「ちよ、ちよつと姉さん!？」

「いいだろ？どうせばれるんだから。」

あなたのせいでバレたんですけどね。そう思ったけど、言う気にはなれなかった。それに、周りから「へえ〜。やっぱり連が言ったとおりだったのか。」「…驚き。」「そんな人いるんだね。」「不思議だね。」「連つて、色々ところで苦労してるのね。」「私の時もそうだったのでしょうか?」「私が初めて会った時は、そんな感じしなかったわ。」と言われていたので、諦めるしかなかった。

すると、唯一なにも言わなかった董さんが僕に訊いてきた。

「あの、結局家庭科の授業はどうなったのですか？」

その言葉に僕と庄一は顔を見合わせ、庄一が答えた。

「どうもこうもねえよ。翌週、授業が始まる前にこいつ一人でやりやがってよ、先生が話してる間にミシンで縫い合わせちまったんだ。先生の話聴きながらミシンの音を聞くって、結構シユールだったな。その後は、説明終了して十分くらいか？それで自分のエプロン作り終わらせてよ。さっさと先生に提出して、おれたちの進行状況とか見て、アドバイスしてたよな？」

そこで僕に振る？そう思ったけど、僕は頷きながら答えた。

「うん。ある程度みんなが出来てきて、僕の仕事終わりかなって思った矢先に、先生が『教えてくれない？』とか言ってきて、結局先生にも教えてたんだよね。」

「あれ？確か次の週のエプロンづくりよ、お前先生やってなかったか？」

「あゝ、そうだったね。前日に職員室に呼ばれてさ、『明日の実習、先生やってくれない？』って言われたんだよ。」

「ふん。」

とちよつとした裏話までしていたら、みんなが驚いていた。ま、無理もないかな？

「ややあ、って感じで驚きから戻ってきた姉さんがこめかみに手を当てながら、

「……連に家を任せた結果がこれか。姉としては嬉しいが、何だろう、複雑な感じがする。」

と言った。みると、他の人もそんな感じだった。ただ、レミリアさんだけが「素敵です！！」と言っていた。褒められるのは悪い気がしないけどね。

しばらくみんな（僕と庄一とレミリアさん以外）は唸っていたけど、気を取り直した風にレイジニアさんが訊いてきた。

「レンとシヨウイチの出会いはいわかったわ。次は…ケイとの出会い

かしら？」

その言葉に待ったをかけたのは、庄一だった。

「いや、その前にさらに面白い思い出話があるぞ。」

その言葉に、僕は嫌な予感がした。え？もしかして、あの事言う気じゃないよね？

庄一の言葉に興味を持ったのか、久美さんが訊いてきた。

「それ、面白い？」

それを待ってましたと言わんばかりに庄一のテンションが上がり、

「ああ！結構面白いぜ！！」

と自らハードルを上げた。そんなこと言って、大丈夫なんだろうか？と僕は心配になった。

そんな僕の心配をよそに庄一が言おうとしたら、

「待ってくれませんか？」

「ん？どうしたんだ？レミリアさん。」

レミリアさんが待ったをかけた。

「その前に訊きたいことがあるんですけど……遠藤千亜妃さんって誰ですか？」

その質問をするレミリアさんは、なぜか久実さん達と同じ雰囲気を持っていた。……彼女はどうしたのだろうか？

質問の意図がわからなかったけど、とりあえず僕は話した。

「その人は、商店街にあるボタン屋さんの一人娘だよ。姉さんと同じ学校に通っていた人で、僕は買い物によく行くから、知り合いみたいな人だよ。」

「本当にそれだけなんですか……？」

まだ何か疑っている……。彼女は何をそんなに気にしてるんだろうか？

僕はなおも不思議に思っている彼女を無視することにして、こう言った。

「そういえば、庄一って料理そんなにできないよね。」

「何言ってるやがる。俺は人並みに……。」

「それ本当なのかしら、連？」

庄一が反論しようとしたら、久美さんが食いついてきた。それに答える様に、圭が言った。

「……それは本当。家庭科実習の時、調味料を間違ったりしていた。」

「圭！それは言うんじゃない！」

圭が言ったことを、庄一が必死になかったことにしようとしていたので、僕たちは笑った。

それが堪えたのか、庄一がいきなり、

「そういう連だつて、人のこと言えないだろ！」

と言った。

「あつたっけ？」

「あつたよ！！お前が中一の時、遅刻してきた時あつたる？その時の理由、なんて言ったかた憶えてるか！？」

「……なんだっけ？」

「『すみません。料理作るの見逃してくれませんか？』だよ！！」

「……ああ！！思い出した！！そして忘れない！！！！」

なんて言っていたら、レイジニアさんが止めてくれた。

「そこまでにしたらどう？今度はケイとの出会い話をしてくれないかしら？」

そう言われて僕たちは口論を止めたが、ふと思いついた。

「そついや、連の料理上手がどうして解ったのかつて話、したっけ？」

「してないよ。裁縫ができる話はしたけど。」

「掃除はお前ひとりでピカピカにするもんなあ。他の奴らは雑用だろっ？」

「何人かには手伝ってもらったよ。」

最初の庄一が言った言葉が気になったのか、

「あの、連君が料理上手だと分かった話つて、調理実習の時の話

ですか？」

董さんがオズオズと訊いてきた。

「そうだな。あの時から連の腕が光ってたよな。」

「特技だけどね。」

そう言っつて、僕たちはあの時のことを話し始めた。

過去編(4)(前書き)

調理実習・前篇ですかね、たぶん。・・・あ。すみません。
遅れました。

過去編(4)

六月下旬のある日(調理実習の日)

「そついやよ。」
「なに？」

今は昼食の時間。僕と庄一は、いつもと変わらず二人で食べていた。その時の話題のほとんどが、好きな女子の話(おもに庄一)だったので、あまり盛り上がらなかった。だって、僕はそれどころじゃなかったんだもん。

おもむろに切り出した庄一の言葉に、一応僕は反応した。でも、また好きな人の話でもするのだからと予想をしていた。けど、今回は違っていた。

「明日、調理実習なんだよな。」
ピクツ。

「ん？どうした、連。箸が止まってるぞ？」
その言葉に僕は焦りながら、
「え。い、いや、なんでもないよ。」

と答えた。それに何かピーンと来たのか、
「お前、また先生の話を聞いてなかったら？」

と庄一が言った。あ、これは隠せないね。そう思ったので、僕は正直に答えることにした。

「うん。寝ていた。威張るな。」
「……すみません。」
僕の言葉にため息をつく庄一。ひよつとしなくても、呆れられているね、これ。

「……お前、どうしてそんなに寝てるんだよ？テスト大丈夫か？」

ため息をついた後、庄一はそついいながら弁当を食べていた。それ

に対して、僕は気にしていない感じで　　というより本当に気にしていないんだけど　　言った。

「何とかなるでしょ？赤点取らなきゃいいだけなんだから。……
……それよりさ、明日の調理実習でつくる料理ってなんなの？」
それを聞いた庄一は、「分かつてはいたけどな。」と言ってから、
教えてくれた。

「明日は親子丼だよ。班は四人または三人なんだけど、お前ひとりだけ寝ていたから、」

「あ、一人で作れってこと？」

「そういうこと。裁縫が得意みたいだが、料理を作るのはどうなんだ？」

庄一が興味津々という風に訊いてきたので、僕は「明日になったら教えるよ。」と言って誤魔化した。

あゝあ。今度は食材買ってこないとなあ。

放課後になって、僕は職員室に来ていた。どうしてなのかっていうと、家庭科の先生が「池田君。放課後職員室へ来てね。」的なことを担任の先生に言ったから。僕としてはさっさと家に帰って明日の買い物をして、家のことをさっさとやりたいんだけどなあ。

「先生、明日のことでしたら一人でやりますので。それと、明日使う食材を買ってきたいので、帰っていいですか？」

「え？あ、うん。分かればいいの。じゃあ明日ね。」

先生が言おうとしたことを全部先回りして言ったのに驚いたのか、あっさり引いてくれた。分かる先生で助かるね。そう思いながら職員室を後にしたら、

「よっ。一緒に帰ろうぜ。」
庄一が待っていた。

どうしてなのかわからなかったけど、僕は「いいよ。」と言って、一緒に帰った。

いつもなら校門前で別れるんだけど、今日はなぜか庄一が僕に近づいてきた。

「どうしてついてきてるの？方向違うでしょ？」

不思議に思ったので、僕は隣を歩いている庄一に訊いた。そしたら庄一が、

「たまには遠回りもいいと思ってな。」

と、あまり答えにもなっていない答えを返してきた。

その答えを聞いた僕は、何かあるなと思いついて試してみることにした。「家に入れないからね。」

突然僕がそう言ったのに庄一は驚いたけど、

「・・・分かったよ。」

少し間をおいて返事をした。ふむ。これは僕の家の中以外にも、何か目的があると見た。となると次に試せそうなものは・・・

少し考えてから、僕は庄一にこう言った。

「僕がどこで買い物してるのか、知りたいの？」

その言葉に、庄一は少し反応した。それを見て、僕は確信した。

やっぱり。明日の調理実習に使う食材を、どうやって買うのかを見に来たんだ。でも、どうしてそんなことしようとしたんだろう？なんて考えてると、

「・・・連。お前って勘がいいのか？」

「え？」

庄一に突然そういわれて、僕は歩みを止めた。

「どうしてそう思うの？」

念のために訊くと、

「だってさっきからよ、俺がお前と一緒に方向へ帰ろうとしてる目的を、全部言い当ててるんだぜ？しかもピンポイント。それで勘が鋭いんじゃないかったら、お前の頭どうなってるんだ？」

庄一がそう言った。そうかな。特に気にしたことなかった。

今更な感じがしたので、僕はどうかたえようか考え、

「勘が鋭いつてわけじゃないよ。ただ、前とは違う行動を人がとる場合、そこには何か理由があるって父さんたちが言ってたから。あと、その場合は大抵、ほかの人が関わってくるともね。」

正直に答えることにした。

その答えを聞いた庄一は口を開けたまま、その場を動かなかった。なので、僕は庄一に戻ってくるように言った。

戻ってきた庄一が、僕に向かって疲れた感じで訊いてきた。

「お前の両親って、大学の先生か？しかも、心理学の。」

それに対して僕は首を横に振りながら、

「違うよ。ただのサラリーマンだよ。二人とも、ね。」

と正直に言った。人間、正直がいいよね。……僕はたまに嘘をつくけどね。

それなのに、庄一は信じてくれなかった。

「いや、絶対に違うだろ。」

結局僕の家に着いても、庄一は信じてくれなかった。

僕の家に着いたので、庄一を玄関先に待たせ、僕は自分の部屋へ直行し、財布を持って下へ降り、買い物かごをもつ前に洗濯物をこいで、買い物かごを持って家を出た。

「買い物行くんだな？」

家から出てきた僕を見て、庄一はカバンを頭のほうへ持ってきたがら言った。僕は鍵を閉めた後、庄一と一緒に商店街へ向かった。

その道中。二人で歩いていると、ふと庄一がこんなことを言い出した。

「連つてさ、結構有名人なんだな。」

「へ？」

僕は、庄一がどうしてそんなことを言うのか分からなかったので、訊いてみた。

「どうしてそう思うの？」

その質問に答えづらそうにしながらも、

「待つてる間、っていつても、そんなに待っていたわけではないけどよ。通りすがりの人に訊いてみたんだ。『この家の息子さんって、普段どんな子供なんですか。』って。そしたら、返ってきたほとんどの答えが、『すごいまじめで、いい人で、優しくて、頼りがいのある人。』だってよ。お前、この周辺の人たちからすごい人気だぜ。」

庄一はちゃんと答えてくれた。へへ、そうなんだ……。

「庄一。」

「なんだ？」

「何人くらいに訊いたの、それ？」

「確か……三人くらいかな？」

僕達は、それから商店街に着くまで一言も喋らなかった。確か親子井に使う食材は……。

そして、僕たちは商店街に着いた。着いたときに、庄一はこう言った。

「俺、こつち側にほとんど来ないからな。こんなに人だかりができていなんて知らなかったぜ。」

それに僕は苦笑しながら、

「庄一の方には商店街があるの？」

と訊いた。それに庄一は「当たり前だ。」と言ってさらに続けた。

「ここだけに商店街があると思うなよ。俺たちの方にもあるぞ。……つっても、俺はあまり行かないから詳しくは知らん。」

ふうん、と思いながら僕は、とりあえず最初に八百屋へ向かうことにした。

「いらつしゃい！何にする、連。って、おい。友達なんて初めてじゃないか？」

八百屋のおじさんに、来て早々そんなことを言われた。間違っちゃ

いないし事実だから、僕はそれには何も言わずに、

「玉ねぎ一個と、キャベツ半玉。それと……」

今日買いに来た野菜を羅列していった。それを聴きながら、おじさんは僕が言った野菜を袋に入れていった。

「はいよ。合計五百四十三円。今回はマケないぞ。」

「え〜ケチ〜。ま、分かったよ。はい六百円。……これ、僕が貯めてたお金なのに。」

「そんな情に訴えかける作戦でも駄目だ。……ほらよ、お釣り。」

「チエ。……また来るね！」

「ありがとよ！」

庄一は、この光景をじっと見ていた。と同時に、連は普段からこうやって買い物をしているのかと、思った。

肉屋にて。

「よう連！今日はどんな肉買った？あれか、ついにステーキ用の肉か？」

「最近それ熱心に勧めるけど、買えないからね？……今日は親子丼に使う鶏肉買いに来たんだよ。え〜つと、一人前つてどれくらいだっけ？」

「ちつ。まあいいさ。それより鶏肉だったな。百グラムくらいじゃないか？一人前は。」

「多すぎだよ。本職がそんなこと言っているの？」

「冗談だよ。五十グラムありゃ、何とかなるんじゃないか？」

「じゃ、それくらいで。」

「七十八円くらいだな。」

「ハイ百円。」

「ほれ、お釣り。毎度あり〜。」

という感じで、買い物が終わった。それを見ている間庄一は、終始考え事をしているようで、黙ったままだった。何を考えているのかは全く分からなかった。

買い物が終わったら、庄一は「なんとなく分かったわ。」と言って帰ってしまった。何を考えたのか不思議だったけど、僕は家に帰って夕食の準備をしないといけないと思い、急いで家に帰った。あ、家計簿もつけなきゃ。

家に帰った僕は、買った食材を袋のまま冷蔵庫にしまい、今日の夕食の準備をした。最近の両親は、いつも七時から九時までの間に帰ってくる。だから、洗濯物をするのに支障をきたさないというよりは、遅くまで待つ必要がない。

夕食を作り、僕分だけテーブルに乗せ、一人で食べた。それから食器を片づけ、自室へ戻り明日の準備をして、下へ降りて風呂を沸かしていたら、両親が帰ってきた。

夕食をテーブルに並べ、二人が食べている間に僕は、明日の朝食と昼食の下準備をし始めた。けど、昼食の時は一人分減らした。だって、調理実習で食べるから。

両親が食べ終え風呂に入ってる間に下準備が完了し、その片づけをやった。それから風呂に入り、自室に戻って寝る前に、両親を強制的に自室へ行かせた。そして、寝た。

過去編(5)(前書き)

実習編・後編です。あと、五万PVを突破いたしました！

過去編（5）

次の日の調理実習。

「では、これから親子丼を作りたいと思います。各班自分たちで決めた役割とスケジュール通りやってください。」

そう言つて、先生は生徒の見回りをしました。庄一は男子の四人グループにいて、ワイワイやりながら作っていた。僕はというと、授業中に寝ていたので完全に一人。でも、さびしいと感じていない。みんなやっているから。

さてやりですか。そう思つて、僕は洗った玉ねぎと包丁を手に持った。

庄一は、班の人たちと協力して作っている中で連について考えていた。その理由は、昨日の商店街での買い物を見たからだ。

あいつと店の人との距離が近かったことから、あいつはあそこでずっと買い物をしていたと想像できる。それに、値切りを常習的にやっていることもかんがみると、どうも主夫みたいなことを家でやっているのではないかとも思えてくる。

その時、包丁がタタタタン！とすごい速さで切っている音が聞こえた。

他の人たちも「誰がやっているんだ？」と思ひながら、その音の発信者を見た。そこにいたのは・・・。

とりあえず玉ねぎを四分の一に切ったから、残りの四分の三はラップに包んでつと。僕は、使わない玉ねぎをラップに包んでから、使う分の玉ねぎを切つていった。

それが終わつたら、すぐさま鶏肉を食べやすい大きさに切つて、玉ねぎとは別なところに置いた。そのあとは、家に余っていたかまぼこを三枚くらい切り取つて、玉ねぎの近くに置いた。

玉ねぎを切っているときから周囲の視線が集まっている気がするけど、僕はそんなことを気にする必要性を感じなかったので、無視して次の作業へと取り掛かった。

調理実習が始まってから十五分くらいが経った時、僕は調理と片づけを終わらせていた。だって、使わなくなった調理器具を、そのままにしておく必要ないでしょ？それに、家で作る方がもつとハードだし。

僕が作り終わった時、他の人たちは意識を取り戻したように自分たちの作業を再開させた。先生もどこかぼけつとしていたけど、すぐさま僕のところに来た。

そして、僕が食べようとしたら先生がこう言ってきた。

「早いわね、池田君。しかも……見た目もきれいに出来てるね。味はどうなのかしら？」

味見がしたいのだろうか？そう思いながら、僕は先生に「食べますか？」と言って箸を渡した。そして先生は、「本当に!？」と言ったと同時に渡した箸を持っていた。はい……。

そして先生は、僕が作った親子丼を一口食べた。今更だけど、最近両親以外での料理のコメントって、聴いた覚えがなかったなあ。なんて思っていたら、先生が箸を落とした。

僕は先生が落とした箸を拾って「どうですか？」と訊いたら、先生が泣いていた。しかも、割と本気で泣いていた。泣きながら、こんなことを言っていた。

「か、各自……作り終わって……食べ終わって……片づけ終わったら……教室に戻ってください!!うわあああぁん!!」

そう言っつて、先生は調理室を出て行ってしまった。あの、先生？料理の味の感想は？ていうか、責任者であるあなたが、どこかへ行つて大丈夫なんですか？と色々と言いたかったことはあつたけど、先生がいなくなつてしまったので、僕は自分で作った料理を一人で食べた。食べながら、まだ味付けの微調整ができないなあ、と思つた。

食べ終わって食器も片づけたので、僕はさっさと教室に戻ろうかなと思つたら、普段絶対に喋らない女子のグループが僕のところに来た。

何か用なのかな？と思つていたら、一人が手を合わせてこう言ってきた。

「池田君！ちよと手伝つてくれないかな！？」

は？なんて内心で思つて他の人たちを見てみたら、他の人たちも必至みたいだった。

何かあつたのだろうか？そう思つた僕は、どうして僕に頼むか訊いてみた。

「どうして僕に？」

「先生がどこかへ行つちやつたから、どうやればうまくできるのか教えてもらいたくて。ね？」

そうなんだ。それで僕に教えてもらいたいと………なるほどね。

僕は心の中でそう思い、おとなしく頷いた。それを見た女子は「やったー！ありがとう！！」と言つて僕の両手を握つてブンブン振つた。い、痛い。痛いから。

それから、僕はその女子のグループに混ざつてというか僕が教えてあげた。

料理ができた時、その女子のグループからお礼を言われ、一緒に食べない？と誘われたけど、僕は丁重に断つて教室に戻ろうとした。でも、みんなそれを許してくれなかった。

結局。残りのグループ全部に教えて、みんな食べている間に僕は教室へ戻ることにした。

教室に戻つて一人で机に伏していたら、担任の先生が来た。授業はどうしたんですか？

僕以外の誰もいないことを確認して、先生は僕の席に近づいてからこう訊いてきた。

「さつき家庭科の先生が職員室へ戻ってきてな、『授業はどうしたんですか？』って訊いたら、『何も訊かないでください。あと、しばらく学校をお休みします。』と言って荷物を持って帰ってしまったんだ。そこで、暇だった俺が原因の解明をしなきゃいけないんだが………。何か知ってるか？」

「先生。どうして僕なんですか？」

僕が顔をあげて訊いたら、先生はあっさりと、

「教室にいたのがお前だけだからだ。」

と言いつつ。つまり、調理実習室へは行ってないんですね。

僕はありのまま言おうか悩んだけど、それを言つと家庭科の先生が可哀想なので、

「急用でも出来たんじゃないですか？」

僕は誤魔化すことにした。

それを聞いた先生は、「ふん。」と言つて教室を出て行った。

それから、授業が終わる五分前の間に、全員戻ってきた。鍵は、ほかの先生が閉めるらしい。

授業が終わつて昼になった。僕は昼食をさつきの親子丼としていたので、弁当を出さずに机で寝ていた。そうしていたら、庄一がいつものように弁当を持ってきて、いつものように食べていた。そんなによく食べれるね、庄一。

庄一が食べているのを、ぼくは無視して机に伏していた。いや、だからけるって最高だね。

そうやっていたら、庄一が箸をとめて訊いてきた。

「連。家庭科の先生が突然いなくなっちゃったが、何があつたんだ？お前の親子丼を一口食べた後。」

僕も何があつたのか詳しく知らなかったので、

「知らな〜い。」

と、机に伏しながら言った。

ただ、予想はつく。おそらく、先生は僕が作った料理を食べて、

何かしらのショックを受けたんだと思う。あまりにも衝撃的だったから、立ち直るまでは学校に来ないのだろうとも予想はつく。

「お前の料理、食べてみたいぜ。」

先生がどうしていきなり帰ってしまったのか、の予想をしていたら、庄一がいきなりそんなことを言ってきたので、

「明日おかずの交換でもする?」

と僕は言った。

過去編(6)(前書き)

これは一応本編の話としています。

過去編(6)

………って感じだったな。」

「そうだね。」

初めての調理実習を語り、僕と庄一が背伸びをしていたら、元が言った。

「そういえば家庭科の授業、しばらく自習だったよね。確か、一ヶ月くらい。」

「俺達のクラスは連が教えてくれたぜ。といつても、五大栄養素とか、裁縫の基本とかだけだな。」

そう庄一が言ったから、圭を除いたみんなが驚いた。………そんなに驚くようなことかな？

だけど、それも一瞬のこと。すぐさま姉さんたち女性陣が、矢継ぎ早に訊いてきた。

「おい連！それが初めて私たち以外に料理を食べさせた時なのか？」

「レン！それからその女子グループとはどうなったのですか！？」

「それから先生どうなったのよ！」

「連君の教え方どうだったのですか！？」

「シヨウイチの班はどうなったのかしら？」

「教えてもらったみんなの味はどうだったの？」

あまりにも一気に訊いてきたので、僕と庄一は慌てて制止させた。

「ストップ！落ち着いて、みんな！！」

「そうだけ！いっぺんに喋るな！」

その女性陣の質問に対し、圭はまとめて答えた。

「………渚さんの質問の答えは知らない。レミリアさんの質問は、あれから前より話す程度の仲。久美さんの質問は、一か月後学校に来て実習があるたびに先生役を連に任せるようになった。董さんの質問は、連の教え方は割とわかりやすく、家庭科の平均点が六点上がったらしい。レイジニアさんの質問は、庄一が皿洗いくらいしかや

らないで終了。花音さんの質問は、仕上がり上々の上に、美味しかったらしい。」

あの、圭？どうしてさっきの姉さん以外の質問をすべて答えられたの？あと、どうして花音さんの質問に答えられることができたの？僕、知らなかったよ。

なんて思っていたら、久美さんが気を取り直してこう言った。

「それはそうと、圭との出会いはどうなったの？」

その言葉を受けても、僕と庄一の話はとどまることは知らず、

「そういや、あれ凄かったよな。ほら体育祭の時。」

「ああ！なぜか僕がパンを作ることになった話ね！！あの時はびっくりしたなあ。職員室に呼ばれて、『池田君。体育祭の時に使うパンを、パン屋さんと一緒に作ってくれない？』って言われたんだよね。」

「そうだったな。俺も、お前から話を聴かなきゃ知らなかったからな。」

「あれは庄一がすごかったでしょ？学園祭での荒らし。」

「俺、そんなことしたっけか？」

「僕に自慢げに言ってきたよね？『学祭の景品付きの出店全部を回って、上位の景品全部獲ってきたんぜ！』って。」

「あ。そんなこともあったな。」

「他にはあったっけ？」

「あとは・・・大掃除をするときは必ずお前が指揮を執っていたとか、危うく生徒会に入りそうになったとか・・・。」

「生徒会の話は、勝手に推薦されたんだったよね。庄一が。」

「お前だって推薦されてたじゃないか。他には・・・あ。あれはどうだ？」

「あれ？」

「離任式でなぜか料理を作る羽目になっただろ！！」

「ああ！あれは大変だったよ。僕、全く面識ないのにつくらされたんだから。あと、なぜか食べた人たちが満足そうだったし。」

そうやって話していたら、ついに久美さんがキレた。

「いい加減に圭との出会いについて話しなさいよ!」

その言葉に僕たちは委縮し、素直に「……ハイ。」と言った。その言葉を受けて圭が、

「…ようやく俺の出番。」

とつぶやいた。その言葉には、なんだか懐かしむような感じが含まれていた。

「じゃ、始めっか。俺達と圭の出会いの話を。」

過去編（7）

中学二年生になった四月のある日（始業式が終わった数日後）

僕たちが晴れて進級して、中学二年生になった四月。僕と正一は、クラス分けをしたのにも拘らず同じクラスだった。しかも、ほかにも何人かいた。

始業式が終わった次の日。僕たちは自己紹介をしたんだけど、同じクラスになった中島元君がいなかった。理由は、春休みに入る前に自身が起こした暴走事件。詳しいことはわからないけど、きっと何かしらの事情があったんだと思った。

それで自己紹介を聴いてちょっとだけ浮いてそんな人を見つけた。それが、圭だ。なんでそう思ったのかというと、

「……木村圭。よろしく。」

たったこれだけ。何を言っているのか聞き取れたけど、これは明らかに誰とも話さなそうな人だと思った。

自己紹介が終わって、先生の話聴いて終わり。こんな日が来るたびに思うのが、毎日がこんなのだったらいいのになあ、だ。

帰宅の準備をしていたら、庄一が僕に話しかけてきた。

「一緒に帰ろうぜ。」

「校門前まででしょ？」

「そうだけだな。」

帰る準備ができたので、僕は庄一と一緒に、校門前まで一緒に帰ることにした。ただその時には、無口な彼はいなかった。

それから、いつものように授業が始まってみんな打ち解けてきたある日。

僕は何となく木村君に話しかけてみることにした。

「やあ。」

「……。」

話しかけたのに無言の対応。一瞬めげそうになったけど、なんとか耐えて続行。

「今日は天気がいいね、木村君。」

「…今日は昼ごろから雨が降る。洗濯物に注意。」

「なんだって!!?」

「…ウソ。」

な、なんだ。嘘か。びっくりしたあゝ。本当に雨が降るのかと

「…ただし、この町には本当に雨が降る。」

「それは困るよ!!!?」

嘘だと言えば本当。木村君は無口そうに見えて、本当は話し上手なのかも知れない。

なんて思っていたら、庄一が僕たちに近づいてきた。

「お、連に木村か。珍しいっちゃ、珍しいかな?」

「庄一。何か用?」

「…岡田庄一。父親が、魔法などが飛び交う中、一般人として無類の強靭さを発揮して活躍しているプロの野球選手。母親は内職をしながら、家事に勤しんでいる。自身の身体能力も高く、中学生とはいえ一般の大人相手なら、三人同時に勝負を挑まれても勝利できる。夢は父と同じだが、最近は揺らいでいるらしい。……なんでもない。」

庄一の声に反応したら、木村君が庄一の詳しい情報を話してくれた。最後の何でもないに対しては、

「…遅すぎる。」

二人でツツコンだ。でも、木村君は何の反応も示してくれなかった。

何か言おうとしたけど授業が始まりそうだったので、自分たちの席に戻った。

「……それにしても、どうして木村君は無口になっているんだろ?」

昼食の時間。本当に雨が降っていた。あゝ、洗濯物が。

僕と庄一は去年から変わらず二人で食べようとしたけど、なんとなく木村君のことが気になったので木村君を探してみたら、教室にはいなかった。

結局二人で食べたけど、その時に木村君がどこで食べているのか話していた。

「友達のところかな？」

「いや、違うだろ。俺の友達で木村と同じクラスだったやつがいるんだが、そいつが言うには、あいつは友達とかそういうのに興味がないのか、いつも一人だったってよ。」

「そうなの？じゃ、どこか別の場所で食べているのかな？」

「そうだろうが、どこだ？それは。」

「うーん。」

それで話がいったん終わり、僕たちは弁当を食べることだけ集中した。そしたら、木村君が戻ってきて自分の席で弁当を食べていた。

それを見た僕たちは、木村君の席の近くの空いてる席に勝手に座り、残っていた弁当をそこで食べ始めた。

僕らの弁当を見た木村君は、

「…池田の料理はおいしい。というわけで、これとそれ、交換して。」

と言ってきた。僕は不思議に思い、

「いいけど。それ、どこで聴いたの？」

って訊いてみたけど、「ありがとう。」と言って僕の話を見無視してトレード開始。それを見た庄一が、

「木村。連がお人好しだから良かったもんだろ。人の話を聴かないで勝手に取るのはどうかと思うぜ。」

と言った。そしたら、木村君が教えてくれた。

「…秘密。」

……答えになっていなかったけど。

ていうか、木村君？話してくれないの？すごい気になるんだけど。なんて思っていたら、木村君が、交換した僕のおかずを食べた。そしてしばしの沈黙の後、

「……本当においしい！！」

と何やら感動していた。その声が結構大きかったので、みんなが僕たちのことを見てきた。うーん、なんだか恥ずかしいなあ。そう僕が思っていると、庄一が苛立っていたのかこんなことを言った。

「木村。まずは静かにしろ。次に、どうしてそんな行動をしたのかの説明しろ。」

庄一の声が聴いたことがなかったので、僕はちよつとビビった。でも木村君は、

「…噂の確認のため。」

座りながらそう言った。噂になっているんだ、そんなこと。なんだか恥ずかしいなあ。そう思いながら、僕は言った。

「ま、これからよろしくね。」

それに対して木村君はちよつと驚いたみただけど、すぐさま表情を消していつもの顔になってこう言った。

「…なんとなく俺もそんな気がするから、俺のことは、圭でいい。よろしく、連、庄一。」

それを聴いた庄一は納得がいけない顔をしていたけど、

「まあいいか。よろしくな圭。」

と言って笑った。僕は、これからこの面子で行くんだろうと想像してきた。

「………という感じだね。」

「そうだな。」「…懐かしい。」

圭の言うことはもつともだね。あれからもつすぐ三年が経つんだもんね。そう感慨にふけっていると、元が手を挙げた。

「どうしたの？」

それに気づいた僕が元に訊いた。そしたら、

「あの。あの頃はゴメン。」

と言った。それに対して僕たち三人は、

「なんでお前が謝っているんだ？」「…元は悪くはない。」「そうそう。気に病むことないよ。」

とそれぞれ言った。だって僕たちは、元がああなった理由を知っているから。

ただ、それを知らなかった姉さんとレミリアさんは、何のこと？的な感じで僕たちを見ていた。

「これで俺たちの出会いの話は終わりだね。意外と過去を振り返ると楽しいもんだな。」

それに気づかない庄一は、ソファから立ち上がって背伸びをしながら言った。

確かにそうだね。特に思い返す必要がなかったからやらなかったけど、こうしてやると楽しい思い出ばっかりだね。なんて思っていると、

「確かにそうね。珍しくあんたと意見があったわ。」

久美さんが鼻で笑いながら言った。どうして庄一に対してそんなに喧嘩腰なのか、僕には解らなかった。

それに対して庄一は、

「本当に珍しいな、意見が合うなんてよ。ま、それはどうでもいいや。まだまだ話したいことがあったが、これでお開きにしようぜ。」
普段ならすぐに喧嘩に移行するのに、それを流して帰ろうと言いだした。どうかしたのだろうか？そう思わずにはいらなかった。

でも、僕はそれを考えないでみんなに「もうすぐ四時だよ。帰っ

たら？」「と言ったら、みんなは「お邪魔しました」と言って帰っていった。

それから、僕はいつものことをして、寝た。ただ、寝る前に姉さんとレミリアさんに、僕は庄一と圭との思い出話をした。

過去編(7)(後書き)

次回から、十二月に入ります。更新スピードは以前より著しく遅くなります。

六 十二月上旬のある日（他愛のない日常）（前書き）

六万行きました！まさかここまで来るとは思いませんでした。

六 十二月上旬のある日（他愛のない日常）

「なあ、最近寒くなったよな。やっぱり、十二月だからか？」

「家ではもう電気ストーブがリビングに置いてあるよ。出したりするの面倒だったけど。」

「……うちはコタツ。」

昼食の時間。僕達はいつものように会話をしながら食べていた。

こんにちは、池田連だよ。自己紹介が面倒だから省略するけどね。

庄一と圭の紹介も省略。問題は無いでしょ？

今の季節は分かる通り、冬。うゝ、さむ。

食べていたら、唐突に圭がこう言ってきた。

「…エミリーさんはまだいるのか？」

その言葉に、庄一の箸が止まった。僕は、今までどうして訊いてこなかったのか不思議でならなかった。なので、正直に答えることにした。

「来週には帰るんじゃないかな？多分。」

「多分って、どういうことだ？」

僕の言葉に、庄一がツツコンできた。

「だって、姉さんがこれからどうするか知らないし、本人の意思だつてあるから。」

「…連はどう思ってる？」

圭。どうしてそこまで訊いてくるの？そう思ったけど、訊いても圭の事だから答えてくれないだろうと思った。なので、

「別に。残りたいのなら残ればいいし、帰るのなら帰ればいいよ。

よく言うでしょ？『来る者拒まず去る者追わず。』って。」

と答えた。それを聴いた二人は、何も言わなくなった。

しばらくして、庄一が口を開いた。

「…お前、やっぱり考え方が大人だな。」

「そうかな？そんなこと思ったことないけど。」

「……それも、いつものこと。」

これで、会話が終了。また三人で黙々と食べる。これを繰り返すのが、僕達三人の昼食。話してばかりじゃ、食べられないからね。

ちよつとしてから、今度は僕から話した。

「ねえ、元たちは？」

「ん？どうせ修羅場がさらに悪化してるんじゃないか？花音さんもいるわけだし。」

あ、藤木さんのことを僕達は最近「花音さん」と呼んでるんだ。理由は話す機会があったらで。

「……今頃は昼食いらず。」

「いいなあ。」

「どこが？」

「だって昼食つくらなくていいんでしょ？負担が軽くなるじゃん。」

「…その分精神的負担が大きい。」

「あ、そうだね。」

「なんだ、連？料理するのが飽きたのか？」

「別にそういう訳じゃないけどさ。最近だって新しいスープ料理に挑戦してるから楽しいし。」

「…じゃあ、どうして？」

「両親の世話が、ね……………」

「大変だな、お前も。」

「…中学生と思えない苦勞の仕方。同情する。」

本当に困ったものだよ、僕の両親は。食べながら、僕はそう思った。

昼食の時間が終わり、午後の授業が始まった。といっても、自習。確か、魔術師専門の授業だったかな。それで元は連れてかれ、久実さんは荒れていた。それでも、最初の頃よりはマシになったんじゃないかな？久実さんの荒れ具合。

「あゝ、暇だな。もう勉強したくねえよ。大体、なんで高校の授業を教わらなきゃいけないんだ。」

「しょうがないでしょ。ここはエスカレーター式なんだから。」

「…俺達は入試免除。そのかわり、高校の授業の先取り。」

「お前ら、今日の授業理解できたか？俺はそんなにできなかつたけどな。」

「僕は大体理解出来たかな？」

「…俺は完璧という訳ではないが、全部理解できた。」

「私はあんなの完璧に理解できてるよ。」

「ん？そっぴいや花音さんって、天才科学者で天才発明家なんだつたな。それだつたら……って、いつの間に？」

僕達が話していたら、いつの間にか花音さんが話に混ざっていた。

一応授業だから、席を立って出歩くのはダメなんだけどなあ。

そんな僕の気持ちも知らずに、花音さんが言った。

「自習ってやることなくて暇じゃない？だから話し相手が欲しくて歩き回ろうとしたら、丁度君たちが何やら話してたからさ、ここで話をしようと思ったわけ。」

そうですね。と僕は思いながらも、顔には出さずに花音さんも交えて話をすることにした。

「庄一。今までの内容がちょっと難しくなつただけだと思えばいいんだよ。そうすれば理解しやすくなるよ。」

「そうそう。全体的につながっていると考えればこんなの簡単だよ。」

「…
「そうは言ってもだなあ。具体例が分からねえと何とも。」

「…だつたら、今日の放課後に、ここで教える。」

「うげっ！」

庄一が嫌そうな声を出した時、僕と花音さんはクスリと笑った。

「おい、連！笑うなんてひどくね！？」

「だつて庄一の声が……。」

「…今のは面白かつた。」

「そつだよね。」

「てめえら！」

「静かにしろ！」

庄一が何か言おうとしたら、先生が注意してきた。すみませんでした。

庄一は納得がいかなかったみたいだけど、何も言わなかった。

十二月上旬のある日(2)

そして、放課後。

教室に残っているのは、僕、圭、庄一（拘束した状態）、花音さん、元、久実さん、董さん、レイジニアさんと、いつものメンバーだった。

「どうして庄一は拘束されてるの？いい気味だけど。」

「んだとこらあ！テメエだってどうしてここにいるんだよ！パトロールとか行かなくていいのかよ！」

「なんであんたがそんなこと知ってるのよ！？……それはおいといて、あんたが拘束されてるのを見たからここにいるのよ。」

「それは嘘。本当は、今日ここで元を伴って勉強会が行なわれる事を知ったから。」

「相変わらず不思議ね。どこでそんなことを訊いてくるのかしら？」
「本当ですね。」

とまあ、相も変わらぬ世間話はそこまでにしといて。

「そろそろやるうよ。時間がもつたないから。」

という僕の言葉で、みんな黒板に向いた。ちなみに、先生役は花音さんと圭。花音さんは他の人よりちょっとどころじゃない程小さいので、椅子に立っていた。残りの僕達は生徒。（庄一の拘束を外した代わりに、逃げ出そうとすると電流が流れるようにした。）

「……ここで、これが使われるわけ。理解できた？」

と花音さんの優しい解説に、

「分かりやすいわね。」

「そうですね。ちょっと分からないところがあったのですが、これで理解できました。」

「花音さん、教えるの上手だね。」

と、僕と董さんとレイジニアさんは言い、庄一、久実さん、元は、
「うっすらと理解できたわ。」

「元たちだつたら力づくで突破しそうだね。」

「したことはあるわ。楽にできたけど。」

「ちよつと、久実。話がずれてるよ。」

結局何が言いたかつたんだろう？このやりとりをして、僕はそう思った。

このままでは話が進まないと思ったのか、庄一がまとめてくれた。

「つまりだ。頼みごとでもなんでも、董さんの家に入れることは凄
い事なんだって。」

「へえ〜。」

そうなんだ。すごいことなんだ。他人事のように、僕は思った。

そんな僕を見て、花音さんと董さん以外の人は呆れていた。どうして呆れているのかなんとなく予想はつくけど、放って置いて話を聴くことにした。

「で、さつきも訊いたけど、頼みごとって？」

「あ、はい。今週の土曜日にお料理を教えてほしいんですけど……
駄目ですか？」

両手を胸の所で合わせて頼んでくる董さん。参ったな、無下に断れない。

僕は少し考えてから、「いいよ。」と承諾して教室を出た。その時に、あれ？豪邸だつたらシェフ居るよね？普通はそっちに教えてもらわない？と思っただけど、何か理由があるのだろうと思ひ、考えるのをやめた。更にその時、一緒に出てきたのか、花音さんが僕と並んでいた。

「僕に何か用？花音さん。」

「連君って頼みごとをよく聴くよね。家の事があるのに、どうして？」

「どうしてって、週末は基本的に、友達が頼んできたのなら断る理由は無いだ。暇だから。」

「暇だから休むんじゃないの？」

「普段はだらけてるよ。想像もできないだろうけどね。」

「うん。」

「即答されちゃったよ。」苦笑するしかないね。

「でもおかげで分かったよ。」

「なにが？」

「連君はやっぱりお人好しの苦労人だつてこと。あゝ、連君の家庭環境が詳しく知りたいなあ。なんとなく、面白そうな気がする。」
「そう言っている花音さんの眼は、キラキラと輝いていた。まるで、新しい研究対象を見つけた時の眼だった。」

「元の観察はいいの？」

「それもするよ？でも、将来でも出来そうだから。」

「すごいね。結婚する気満々だ。ライバル多いのに。」

「私だつて負けないもん！」

ふう。何とか話を逸らすことに成功。危なかったあ。このまま僕の家までついてきそうな感じがしたよ。

校門でそのまま別れ、僕は家へと帰った。

「あれ？上手い具合にはぐらかされた？これはますます観察してみたいよ。」

自宅へ着いた時に、花音は思い出したようにつぶやいた。どうやら、逆効果だったようだ。

十二月上旬のある日(3) (前書き)

九十話いつてました。あと、初投稿から一カ月が経っていました。驚きですね。

十二月上旬のある日(3)

帰宅して、まあいつも通りに洗濯物をこんでから夕飯を作り、洗濯物をたたんでいたら両親が帰宅し、たたみ終わって弁当を洗っていたら姉さん達が帰宅した。結局、弁当箱を全部片付け終えたら、みんな食べ終わっていた。

仕方なく一人で夕飯を食べ、終わったら風呂を沸かしにいき、戻ってきたら姉さんとレミリアさんが後片付けをしていた。

「珍しいね、姉さんがやるなんて。」

「姉としてお前ひとりに何でもやらせるかっての。」

「いつもやらせてるじゃん。家事全部。」

そういつたら、姉さんが「前はいつも二人で役割分担してたよね？」と言ってきた。だからどうしたんだよ。と思ったけど、何も言わずに二階へ上がった。レミリアさんに「ご苦労様。」と言って、一方、

「全くあいつは……って、おいレミリア！血落としそうぞぞ！」

「……はっ！……え！？あ、あわわわ！」

「……大丈夫か？これで。」

渚に言われるまで、レミリアはトリップしていたという。

一階に戻ると、姉さんとレミリアさんが明日の台本の確認らしきものをしていた。僕には分からないから、明日の昼食と朝食に使う料理の下準備をし始めた。両親は、風呂から上がって酒盛り中。

下準備中に、レミリアさんが僕の事を時折見してきた。それを見た姉さんは「仕方ないなあ。」とでも思ったのか、何も言わなかった。視線の意味が解らなかったので、僕は気にしなかった。

下準備が終わった時、いつの間にか姉さん達が風呂から上がっていたので、二人とも寝巻に着替えていた。ただ、レミリアさんの寝巻が昨日までと違かったけど、どうしてだか訊かなかった。そんなこと訊いたら、変態だなんだと言われそうだからね。なので、気付

かないふりをして下準備に使った器具を洗って片付けていった。

風呂から上がってリビングに行ったら、両親と姉さんとレミリアさんでゲームをしていた。普段僕はほとんどゲームをやらない。やる時は、庄一やまが来た時か、

「おい。連もやろつぜ。」

誘われた時ぐらい。自分ではやらないんだよ。やることがあるからね。

「いいよ。」

と、僕は頷きながらテレビの方へ向かった。

十二月上旬のある日(4)

最初は両親が圧勝してたけど、そのうち僕が縮めていって、最後にはギリギリまで追い詰めたけど、負けた。姉さんやレミリアさんは、何故か最初に負けてしまっていた。

ゲームを片付けて二階へ上がるうとしたら、レミリアさんがついてきた。ちなみに、両親と姉さんは酒盛り中。どっだけ酒飲むんだよ、あんたら。

「レン。」

「なに？」

階段を上りながら、レミリアさんが訊いてきた。レミリアさんが先で、僕が後だよ。

「これ、どうですか？似合っていますか？」

「新しく買ってきたんだよね。うん。似合ってるよ。」

「そうですか。良かったあ。」

僕の言葉に、僕を向いて胸をなで下ろしたレミリアさん。なんだか癒されるね。

「以前のど、どっちが似合っていましたか？」

「う〜ん…甲乙つけるのは僕には無理かな？こればかりは着てる本人の感性だと思うから。」

「客観的な意見が欲しいんです！」

「そこまで言われるとなあ。……駄目。無理。どっちも似合ってるよ。」

「本当ですか？」

「だって、レミリアさんが綺麗だから。どっちもレミリアさんに合わせてる気がして。」

「き、綺麗ですかっ！！？そ、そそそんなこと、ななないですよー！」

僕の一言に、レミリアさんの顔はゆでだこの様に真っ赤になり、両

手をブンブンと高速で動かしていた。あ、そんなことしたら……

「そ、そんなことないです……って、キャッ！」

「うわっ！……あ、危なかった。もう少し強かったら僕まで落ちたよ。大丈夫？」

階段を踏み外したのかレミリアさんが落ちてきたので、僕は何とか彼女を抱きしめる形で支えた。こんな事って本当にあるんだね。お、こわっ。

踏ん張る必要がなくなったので、レミリアさんを一段上の階段のそこへ座らせた。その時の彼女は顔がもう真っ赤で、僕と目を合わせしてくれなかった。恥ずかしかったのかな？

仕方がないので、僕はレミリアさんが座っている階段の空いているスペースを上って自室に行った。自室に入った僕は、今更ながらレミリアさんを抱きしめていたという事実にも、心臓がドキドキして顔が赤くなった。

時を少し戻して。レミリアは、階段に座ったまま動けなくなっていた。

もちろん、顔は真っ赤で。

今の彼女は声に出せない嬉しさで、頭の中が埋まっていた。

（キャ　　！！いい、いいいい今、だ、だだだ抱きしめられた！？レンに！？事故だったけど、だだだだ抱きしめられちゃった！！抱きしめられた時のレン、カッコよかったなあ。）

この時すでにレミリアの顔はウツトリとしていて、傍から見ると危ない人である。

それがなおも続き、

（もしこれで私の事を意識してくれたら……キャ　　！！もしそうになったらどうしよう！？うわあ、も、もう、し、しばらくは目を合わせられないよ……！！）

と思っていたところで、

「なにやってるんだレミリア？こんなところで。」

「!?!?な、渚さん!?!」

渚が現れた。そして、さっきの顔の原因にピーンときたのか、こう言った。

「ははくん。お前、連に抱き締められてもっとうしようもなく幸せだと思ってるだろう?」

「えっ!?!?どうして分かったんですか!?!?」

「え? 本当だったの?」

まさか当たると思わなかったのか、レミリアの言葉に驚いた渚。しかし驚いたのも一瞬で、すぐにこう言った。

「これで浮かれてちゃ駄目よ。ただの事故だとあいつは思ってた明日も普通に話しかけてくるかもしれないわ。だから、その時はちゃんと会話できるようにしときなさい。」

「む、むむ無理です!」

「甘えないで頑張りなさい。お休み。」

そう言って、渚は自室へ戻っていった。それを見たレミリアは渚の後ろ姿を見送ってから、

「うっうっうっう。が、頑張らなきゃ! ファイト!」

自分に気合を入れて、渚の後を追った。

七 十二月上旬のある土曜日（前書き）

七万PV突破しました！更新スピードはこんな感じで遅くなっていますが、よろしくお願いします。

七 十二月上旬のある土曜日

約束の日。

僕は、家の掃除をしていた。僕以外の人は誰もいないから、やるのは僕一人。結構大変だよ。

「ふう。これで終わり、っと。姉さん達の部屋は、自分たちでやってもらおうっと。」

僕と姉さん達の部屋以外は全部やった。自分の部屋は、自分で使っているのでやる事は無いし、姉さん達の部屋はプライバシーの問題上、やらない。こればかりは自分たちでやってもらいたいんだけど、多分、やらないだろうなあ。

掃除が終わって時計を見ると約束の時間の五分前だったので、僕は掃除用具を片付け始めた。

掃除用具を片付け終えたと同時にチャイムが鳴ったので、僕は「は〜い。」と言って、玄関に向かった。

「おはようございます。連君。」

「おはよう。董さん。」

玄関を開けたら、董さんが立っていた。清楚、という言葉がぴったりの董さんの恰好に、僕は今更ながらに緊張した。

「なにかしていたのですか？」

そんな僕の気持ちも知らずに、董さんが訊いてきた。僕はドキドキしながらこう答えた。

「あ、ちよっと、掃除をね。土曜日は基本的に掃除と買い物以外は何もしないから。」

「あ。そうなんですか。それは大変でしたね。ところで、大丈夫ですよね？」

「え、うん。大丈夫だよ。」ちゃんと戸締りはしといたから問題は

ないしね。

「では、こちらに乗ってくれませんか？」

「これ、凄い高級車だね？こんな所に止めていい車じゃないよね？」

「いいから乗ってください。」

そういうやりとりがあつて、僕はその車に乗って董さんの家に行くことになった。

車内にて。

「そういえば今更なだけどさ。」

「なんですか？」

僕は、前にふと疑問に思ったことを訊くことにした。

「どうして僕に料理を教えてもらいたかつたの？シェフとかいるんでしょ？どうしてその人達に教えてもらおうとしなかつたの？」

それに対して、董さんはあたふたとしながらこう答えた。

「え、そ、それは………ちょっと教えてもらえなくて………。」

「え？でも、最近料理のレパトリーが増えた理由を元が訊いたら、シェフの人に教えてもらったって言うてたらしいけど………。」

「……あの、騙してごめんなさい。」

「え？騙す？」

いきなり話が変わつたので、僕は訊き返した。そりゃそうだよ。単純に質問してただけなのに騙してごめんって。意味が分からないよ。

それが表情に出ていたのか、董さんが説明してくれた。

「連君を私の家に招待する理由です。もちろん、料理を教えてもらいたいんです。でも、今回はちょっと皆さんに秘密にしてもらいたいんです。」

「秘密？もしかして、僕だとばれると大変なことが起こるの？」

「いえ、そういう訳ではないのですが………あ。家が見えませんでした。」

まだ最初の方しか説明してもらっていないのに、目的地が見えたら

しい。董さんが窓を指していたので、僕は窓を覗いてみた。そして、僕の目に飛び込んだ光景がとても衝撃的だった。

なぜなら、家がデカイから。おそらく三階建てなんだろうけど、建物自体の大きさがとてつもなくデカイ。金持ちって見栄っ張りだよな。こういう建物を見ると、本当にそう思う。

それに、敷地が広い。良くこんな土地を見つけたものだ。本気で感心するね。

まあ、そんな考えを置いて。

「お嬢様、玄関に着きました。」

「ありがとうございます。源さん。じゃ、降りましょうか。詳しい話は家に入ってからにしましょう。」

「あ、うん。」

運転していた源さんの言葉で、僕と董さんは車から降りた。

「では、私は車を置いてきますので。」

僕達が降りたら、源さんは車を発車させた。車をもとの場所へ置いてくみみたいだ。

車が去っていくのを見送った僕達は、家に向かった。

「そういえば、源さんって誰？ただの運転手じゃない気がするんだけど……。」

玄関を前にして、僕は董さんにそう訊いた。雰囲気としては、何でもできそうな人のような気がする。例えば、執事長とか。

そんな僕の質問に、董さんは驚いていた。

「あれ？違かった？」

「いえ。最初に源さんにお会いになる方は、みんな運転手だと思われるので……。」

「じゃあなんなの？」

「源さんはこの家の執事長です。」

「あ。やっぱり？」

「やっぱりって？」

「そんな雰囲気を感じたからさ。」

そうこう言っていると、玄関前に着いた。僕は、その玄関を見て再び緊張した。なんだろう、圧倒される感じがする。

そんな僕をよそに、董さんは普通にインターフォンをおして、「董です。私の友達をお連れしました。」と言った。そしたら、玄関の扉が開いて、そして、

「……おかえりなさいませ。董お嬢様。」「」

メイドさんと執事が一斉に僕達（と言ってもおそらく董さんだけ）に向かってお辞儀をした。

しかも、左右から一寸の狂いもなく同時に。

十二月上旬のある土曜日(2) (前書き)

家の中の描写を期待しないでください。

十二月上旬のある土曜日(2)

僕はその光景に圧倒されながらも、メイドと執事の比率を何ともなしに数えていた。

うーん、メイド6に執事4ですか。若干メイドよりなのは、家族構成のせいかな？

そう観察をしていたら、董さんが僕の事を催促していた。あれ？いつの間に？

そう疑問に思ってたけどどうでも良くなったので、催促されるがままに家の中に入った。

家の中に入って、僕は董さんに案内されるがまま歩いた。その時に董さんの専属メイドさんらしき人三名がついてきた。名前を聞いたところ、無表情で無口そうな人がメイド長で堂本未来さん。年齢は推測で二十代前半だろうね。

その隣の活発そうな人が、その部下の松村真帆さん。年齢は十代後半くらいかな？

それで真帆さんの隣が、同じく未来さんの部下で松村美帆さん。年齢は真帆さんと同じで十代後半のような気がする。そして、おとなしそうな気がする。

あ、今名前で気づいたけど、真帆さんと美帆さんは双子だ。すごいね。

そんな紹介を終えてしばらく歩いていたら、董さんが「ここが客間です。先程の詳しい説明はここです。」と言った。

客間に入った僕は、部屋が広いことに驚きを感じなくなっていた。だって両親に連れられていろんな家に行ったことあるもん。どれもここほど広くはなかったけどさ。

僕は、董さんに勧められるがままソファに座った。結構座り心地良いなあ、これ。やっぱり高級品だからかな？

董さんは僕の正面に座り、メイドさんたちはその後ろに立っ

た。ビシツとしてるね。

そんな僕の感想をよそに、董さんは話し始めた。

「それで、家に招待した本当の理由なんですけど……お父さんとお母さんが喧嘩してしまっただけですよ。」

「あのすみません。」この時点ですでに理由が分かった気がする。

「なんですか？」

「もしかして……僕にその仲直りをして欲しいの？」

「そうなんですけど……ちょっと違うんですよ。」

「え？」

何か歯切れの悪い董さんの言葉。一体僕に何をしてもらいたいのだろうか？

すると、董さんの代わりに未来さんが説明してくれた。

「現在、奥様とご主人様はここ一週間近く喧嘩をなさっています。

その原因が、あなたにあるのです。」

「え？僕ですか？」

困った。思い当たる節が無い。どうして僕が喧嘩の原因になるんだろう。

さらに説明が続いた。

「そうですね。どうも、ご主人と奥様はあなたの事を気に入ったみたいなのです。そこまですら喧嘩にもならなかったのでしょうか、その後が問題なのです。」

あの、それって僕のせいではない気がするのですが……。そう言おうとしたけど、未来さんに口答えするのは僕にはできなかった。

代わりに、僕は質問した。

「問題ってなんですか？」

「そうですね。あなたが知らないのは無理ないでしょう。知らないうちに当事者になっていたのですから。」

薄々分かっていたんですね。本当に僕はそう思った。

「問題は、意見が分かれた事です。池田連、あなた様を執事として家で雇うか雇わないかで揉めているのです。」

やっと本題に入ってくれた未来さん。あれ？僕の意味は？そう思っていたら、

「お父様は連君の事を雇うとおっしゃっていました。しかし、お母様は反対してるのです。それは私も分かります。連君の大変さは、よく耳にしていますから。」

董さんがまた話してくれた。

え〜っと、話を整理すると……………。

どうやら、僕は董さんの両親に気に入られているらしい。

それで、僕を執事として雇うかどうかで揉めている、と。

ふ〜ん。なるほどねえ……………。

「大体わかったよ。」

「どうもすみません。仲直りしてもらうには連君の意見が」

「すみません。遺言書を書きたいのですけど、紙とペンありませんか？」

「ちよつと待つてください！！どうして死ぬ前提なんですか!？」

「だって……………董さんのお父さん、魔術師じゃん。無理だよ。僕死んじゃうよ。」

どうすれば生きて帰れるかな？

「大丈夫ですよ！いくらお父様でもこんなことで怒ったりしないはずですか」

「ん？董、お客さんか？……………って、池田君じゃないか！久し振りだな！」

何と間の悪い事でしょう。董さんが必死にお父さんの事を言っていたら、ご本人が登場してしまいました。もうこれは他人事のように振る舞うしかないよね。

「久し振りですね。学祭以来ですね。」

「そうだな。妻が私の代わりにお礼をしにいったから、学祭が最後だな。それより、どうしたんだ？君の事はいつか呼ぼうと思っていたのだが、まさか今日来ているとは。」

「ちよつと、董さんから依頼がありましたね。」

「そうなのか？ま、ゆっくりしていつてくれ。」

「分かりました。」

そんなやりとりで、董さんのお父さんはどこかへ行った。

うーん。家と外じゃ雰囲気は全く違うね。僕の両親とは大違いだ。

そう思っていたら、董さんが気を取り直して言おうとしたけど、

「あら、連君じゃないですか？いつぞやはどうも。」

今度は董さんのお母さんが客間に来た。こうなると董さんが気の毒になるね。

「お母様、何しに来たのですか？」

僕が挨拶をする前に、董さんが話を訊いていた（ちよっと怒ってない？）。そうすると、僕って挨拶しづらいよね。

その質問に、お母さんは笑みを絶やさずにこう言った。

「なについて、源さんが元君とは違う男の子を連れてきたと言っていたのですよ？気になって執筆できないわ。ま、見に来てよかったです。それじゃ、連君。ゆっくりしていつて下さいね。」

そして、僕に何も言わせないまま部屋を出て行った。

十二月上旬のある土曜日(3)

僕は、これからどうしようか本気で考えた。だって、どうもこれは僕の意見によって決まりそうだから。そして、僕の意見によって是最悪なことになりそうだから。

そう考えていたら、客間の二つのドアが同時に開いて、客間に入りながら言ってきた。

「「そういえば、連(池田)君に訊きたいことがあったの(んだ)。」」

同時にドアが開いたので、当然鉢合わせという形で互いに顔を見ることになる。その結果、

「「ふん!」」

同時にそっぽを向いた。やっぱり仲がいいね、董さんの両親。

その光景を見た董さんは、

「お父様、お母様、お客様の前で露骨にやらないでいただけませんか?」

と、二人に近寄って言った。しかし二人は、

「いや、いくら董の頼みでもこれは無理だな。」

「そうね。こればかりは無理よ。」

と言って、互いに頑として譲らなかった。

それに耐えきれなかったのか董さんが、

「だから連君を連れてきたんです!本人の意思が重要だと思ったから!」

その言葉で、未来さんは「お嬢様、成長なされましたね……。」「と言っていて、あまり話さなかった松村姉妹も「かっくいい」。」「真帆、茶化しちゃ駄目……。」「と言っていた。

そして、董さんの両親はというと、

「そうか!それで池田君が来ていたのか!」

「確かに、本人に聴けばこれ以上無いくらいにはつきりしますね。」

納得していた。どうしよう、もうこれで逃げられなくなった気がする。その時に、僕の携帯電話が鳴ったので、電話に出ることにした。「もしもし?」

『よう連。』

「庄一?どうしたの?」

『今、董さんの家か?』

「うん。そうだけど。」

『そうか。じゃあ、さっさと頼みごと終わらせてきてくれ。いや、終わらして来てください、お願いします。』

「へ?」

庄一は突然何を言ってるのだろうか?電話をしながら、僕はそう思った。その時の僕の周りはいつと、董さんの両親は僕の会話を聴いていて、董さんはメイドさんたちと話していた。話している内容は聴こえなかったけど、何故か董さんの顔が赤くなっていた。どうかしたのだろうか?

それに構わず、庄一は話を続けた。

『あ、ワリイ、ワリイ。順を追って説明するか。今日、俺は一人でぶらついてたら圭と出会ってよ。そこから二人で適当に歩いてたら元が追われてたんだよ。それを見た俺達が隠れたら、その場所に元が来たんだよ。』

「偶然が凄い重なったね。」

『そうだな。そこで、仕方なく元が追われていた理由を訊いたんだが、それが自業自得だよ。見放そうとしたんだが、追ってきた奴らに見つかってよ。それで俺達で逃げてるんだよ。』

「それで?どうして僕が?」

『今は何とか撒いたみたいだが、どうやらお前に用があるみたいだぜ。だからお前も来てくれ。そうだな・・・集合場所は学校という事で。』

「え??...分かったよ。さっさと終わらせて学校へ行けばいいんだね?」

『そついう事だ。じゃ。』

と言って、庄一から電話を切った。やれやれ。休みだったのに今日は面倒なことが立て続けに起こるなあ。そう思いながら携帯電話をしまつたら、董さんの両親が僕の事を見ていた。

「なんですか？」

僕はその視線を受けながら董さんの両親を見た。

「いや、池田君はいつも苦労してるんだなと思ってな。」

「これぐらい普通ですよ。一番忙しくて二日ぐらい不眠不休でしたから。」

あの時は連休だったから良かったけど、平日だったらどうなっていた事か……。

と、そのことを思い出していたら、

「……………」

あれ？みんな黙っちゃったよ。どうして？

「私でもその年でそんなことをしたことはないのだが……………」

「私でもないです。一体何をしていたのですか？」

と、董さんの両親たちが口々に言っていた。その後ろでは「お嬢様、あの人は同じ学友なのですか？」「そうですね……………」。「すごいね！あの人！」「そう、ですね。未来さんでもそこまでできませんよね？」「出来ることはできますが、池田さまと同じ年齢ではやるうとしません。」と、そんなやりとりがあったみたいだ。

僕はそれらの言葉を聴き流しながら、出来るだけ早く事を終わらせるために言葉を紡いだ。

「あの、僕はこの家の執事になりません。そう言われてうれしいのですが、生憎家の事をしなければいけませんので。それに、僕は基本的に家事を特技としてるので、これでお金を稼ごうとは思っていないんですよ。」

そう言うってから、僕は董さん見てこう言った。

「そついう訳ですから。ありがとございます、董さん。家に招待してくれて。」

すると、董さんのお父さんがこう言ってきた。

「そうか……しかし、もつたいないな。君ならそれで稼げるだろうに。」

それに対して、董さんのお母さんはこう言った。

「連君は家事を仕事だと思っていないのですよ。むしろ、習慣としてこなしているだけです。だから、そう言った話には飛びつかないのですよ、あなた。」

まあ、本当の理由は別にあるんですけどね。と、董さんのお母さんの言葉を聴きながら僕はそう思った。その時に、未来さんが僕の事を見ていてこう言った。

「池田様。何かおっしゃりたい事があるのならどうぞ。」

あれ？どうしてばれたんだろう？ひょっとして顔に出てた？

そんな僕を見て、未来さんは笑いもせず説明してくれた。

「私はちよつと特殊な魔術師です。基本的に相手が何か言いたいと思っている時にだけ、私の魔法が発動するのです。」

その説明を受けて、僕は納得した。しかし、それだと隠し事が出来ないのでは？素直に僕はそう思ったけど、話すことにした。

「董さんの言う事にも一理あるんですけど、本当は別な理由なんですよ。自分の特技でお金を稼ぎたくない理由。」

「そうなの？」

「はい。」

僕の発言に、董さんはもちろん、客間にいた全員が驚いていた。そして、僕は説明した。

「特技でお金を稼ぎたくない理由は、単純に僕がやりたくないからです。おそらく、他の職に就けなくても。」

その言葉に、なんていうんだろう、皆さん呆れていた。

そうだろうと思ったけど。そう思いながら、僕はこう言った。

「董さん。」

「はい、なんですか？」

「これで終わりだよ。」

「ええ。」

「じゃ、学校まで送ってくれない？いや、学校までじゃなくていいや。それに近い所で目立たないところがいい。」

「え？あ、はい。分かりました。……源さん呼んでくれませんか？友達をお送りするので。」

「かしこまりました。では、真帆。美帆。貴方達は源さん呼んできてください。私は二人を案内します。」

「わかりましたー！」「はい！」

一方、董さんの両親はというと、

「なんだか蚊帳の外だな。」

「そうですね。でも、連君は諦めた方がいいじゃありません？」

「もったいないが、諦めるしかないか。」

「そうした方がいいですよ。」

等と言っていた。良かった、かな？

十二月上旬のある土曜日(4)

未来さんに案内され、僕は董さんの家を出た。丁度その時に、僕を迎えに来た時とは違う車が来た。どうみても、普通乗用車だった。

「驚きましたか？」

「うん。高級車ばかりじゃないんだね。」

「近くまで行くのに、そういう車だと不便ですから。」

そんなやりとりの後、僕が車に乗ったら董さんが車窓越しでこう言ってきた。

「今日はありがとうございました。このことは秘密でお願いします。」

「分かってるよ。それより、こちらこそありがとう。家に招待してくれて。結構よかったよ。」

「そう言ってもらえると、嬉しいですね。…あ、今度はお料理教えてくださいませんか？」

「僕が暇だったらね。」

そして、車は出発した。

友達が指定した、集合場所へ。

連を乗せた車が出発した後。

「お嬢様、どうして先程のご学友の方に料理の指導を頼んでいたのですか？私達に頼めば、教えますのに。」

未来は董にそう訊いた。感情に起伏が無いように感じるが、どことなく拗ねてる感じがした。

「そうなのですけど」

と、言った後に続けようとしたら、

「連君の料理はともおいしいのよ、未来。どのくらいかというところ、プロの料理人のプライドがボロボロになるくらいおいしいの。」

董の母にセリフを奪われた。その言葉を受けて、未来は疑わしい

目をしていった。

「本当なのですか？」

「本当ですよ。ねえ董？」

「はい。」

連の料理の腕をべた褒めしていた人たちがいたとか。

十二月上旬のある土曜日(5)

「ありがとうございます。」

源さんにそうお礼を言い、僕は集合場所の校門前に来た。そして、車が走り去った方向と同じ方向から、三人の人影が猛ダツシユしてこっちに来てるのが見えた。

その人影はだんだん大きくなっていき、

「ちくしょう！あいつらただの不良だろうが！どうして振り切れねえんだ！？」

「…グループで俺たちの事を搜索していたと推察。だから、そんなに体力を使っていないと考えられる。」

「二人とも！学校の前に人がいるよ！」

「よつしゃあ！」

という声と共に、三人が僕の目の前で止まった。その後ろから柄の悪い人たちが追い付いてきた。あれ？この人達、会ったことがある気がする……？

とか思っていたら、庄一曰く不良の人たちが僕たちの事を囲んだ。

(その数二十人)

「ち、ちくしょう。こ、こまでか……。」

と、囲まれた時に庄一は言った。これから殴られることを想像したのだろう。しかし、そうはならなかった。なぜかという、困んでいた一人の不良の人が僕の事を見つけたらしく、

「あ、兄貴！？おいお前ら！兄貴がいるぞ！」

と叫んだ。そのセリフに、庄一たちは首をかしげ、僕はこの人達が誰か理解し、困んでいた人たちは僕の近くに集まって、

「……お久し振りです！兄貴！」

と言った。それに対して、

「あ、久し振りです。それに僕、皆さんより年下なので兄貴はやめてくれませんか？」

「…どこで会った？」

「えっとね、スーパーまで行く道中で絡まれていた人がいたからさ、何してるの？って言ったたら追っかけられて。」

「…それから？」

「逃げていたら追い詰められてさ、殴られそうな雰囲気になったからとっさに料理を作ってあげるから勘弁してって言ったたらどうも調理学校の生徒でさ。だったらつくれよという話になって学校まで連行されて、まあ料理をつくって食べさせたら、こうなったんだよ。」

「いつ会ったの？」

「確か…：僕が中学二年の事かな？その時確か、みんな高校一年生くらいだったよね？」

「…：そうっす！！」「…：」

皆、息ピッタリですごいね。と僕が心の中で賞賛を送っていたら、庄一たちは固まってひそひそと話していた。

「（大変なつながりができてるな。）」

「（ねえ、連とプロの料理人だったらどっちがうまいと思う？）」

「（…：多分、プロの料理人が少しだけ負ける。これは、あくまで現段階の話。）」

「（と、なると、だ。こっから先の連次第で…：…：…：）」

「（プロの料理人を遥かに凌ぐかもしれない？）」

「（…：可能性はある。）」

？内容は分からないけど、時折僕をみても呆れた視線だったり、羨望の眼差しだったりしていた。良く分からないなあ。

と、僕の周りにいた不良の人たち（調理学校の生徒）が思い出したように、僕に向かって言った。

「…：兄貴！俺達はあれから必死に学校で勉強したんす！その成果を見てください！！」「…：」

「え？あ、ちよっと…：…：って、待ってえええ！！！」

僕が何か言う前に、腕をつかまれ強制連行という形で連れ去られた。話を聴いてよ〜！

置いてかれた庄一たちは、

「連の後ついていこうぜ。」

「…無理。それより、確実な方法がある。」

「え？それって？」

「…学校の場所を調べて、先回りをする。」

「よっしゃあ！行ってみようぜ！」

「大丈夫かな？」

連がつれていかれた先に先回りすることにした。

十二月上旬のある土曜日（6）

「着いたつすよ、兄貴。」

「ふう。……久し振りだね、ここ。」

僕が着いた場所は、前にこの人達に絡まれた時に連れてこられた調理学校の校門前だった。

それから間もなく、庄一たちが追いついてきた。

「そういえば兄貴。この人達とは知り合いなんすか？」

息切れで倒れている庄一たちを見て、僕を連れてきた人（鈴木さん）が訊いてきた。

「うん。さつきも訊いたよね？その質問。」

そんなやりとりをしながら、倒れている庄一たちを他の人たちが担いで、僕は再び調理学校の敷地内に入った。

「ここが、俺達が普段使っている調理室つす。」

「変わってないねえ、ここも。」

この集団のリーダー格である鈴木さんが、僕達を調理室へ案内してくれた。と言っても、この人達だけしか使っていないらしい。理由は、落ちこぼれ専用のためにつくられたから、とか。

確かに、去年会った時の料理の腕はかなりひどかった。僕を兄貴と呼ぶようになった後、一度だけそれぞれが作った料理を食べさせてもらった。その時の味は、董さんよりはマシだったとだけ言っておこう。

「俺達は、あれから必死にここで料理を作っていました。今では、学年の成績で全員中間くらいにまで行けました。これも兄貴のおかげつす！」

「いや、みんなが自分で頑張った成果でしょ？僕はきっかけをつただけじゃないかな？」

「それでも良いんす！それだけでも恩があるんすから！」

「『イエス！！』」

みんな、本当にノリがいいなあ。と、騒いでる集団を見て、僕は思った。

一方、庄一たちはというと。

「大丈夫か？」

「……（フルフル）」

「……む、り。」

一足先に回復した庄一と、未だにぐったりしている圭と元が隅っこでそんな会話をしていた。

「さあ、兄貴！俺達つくりますから、見ていてくださいね！あと、食べた感想を言ってください！」

「あ、うん。分かったよ。」

と言ったら、鈴木さんが

「よっしゃー！全員バラバラの料理だ！俺達がどのくらい成長したか、兄貴に見てもらおうぜ！」

とみんなに言って、返ってきた返事が、
「……っしやー！！」「……」
と、やけに体育会系のノリだった。

一斉に調理し始めて、もう十分が経過した。この時には既に、庄一は立って歩けるくらいまで回復していた。散々走ったのになんとう体してるの？と、真剣に思った。元と圭は、何とか立ち上がるくらいまでは回復した。

「情けねえな、元。能力使えば一発だろうに。」

「それじゃあ意味がないの。能力使ったら結局体力とか使うからね。回復したとしても、また疲れるだけだよ。」

「……庄一の体力が常軌を逸している。」
そんな会話をしているところに、僕は近寄って会話に混ざった。

「二人とも、大丈夫？」

「おいおい。俺への心配はなしか？」

「そういう連はどうして平気な顔してるの？」

「……ここまで来るのに軽く十分かった。全速力をキープした状態です。」

「え？僕は普段あの人たちが使っている近道で来たから、そんなに疲れていないよ？」

「俺は無視か？」

「「ずるい！！」」

そんな会話をしていたら、後ろから声をかけられた。

「兄貴。できましたんで、どうぞ。」

そう言っつて、一人（坂江さん）が僕に料理を持ってきた。僕は、持つてこられた料理を一口食べて、テーブルに置いた。

「ど、どうですか？」

「……う〜ん。正直に言うと、まだ味付けが雑だよ。もうちょっと整えないと。それに具にもうちよつと熱を通した方がいいよ。そうすれば食べやすくなる。」

「そ、そうですか！ということは、まだ上達するってわけっすね！ありがとうございます！」

そう僕に言っつて、坂江さんは後片付けをしに戻った。それと入れ替わりになるように、別な人（佐倉丸さん）が来た。

「次、お願いします！」

「分かったよ。」

それから、後の人たち全員の味見をしていった。だって、全部食べたらお腹いっぱいになるんだもん。残った料理は、庄一たちが食べていった。余程お腹がしていたのだろうね。三人ともがつがつ食べていた。

全員の味見が終了して、僕はみんなにこう言った。

「みんな、本当によく成長したね、と言いたいところだけど、注意されたところをちゃんと直せばまだ良くなるからね。それに、料理の道にゴールは無いんだ。諦めないで頑張っつてね。」

そう僕が言っつたらみんなが、

「「「「了解しました！！」」」」」

と言ってくれた。嬉しいね、やっぱり。

ちなみに、庄一たちは「食った、食った。」「…食い過ぎた。」「動けないね。」と残った料理を三人で全部食べ終えていた。

そして、僕がちよっとしたアドバイスをしていたら、乱入者が現れた。

十二月上旬のある土曜日(6) (後書き)

お久しぶりです。ちょっと忘れてました。これからもよろしく願
いします。

十二月上旬のある土曜日(7) (前書き)

気づけばもうすぐ百話。読んでくださる皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

十二月上旬のある土曜日（7）

「あんだ達、なんで部外者を校内に連れて来てるのよ！しかも、どう見ても中学生じゃない！最近おとなしくなったと思ったのに、また問題起こす気！？」

その人は、この学校の制服を着て、長い髪を後ろで留めてポニーテールみたいにしていて、腕の所に『生徒会』と書かれた腕章をつけている、女の人だった。しかも、十人が十人振り返るだろう、綺麗な人だった。

僕は、近くにいた鈴木さんに訊いた。

「あの人は誰？」

それに対し、鈴木さんは歯を食いしばりながらこう言った。

「…あいつはこの学校の生徒会会長、倉敷来夏^{くらしきらいか}。俺たちの事を、何かにつけて退学させようとしてる奴っす。しかも、あいつの料理の腕は学年最高。三年生でさえほとんどの人が勝てないらしかっす。」

「ご丁寧な紹介ありがとうね、鈴木君。」

「何の用だ？一応、許可は貰っているはずだぞ？」

笑って言ってる倉敷さんに対し、挑発してる鈴木さん。さっき自分で言った通り、倉敷さんとは因縁があるようだ。

「そうね。ただ、あんだ達がこの子たちを連れてきたのに問題があるのよ。」

「なんだと？」

「あんだ達が中学生を連れてきたから、教師側が見て見ぬふりをできなくなったの。」

「なるほど。それであんだがお出ましになったわけか。役職就くと大変だな。」

「そうよ。だから、この子たちは私達が保護するわよ。」

と言って、いつの間にか庄一たちの近くに四人の生徒がいた。庄一

「私たちは、動けるか？つて、訊いても囲まれてるもんなあ。」「……まだ無理。」「能力使っても良いけど、基本的に使ったら面倒だからなあ。」「知ってるよ、それくらい。だからこうして見てようぜ。」「どうして？」「……連の執る行動を見る。」「要するに、成り行き任せつてやつだ。」「樂觀してるね。」「などと言っていた。囲んでいる人達に聴こえてるよ、君たち。」

もうそつちの方は無視して、自分たちの方を考えることにした。

「はん。断るぜ。俺達の客人をはいどうぞ、つてやるわけねえだろ。」

「そう。なら仕方ないわね。だったら、ここはこの学校の伝統に則つて、対決しないかしら？」

「……分かったぜ。こつちは誰でもいいんだな。」

「ええ。こつちは私だから。」

それを聞いた鈴木さんが、僕を交えてみんなで円になった。

「おいどうするんだ、鈴木。あんなこと言つて。」

「ワリイ。つい抑えきれなくてな。」

「でも実際どうする。あいつに俺達は、一度でも勝てたことあったか？」

「ないな。あいつが自分で負けを認めた以外に勝ったことなんて、一度もない。」

「じゃあどうするんだ!？」

そうやって話を聴いてるうちに、僕はちよつと倉敷さんの実力が気になった。なので、

「だったら、僕が出てこようか？」

と言ったら、全員が僕の方を見た。

「……………駄目？」

僕がそう言つと、みんながウーンと唸つてからまるで示し合わせたように、こつち答えてくれた。

「……よっしゃ!それでいくぞ!」「」「」

そう言つた後にみんなが元の場所へと移動した。

「決まったのかしら？」

「ああ、決まったぜ。お前の相手は」

「よろしく願いますね？」

「なんで保護する人と勝負しなきゃいけないのよ!？」

「お前が言つたる? 『誰でもいい。』 って。」

「そうだけど……まあいいわ。たとえ中学生でも容赦はしないから。」

とまあ、相手側の了承も取ったことだし、

「いっちょ頑張りますかあ。」

見下してる人に負けたくないよね。

料理のテーマは『冬にぴったりのスープ』。食材と調理道具はここにあるやつを使うことになっている。

「料理に自信があるようだけど、年の差を思い知らせてあげるわ。」と、自信満々に言う倉敷さん。その言葉に、庄一たちを囲んでる人たちから黄色い声援が聴こえてきた。人気があるんだね、やっぱり。それに対して僕は、いつもの顔でいつもの口調で言った。

「よろしく願います。」

審判として、この学校の先生が数名来ていた。どうも、部外者対生徒という事例が初めてだったらしく、いつの間にかギャラリーがいた。

「頑張れ!頑張れ!」

と、鈴木君たちが僕に向かって応援していたのを見て、ギャラリーの生徒から「あの子、一体何者?」「中学生だよな?」という声が出た。

先生は時計を見てから、

「始めっ!」

と開始の合図をした。それまでに僕は、料理に使う食材を見繕っていた。

開始の合図と同時に、僕は料理を開始した。こんなのは初めて

なんだけどね。

調理を開始して間もなく。ギャラリーとして見に来た生徒と、審判としてきた先生、さらには相手である倉敷でさえ、目の前の光景に驚きを隠せなかった。倉敷に至っては、あまりの驚き様に調理が全くといって良いほど進んでいなかった。

もはや静寂に包まれたこの中で、一人の生徒がポツリと言った。

「……すごい。本当に中学生？」

そう。連の動きには無駄がなく、その上綺麗に野菜を切ったりしている。それは、この学校の生徒たちにとって、いや、この学校に通う者たちにとって衝撃的なものだった。

その動きは、一流の料理人さえ凌ぐものだった。

ただ、驚いていない人たちがいた。それは、庄一たちと鈴木たちであつた。

「いつ見てもすごいな、連。」

「兄貴、流石つす！」

「……いつも大変だから。」

「何度見ても慣れないんだけど……。」

そして、庄一たちを囲んでいた生徒の一人が庄一たちに訊いてきた。

「ねえ。あの子、本当に中学生？」

それには、代表して庄一が答えた。

「ああ、そうだ。……言つとくが、この学校には多分、連に勝てる奴は誰もいないぜ。あいつは、あそこの奴らの師匠みたいな立場だからな。」

そう言つて、庄一は鈴木たちを指差した。その当人たちは、そんなことに気付かずに連の応援をしていた。

そして、調理時間終了。連は作り終わった料理を見ながら「まだちょっと調味料の加減がなあ……。」とぼやき、倉敷は一応作り終わっていたので、審査員である先生の前に出した。

両者の料理を見た先生達は、感心の声を上げた。なぜなら、二人

の料理の見栄えがどれもプロの料理人に似ていたからだ。ちなみに、連は作った料理がちよつと不満だったが、顔に出さなかった。

まず、倉敷の料理。反応は当然のように「おいしい。」だった。それに対して倉敷は、お礼を一言述べた。

次は、連の料理。先生達はゆつくりとスープを飲み、しばらく口の中で吟味した。それが長かったのでギャラリがざわつき始めたら、一人の先生が口を開いた。

「……悔しいが、一人の料理人として私個人は、負けを認める。」

その言葉を聞いた庄一、圭、元、審査員の先生以外の人は全員、その先生の言葉に耳を疑った。

その先生を皮切りに、次々と他の先生達も同じことを言った。ただし、その言葉を聴きながらも、連の気持ちは不満だった。

先生達の言葉を聴いた倉敷は、

「私とこの子の勝負です！どっちが勝ったんですか！？」
と先生方に詰め寄った。しかし、それは単に認めたくない事実を突きつけられることになる。

「無論、あの子の勝ちだ。どうしてこんな子がこれほどまでの実力を持つているのか分からないが、他の先生達も同じ意見だろう。」

その言葉に鈴木たちは大喜びし、庄一と圭は最初から分かっていたという顔をし、元は「連。君は一度花音に調べてもらいたいよ。」と神妙な顔で呟いていた。

納得がいかない倉敷は、連がつくったスープを飲んだ。そして、
「……私の負けだわ。」
と力なく言った。

それを聴いた鈴木たちは連を胴上げし始めた。そこに、庄一たちも混ざった。胴上げされてる本人は、「あ、ありが……って、うわっ！！」と、うるたえていた。

胴上げが終わったら、倉敷さんが僕の所に来た。ちなみに、残っ

た僕と倉敷さんのスープは、ギャラリーの皆さんと先生達が飲んで
います。スープを飲んでる音がするたびに、「うめえ!」「倉敷さ
んもおいしいけど、あの中学生もすごいおいしい!」「っていうか、
あの子のスープ、ほっぺたが落ちるぐらい美味しかったんだけど。」
という声が出ている。おいしく飲んでくれるなら、作った甲斐があ
ったって思うよね。

「なんだあ、倉敷さんよお?」

近づいて来た倉敷さんに、鈴木さんがガンをとばしたけど、無視さ
れた。倉敷さんと僕の距離がだいぶ近づいた時、不意に倉敷さんが
こう言った。

「あなたが、こいつらを更生させたの?」

「うん。まあ、そうだと思いますよ?」

「……ふむ。それならば納得がいくわね。君、名前は?」

「連です。池田連。」

「連か。いい名ね。では連。勝負の結果だが、私の負けよ。しかも、
完膚なきまでに自信を崩されたわ。」

「倉敷さんが料理上手だから、僕も本気で応じたんです。ありがと
うございました。」

そう言ってお辞儀をすると、倉敷さんが両腕をあたふたと動かしま
がら、

「い、いや!私にとって得るものが大きかったから頭をあげて!」
と言った。これを好機と見たのか、

「お、お、珍しいこともあるなあ。生徒会長であろう倉敷がこんな
に動揺してるなんて……グフオっ!」

鈴木君が何か言おうとしたら、思いつきり倉敷さんに殴られた。

倉敷さんって、強いんだね。

その時、周囲にいた全員がそう思ったに違いない。

このままではマズイと思ったのか、倉敷さんがわざとらしく咳払
いをして話を戻した。

「と、ともかく!私の負けという事にしておくわ!次会う時はこの

学校に入学する時ね！」

その言葉に、鈴木君たちと庄一たちと僕は、一斉に首を横に振った。まさかここで揃うとは思わなかったのか、それとも否定されたのに驚いたのか、倉敷さんは僕に訊いてきた。

「え？入学する気はないのかしら？」

僕の代わりに、鈴木君が答えしてくれた。

「そうだけ。兄貴は中高とエスカレーター式の学校に通っているんだ。前に俺達の学校へ来てほしいと言ったら、きっぱりと断れちまつただげ。高校はもう決めてるからってよ。」

そういえばそんなことあったなあ、と懐かしんでいたら、倉敷さんは納得がいつていない顔をしながら、

「…………そう。なら強制はできないわね。勿体無い。でも、うちの学校へ遊びに来るのなら歓迎するわよ。この人達に誘われなくても、自分の意志で来ていいからね。」

と言ってくれた。その時の眼が凄く優しいかったので、僕は反射的に頷いた。

僕の返事をどう取ったのか分からないけど、満足そうに頷いた後、倉敷さんはこの調理場から出て行った。庄一たちを囲んでいた人たちも、倉敷さんを追って出て行った。

僕は、他の人達にはれないように出て行った。鈴木君たちに「ありがとう。」と言って。

帰り道。僕たち四人は歩きながら話していた。

「連、お前どれだけ腕を上げる気だよ。あの倉敷って人、あの学校で上位の料理人だって、まわりの奴が言ってたぞ。」

「本当だよ。毎度のことながら驚かされるよ。」

「…………今度、鍋パーティーでも、やる？」

「あのねえ。」

三人が言いたいことを言っていたので、僕は黙っていられなかった。「いい？言っとくけど、僕はあの人に勝ったと思ってないからね。」

最初、倉敷さんが僕の動きに目を奪われていたから、何とか勝てたようなものだからね?」

「そうはいつてもよ、お前の料理食べた先生が料理人として負けたって言ってるんだぜ?そこはとうなんだよ?」

「そこはお世辞じゃないの?ほら、僕中学生だし。」

「……全員が言ったんだぞ?」

「それは、たまたま好みがあつたんじゃないの?」

「もうやめよう、庄一、圭。これ以上は言っても無駄だよ。」

と、ため息交じりに言う元。どうしてそんなこと言ったのか分からなかつたけど、たいしたことではなさそうだったので、僕は無視して別な話題を話すことにした。

「そういえばさ、もうすぐ冬休みだね。」

「そうだな。今年もいつも通りか?お前らは?」

「……いつもと同じ。家で宿題をやりながら、寝たり遊んだりする。」

「僕もそうかな?今年は姉さんとレミアさんもいるみたいだけど、特に変わるってことは無いだろうからね。そういう庄一は?」

「俺?俺は……そうだな。仲直りしねえとそれどころじゃないんだよな。」

「え?」

庄一の言葉に、僕と圭は庄一の顔を見た。今なんて言ったの?

庄一は僕達の顔を見てハツとした後、元に話を振った。

「元はどうするんだ?家族と旅行か?それともあいつらと何かするの?」

「え!?!ぼ、僕は……決まってるないんだ。いつもは宿題をやっていたら、久実たちが遊びに来るんだけどね。今年は……どうなるか分からないんだよな。」

「ふん。」

それから話がなくなつて、僕達は自然に帰路に就いた。

家に帰った僕を出迎えてくれたのは、

「お、お帰りなさい、レン。」

「もうすぐ四時だぞ、連。どこほつつき歩いてたんだ。洗濯物はやつといたからな。」

私服の姉さんとレミリアさんだった。

僕は仕事が早く終わったのかと考え、だとしたら姉さんが買い物に行ってくればいいじゃないかと思ったけど、それを言うとなにされるか分からないので、

「ただいま。」

と言って、自室へ戻っていった。

戻ってから家用の財布を机から出して、下へ降りた。そしたら、「買い物へ行くんだろ？だったらこれもついでに買ってきてくれ。」と言って姉さんから渡されたメモを見たら、シャンプーなどの日用雑貨だった。しかも、どこの製品と、商品名が事細かく書いてあった。

僕はそれを見て、

「自分で買ってきなよ。」

と言って外に出ようとした。そしたら、姉さんが僕の肩に手を置いてから、

「ほら、私、有名人だろ？買い物なんていったら、それどころじゃなくなるだろ？」

と言ってきた。

「今まで気にした？そんなこと。それに、この町の人は気にしないよ。他の所は知らないけど。あ、あとさ。外に出たくないならネットの通販で買ったら？そうすれば問題は無いでしょ？」

と僕が反論したら、

「そうね。でも頼んだわよ。」

無茶苦茶なことを言われた。鬼だね、全く。

もう何も言えなくなった僕は、ため息をつきながら、降参という意味で黙って外に出ようとした。そしたら姉さんが、

「あ、そうだ。私これからはここに暮らすから。それと、レミリアもね。だから、レミリアも一緒に買い物に行ったらどう？」
と言ってきた。へえ、姉さん達ここに暮らすんだ。

．．．はい？

なんだって？姉さん達がずっと暮らす？ちよつと待ってよ。ただでさえ両親で大変なのに、その上姉さん達も？

いやいやいや。きつと何かの聴き間違いだ。たぶん．．．．．
そう！たぶん「まだしばらく」という意味があるに違いない！

と一人で納得していたら、姉さんが苛立ちを込めた声で、

「いい？これからは私たち家族とレミリアを含めた五人で暮らすからね？わ・か・つ・た？」

と言った。その頃レミリアさんは、顔を赤らめながら何度も頷いていた。

どうしよう、家出したくなったよ。

これから先が全く見えないこの状況で、僕はせめてもの気分転換に買い物に出かけた。

「はあ。」

スーパーへ向かう途中、僕は何度目か知らない溜息をついた。こうしてるから苦労しかないのかな？と、思ってしまった、またため息どうしよう。これで過労死とかシャレにならないね。と思いながら、僕はスーパーを目指した。向かっている途中、体がだるい気がしたけど気にしなかった。どうせいつもの事だから。

スーパーに入って姉さんが指定してきたものと普段買っているものを買い（レシートは別にしてもらった）、店を出て、商店街へ向かった。商店街で買い物をしているときに、店の人達から「顔色が悪いが大丈夫か？」とか、「風邪でも引いたか？」とか心配された。そんなに顔色が悪いのかな？と、買い物をしているときに僕はそう思った。

買い物が終わりに家に戻って、僕はいつものように買って来たものを冷蔵庫に入れ、姉さんに頼まれたものを渡し（ついでに徴収もした）、自室へ戻った。その時姉さんから、「お前、さっきより顔色が悪いが大丈夫か？」と言われ、その隣にいたレミリアさんから「レン、大丈夫？」と心配された。ていうか姉さん。さっきから顔色が悪いのを知ってたのなら言ってくればいいじゃないか。

自室へ戻った時、僕は急に視界がかすんだような気がした。そして、体がふらついた。

え？もしかして……。と思う間もなく、僕は意識を失った。前にもあったね、確か。

「……………」

気がついた時、僕は寝かされていた。しかも、見知らぬところに天井しか見れなかったけど、ここがどこだか分かった。でも、

あれ？ここって、病院？でもどうして？

という疑問が頭に浮かんだんだけど、すぐさま氷解した。

そういえば倒れたんだっけ、僕。これで二度目だね。

疑問が氷解したので上半身を起こそうとしたら、体全体に倦怠感がのしかかっているみたいで、体を動かせなかった。

つまらないなあと思っていたら、病室に入ってきた人たちがいた。顔は何とか動かさせたので人が来た方へ動かしたら、姉さんとレミリアさんが居た。なぜか、二人とも泣きそうな顔をしていた。

「どうしたの？」

僕は二人に訊いた。声は普通に出せるみたいでよかったと思いがながら。

そしたら、姉さんが答えてくれた。

「すまなかつたな、連。お前に無茶を押し付け過ぎた。さっき医者から聴いたんだが、お前は過労と風邪が同時に来たんだと。しばらく

く安静にしときなさい、だそうだ。」

過労に風邪ね。風邪なら引くかもしれないけど、過労は中学生ではあまりないもんね。僕は二回目だけど（中学生の時のみの換算で）。

そしたら、今まで黙っていたレミリアさんがこう言った。

「すみません、レン。」

「なんで謝るの？」

「だって、レンの顔色が変わっていることが分からなかったんですよ。」

「それだったら僕自身も知らなかったし、他の人達も知らなかったんだから、別に気に病む事は無いよ。それに、体力がない僕が悪いんだから。」

「そんな事は無いですよ！連はいつも顔色一つ変えないで、家事と学校を両立してるじゃないですか！凄い事ですよ！」

そこまで言われるとは思わなかったの、僕は何も言わなかった。

まさかそこまで言うとは自分でも思っていなかったのか、レミリアさんは顔を赤くしてから何も言わなくなった。

それを見た姉さんは若干呆れながら、

「連。今日はここで安静にしとくよ。明日には退院できるだろうけど、退院したからっていつもと同じことをしないでね。また倒れられても困るから。」

と言って、レミリアさんと一緒に帰っていった。どうも、明日に僕の着替えとかを持ってきてくれるみたいだった。

帰り際、「父さん達にはいっといたから。」と姉さんが言った。

それを聞いた僕は、入院費とかの支払どうしようかなあと考えていた。

連の見舞いから帰る時。

レミリアと渚は一緒に歩いていた。どちらも、表情は暗かった。

歩きながら、レミリアはポツリと言い始めた。

「すみません。私がこれからずっと住むって、言い出したせいで…。」

その言葉を受けて、渚は首を横に振りながらこう言った。

「謝るな。私が連の体調を把握していなかったんだ。姉失格だな。

それに、どうやら心労もあつたみたいだしな。」

「え？」

レミリアは、渚の言った意味が分からなかった。

「あいつは、私が突然帰って来た時やレミリアが家に住むことが決まった時、それに他にも原因があるらしいが、どうにもストレスと疲労がたまっていたみたいだ。それに気付かなかったのが悔しいな。」

その言葉に、二人は黙つたまま帰路に就いた。

十二月上旬のある土曜日(7) (後書き)

百話記念というものを全く考えていないので、普通に話を続けます。

八十二月上旬のある日(とある月曜日)(前書き)

百話です。今回の話は……ちょっとしたおめでたい話です。

八 十二月上旬のある日(とある月曜日)

領収書

入院費、治療費の合計六万七千円也。

僕が入院した次の日。ま、すぐ退院したんだけどね。で、すぐに領収書が来て、僕は仕方なく自分の財布で払おうとしたら、レミリアが「いつもお世話になってますので、これくらい払わせて下さい。」と言ってあっさり払ってしまった。

僕、一応払えるんだけどね……。

そう思いながら、僕はレミリアさんと姉さん達と一緒に帰った。

「すみません。迷惑でしたか？」

「うん。正直言つと。」

「あう！」

「こら、連。代わりに払ってくれたのに、なんという態度だ。謝れ。」

「そうだね。ごめんね、レミリアさん。」

「い、いえ。私が勝手にやったものですから……。」

「さつきはありがとね。家に帰ったらその分返すよ。」

「え！？そ、そんな訳でやったわけではないのですが……。」

そんなことがあって、僕はレミリアさんに領収書分のお金を渡した。

次の日。

「ねえ庄一。」

「なんだ？」

学校へ行ってから、僕は庄一に話しかけた。

「どうやって体力つけたらいいのかな？」

「は？」

僕がそう訊いたら、庄一の目が点になった。どうも事情を把握していないのだろう。そしたら、圭がいつの間にか来て、説明した。

「……一昨日の夕方、過労と風邪で入院。原因は、過度の過労と心労。そのせいでレミアアさんと渚さんに泣きそうになられて自分の体力不足を痛感。だから。」

「圭。君はどこかで見ていたの？それとも、医者の人達から聞いたの？」

「……ここでは話せない。」

僕はこの時ほど、圭が怖いと思った事は無かった。

圭の説明を聞いて、庄一が言った。

「分かったよ。いいぜ。俺の家に来いよ。今週末でいいな？」

「うん。」

「ただし、俺の部屋は覗くなよ。それだけ約束してくればいいぜ。」

「それ位なら別にいいけど……。」

そんなに部屋が汚いのだろうか？僕はすぐさまそう思った。

それを聴きつけたのか、元たちが近寄ってきた。

「どうかしたの、元？」

「ん？久実さんや董さん、それと」

「……レイジニアさんと花音さん。なにか？」

僕達が、近寄ってきた五人に対してそう訊くと、それぞれが答えた。

「何やら楽しそうにお話をしていたので、何をお話しているの？気になるよ。」

「なんか変な話をしていないか、確かめに来たのよ。」

「面白そうだから。」

「気になっただけよ。別に心配はしていないわ。」

「単純に話が気になっただけだよ。」

それぞれの答えを聴いて、僕はふと疑問に思った。

「あれ？元たちって確か職員室へ呼ばれていたんだよね？用事、終わったの？」

それに答えたのは、久実さんだった。

「もちろんよ。それに、もうすぐ一校時目が始まるから、早めに切り上げて戻ってきたのよ。」

大変だなあと思いながら、僕は気にせずこう言っつて、自分の席に座った。

「それだったら授業の準備しないとね。あと五分で始まるから。」
僕の言葉に、全員が慌てて自分の席へ戻った。

昼休みになつて。僕達三人はいつも通りの席の状態になつた。

そして、話題は当然のように一昨日のことになつた。

「なあ、入院したんだろ？その金はどうしたんだよ？」

「僕が払うつもりだったんだけどね、レミリアさんが代わりに払ってくれたんだよ。結局レミリアさんに払ってくれたお金を全部返したけどね。」

おかげで僕のお金がまたなくなっちゃったよ。と肩をすくめながら、僕は弁当を食べた。

そしたら、庄一たちが驚いていた。

「どうしたの？」

「いや、レミリアさん、まだいたんだな。」

「……それより、入院費やらを一人で払う普通の中学生に驚くところ。」

あ。そうだったね。

「でも、僕ほとんどもらったお金を使っていないからそれ位はあったよ？それに、自分用のお金は基本的に節約と称してほとんど使わなかったんだ。だから残っていたんだよ。」

「お前の場合、使う余裕がなかっただけだろ。」

「…そうだな。」

そう言いながら、僕達は弁当を食べていった。

そして、庄一は僕にこう言った。弁当を食べながら。

「ま、そんなことはどうでもいいんだ。体力をつけたいんだろ？」

「うん。」

僕が即答すると、

「だったら、常日頃から鍛えることだ。体力つてのはな、毎日毎日筋トレとかやっていれば勝手につくんだよ。例えば、ジョギングを毎日三キロ朝やるとか、腕立てと腹筋を毎日二百回やるとかな。」

庄一がありがたい例え話をしてくれた。

でもね……………。

「ねえ、それは普段やり慣れている人が出来ることじゃないの？」

「…それを初めての人がやると、絶対に筋肉痛で翌日歩けなくなる。」

「

「そうか？」

庄一、君は普段そんなことをやっているの？

僕はそのことに戦たたかいた。

放課後。僕が帰る準備をしていたら、元が僕に近づいて来てこう言った。

「ねえ、今日暇？」

暇と言えば暇だけど、やることを考えると暇ではないので、

「暇じゃないよ。家の事があるんだから。」

と言った。それに納得したらしい元は、

「そっか。じゃ、また明日ね。」

と言って先に帰っていった。おそらくパトロールに行くのだろうけど、どうして僕に今日の放課後の予定を訊いてきたんだろう？

……………どうしてだろうね？

考えても分からない僕は、家に帰ることにした。普段は、校門前までは庄一たちと一緒に帰るんだけど、今日はいそいそと帰ってい

った。理由を訊いたら、「野暮用で。」と、同時に返ってきた。

って、あれ？元だけってのもおかしくない？普段は久実さん達が一緒にいるのに。

それについて考えて出た結論は、『たまにはそういう事もあるだろう。』だった。ま、別に僕には関係ないだろうしね。

そう結論付けて、僕は家に帰ることにした。

八 十二月上旬のある日（とある月曜日）（後書き）

次回は、前書きの意味が分かるかもしれません。

十二月上旬のある日(とある月曜日)(2)

「ただいま。」

そう言つて、僕は玄関のドアを開けた。そしたら、見覚えのある靴がたくさん置いてあつた。

僕はどうしてこんなに靴があるのか疑問に思いながら、真つ先に自室へ戻り、私服に着替えて明日の準備をした。

そして明日の準備をし終えたので、リビングに行こうとして部屋を出たら、

「あれ？庄一に圭？どうしたの？二人とも制服のままだけど。」

庄一と圭が部屋の前にいた。

「……………」

「い、いやな？ちよつとお前の家で遊びたくてそのまま来ちまつたんだ。で、お前の姉さん達がいたから、先にお邪魔したわけだ。」

僕が質問したら、圭は黙り庄一は焦つた口調で答えた。

……………

何か違和感があるな。

なんとなくそう思つたので、僕はとりあえず訊くことにした。

「ねえ、何隠してるの？」

それに対して圭は黙り、庄一は言葉を詰まらせた。

うん。やっぱり隠してるね。

そう確信した僕は、とりあえずリビングに行こうとした。そして、

「な、なあ連！商店街いこうぜ！久し振りに駄菓子屋で何か買おうや！」

庄一が唐突に思いついたような声で提案してきた。

それにますます確信を持った僕は、普通にリビングに向かった。

その時に庄一と圭から制止の声が聴こえたけど、気にしなかった。

リビングのドアを開けようとしたら、何故か開かなかつた。

僕は、とりあえず持っていた鍵（家の中の鍵で閉まるところは全部持っている）で鍵を開け、リビングの中に入った。

そこで見た光景は、

「・・・・・・・・・・・・・・・・何してるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そんな平然と入ってこないで！！」「」「」「」

「」

おそらくパーティーの準備を姉さんと両親、レミリアさんと元たちが頑張っしてしていた。

よく誕生日会とかの内装を、みんなで作っている最中だったようだ。

そして、僕の後ろから来た庄一と圭を見て、姉さん達が文句を言っていた。

「お前ら、連の足止めしとけって言ったろ！」

「無理ですよ！いろんなところでボロが出てたじゃないですか！」

「誰よ、『俺達に任せとけ。』って言ったのは。」

「……面目ない。」

「ていうか、もとはと言えば元が自宅に誘うの失敗したのが悪いんじゃないかねえか！」

「確かにそうだけど！「家の事で忙しい」って言われたらどうにもできないじゃん！」

「もうちよっとな粘りなさいよ！」

「最後のバリケードとして鍵を閉めたのだけれど、意味なかったわね。」

「そうだな。良く考えれば、連が家の事を仕切っているからな。鍵を持っていて当然だったな。うっかりだ。はっはっは。」

「あの、それを早く言ってくれませんか？」

「あゝあ。ばれちゃった。」

「一応秘密だったのですけどね。」

さて、一通り文句や愚痴などが聴こえたところで、

「これは一体どういう事？」

僕はみんなに訊いた。

「誕生日？誰の？」

「誰って、お前だよ。お・ま・え！」

一通りみんなの話を聞いてなんとなく分かったけど、僕はまだ不思議だった。

「僕、みんなに誕生日言っただけ？」

「俺と圭は知ってたろうだが。」

「…（コクリ）。」

「私達は家族だから知ってたさ。」

「僕は庄一から聞いた。」

「私は元と庄一が話していたのを聞いたのよ。」

「私もです。」「私も。」「私もだわ。」

「私は渚さんから聴きました。」

そういえば庄一たちは知ってたっけ。僕はみんなの話を聞いて、そう思った。

「僕、思いつき忘れてたんだけど。」

「そんな感じはしてたけどな。」

僕の言ったことに、庄一はため息交じりでそう言って、他の人達は頷いていた。

でも、そのことに不思議に思ったのか、圭が訊いてきた。

「…どうして忘れてた？」

え？どうしてって…

「家事で忙しかったし、基本的に両親帰ってくるの遅いし、家族の誕生日なんて覚えてないもん。そもそも、誕生日って祝ってもらえるものなの？」

そう僕が言ったら、姉さんと両親以外は驚いていた。

「マジで!？」

「うん。」

庄一の驚き様に若干引きながら、僕はそう答えた。そしたら、

「よし！とりあえずこつち来い！」

と言って、元たちと庄一と圭とレミリアさんが集まっていた。どうやら、何か話し合っているみたいだ。

その間に、僕は両親と姉さん達に近寄った。

「そういえば、私達の誕生日って祝ってくれたっけ？」

「祝ってもらわなかった気がするわ。」

「私もだな。撮影現場で誕生日のサプライズがあった時は本気で驚いた。その時に、他の所では祝うのが普通なんだと思ったわ。」

そうやって話していたところに、僕は混ざった。

「ねえ、父さん達は会社どうしたの？姉さん達は今日仕事あったんじゃないの？」

「ん？私達はとりあえず商談成立させて帰ってきたんだ。上司に無理言ってるね。」

「そうね。でも、結構早く帰らせてくれたわよね。」

「ふ〜ん。で、姉さん達は？」

「私達は今日仕事無かったのよ。だから色々と準備してたの。」

「それにしても、今まで祝ってくれなかったのにこういう風の吹き回し？」

「そりゃあ、なあ？」

「普段頑張ってくれてる息子の誕生日だからよ。」

「ま、ぶっちゃけて言うなら、お前の友達の庄一から電話があったな。『明日連の誕生日なんで誕生日会の会場として貸してくれませんか？』と言ってきたからなんだが。」

「姉さん。そこは嘘でも言わないところだと思っよ。」

そんな話をしていたら、どうやらあっちの方での話し合いが終わったようで、代表として庄一が僕に向かって言ってきた。

「連。」

「なに？」

「お前、今日は何もするな！！」

「へ？」

突然の事で、僕はどう反応していいのか分からなかった。

どうして庄一に言われなきゃいけないんだろっ？とさえ思った。

「どうして？」

「どうしてって、あんな……」

僕が訊いたら、庄一がどう説明しようか考えていなかったのか、会話がとまった。その時に、

「い、いつもレンがやってくれているのですから、きよ、今日くらいはやらなくても罰は当たらないと思います!!」

と、レミリアさんが言った。その言葉を聴いた僕達は、ポカンとしてレミリアさんの方を向いた。すると、僕の肩を姉さんが叩きながら、

「ま、そういうこった。今日はゆっくりしていいわよ。なんせ、あなたの誕生日なんだから。」

と言った。うん、と唸りながら考えてから、僕はこう言った。

「……そういえば、僕は皆の誕生日知らないや。それに、みんなの誕生日祝ってないから、気を遣ってくれなくて結構だよ。」

僕がそういうと、みんながずっこけた。何か変なこと言った？僕としては当たり前だったんだけど。

そんな表情をしていたのがまずかったのか、庄一がキレた。

「ああ!!もういい!!とりあえずお前、どっか行って時間つぶして来い!!その内に俺らがやっておくから!!さっさと行け!!」

そう言いながら僕をリビングから出そうとしていたので、

「分かったよ!!今日はもう帰らないから!!じゃ!!」

と、僕も半ばやけくそで言って自室へ戻り、自分の財布といつものバックを持って、家を出た。

今日は絶対に家に帰らないぞ、と思いながら。

十二月上旬のある日(とある月曜日)(2)(後書き)

はてっどいで雲息を怪しくさせってしまったのでしょっつまあとりあ
えず……見守ってください。

十二月上旬のある日(とある月曜日)(3)

連が家を出て行った後。

「何やってんのよ、この馬鹿庄一!!」

ゴン!!

「いったあ!？何するんだ久実!!」

「あんたがあんなこと言ったから、連がどこか行っちゃったじゃない!？どうするの!？自分で今日はここへ帰らない、って言ってるのよ!」

「うなもん、ただの強がりだろ!!どうせ戻ってくる!」

「あんたのその根拠のない自信じゃ頼りないわよ!!」

「なんだと!」「なによ!？」

と二人で喧嘩していたり、

「すみません。私があんなこと言ったばかりに……………」

「別にレミリアのせいじゃないよ。あいつが意地を張ってるだけなんだ。それに、私の家は祝い事なんて皆無だったからね。そうだから?」

「え?」

「正月くらいじゃなかったか?普通に祝ったことあるの。」

「あら、結婚記念日とかあったじゃないですか……………でも、渚や連だけの祝い事なんてやらなかったわね。」

「そういうわけだ。私は仕事である程度祝ってもらったが、あいつは皆無。家事で褒められたことなんて一度もないだろうしな。」

「それで辛くなかったのでしょうか?」

「さあな。あいつのことだ、『自分でやらなきゃ大変なことになる』って認識で毎日やってたんだろうな……………その責任は、私にもあるのだけどね。」

「渚さん……………」

と何やら結構なことを言っていたりしていた。ただ、それを冷静に見ている人達もいた。

「どうするの〜?」

「庄一と久美は喧嘩してるし。」

「あそこは何やら雰囲気が悪いし。」

「連君、戻ってくると思いますか?」

「……多分、戻ってこない。あいつはそういう奴。追っかけていこうとしたら、逃げられ、抵抗され、見失い、こっちが迷子になる。」

「最後のは何?」

「…連の方がこの町を詳しく知っている。前に俺がヒントらしきヒントを言わなかったのに、俺がいた場所を言い当てた。」

「すごい。ますます連君の事調べたいなあ。」

「そしたらどうするんです?」

「う〜ん。どうしたらいいんだろう?」

「…魔法を使えばいい。対象を池田連。範囲をこの町にして。」

「残念ながら、こういった私用では使えないのです。」

「…だったら、」

「何かあるの、圭?」

「…これを使う。」

そう言っ、圭はパソコンを取り出した。かなりコンパクトサイズなので、持ち運びに便利。だから、圭はいつも持ち運んでいる。

圭がパソコンを起動させたとき、丁度両親が言った。

「みんな!とりあえず先に準備を終わらせよう!ちよつとしたハプニングがあつたが、連がいない今のうちにやろう!……ま、ばれてるけどな。」

「そうよ!この場で喧嘩していても意味は無いわ!だったら何を優先にするか分かってる?さ、準備するわよ~!!」

そう言っ、から、連の両親は飾り付けをやり始めた。それを見た渚とレミリアもやり始めた。

その光景を見た元たちは、

「僕達もやるのか？」

「そうですね。」「そうだね。」「そうね。」「…俺はパソコンをやる。」

と言つて、圭以外は作業をやり始めた。

そんな中で喧嘩していた庄一と久美は、自分が場違いだと知り何も言わず再開した。

十二月上旬のある日(とある月曜日)(4)

家を勢いよく出てきたのはよかったんだけどさ……………。

「これからどうしようかな？」

僕は寒空の中ブラブラと歩いてた。

しまったな。自分の部屋に戻ったのなら、コートくらい持って来ればよかった。と今更後悔しても意味が無いので、

「缶コーヒーでも買ってからどうするか決めよう。」

そう言いながら、僕はコンビニに向かうことにした。

歩きながら、もうすぐで六時か、夕飯はどこで食べようかな、と思っていた。それから、明日の学校どうしよう、とか、今日みんなどうするつもりなんだろうか、とか思った。

そんな考えをしていたからか、コンビニには割と早く着いた感じがした。

「いらっさいまっしやー!!」

「いらっしやいませー。」

店にはいるたびに、この人はわざとやっているのだろうかと思う。

僕は夕飯として何を買うか悩んだけど、結局缶コーヒーだけにした。

「ありがたございにやしたー!!」

「ありがたございましたー。」

温かい缶コーヒーだけを買って店を出たら、空は暗く星が少し出ていた。……………寒かったけど。

僕は店の前で缶コーヒーを飲むかどうか悩んだけど、近くに公園があったのでなんとなくそこで飲むことにした。

公園にあるベンチの一つに腰を掛け、僕は缶コーヒーを手に持ってカイロ代わりにした。

最初は火傷するかと思ったけど、だんだんと温かくなってきた。

ある程度温かくなったので、僕は缶コーヒーを飲んだ。ふう。体が温まる。

飲み終わったあと、僕はこれからどうするかストレッチをしながら考えていた。

誰かの家にお世話になるなんて論外だし、近くに宿泊施設なんてない。

となるとやっぱり野宿だな、と思ったので、僕は次にどこで野宿しようか考えた。

うーん。見つからない場所で、寒さがしのげる場所。何処かにあったかな？そう考えながらストレッチをずっとしていたら、ふと思っただ。

こんな所でストレッチをやったら警察を呼ばれるんじゃないか？

それが現実になったのか、車のブレーキ音がしたので、僕は温まった体で当てもなく走り出した。こうなったら意地でも帰ってやらないさ。

「あれ？確かあの方は・・・・・・・・・・。どうかしたのでしょうか？」

公園内で不審な動きをしている人がいたため車を止めたら、その人が逃げてしまった。

誰だったのか薄々見当がついた寺井家メイド長こと、堂本未来は、車で追いかけてよとはせず、そのまま家に帰った。

闇雲に走っていたら、とある空き地に着いた。ここは確か・・・・・・・・

「中学校の近くにあった空き地だ。ということは、公園から走って来たって事が、ここまで。」

そう呟きながら、ここからどこへ行くのが悩んだ。基本的に野宿で過ごすとしているので、人の家に厄介になるわけにはいかない。そ

うすると、野宿する場所が限られてくる。ここら辺で一番近い森でも四キロ近くあったので、こういう空き地か、さっきの公園みたいな場所じゃないと野宿できない。でもそれだと庄一たちに絶対に捕まってしまう。

さてどうしようかと空き地で考えていたら、車が一台空き地の前で止まった。どうやら、パトカーの類ではないみたいだった。

どうしてここで停まるのかと思ったけど、こんな時間にこんな所に一人にいるからだと思い直した。

そして、車の運転席の方のドアが開いて運転していた人が出てきた。出てきた人に、僕は驚いた。

「み、未来さん！？どうして？」

「どうしてと訊かれると、あなたがこんな時間に一人で公園にいたからなんです。」

僕が驚いて訊いたことを、表情一つ変えずに淡々と答えてくれる未来さん。本当に驚いた。どうしているのかまだ分からないよ。

そうしていたら、今度は未来さんが訊いてきた。

「あなたはどうしてここにいるんですか？今日はあなたの誕生日らしかったのですが。」

あの、すみません。

「それ、董さんから訊いたのですか？」

「ええ。なんでも、昨日お嬢様のご学友から電話があったらしく、張り切っていました。ですからあなたがここにいるの不思議でならなかったのですが……何かあったのですか？」

「ええ。実は……。」

僕は仕方なく、未来さんに今日の出来事を話した。と言っても、さっきまでの事だけだよ？それ以外は蛇足だからね。

事情を聞いた未来さんは、

「家に帰る気はないのですか？」

と訊いてきた。その言葉に僕は、

「まあ、帰る気はないですね、今のところは。」

と答えた。一応、これは僕の本心だ。今回はみんなに悪いけど、一人でいたいからね。

その答えを聞いた未来さんは、

パシン！と僕の頬をはたいてから、こう言った。

「池田様。あなたは馬鹿ですか？」

僕は、未来さんが怒っているのを感じ、何も言わなかった。

「どんな気持ちでお嬢様方がやっていると思うのですか？その気持ちを無駄にする気ですか？あなただって、いつも料理を作っているのですから、それがどんなに辛い事か分かるんじゃないですか？」

その言葉に、僕は前にそんなことがあったなあと思った。

あれは僕が小学生の頃だっけ。分量間違えて沢山作ったものを、姉さんが半分くらい捨てたんだっけ。あの時は失敗したなあと思っ
たし、捨てるなんてもつたいないと思っ
たし、せつかくつくつたの
になあとも思っ
た。

あの時の事を思い出し、僕は思った。

あゝあ。変なことで意地張っちゃったなあ。これからどうやって謝ろう？

そんな僕を見た未来さんはちょっとだけ笑った顔をつくりながら、
「理解できましたか？」

と訊いてきたので、僕は笑顔をつくって、

「そうですね。ありがとうございます、未来さん。」

と言った。そしたら、未来さんがちょっとだけ視線を逸らしながら、
「家にお帰りになるのでしたらお送りしますよ。私達も呼ばれますので。」

と言った。

・・・・・・・・・・・・・・・・ん？私達？どういうこと？

急に未来さんの言った意味が分からなかったので、僕が困った顔
をしたら、

「それはともかく、車にお入りください。始まるのが遅くなってしま
います。」

と答えた。

十二月上旬のある日(とある月曜日)(4)(後書き)

次回は誕生日パーティーです。果たして連はどう祝われるのか!そしてフラグは立ってしまうのか!

人物紹介その四（前書き）

ドバっと一気に紹介します。あと、おまけもつけてみました。

人物紹介その四

堂本未来（19）・・・寺井家のメイド長で、董の専属メイド（みたいなもの）。髪は黒髪のショートヘア、服装はメイド服。美人だが、無表情。連と出会う前は感情があまり顔に出ていなかったが、最近董やその両親たち以外でもわかるくらいには、感情で表れ始めている。メイド長をやっているので、超有能。魔術師でもあり、董の師匠となっている。好きなものは人形と裁縫。メガネはかけていない。最近、連の有能さに素直に感心し、なおかつ、気になっているらしい。

松村美帆（16）・・・松村姉妹の姉で、同じく寺井家のメイド。髪は腰までであるロングヘアで、そのおかげかどうか知らないが、片目だけを隠している。顔立ちは可愛く、癒されると使用人たちからは評判。

基本的に有能だが、人見知りや恥ずかしがり屋のせいで、うまく人と接することができない。董でさえ、三週間かかった。趣味は、読書・スポーツ・綾取りなど。最近、自分より年下のはずの連がずいぶん大人っぽいと感じたのか、ひそかに尊敬しているらしい。ちなみに、一般人。

松村真帆（16）・・・松村姉妹の妹で、（以下略）。髪は姉と違ってショートで、顔立ちは全く同じ。だから、美帆が髪を切るとどっちがどっちだかわからなくなる時がある。体型だけが違って、姉は胸が小さいのに対して、こちらは大きい。

メイドとしては有能だが、大雑把。基本的にだらけている。やるべきはやるのだが、怠け者である。

性格は快活で明るい。誰とでも仲良くなれるようで、董とは、会っ

たその日に仲良くなった。だからなのか、董に対してタメ口を使っている。というか、大体の人はタメ口。趣味は、ほとんど美帆と同じ。最近、董の友達は愉快な人が多いなあと羨ましがっているらしい。同じく一般人。

源さん(？)・・・寺井家の執事長。年齢は六十代後半らしいのだが、詳しいことは誰ひとり知らない。

服装は燕尾服。いつもそれで生活している。顔立ちは年相応の老け顔。だが、何でも優しく教えてくれるので、意外と人気者である。性格は、年のせいなのか穏やか。執事としてはもう完璧な人で、未来が来る前までは一人でメイドと執事をまとめていた。しかも、年の割には機敏に動き、格闘術も衰えていない。

最近、連がどれほどの人物が見極める機会がないのか模索している最中らしい。一般人。

調理学校の人々(不良グループ)・・・連が通っていた小学校に近い場所にある専門学校に通っている、成績最低の人たち。人数は二十人くらいで、連に出会う前までは「学校の恥さらし」などと言われ、手の付けようがなかった人たち。

連と出会ったことにより改心し、しかも連が教えてくれたので(少しだけ)、今では成績は中盤にまで上がった。そのせいで一度疑われたが、彼らが不正などしていないことはわかっていたので、今では「恥さらし」と言われることはなくなった。リーダーは鈴木。

余談だが、彼らは現生徒会長と犬猿の仲である。最近、兄貴(連)の教えをみんなで復唱し、それから料理をするらしい。あと、来夏が負けを認めるような料理を日夜研究中らしい。全員一般人。

倉敷来夏(17)・・・不良グループたちがいる調理学校の生

徒会長。髪型はポニーテール。茶髪。体型は、どっちかというところやスレンダーだが、美人と言える。

料理の腕は学校内では一番上（生徒だけなら）。生徒や先生からの信頼も厚く、自分や他人に厳しい。

そのせいか、ことあるごとに鈴木たちのグループとは対立する。

また、何事も潔いので、勝負の方法に反した場合は自ら負けを宣言する。だからなのか、男女構わず告白もしくはラブレターをもらう（学校内という意味で）。

最近、連に負けたことでプライドなどがぶっ壊されればスランプになったようだが、連の顔を思い出すとスランプから抜け出せたようだ。そのうえ、料理の腕を上げたらしく、先生にいろいろとアドバイスを訊いたりしているらしい（ただ、先生達の方がショックが大きく、参考になるものは特になかったらしい）。一般人。

遠藤千亜妃（20）・渚の中学までの同級生。商店街にあるボタン屋の一人娘で、看板娘。高校を卒業してからすぐに家の手伝いをするという、親にとってはものすごくありがたい孝行者。だが、それゆえ親が娘の将来について不安になっているらしい。

結構な美人で、高校のころは「優しいお姉さん」という愛称のもと、何かと告白されていたらしいが、すべて断っていた。理由は、「他に人が好きな人がいるか。」の一本で通したらしい。

渚とは親友で、中学校のころまでは渚がとにかく目立っていたので、美人でも相手にされなかつたらしい（本人は、そちらの方がよかつたと思っているようだ）。

最近、連と渚がよく似てるなあと思いつながら、会った時には連に声をかけることを欠かさないらしい。一般人。

柊宙（？）・・・情報屋（裏の顔として）。仕事で飛び回っている、家と呼べる家がない。どんな仕事かは、誰にも言っていない。

顔は美形。だから女性には大人気。言葉巧みに誘い、気になることを訊いて特に何もしないで別れるのが普通で、彼曰く『今のところ本当に好きになれそうな人がいないので。』だそうだ。情報屋としては、新参者なのに結構有能。仕事柄どこでも飛び回っているせいか、彼が持つてくる情報は有益なものが多い。最近、圭の友達である池田連の料理の秘密を知りたいと密かに思っているらしい。

日食の大将（？）・・・表は食堂の大将、裏は古株の情報屋。日暮食堂の店主（三代目）で、店を空けることはせずに日夜頑張っている。店を空ける場合は、連に頼むか、休む。

モットーは『地域に根強く知られるお店』。

顔は結構いかついが、笑っている顔は結構愛嬌がある。髪は結構短めで、頭にタオルを鉢巻代わりに巻いているのも特徴。

普段は優しいが、へまをした人に対しては容赦なく怒鳴りつける。人目も気にしないうえ、声がでかいので、周りの人は思わず注目してしまう。

情報屋の腕は超一流で、圭に情報屋とはなんたるかを教えた人。ちなみに、既婚者（子供もいる）。

余談だが、日暮れ食堂の店主になる場合、同時に情報屋を世襲する（この世界では珍しい）。

最近、連を店で働かせたいと思っている。一般人。

オマケ

誕生月別人物分け

四月……岡田庄一、レイジニア・ゼロ、源さん
五月……清水久美、連の父親、元の父親
六月……庄一の母親、久美の母親、木村圭、藤木花音
七月……寺井董、連の母親、圭の母親、堂本未来
八月……董の母親、庄一の父親、松村美帆・真帆、倉敷来夏
九月……池田渚、久美の父親、董の父親、
十月……遠藤千亜妃、レミリア・ジャンヌ、
十一月……柊宙、
十二月……池田連、
一月……黒曜甚平、
二月……詩音、日食の大将
三月……圭の父親、元の母親、
不明……ミネルバ、長老、門番

人物紹介その四（後書き）

これから、おまけの部分が変化すると思います。

九 その日の夜（Let's 誕生日パーティー）〜次の日（前書き）

連の誕生日パーティー編！我らが主人公はどう祝われるのか？そしてどう反応するのか？

九 その日の夜(Let's 誕生日パーティー)の次の日

それから、未来さんが強引に僕を家の中へ入れ、リビングに着いたら、みんなてんやわんやだった。さつき料理の注文してないって、言ってたからなあ。

その時に僕がいることにみんな驚き、気まずい雰囲気になったけど、僕が先に謝った。そしたらみんな許して……くれたのかな？それはともかく、いつも通りになった……気がする。

ま、外で話を聞いていたので、料理をどうするかみんな考えていたら、未来さんが「こんなこともあるうかと、ちゃんと注文は致しました。」と言ったと同時に来たので、みんな未来さんにお礼を言った。本人は無表情を装っていたみたいだけど、董さんや董さんのお母さん、それに僕たち家族から見たら、とても嬉しそうだった。料理の料金をどうするかで一悶着があったけど、準備は整った。

初めは十二人くらいだったのが、総勢十九人くらい。リビングに人が入りきれなかった。

これをどうするか考えた結果、もう七時だというのに場所を変えることとなった。締まらない気がするなあ。なんて思った。

で、肝心の場所だけど……

「え？董のところでいいの？」

「大丈夫ですよね、お母様？」

「ええ。」

凄く簡単に決まった。ちなみに、僕は元の両親と久美さんのお母さんに、その時挨拶した。

「久しぶりです。今日はお忙しいところわざわざすみません。」

「本当に礼儀正しい子だな。元も見習ってほしいと思う。」

「本当ね。あの子もこれくらいの挨拶をできればいいのにね。」

「君が池田連？思ったより普通の子ね。」

「初めまして、久実さんのお母さん。今日はどうして？」

「そりゃ、久実が元君以外の男の子の話を最近してるから、その子たちはどんな子かなあって思ったからよ。」

「そうなんですか。」

こうやって挨拶をした限りじゃ、三人ともいい人だと思った。

これを見ていた庄一たちは、

「おい元。連の社交術ぐらい学べってさ。」

「あれって自然にできるものなの？」

「…連の両親を見てれば自然とできるのでは？」

「相変わらずレンはすごいわね。」

「そうだね。」

「私もあれくらいできたら……。」

と言っていた一方、未来は真帆に向かってこう言った。

「真帆。あなたもあれくらい出来ないといけません。」

「私があんな高度な話し方できると思えますか？」

「真帆。それは自慢できないよ。」

「そうですね。連様を見習った方が、仕事が効率よくなるのでは？」

それを聞いた美帆は、ふと疑問に思った。

「あれ？未来さん。いつの間に池田君の呼び方を変えたのですか？」

それに対して、未来は表情を変えないまま、

「色々あったのです。」

と言った。

そんな話をしているのを聴きながら、連の両親と渚は話していた。

「それにしても、いろんな人が集まったなあ。」

「そうね。有名な人が結構いるわね。」

「私がない五年間、連は苦労してただけじゃないのね。」

「私達も知らなかったな。」

「そうやって成長していくのかしらね。」

「私もそうだった、と言いたいのかしら？」

「イエス!!」

「まったく……でも、楽しそうでいいわね。連。」

それで、結局移動することになった。移動するのに十分くらいかかったね。あ、料理とかは持ってきてるみたいだよ。

そして、董さんの家に着いた。僕達は（というか董さんの家に来たことがある人以外と僕の両親は）玄関で圧倒されていた。分かるよ、その気持ち。僕も二回目だけど、ちょっとだけ威圧感を感じるから。

どうでもいいけど、移動中に「董さんのお父さんは？」と訊いてみたら、「仕事でいません。」と言われ、「私の方も、夜勤でいなしわ。」と久美さんのお母さんが言っていた。

なんだろう、可哀相な気がするのにとっても安心した。

で、前みたく玄関から家に入って、今回は広い所に案内された。客間でも結構広かったのに、この部屋は倍以上の広さをほこっている気がした。僕たち全員が入っても、めっちゃうちゃ余裕があった。

「最初からこちらにすればよかったのでは？」

と、未来さんが言っていたけど、僕はこんなことがあるとは思わなかったし、庄一たちはまさかここまで人数が多くなるとは思っていなかったようだった。

それから料理だけ運んできて、クラッカーを僕以外の人が持ち（いつの間に？）そして、

「……連！誕生日おめでとう　　!!」「」「」

と言ってくれた。

僕は笑いながら、

「ありがとう!!」
と言った。

こうして、誕生日会という名のパーティが始まった。

……これがまた大変なことになったんだ
よね……。

その日の夜(2) (前書き)

連の身に降りかかったものとは・・・？

その日の夜(2)

最初は、まあ皆とお喋りしながら食べていた。そこまでが普通だったんだけど、

「じゃあ、プレゼント渡そうぜ!!」

「……イエイ!!」「」「」

プレゼントをくれる時からなにやらおかしくなった。

まず、誰が最初にプレゼントを渡すのかという事でなぜか全員が揉めだし、僕がその光景をオロオロと見ていたら、未来さんが「お誕生日おめでとうございます。」と言って、僕にラッピングされた箱を渡してくれた。

「ありがとうございます。」と言おうとしたら、他のみんなが未来さんに「抜け駆けした!」「ずるい!!」と大声で抗議した。しかし、未来さんはどこ吹く風のように聞き流していた。

それから、僕の所に人が押し寄せてきたので、たまらず「整列!!」と言ってしまった。そしたら、みんなある程度ちゃんとした列をつくった。ノリがいいんだろうか?

で、両親たちからもプレゼントを渡されそうになったけど、「家に帰ってからにして。」と言ったら「それもそうだな。」という感じで、プレゼントの受け取りは終了した。

その次に、なぜかマイクを持っていた庄一が、

「ゲームやるぞ!! ARE THEY OK?」

「……イエイ イ!!!」「」「」

司会者張りのノリで進行していた。様になっているけど、なんだろう。テンション高すぎない?

なんだか心配になってきたけど、とりあえず楽しむことにした。

「やるゲームは……『王様ゲーム』だ!!」

勝手に庄一が決めただけ、みんな異論をはさまなかった。それどころか、テンションが上がっていた。うん。一体何が原因なんだろうか？

そう思いながら他の人達を見ると、ほとんどの人の顔がほんのり赤くなっていた。

.....え？まさか.....
お酒？

この謎のハイテンションの原因に当たりをつけた僕は、とりあえず近くにあった飲み物を嗅いでみた。そしたらアルコールのにおいがしたので、誰がこんなことをしたのか考えようとしたら、

「あ、レン！こっち来てくださいよ〜！」
テンションが上がったレミリアさんが手招きしていた。.....
酔ってるね、明らかに。

どうしようか一瞬躊躇したけど、おとなしく近寄ることにした。

レミリアさんに近づいて行ったら、庄一がルール説明をしていた。「まずは王様をくじ引きで決める！！その時、王様以外の奴らは番号の書いてあるくじを引いている！それから、王様が番号二つ以上とやることを指示する！！指名された番号の人達は、王様が言ったことをやらなければいけない！以上！DO YOU UNDERSTAND!？」

「.....YES!」「.....」
や、やばい。みんなテンションの高さが異常だ。かろうじて大丈夫そうなのが、未来さんとうちの両親。それ以外の人はみんなテンションが高い。おとなしそうな美帆さんでさえ、「ヤッホー！」なんだから。他の人達がどれくらい高いか想像できるんじゃないかな？この状況で逃げようとしたら、レミリアさんに腕を掴まれた。そして、腕を組まれた。

えええ！！ちょ、ちょっとレミリアさん！？あ、ああの、む、胸が.....!!

他の人達とは違い理由で顔が赤くなった僕を見て、レミリアさん

はにっこり笑いながら、

「放しませんよ レン」

と言ってきた。うう。やっぱり綺麗だなあ、レミリアさん。

僕の心臓の鼓動がレミリアさんの笑顔で速くなっていると、庄一がお構いなしに、

「じゃ始めるぞー！！くじ選べー！！」

王様ゲームの開始を宣言したので、僕はレミリアさんから何とか離れ、くじを引くことにした。

その時のレミリアさんの顔が若干名残惜しそうだったが、不思議だった。

みんな（総勢十九人）がくじを引き終わったあと、

「いくぜ！！王様だ〜れだ！！」

と庄一が言っで、一斉に自分たちが引いたくじを見た。

その日の夜(2) (後書き)

法律？ばれなきやいいんですよ。こづいいうものは。

・・・なんて偉そうにしてみました、酒の力って恐ろしい
ですね。

その日の夜(3) (前書き)

王様ゲームって、こういう話に結構使われますね。

その日の夜(3)

僕も見ただけど、『十七』という数字が書かれていた。この数字が呼ばれないことを祈るしかないね。なんて思っていたら、

「やった！私だー！」

と言って声を張り上げたのは、姉さんだった。え？うっそ。嫌な予感しかないよ。

それとは対照的に嬉しそうな姉さんは、張り切って番号と命令を言った。

「じゃあ、六番が十七番に抱き着くー！」

その言葉に、会場はシン、と静まり返った。え？なに？六番が、十七番に抱き着く？はっはっは。な、ななに言ってるんだよ、姉さん。そ、そんなこと許される訳。

なんて思っていたら、

「さあ、六番と十七番！手を挙げるー！」

庄一が進行させていた。せめてもの抵抗に手を挙げないでいたら、

「六番は私ですね。」

未来さんが手を挙げていた。……………これは、絶対に挙げられなくなった。

どうしてこうなった！？なんて表情を変えないで考えていたら、

「十七番！手を挙げるー！そして抱きつかれるー！」

やけくそ気味に庄一が叫んでいた。無理無理無理。僕にそんな度胸がないよ。第一、手を挙げたら最後、僕がどうなるか分かったもんじやないよ。

そうやって場が流れることを期待したら、姉さんが庄一に何か話して、庄一は納得がいった顔をして、マイクを持ってこう言った。

「オラア！連ー！十七番！分かってるんだから無駄な抵抗はやめろ

！ー！」

「ハア！ー！？ちょよ、ちょっと、どうして分かったの！ー！？」

庄一が名指しで十七番の人を言ったので、僕は驚いて声を上げてしまった。そして、しまった、と思った。なぜなら……………

「やっぱり連だったのね。そうなんじゃないかと思ってたのよ。」と、姉さんが怪しい笑いを浮かべながら言っていた。その笑顔で男の人を誘惑できそうだね、姉さん。何て現実逃避気味にしてみたけど、当然逃げられるわけでもなく。

「次行きたいからさっさとやられちまえ!!」

その庄一の言葉が合図となったのか、未来さんが僕の所まで来て、立ち止った。何故か、恥ずかしそうだった。

「あ、あの、私、こういうの初めてですの。」

「え？あ、いえ。僕もこういうの初めてなんですけど。」

しどろもどろな感じで、僕と未来さんの間に変な空気が流れていたから、未来さんの近くにいた真帆さんが、

「ほら未来さん!」

「え？キャツ!!」

未来さんの背中を押して、その反動で未来さんが僕に抱き着く形となった。

抱きつかれた僕は、状況を飲み込めないまま、未来さんからいい香りがするなあとか、未来さんの顔が赤いなあとか思っていた。なんだろう？普通だったら嬉しいはずなのに、今までの流れで台無しになってる気がする。

そして、ふと思った。これって、いつまでやればいいのか？と。

姉さん達は口笛吹ながら見て楽しんでいるし、レミリアさんは笑顔のほずなのに怖いから、誰も止める気が無いのは明白。

となると僕達で止めるしかないのか、と思って未来さんに声をかけた。

「み、未来さん。もう充分なのでは？」

それを聞いた未来さんは、

「え、あ、そうですね。では……………」

若干残念そうにして僕から離れた。……………
…どうして？

僕達が離れたのを見た庄一は再びマイクを持って、

「はい！じゃあ二回目行くぞ！！ARE THEY OK？」

「……イエ イ！！」「」「」

二回目開始の合図を宣言した。

それからが大変だった。

今まで十五回くらいやったけど、僕が指名される確率が何と六割近く。理由は、王様が僕の両親だったり、姉さんだったりしていたから。ていうか、僕が王様になってないんだけど。あと姉さん。五回連続で王様とかありえないよね？

だから、ほとんどの奴は僕が参加している。たとえば、真帆さんにキスされたり、レミリアさんとダンスしたり、董さんのお母さんに『あ〜ん』されたり、庄一に掃除のコツを教えたり、美帆さんに恥ずかしがられながら抱きつかれたり、傍から羨ましいものだったりした。

次に多いのが元。庄一の全力キャッチボールに付き合ったり、久実さんに『あ〜ん』されたり、董さんと踊ったり、レイジニアさんとコスプレしたり、花音さんをお姫様抱っこしたりと、これまた羨ましいものだったりした。

庄一は、僕に掃除のコツを教わったり、元に全力でボールを投げたり、久実さんと口喧嘩しながら踊ったり、圭と漫才やったりした。圭に至ってはほとんどやっていなかった。ずるいよね、圭。

で、十六回目。

「これがラストだ！全員覚悟はいいか！！」

「……OK！！」「」「」

「ARE YOU READY!？」

「……YES!!」「」「」

「王様だ〜れだ!!!」

そう言ってくじを見たら、僕のくじに『王』という文字が。やった

あ！最後の最後で僕だ！

嬉しくなりながら、僕はすぐに名乗りを上げた。

「僕だ！」

「おう！誕生日の主役で締まるなら文句はねえぜ！！さあなんて命令する！？」

庄一にそう言われて、僕はちよつとだけ悩んだ。一応決まっているけど、番号を考えなくてはならない。

うーんと悩んだ後、僕はヤマ勘で番号とやらせる内容を言った。

「……………三番と八番と十二番と十八番は、五番に！十一番は四番と！七番は十番にキスする！！」

その言葉に、僕の両親と元の両親、それに元、董さん、レイジニアさん、花音さん、久実さんが驚いていた。うん。僕はこういう内容の方がいいんだよね。ま、これはみんなに対するお礼、ってことで。なんて思いながら、恥ずかしそうにする五人と、堂々とキスしている二人組×二と、それを囁し立てる人たちを見ていた。

あー、楽しかった。

無事に元に四人同時にキスして、僕の誕生日会はお開きとなった。ていうか、僕以外の人がぶっ倒れたからなんだけどね。

それから、源さんに僕が頼んで車を手配してもらい（最初僕が頼みに行ったら驚いていた。）、全員をそれぞれの家に運んでもらえるようにお願いした。でも、玄関先で置いてかれるのがオチだろうなあと思っただ。

僕も車に乗せてもらって、家まで送ってもらった。そして、両親と姉さんとレミリアさんを家の中に運んで、それぞれの部屋に運んだ。運んでいる途中に、レミリアさんが「レンの馬鹿あ。私の気持ちも……………」とか呟いていた。どういふことなんだろう？

全員をそれぞれの部屋に運び終えた僕は、一人で風呂に入って自分の部屋に戻り、みんなからもらったプレゼント（これも持ってきてもらった）を開けることにしたけど、眠くなっただのでベッドに入

って寝ることにした。

今日も色々なことがあったけど、最終的に楽しかったからこれでいいよね。

その日の夜(3) (後書き)

次の日。はたしてどうなったんですかね？

次の日(4) (前書き)

誕生日会が終わった次の日。何か起きてしまいました。一体何が・
・
・
・
・
?

次の日(4)

後日。

朝普通に起きて朝食と昼食の支度をし終えて洗濯物を干していたら起きてくるはずの両親が、起きてこなかった。姉さんもレミリアさんも起きてこなかった。

起こそうとしたけど、昨日大変だったからやめといておこうと思っただ。

そして学校に行ったら、元、庄一、圭と、久実さん、董さん、レイジニアさん、花音さんが来ていなかった。どうやら、遅刻や欠席するらしい。

僕は、とりあえずみんなのために、ノートを綺麗に書くことにした。昨日頑張ってくれたからね。

そして放課後。結局みんな来なかった。……
大丈夫だよな？

そんな心配をしながらも、僕は家に帰った。

「ただいま。」

そう言いながら玄関で靴を脱いでいると、昨日と同じ光景を見た。

要するに、靴がたくさん置いてあったという事。ただ、昨日より多いような気がした。

既視感を覚えながら、僕は自分の部屋に行つて着替え、リビングに行つた。そしたら、

「うだ〜。気持ちワリイ〜。」

「…頭がグルグルする。」

「酒飲み過ぎたな、母さん。」

「そうね。あまりにも楽しかったものだから。」

「私も飲み過ぎたと思ってるわ。……あ、連。お帰り。」

「僕が呆然と突っ立ってるのを見て、姉さんが気怠そうに言った。．．．．．やっぱり二日酔いだっただのか。ていうか、なんで皆さん此処に？」

その疑問に、元が答えてくれた。

「僕達は間違ってお酒飲んじゃってさ。朝起きたら二日酔いになっちゃって。で、僕達は今日どうしようか話し合った結果がこれ。」
え〜っと、つまり？

「．．．．．ここに集合して、暇つぶししてたの？」

「ま、そういう事になるな。」

だるそうにしながらも、何とか庄一が答えてくれた。未成年で酒なんて飲むからだよ、全く。そう考えながら、僕はとりあえず確認することにした。

「今この家にいるのは？」

「．．．元の両親以外はいる。」

．．．．．通りで、リビングに人が
沢山居るわけだ。

僕はため息をつきながら、ふと気になったことを訊いた。

「え？元の両親以外？」

そしたら、

「そうです。家に居ては何かと不味いので、私達もここにお邪魔させていただきました。」

「ごめんなさいね。」

「気持ち悪い〜。」「真帆。それは誰でも同じだと思うよ。」

「私も、ちよつとまずいと思ったからね。ごめんね、池田君。」

と、未来さん達が答えてくれた。．．．．．ただ、昨日の事を憶えているのか、何人かの顔が若干赤かった。

この惨状を知った僕は、プレゼントの中身を確認することを放置して、みんなを介抱することにした。総勢十六人。うん。なんとか．．．．．と思う。

それからしばらく、僕は一人で皆の世話をした。たまに両親が二日酔いになることがあったので、僕はその経験を参考に献身的にやることにした。これが結構大変だったよ。

やってるうちに両親が酒飲もうとしてるし、庄一たちにはノート見せなきゃいけないし、二日酔いでも手伝おうとする未来さん達を止めさせなきゃいけなかったし、勝手にガサ入れしようとする人を止めたりと、昨日は疲れなかった分が、今日になって来たって感じた。

その甲斐あつてか、みんな快方へ向かって行った。その時に、「連って、こういつ時の対処も出来るんだ。すごいね。」とか、「お前、本当に何でもできるな。家事限定で。」とか、「今度二日酔いになったら、また連君に介抱してもらおうかしら？」とか言われた。最後の一言を聞いた時、僕は何か冷たい視線を感じた。どうしてだろうね？

みんなが何とか二日酔いから脱した時、時間は午後六時。うわあ夕飯の準備してないよ。

焦った僕は、とりあえずみんなに帰ってもらって（お礼がどうのこうのとか言われたけど、僕はほとんど聴いていなかった）、自室に戻って財布を取ってきてからスーパーに向かった。両親たちは、もう放っておいても大丈夫だろうと思っただけで放置してきた。

スーパーに入店して、僕は何をかうのか考えていないことに気付いた。

どうしようか考えても仕方がないので、僕はとりあえず簡単にできそうなものを適当に買って、レシートを貰って家に帰った。

家に帰った僕は、買ってきたものを冷蔵庫に入れ、まだ完全に回復していない両親たちをほっと置いて夕食の準備をし始めた。今日は疲れたから、冷凍食品と今日買ってきたものを適当に並べて終わり。

準備が終わって、僕達は夕食を食べた。一応みんな食べているけ

ど、僕以外の箸が進んでいなかった。

その時、僕は気になっていたことを訊いてみた。

「そういえば、どうして庄一たちはみんなお酒飲んだの？」

すると、父さん達は箸を止めて急に静かになった。……………
どうかしたのだろうか？

そして、しばしの沈黙の後姉さんが答えてくれた。

「あれはな、なんとというか、悪かったと思ってているし、どうしてもあなつたのか憶えていないところもあるんだ。」

「珍しいね。要領得ない答えで返してくるなんて。」

そう僕が言つと、父さんはバツが悪そうにしながら言った。

「昨日あそこで私達飲んでただろう？その時ジューズより酒の方が多くなつてな。ジューズと間違つて酒を飲んでしまったんだよ、お前以外。」

ほうほう。つまり、酒を飲み過ぎていたあんた達のせいだと……

そういうこと。なるほどなるほど、よおうく分かつたよ。

「父さんたち。」

「な、なんだ？」

僕の言葉を聴いて、父さんが縮こまつた。どうしたの？

見ると、姉さん達もどこか緊張していた。僕が何か別な人に見えるの？それとも、声が怖いのかな？

そんなことは置いといて。今は父さん達に言わなきゃね。

「これに懲りたらお酒をほどほどにしてね？あと、今日から一週間は禁止にするから。飲んだらどうなるか……………分かつてるよね？」

その言葉を聴いた時の父さんと母さんはショックを受けたみたいだけど、僕の声で本気だと分かつたのか、おとなしく頷いてくれた。それを聴いたレミリアさんは、姉さんに「レンの怒るところを初めて見ましたけど、怖いですね。」と言つて、姉さんは姉さんで「普段怒らない奴が起こると数倍怖いよ。」と言つていた。そうですね、僕はとても怒っています。

それから、僕は食べ終えた食器を片付けて明日の朝食と昼食の下準備をした。あ、風呂沸かすの忘れたと思っていたら、姉さんがやっていた。

先に父さん達を風呂に入れて部屋に行かせ（酒を飲む可能性があるから）、次に姉さん、レミリアさん。それで、最後は僕。いつもの順番だよ。

風呂から上がったら、レミリアさんがリビングに残っていた。

「どうしたの？湯冷めするよ？」

僕がそう言ったら、レミリアさんは僕に近づいてきながらこう言った。

「あの、レンってどうしていつも一人でやろうとしているんですか？」

「へ？」

僕がいつも一人でやろうとしている？そうかな？そんなこと思った事は無いけど。

そんな僕にお構いなしに、レミリアさんは続けた。

「誰かに頼ろうとしないで、いつも一人で家事をやっているじゃないですか。どうしてなんですか？」

うん。そんなに僕って人に頼っていなかったのかな？前より頼ってる気がするんだけど。

なんて過去の自分と照らし合わせていたら、一つの事実思い至った。

レミリアさんは、僕の昔を知らないからこんなこと言ってるのか。

そう結論づけて、僕は彼女にこう答えた。

「昔の方がひどかったよ。以前の僕の方が、自分一人で何でもやってきたから。」

それは姉さんや圭、庄一達が知らない一つの過去。僕は、今まで誰にも話さなかったことを、彼女に話すことにした。僕と両親だけの秘密の過去を。

「きっかけは姉さんが出て行った小四。今のようになったのは、小

六の頃なんだ。
」

次の日(4) (後書き)

次回は、連が語る自身の過去。昔(小学生)のころの連は、一体どんな子だったのか……？

十 在りし日の池田連（小学四年生〜小学六年生）（前書き）

初めて語る自身の過去。それは人とは違う『普通』。今の自分になるまでの話。

十万PV突破しました。読んでくださる皆さんに、感謝したいと思います。

十 在りし日の池田連（小学四年生〜小学六年生）

姉さんが出て行った日から、僕は家の事を一人でやらなければいけなかった。理由は、両親が家事を全くできないから。風呂を沸かすことすらできない。そのせいか、仕事は超人的な成績を上げている。だから、今までは僕と姉さんが家事を分担してやっていた。姉さんが出て行くだいたい前から、僕は姉さんに色々教えてもらっていたから姉さんが居なくても出来ると思っていた。でも……

「きついなー。姉さんこんな事をやっていたんだ。ていうか、僕が生まれるまで姉さん一人でこれやってたんだっけ。……あれ？そしたら、姉さんが生まれるまでは誰が家の事やっていたの？」僕は自分の部屋のベッドに寝転がりながら、そう呟いていた。

今の時間は十一時。小学生でこんな時間まで起きているのは凄く稀だろうし、その理由が家事をやっていたっていうのは、おそらく僕だけだろう。

そんな僕は明日の予定を頭の中で確認しながら、寝てしまった。

次の日。僕は眠たいながらも五時に起きて、朝食と昼食をそれぞれ三人分作った。それから、洗濯物を干した。僕が欠伸をかみ殺しながら洗濯物を干していたら、両親が起きてきた。

僕としては、仕事より家事が出来てほしかった。そうすれば、僕がこんな事する必要が無いから。普通の家庭は小学生が親の世話をしないから。だけど、悲しいかな、これが現実。これが僕にとっての『普通』。これは、こういう生活をしている自分なりの考え。何度思っても現実が変わらないから、受け入れるという考え。

こんな考えをしているから、僕は小四になっても友達はいない。

たぶん、これからも。なぜなら、僕自身が友達を欲していないからだ。家の事で手一杯で、自分の事に向けていられない。これが当然だと思っっているから、僕はろくに人と話さない。……学校では。

朝食を食べ終えてから、僕は食器を片付け家を出た。両親がいつも後に出発するので、僕は両親に合鍵を渡してある。失くしても知らないと言って。

僕は学校に着いたら、自分の席に座り最初の授業の準備をして、机に伏した。眠いから。

そんな僕に、毎日のように彼らはやって来る。

「いよ 池田じゃないか。どうした？いつも眠そうだな、お前。」

「……………」

「史夫ふみおさん。こいつに話しかけるの、止めた方がいいですよ。」

「そうだけ史夫。なんたって一度も俺達と話さないんだから。なに様？って感じた。」

「だからだろうが。徹宏てっひろ、弘威ひろい。この俺達を無視する根性がどこまであるか、試しているんだろう？」

そう言いながら、『彼ら』は笑った。僕にとって、学校の時間というのは単なる時間の無駄遣いだ。だから、学校にいる人たちは僕にとって「無駄」でしかない。だから、僕は学校で会った人の名前を憶えない。ただ、見ているだけ。空気と化し、人に紛れ、全体的に人を見る。それだけ。

ただ、彼らは最近僕に対して暴言や中傷的な言葉しか発しない。どうやら、僕が怒って喋らせるためにやっているようだ。でも僕はそんなことを気にしていない。むしろ、罵倒しかできない彼らに、憐みの視線をあげられる余裕がある。だって、「無駄」だから。

ちなみに、こんな光景が毎日のように繰り返り広げられているけど、誰も注意はしない。僕はこのクラスの人と話さないし、僕に話しか

けている『彼ら』の矛先に向けられるのが怖いからだろう。

それからずっと僕に向かって話しかけていたけど、僕はその時完全に別なことを考えていたので、相手にしていなかった。

授業が始まった。僕は開始早々、寝た。先生も僕の行動には慣れていたの、僕の事を一切触れずに授業をしていった。寝ていてもテストは大体八十点くらいならとれる。だって、姉さんに教えてもらったから。一応、中学一年までは。

授業が終わると、必ず『彼ら』が話しかけてくる。けど、僕は授業の準備をしてからすぐ机に伏すので、『彼ら』の話を全く聴いていなかった。聴く気すらなかったけどね。

昼食の時間。僕は一人で黙々と食べていた。他のみんなは、友達同士で集まったりして食べていた。僕はそれを見ながら、この人はどんなことを考えているのだろうと考えながら、弁当を食べていた。

十 在りし日の池田連（小学四年生〜小学六年生）（後書き）

連の過去編が始まりました。しかし、皆さんは小学生のころ、どういった子供だったか思い出せますか？

在りし日の池田連(2)

放課後。僕は普通に家に帰る。特に何をするわけでもなく、家に帰る。委員会とかは何も入っていない。家の事が忙しいから。

僕は学校が終わるたびにこう思う。さっさと学校無くならないかな、と。どうせ行ってもやる事が無いのだから、行かなくても良いんじゃないか、と。

そう思いながら校門を出てしばらく歩いてると、

「ヤッホー連君。一緒に帰ろうよ。」

そう言いながら、路地裏から一人の少女が出てきた。最近というか小学二年生の頃からこういう出現をしてくる。ていうか、これ以外に観た事は無い。

僕は目の前の少女を無視して、そのまま帰路に就くことにした。しかし、それを少女は許さなかった。

「駄目だよ連君。私の事を無視しちゃ。違うクラスなんだから、それくらいいいじゃない。」

そう言われても、僕は急いで帰りたいと思っているんだけど。それに、君が周りから変な目で見られるんじゃない？

そう思っていたけど、彼女はそんなことを気にしなかった。

「ねえ連君。何をそんなに急いでるの？どうして私と話してくれないの？去年までは、二人で仲良くおしゃべりしながら帰ったじゃん。」

これ以上黙っていると家にまでついてきそうだと思ったので、僕は早足になりながら口を開いた。

「秘密。これ以上は言わないよ、佳織。」

こちらも早足になりながら、僕の隣にいた。しかも、「やっと今日喋ってくれた。」と言わんばかりの笑顔で。

西条佳織。一昨年まで一緒のクラスで、一応友達らしい。あつちがそう言ってるから。容姿は、同学年の男子から割と告白されると

いう点で想像して。あ、髪はショートだよ。

言っておくけど、家は近くという訳ではない。佳織の家は小学校に近い。反対に、僕はとても遠い。その小学校は、僕の家からスーパーを通り過ぎたところにある。逆に僕の家からスーパー・商店街へ行く道の反対側へ行くと、中学校があり、その近くに高校がある。佳織は、どうしてだか僕と一緒に居たがる。前に訊いたことがあったけど、「なんとなく。」って言われた。僕なりの考えでは、二年生の時に犯人にされかけた彼女を助ける形で、真犯人を見つけたことが理由のような気がする。

彼女が犯人にされかけたという騒動とは、失くしたと思っていたものが彼女の机から出てきたから、彼女が盗ったのではないかというもの。あれは色々と不自然過ぎたから、ちよつと名指ししただけで真犯人は見つかった。その結果皆から色々と称賛の言葉を受け、真犯人は素直に謝つたみたいだった。あ、僕は一応謝つたよ、真犯人に。

早足で道を歩いていると、佳織がふと思いついたように訊いてきた。

「そつえばさ、連君の家って知らなんだよね、誰も。今度行つても良い？」

僕は首を横に振りながら答えた。

「無理。」

「どうして？」

「遠いから。」

「連れてつてくれればいいじゃん。」

「君の家を知らない。」

「教えてあげよっか？」

「結構。」

「むう。」

こうやって押し問答をしていると、必ず佳織が先に音を上げる。そして、頬を膨らます。それを僕は笑ってなだめる。こんなことを結

構繰り返していた。

最初の方は名前も個人情報をおぼえる気が無かった僕だったけど、住みだけはおぼえた。なぜなら、彼女が毎日のように帰り道を一緒に歩くからだ。

途中で彼女と別れ、僕は一人でスーパーを通り過ぎ家へと帰った。

家に帰ったら、僕はまず洗濯物をこんでからたたき、それから各々の洋服箆笥にしまい、今夜の献立を決めて買い物をするために自室に戻って鞆を置いてから、財布と買い物袋を持って出かけた。

最初にスーパーへ向かった。その時、近くにある公園で遊んでいる同い年の子供たちを見ながら、ちよつとだけ羨ましいと思つた。けど、それもちよつとだけで、ほとんどが大人になったら何もできないんだろつなあ、と憐れんでいた。

スーパーに入つて、卵と冷凍食品をいくつか買つてレシートを買つて店を出た。見知つた顔が親連れで何人かいたけど、声をかける気すらなかつた。

次に商店街へ向かつた。足りなくなつてるものを買うためと、夕飯に使う食材を買うために。

順番としては、スーパーから商店街へ向かつた場合、最初に精肉店、次に八百屋、その次に豆腐屋、最後に魚屋。そして駄菓子屋を通り過ぎて帰る。これもいつものこと。

商店街に始めてきたのは五歳くらいの頃。姉さんと一緒に買い物へ来たのがきっかけ。それから、買い物は僕の仕事となつた。

精肉店に着いた僕は、オススメをガン無視していつものお肉を買つた。その時、レシートを貰うのは忘れなかつた。

次に、八百屋へ向かつた。近いから、そんなに歩く事は無かつた。こちらは、足りない野菜を買つた。同じくレシートを貰つて。

今回はそれだけで終わつたので、僕はレジ袋と買い物袋を両手で持つて帰ることにした。この光景を見慣れている商店街の人達は、「手伝おうか?」と言つてくれる。ありがたかつたけど、僕はいつも

一人でやる。あっちの仕事に支障をきたさせないために。

こんな事を毎日やっているの、割と筋肉はついているらしい。握力で三十を出した時、先生にそう言われた。

駄菓子屋を通り過ぎる時、ある人物に声をかけられた。

「よう連。精が出るねえ。頑張りなよ。」

「ミネルバさん。そっちこそ。」

藤井駄菓子店一階の店員こと、ミネルバさん。彼女はロボット。言語プログラムのインストール時に誤って男口調を選択されたから、あんな口調になってるらしい。

意外と面倒見はいいが、怒るとシャレにならないことをしてくる。ことがしばしば（僕は視た事は無い）。

ミネルバさんの声援を受けて、僕は家に帰った。いつ両親が帰ってくるのだろう、と思いつながら。

在りし日の池田蓮)2(後書き)

振り返ると分かることって、多い気がします。

在りし日の池田連(3)

家に帰った僕は、買ってきたものを冷蔵庫と冷凍庫に入れ、夕食に使う食材を出して調理を始めた。

とりあえず三人分作り、一人で夕食を食べた。両親を待っている、家事が滞ってしまうからだ。

夕食を食べ終え、風呂を沸かしてから、僕は宿題をやった。正直面倒だったけど、授業態度が悪いのでこれくらいはきちんとやらなといけない、と思ってるからだ。宿題が終わったら、今度はレポートとノートを持って家計簿をつけた。これも姉さんがやっていたのを教えてもらった。だから、姉さんが書いていたノートも一緒に僕の部屋に保管してある。

家計簿をつけ終わった時に風呂が沸いたので入ろうと思ったら、電話が鳴った。それに出たら、両親がもうすぐ帰ると言ってきたので、夕食を温めてからテーブルに並べ、それから風呂に入った。

風呂から上がった時、両親は酒を飲みながら夕飯を食べていた。僕はそれを見ながら「明日のゴミ捨て、よろしくね。」と言った。でも、聴いていたかどうかは正直怪しかった。

最後の人が風呂に入った時間が午後九時。その時に、僕は今日の服を洗濯機に入れて、洗濯機をまわしていた。

洗濯機が回り始めたら、僕はそのまま無視してリビングに行った。そしたら、母さんが一人でビールを飲んでいた。

僕はそこに適当におつまみを置いたり寝ようかと考えたけど、つまみだけを置いておき、ソファに座って父さんがあがるのを持った。父さんが風呂から上がったなら、僕は風呂場へ直行。そして、頭を抱えた。

どうやら、風呂場を洗おうとして失敗したらしい。こんな簡単なこともできない両親に頭を悩ましながら、僕は風呂場を洗い直した。

風呂場を洗ってから、両親の事を無視して自室へ戻ろうとしたら、テレビがつけっぱなしだったので消した。そして、散らかっていたテーブル周りを片付けて自室へ戻って明日の準備をして、寝た。

こんなことが毎日のように続いた。しかし、一月のある日の夜。僕は人生で初めて倒れた。

それは冬休みが終わってしばらく経った時だった。

僕はいつも通りの事をやっていた時、妙に体がだるいことを不思議に思った。でも、それを気にせず、あとは明日の学校の準備をして寝るだけだなと思い自室へ戻ろうと階段に向かった。

その時、意識が急に遠のき、知らぬうちに意識が飛んでいた。

これを発見したのは父さんで、急いで救急車を呼んだらしい。迅速な判断だね。

それから僕は救急車に運ばれ、それを見た父さん達の酔いは醒めたらしく、僕が搬送された病院にタクシーで向かったらしい。

診断の結果は、過労による貧血。それに、風邪をこじらせたらしい。本来なら普通に家に帰せるみたいだったんだけど、僕が目を見まさなかつたので即刻入院。僕が目を見ました時、倒れてから一日が経過していた。

目を覚ました僕を見て両親は喜び、二人とも抱き着いてきた。状況が分からない僕は一旦両親を落ち着かせ、事情を説明してもらった。

それから看護師が来て診察室へ来てくださいと言われ、歩いて行くこうとしたけど、フラフラだったので両親に付き添ってもらった。

診察室の中に入った僕は、医者から自分の病状を言われ、どうしようだったのか訊かれた。でも、聴かれたことには正直に答えなかった。だって、そんなこと言ったら僕の家に見聞相談所の人たち

が来そうだと思っただからだ。

最終的に、医者から「しばらくは入院して安静にしてください。それと、退院しても一週間は安静にして下さい。」と言われ、病室に逆戻り。親が家に帰ってやるのがなくなった僕は、医者に言われた通り、おとなしく寝ることにした。

医者に言われた過労とは、身体的疲労と精神的疲労、いわゆる肉体的疲労とストレスの溜まり過ぎによつて発症したものらしい。「そんなになるまでどうして抱え込んでいたの？」と医者に言われたけど、「色々あるんです。」と言つてはぐらかした。

退院するのに、四日かかった。その間に、どこから聴きつけたのか知らないけど、佳織やミネルバさんを含む商店街の人達が見舞いに来た。本当に、どこから知つたんだらう？

佳織に至つては、二日目以降から毎日来ていた。そして、毎日学校であつた出来事を話してくれた。楽しそうに話す佳織を見て、僕は何故だか心が痛んだ。その理由も想像はついていた。それは、僕と彼女では学校に対する考え方が違うから。楽しいと思つている佳織と、なくても良いと思つている僕。

そして僕は退院した。その日の学校も休んだ。両親は会社を休んだ。家に帰つてまず僕が目撃したものは、散らかつたりビンゴ。僕は分かつていた事なのでたいして怒ることなく、掃除した。それから、冷蔵庫の中がほぼ空っぽだったので、スーパーと商店街に買い物物をして行った。荷物持ちを両親にやらせて。

商店街で買い物物をしていた時、店の人から退院祝いを貰つた。それに一言ずつお礼を言いながら、僕は買い物物をした。家に帰つて、僕は明日の準備をして昼食の準備をした。父さん達に任せようものなら、絶対に口クでもないものが出来ること明白なので、一人でつくつた。

昼食を食べ終え食器を片付けた後、のんびりと家の中で過ごした。両親に、昼間からの飲酒を禁止させて。

夕方になつたので、僕は夕食をつくつた。それを食べている途中、

父さんが口を開いた。

「連。すまないな、こうやっていつもやってもらって。」

僕は、その言葉に箸を止めた。いきなり言われたから戸惑った証拠だと、素直に思った。

それから父さんの話は続き、

「父さん達が毎日仕事に集中できるのは、連や渚が学校に通いながらもこうやってくれたからだ」と、連がいない四日間で痛感したよ。二人には悪いことをしたと思っっている。」

と言ったあと、言葉がなくなった。おそらく、他にも言いたいことがあるけど、どう表現すればいいのか分からないから考えている、といった感じだろう。

だけど、僕はその言葉に笑いながらこう言った。

「だったら、ちゃんと自分たちでできるようになってよ。そうすれば、僕の負担が・・・軽くなるん・・・だから・・・。」

そう言っている途中、涙が出てきたらしい。頬から何かが流れるのが分かった。僕はそのままにしながら続けた。

「だから・・・少しは頑張つてよ。出来るように努力してよ。僕だってできるんだからさ・・・。」

そう言った後、僕はとうとう泣き出した。前から溜まっていたものを全部吐き出すように。そして、その吐き出したものを洗い流すように。

泣き出した僕を見た両親は、そのまま何も言わず食べないまま、僕が泣き止むまで待った。

二十分くらい泣いたのだろうか。泣き止んだとき、食べていた料理が冷めていた。

僕が泣き止んだことを見て、母さんはこう言ってきた。

「そうね。これから頑張ってみるわ。でも、それまではよろしくね？」

僕はその言葉に、ちょっとだけ理不尽さを感じた。

「え？ちよつと待って。それまでって？これから三人で頑張ってるんじゃないの？」

「それはそうなのだけど………仕事が大変なのはわかってるわよね？」

「うん。知ってる。良く愚痴を聴いてるから。」

「だから、家事の事にあまり気が回らないのよ。」

「そこおかしいからね？一人暮らしの人、なめてない？あの人たち、仕事と家事両立できるからね？」

「う〜ん。どうやって連をまこつ？」

今、撒こうって言わなかった？そう思ったけど、僕はこの問答は無意味だと考えたので、何も言わないことにした。

そしたら、父さんがこう言ってきた。

「今すぐ手伝え、というのはさすがに無理があるが、お前の負担を少しでも軽くしてやることなら、可能だ。」

「本当!？」

父さんの言葉に、僕は身を乗り出した。それを見た父さんは微笑みながら、

「ああ。食べ終わったら話し合う事にしよう。」
と言った。

それからみんな無言で食べ、食べ終わった食器を片付けようとしたら、父さんが「こっちに来い。」と言ってきたので、片付けるのを後にしてテーブルに戻った。

僕が椅子を座つたのを確認した父さんは、いつの間にか用意していた紙とペンをテーブルに置いてからこう言った。

「それじゃ、家事の効率化について話し合おう。」

僕は気になることを訊いた。

「どうしてこんなことする気になったの？」

「そりゃ、少しでも負担を軽くしたからだ。思い立ったが吉日というだろう?。」

そうだけどさ。どうして僕が入院する前にやってくれなかったのか、

本当に疑問だ。

そんな僕にお構いなしに、父さんは続けた。

「さて、見ていた俺達としては、夕飯を食べ終えた後の時間に明日の朝食とかの準備をしたら、と言いたい。」

そう言いながら、紙に『片付け後の時間に明日の準備』と書いた。

僕はそれを見ながら、どうしてやっていなかったのか自分でも不思議に思った。

「俺はこれくらいだが、母さんは？」

父さんが自分の意見を書き終えたらしく、母さんに訊いた。すると、

「そうね……。あとは、遅くまで私たちの事気にし過ぎじゃない？ 私達でもゴミ捨ては出来るんだから。」

と言った。それを聴いた父さんは、『逆過保護禁止。』と紙に書いた。

逆過保護って。まあそうなんだろうけどさ。

僕は紙を眺めながらそんなことを思っていたら、父さんが訊いてきた。

「連、何かあるのか？」

その言葉に少し考え、

「一杯あるけど一番言いたいことは、変な買い物してこないで。」と言ったら、

「それは分かってる。それ以外で、だ。」

と言われた。僕としては、本当に分かっているのか怪しいんだけどな。なんて思いながら考え、そして、

「家に帰ってくるのが遅い。また、それに対する電話が全くない。」と言うことにした。そしたら父さんが、『帰宅時間の遅さ。また、

遅くなることの通告無し。』と紙に書いた。本当はいの一番に『家事の手伝いをしてくれる。』と書いてもらいたかったけど、今の状況でやってもらったら僕がまた入院しそうなので、何も言わなかった。

父さんが「これで全部か？」と確認してきたので、一応頷いた。

書いた紙を眺めて、父さんと母さんは言った。

「よし母さん。これからはなるべく早く家に帰ってこよう。」

「そうね。家の事をやってもらっているのだから、それくらいはやらないとね。」

その後、「これを見てやってみたらどうだ？」と言われ、父さんと母さんの意見が書かれた紙を渡され、それを参考にすることにした。今から夕飯に使った食器の片付けをするので、それをやりながら明日の昼食と朝食の献立を考えた。そして、とりあえずという意味で、僕はそれらの下準備だけをした。明日はそれを焼いたりするだけにした方が、色々と良かったりするのではないかと思っただけからだ。それから、風呂を沸かし、両親を先に風呂に入れ、その間に洗濯物をやった。これはいつものこと。

僕が風呂からあがったら、両親は酒盛りをしていた。それを見た僕は「楽しみをとっちゃ駄目だな。」と思いつつ、自室へ戻って寝た。

在りし日の池田蓮)3(後書き)

これで、今の連の一日の行動が出来上がります。

在りし日の池田蓮)4(前書き)

区切り方を最近間違ってたりするのは、どうすれば直るのでしょうか？

在りし日の池田連（4）

それから、僕の生活はちよつとだけ負担が軽くなった。ただ、学校では相変わらずなままだった。

元々人があまり寄ってこなかったたので、退院した後は更に近寄ってこなくなった。僕としては、家の事を考えられるからいいんだけど。

『彼ら』は例外。僕が退院してからも、ずっと話しかけてきた。といつても、暴言ばかりだけど。

佳織も例外。下校の時は一緒に帰ることがほとんど。だから、たまにひそひそ話で、僕と彼女の仲について言われることがある。正直、ゴシップ好きな人たちだと思えなく、憐れむことしかできない。

そんな感じで月日は流れ、小六の夏。

僕はまた入院した。

きっかけは、なかったはず。ただ、突然僕が倒れた。それだけ。

どうして倒れたのか、なんてことは僕が訊きたい。訳も分からず倒れたのだから。

ただ、僕は家で倒れたのではなく外で倒れた。医者には、『過労と熱中症が同時に出たんだらうね。また無理したんじゃない？』と言われた。更に、また入院させられた。夏休みだったので、特に問題はなかったけど。

見舞いには、両親と商店街の人達が来た。どうして商店街の人が来るのか気になったので訊いてみたら、『教えてもらった。』と言って、詳しいことは教えてくれなかった。

でも、佳織は見舞いに来なかった。

夏休みが終わって、いつものように学校に行った。そして、いつものように誰とも話さずに過ごし、いつものように下校した。その時も、佳織はいなかった。

それが何日も続いたので、僕は不思議に思い職員室へ行って先生に訊いてみた。

「先生。」

「ん？なんだ、池田？久し振りに声を聴いたような気がするんだが。」

「そんなことはどうでもいいのでは？」

「それもそうだな。で？」

「西条佳織さんはどうしたんですか？」

僕がそう訊くと先生は、佳織の担任の先生に「そっちのクラスにいた西条佳織って人、どうしたんですか？」と訊いてくれた。そして、

「西条さんですか？あの子なら転校しましたよ。確か：夏休みの終わりごろに電話がありました。」

と言われた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？そうなの？」

あまりにも衝撃的なことを言われたので、僕は職員室という場所を忘れ、呆然としていた。

先生に言われるまで、僕はその場に立ち尽くしていた。その間、僕の頭にずっと『どうして佳織は転校したのか？』という疑問が渦巻いていた。

職員室から出る時、佳織の担任の先生が「これ、彼女から。」と言って、一通の手紙を渡してくれた。

僕は急いで家に帰り、自室へ戻って先生に渡された手紙を読んだ。その内容とは、こんなものだった。

『拝啓 池田連君へ』

手紙なんて初めて書くから、緊張するなあ。なんて書けばいいのかわからないよ。

えっと、こんな形でお別れしちゃってごめんね。私も不本意だったんだけど、こっちにも事情があったの。本当にごめん。

で、その事情なんだけど……今から話すからね？

私は、超能力者です。これは、両親以外は知りません。なぜなら、私はそのせいでいじめられたことがあるからです。……

本当だよ？
といつても、幼稚園の頃でしたが。それでも、幼い私にはトラウマになりました。

そのせいで、私は小学校に上がる時に自分が超能力であることを隠そうと思いました。

その時に、君に出会ったんだよ。連君。君の明るい性格と、人懐っこい性格で割とクラスの人気者だったよね。でも、人の中心に居てもたまに楽しそうじゃないよね。

そんな君を見て、私と同じように隠し事をしているのかな、と思っちゃったんだよ。それだけなら特に問題はなかったんだけどね。

君はいつも優しくかったよね。どんな時も。誰にでも。

そんな君を、だんだん私は……
そんなことはちょっと関係なかったね。それで話を戻すと、連君が入院する原因となったのは、私です。私が超能力を使ったからです。

その時のことは覚えていないよね？だから教えてあげる。

あの時、私と連君は一緒に歩いていたらだよ。確か、宿題で私が呼び出しちゃったからだったんだよ。

そしたら、黒服の人達が私達の前に現れてこう言ったんだよ。

『あなたが西条佳織ですね？』つて。私は名前を言われてびっくりしちゃった。

でも、君は動じないで『逃げるよ。』と私の手を引きながら逃げてくれたよね。あの人たちから逃げ切ったことには、本当に驚いたなあ。どうしてこんな道を知っているのか、不思議でならなかったもん。

振り切った後、君は私にいくつか質問したよね。私が全部答えたら、君は考え込んでから『誘拐かも知れないから、君はここに居たら？』つて私の心配をしてくれたもんね。凄い嬉しかった。

でも、私はそれを無視してついていつちゃったから、黒服の人達に見つかっちゃつて私の事を渡せと言われたのに、君は最後まで嫌だと言ってくれたよね。

だから私は、そんな君のために使うことにしたんだ。自分の力を。その結果がこれ。でも、後悔はしていないからね。

………これくらいかな？

あ、ごめん。忘れてた。私の家、本当は大金持ちなんだつて。なんでも、両親がお金持ちの事が嫌いだったらしくて、その結果駆け落ちして逃げてきたんだつて。

でももう見つかっちゃった。それも伴つて、こんな結果になっちゃったんだ。

最後に、君に言いたいことをいくつか言つよ。

一つ目。元々明るいんだから、それを全面に押し出せば何とかなるよ。みんな仲良くしてくれるよ。

二つ目。またいつか会ったら、君の隠し事を教えてね。今度は腹を割って話せるといいね。

これで終わり。さようなら。大好きだよ、連君。

敬具

西条佳織より』

この手紙を読んで、僕は涙が止まらなくなった。あまりにも悲しかったからだ。

それを読んだ後、僕は丁寧に手紙を折り、机の中にしまった。それから、ベッドで横になった。彼女に対しての感謝の言葉が、急に出てきたからだ。

その言葉を噛みしめながら、僕はいつのまにか寝てしまった。

それから小学校の卒業まで、僕は前のように戻った。いきなりな僕の変容ぶりにみんな驚いたけど、それでも受け入れてくれた。

それでも僕の考え方は変わらなかったけど、少しだけ柔らかくなった気がする。そのおかげで、少しだけ心の中が軽くなった気がする。これも佳織のおかげだと、僕は思った。

「……………う事があったんだ。」

そう言った後、僕はレミリアさんに「水でも飲む？」と訊いた。それにレミリアさんは「結構です。」と言ってきたので、自分の分だけコップに注いで飲んだ。

そのコップをさっと洗っていたら、レミリアさんはこつこつぶやいた。

「……レンは、その人の事好きだったんですか？」

僕は苦笑しながら答えた。

「ただ単に、友達としての好きだと思ってるよ。」

その言葉に、レミリアさんは「西条佳織さんには同情します。」と呟いた。どうして？

すると、レミリアさんは僕の目の前に近づいてきて、「こつこつ呟いてきた。」

「今の学校はどうですか？」

その言葉に僕は、

「みんなのおかげで楽しいよ。」

と笑って言った。それから、僕達は自室へそれぞれ戻って、寝た。

在りし日の池田連(4) (後書き)

今回で、連の独白が終わりました。いや、子供のころから大変です
ね、ホント。

さて、次回からは冬休みに入ります。ただ、あまりにも長いので？
と？に分けました。それでも長いですが、どうぞよろしくお願
い
し
ます。

十一 冬休み？（十二月二十二～二十五日）（前書き）

やってまいりました冬休み。たった二週間近くしかないはずなのに、おそらく最長になるんじゃないでしょうか？すでに二つに分割してしまいましたし。

では、ご覧下さい。

十一 冬休み？（十二月二十三～二十五日）

ついに冬休み！！やったあ！！

.....なんて喜びたかったけど、

「何で宿題が高校の内容なんだよ　　！！！！！」

「庄一、うるさい。」

「でも、わからないわけじゃないでしょ？」

僕は冬休みの宿題を、僕の家でやっていた。

庄一の家を訪問した時に色々あったけど、そんなことはともかく。今は冬休み初日。両親と姉さん、レミリアさんが仕事でいないので一人で宿題でもしようかなと思ってやっていたら、家の電話が鳴った。

誰だろうと思い電話に出たら庄一から。要件は、今からお前んち行って宿題と一緒にやっても良い？で、誰もいないから別にいいかなあと思い承諾したら、玄関のチャイムが鳴った。

電話を切って出てみると、庄一と圭が目の前にいて、「さっさとやろつぜ。」と言って家の上がっていき、冒頭のような状況。でも庄一だけがあまり進まない。

「言いだしつぺなのね。」

「正直、貰った時から時間はあった。だから俺は七割がた終わっている。」

「そんな時間僕にはないよ。暇な時間はのんびりしないと体が持たないから。」

「そんなこと言って連。お前、どのくらいやったんだ？」

「まだ四割くらいかな？八時からずっとやってるから。」

「早いな！？俺まだ二割もいってないぜ！？」

「口より手。」

そう圭に注意され、庄一は静かにやり始めた。今の時間は午後二時くらい。昼はいつものように僕がつくった。僕、宿題終わらせたいのになあ。

ちなみに、元たちはこの場にはいない。圭が言うには、「大変な事件に挑んでいる。」だそうだ。詳しくは終わってからに聴こうかな？
そうやって黙々と宿題をやっていたら、庄一が思い出した感じにこう言った。

「そついやよ、明後日って確かクリスマスだよな？」
その言葉に、僕達二人は固まった。

ああ

！！

「すっかり忘れてた

！

！！」

「うっさい！！」

僕はともかく珍しく圭まで言ったのに、庄一は驚く素振りも見せなかった。僕は驚いたのに。

庄一の言葉に落ち着きを取り戻したけど、僕と圭はちょっとソワソワしながら宿題をやっていた。

クリスマスなんてすっかり忘れてたよ。今年のメニューどうしよう？なんて考えながら宿題をやっていたから、一向に進まない。圭に至っては、もう宿題をやらずに考え事をしていた。

それを見た庄一が「一旦休憩にしようぜ。」と言ったので、僕達は背伸びしたりして休むことにした。庄一、助かったよ。

今更ながらに僕達の慌てっぷりを疑問に思ったのか、庄一は僕達に訊いてきた。

「どうしてそんなに前ら慌てているんだ？」

それに答えようか考えたけど、答えても大丈夫だろうと思ひ言おうとしたら、先に圭が言った。

「…その日から、両親が海外に行くらしい。大晦日までには戻ってくるだろうが、それまでは一人で過ごさなければならぬのを思い

出した。」

「なんだか大変だな。・・・で、連は？どうしてお前は慌ててたんだ？」

「僕は、クリスマスの夕食のメニュー一つも考えてなかったんだ。去年はもう決まっているはずなんだけど、今年は色々だね。・・・」

「お前、大変だったもんな。」

「……料理？」

僕が慌てた理由を言ったら、庄一は同情、圭は疑問を浮かべていた。何処かに不思議がるところ、あった？

僕達の理由を知った庄一は、そんな圭にお構いなしに訊いてきた。「クリスマスプレゼントって、貰ったことあるか？」

その言葉に僕は顔を見合わせ、首を横に振った。貰いませんよ、そんなの。だって誕生日会でもらったのが初めてだったし。

「だよな〜。」

僕達の反応を見た庄一は、席を立ちながらそんなことを言った。

「そう言う庄一は？」

「俺？俺は・・・・・・・・キャッチボール用のグローブとかなら貰ったことあるぜ。」

「もらってるじゃん。」

再びハモる僕と圭。いいなあ、庄一。

そんな風に思っていたら、

「どうしてお前ら貰ったことないんだ？」

庄一が理由を訊いてきた。え〜と・・・・・・・・・・

「僕は料理食べて終わりだったからね。それに、今月の誕生日会が初めてなんだよ。プレゼント貰ったの。」

「なにに！!?」

僕の発言が衝撃的だったのか、今度は圭と庄一がハモった。良くハモるね、圭。

「じゃあ今までお前、そういうの貰ったことないのか!？」

「うん。例えば、よくバレンタインでソワソワする男子見て、『今日って何かの行事だっけ?』としか思わなかったし、基本的に寝てたから。それに、両親料理ベタだし、買い物ほとんどしなくなったからそういうの買ってこなかったもん。あとは、さっき言った通り。」

「…自分で買ってきたものしか置いてなかったのか、あの部屋?」

「そっだよ?でも、さすがに教科書や机、本棚に制服とかは家のお金だよ。僕が買ったのは、服にノートに本、それに…ファイルくらいかな?」

僕は訊かれたことに答えただけなのに、二人は何故か驚きと同情の両方が混ざった視線を送ってきた。え?なにかあったの?

気を取り直した感じで、庄一は圭に訊いた。

「圭は?」

「…俺は、パソコンは拾ってきたものだから、貰ったと言いたい。」

それに、今のパソコンは、デントツでパーツを買ったり貰ったりして、知り合いに教えてもらいながら改造していた。」

「その金はどうしてるんだよ?」

「小遣い、もしくはバイト代。」

「小遣い貰ってるの!?いいなあ。」

「いや。小遣いを両親に渡すお前の方が凄いから。ていうか、バイト代を貰う前までは連はどっやって金貯めてたんだ?スッゲー不思議なんだが。」

「うん。あまり言いたくないんだけどなあ。」

「…両親の親が、それぞれ毎月送ってくることを?」

「どうして知ってるの!?!」

圭、君はやっぱり敵に回したくないよ。なんて思っていたら、庄一が食いついてきた。

「いくらもらってたんだ?」

仕方がないので、僕は正直に答えることにした。

「父さんの両親からは毎月二万円で、母さんの両親からは毎月三万

円。確か今も送られてるはずだよ？」

どっちの両親も健在で、今年はいかなかったけど、夏休みになると必ずどっちの家にも行っていた（姉さんも、女優になる前は行っていた）。その度に「こんなダメ息子（娘）からこんな立派な孫が生まれるなんて……」。なんて言われる。そのうえ、「これからも頑張つて。私達は応援してるから。あと、小遣いを振り込んであげるからね。」なんて言われた。嬉しいはずだけど、全く嬉しく感じないのはどうしてだろうか？

そんなことを考えていたら、

「なんだと連。私は、そんなお金一銭ももらってなかったぞ。」
という声がした。まさか今の声って……。恐る恐る振り返ってみると、そこにいたのはやっぱり、

「姉さん！今の話、聞いてたの!？」

「たまたまなんだけどね。」

そう言いながら、姉さんは僕達に近づいて来た。その後ろからレミアさんも歩いてきた。なんだか姉さんが引つ張っている感じがするなあ。

僕達がやっていた宿題をちらつと見た後、姉さんは訊いてきた。

「ねえ連。どうしてお前は貰っていたのかしら？」

「知らないよ。貰ったのは姉さんが出て行ってからだもん。前に訊いたら「なんとなく。」って言うてたから。」

僕が正直に答えたら、姉さんは「まったく、私だってあの両親には苦労したのに……。」と言いながらキツチンの方へ向かった。

絵になるなあと思いつながら、僕はふと時計を見た。そしたら、もうすぐ四時になろうとしていた。

「四時だ。」

「ん？本当か？なら帰るか。」

「……邪魔した。」

僕が時間を告げたら、庄一達は席を立てて帰っていった。

それを見送った後に僕はリビングに戻ったら、レミアさんと姉

さんが僕の宿題を眺めていた。どうしたんだろうか？

「なんで見てるの？」

そう思っただけなのに、

「え！？べ、別に！？」「な、なんでもないわ！？」

二人は妙に焦っていた。………ん？
何かあったのかな？

………もしかして………。なんて思いながら、僕はちよつと確認することにした。

「二人とも、勉強してないから分からないの？」

「！！？」

凶星、かな？驚いてるから。

なんて思いながら、僕は宿題を自室へ片付けて夕食をつくることにした。

両親が帰ってきてみんなで夕食を食べていたら、姉さんがいきなりこんなことを言った。

「そっいや、明後日クリスマスなんだよね。私がいなかった時はどうしてたの？」

それに答えたのは父さんだった。

「ん？クリスマス？だからいつもより豪華な料理が出てきたのか？
今まで。」

その言葉に、父さん以外の全員が固まった。

「どうした？なにをそんな顔をしているんだ？」

何にもわかっていない、って顔をしている父さん。母さんでさえ分かっているのに、どうして父さんは分からないのか、僕は分からなかった。おそらく、姉さん達も同じ気持ちだろう。

そのことに呆れながらも、姉さんは提案してきた。

「それだけだったのなら、今年はプレゼントでも持ち寄らない？」

「プレゼント？明後日だろう？そんな時間は無いと思うぞ。」

否定的な父さんに、姉さんは続けた。

「帰って来るときでもいいじゃない。」

「そうだが……私はどんな物がいいのかわからないんだが。」

「だったら、私も買いに行くからその時一緒に行けばいいでしょ？」

母さんも一緒に。」

「そうね。プレゼントなんてほとんどなかったものね。」

姉さんの言葉に、母さんまで便乗した。僕は、その話を聴きながら明後日の料理を何にするか、考えていた。毎年やっていると、かぶる料理あるしなあ。

そしたら、今まで黙っていたレミリアさんがこう言ってきた。

「あの、普通プレゼントって、もらう側が要求するものじゃないんですか？」

それに対して僕たち家族の答えは、

「……人から要求されるものじゃ、自分たちが納得しない。」

と、見事に満場一致の意見だった。そうだよな。あれこれ考えてからこれにしよう、っていう流れが大事なんだよね。などと、言った後に思っていたら、

「なるほど。つまり、考えた結果で選んだものを渡す、という事ですか？」

レミリアさんが納得したように頷きながら言った。大体は合ってるね。

そして、夕食の間に話し合いが行われ、明日みんなバラバラで買いに行くこととなったんだけど、姉さんは父さん達と一緒に行くよかったです。

それならば、という事で、何故か僕とレミリアさんが一緒に買いに行くこととなった。それが決まった時、レミリアさんはものすごい喜んでいた。

はて。僕と一緒に居られて嬉しい事でもあるのだろうか？

十一 冬休み？（十二月二十二～二十五日）（後書き）

次回はプレゼント選び！とんでもなく朴念仁な池田連は、レミリアの気持ちに気づくのか！？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんて書いてみましたが、最後の方は気にしないでください。ただなんとなく書きたかっただけです。深い意味はありません。

冬休み？（2）（前書き）

えっと、たぶん大晦日にも更新すると思います。

突然ですが、もう二ヶ月なんですね。これを投稿してから。終わりまで読んでくだされば、私としても幸いです。

冬休み？（2）

次の日。

姉さんとレミリアさんは、仕事が無いという事で家にいる。僕は朝の仕事をやったら、自室へ戻り宿題をやることにした。昨日の時点で五割弱ぐらいしか終わっていないので、大晦日の四日前くらいまでには終わらせたい。

一月にやっても良いんじゃないのかって？

甘いね。とても甘い。僕にとって、この冬休みは脅威でしかないのさ。

なぜなら、クリスマスはもちろん大掃除にお正月、寺社巡りなどが待ち受けているからだ。正直、宿題どこの話じゃない。だから僕は、宿題を早めに終わらせようと頑張っている。

しかし、あと三割の所で時計を見たら、時間になりそうだった。なので、僕は宿題をそのままにしておき、財布とコート、それにマフラー（姉さんが『せっかくあるんだから』という事で着けることになった、）を持って一階へ降りた。

一階へ降りてリビングへ向かったら、誰もいなかった。

となると、まだ着替えとかに手間取っているのだろうかと思い、来ない間に財布の残金を確認した。そしたら、お金を降ろさなきゃいけないことに気づき、僕は自室へ戻って印鑑と通帳を持って行くことにした。しかし、通帳や印鑑を持ち歩くのは危険なので、僕は自室にあったポーチを持ち出しその中に入れ、また下に降りたら姉さん達がいた。

「よう連。準備できた？」

僕を見つけて、姉さんが訊いてきた。レミリアさんは、どうやら姉さんの後ろにいるみたいだ。

そんなことを考えながら、僕は頷いた。

それを見た姉さんは「そうか。じゃ、レミリアのこと頼んだわよ。

「と言って、立っていたところから一歩ずれた。その後ろにいたのは、おそらく新品であるう冬物の服を着て恥ずかしがっているレミアさんだった。」

明らかに気合の入ってそうな服装に、僕は心の中でそんなに楽しみにしてたのかな？と思いつつ、催促される前に正直な感想を言った。

「凄い可愛いよ。さしずめ冬の天使かな？」

そう言われたレミアさんは、一瞬で顔がゆでだこの様になり、倒れた。

おかしいな。いつものように褒めただけなのに。

どうしてレミアさんが倒れたのか考えてる僕と、倒れたレミアさんを見て姉さんは、

「レミアは今日もつのかしら？」

等と意味不明なことを呟いていた。どういうこと？

こうして、出発前から大変な、僕とレミアさんの買い物が始まった。

「すみません。倒れてしまって。」

「気にしなくても良いよ。今日はゆっくり買い物しよ？」

家を出て二人で並んで歩いてたら、レミアさんが先程の事で謝っていた。本当に気にしなくてもいいのに。

そのまま歩いていたら、レミアさんがふと今更のように訊いてきた。

「そういえば、今日はどこで買い物をするんですか？」

僕は、そう言えばレミアさんと一緒に買い物するの初めてだな、と思いつながら答えた。

「駅前の方だよ。僕達の方から反対側にあるから、普段は行かないんだ。そこへ行く理由は、プレゼント用の物がたくさん売ってるから。レミアさんは、この町の駅前に行くのは初めて？」

「いえ。撮影で一回行ったことあります。．．．．．ところで、レン。訊きたいことがあるんですけど。」
「何？」

そう言つてレミリアさんを見てみたんだけど、彼女から何か黒いものが見えるのは気のせいかな．．．．？

「普段行かないつて、おつしやりましたよね。それでしたら、どの様な時に行ったのですか？」

そう訊いてくるレミリアさんから、何かすごいプレッシャーを僕は感じた。

答えないと押しつぶされそうだったので、

「どの様な時つて．．．．．旅行に行く時とかに新幹線を使うから、駅を利用するだけだけど？」

と、僕がそう答えたら、レミリアさんから放たれていたプレッシャーが無くなった。

それから、レミリアさんは恥ずかしさのあまりか顔を真っ赤にして、目的地に着くまで一言も話さなかった。

僕はというと、特に会話も無くて大丈夫だった。それに、僕は僕で明日の夕食どうするか考えていたから、逆によかったのかもしれない。

目的地の駅前に四十五分かかつて着いた。途中でお金を降ろしていたからだ。

そして、レミリアさんは復活した。

「どこ行きますか？」

そう言いながら、人通りの多い道の真ん中でキョロキョロするレミリアさん。

僕はそれを見て、なんだか小動物みたいだなあと素直に思いながら、

「じゃ、今から十二時まで別々に行動ね。」
と言つて離れようとした。そしたら、レミリアさんが僕の腕をガシ

ッ！とつかんだ。

「待ってください。ここは普通『一緒にあっちの方から観ようか？』
と言うところじゃないのですか？」

「え？だってプレゼントって、誰が何を買ったのか分かったら、楽
しくないんじゃないの？」

「そうですね……。」

うーん、彼女は何が言いたのだろうか？……………
……………あ！

「もしかして、迷子になりたくないから一緒に居たいの？」

「似てますけど、そうじゃありません。」

あれ？外れた。やっぱり人の考えていることを考えるって、難しい
なあ。

なんて思っていたら、突然レミリアさんが僕の腕に自分の腕をか
らめて腕を組む形にした。

あまりにも突然だったので、僕の思考は一瞬でトんだ。

えええ！！！！ちょ、ちょっとレミリアさん！！？誕生日会でも同
じようなことをやっていましたよね！！？

などと思っていたら、

「案内してくれますか？レン。」

頬を若干赤らめながら、上目遣いでレミリアさんが頼んできた。そ
の破壊力は、僕の思考能力が回復しそうになったのに、また一瞬で
トばされた拳立ちくらみに似たような症状が出るくらいだ。

「大丈夫ですか！？」

僕がクラッとなったのにレミリアさんは驚いて、こう言ってくれた。

僕は何とか踏みとどまり、心配をかけまいと考えていった。

「大丈夫大丈夫。じゃ、仕方ないからこのまま行こうか。」

その言葉にレミリアさんは、ものすごい笑顔で「ハイッ！！」と言
ってくれた。

そのまま歩きながら、これってデートと呼ぶのだろうか、ふと
考えてしまった。

冬休み？(2) (後書き)

どうでもいいですけど、思い込みが強い人ほど、意志が強いのでし
ょうかね？

冬休み？（3）

まずは、僕の両親に対してもプレゼントを選ぶことにした。僕だけのはずなんだけど、レミリアさんが「お世話になってますから。」と言ってきたので、二人で選ぶことになった。

何を買うか全く考えていなかったもので、とりあえず通りをブラブラ歩いて気になった店に入る方式をとることにした。

久し振りに両親にプレゼントをあげるなあなんて思いながら、僕は歩いていった。そしたら、レミリアさんが「あ。」と言って立ち止った。まだ腕を組んでいる状態なので、結果的に僕も立ちどまざるを得なかった。

「どうしたの？」

レミリアさんにそう訊いてみたら、「あそこに入ってみませんか？」と言いながら指を指した。

その先にあったのは、最近オープンしたらしい化粧品のお店だった。僕にとっては馴染みが全くといってない店なので、有名店だと言われてもピンとこなかったけど、レミリアさんが催促するので入ることにした。

店の中に入ってみたら、主に女性客を中心としていた。男もいるけど、一人で来ているのはほとんどいなかった。大体は、僕のように女の人と一緒にいる。

そういえば、最近男物の化粧水とかあるんだっけ？と思いながらあれこれ見ているレミリアさんの後についていると、ある商品に目が留まった。

「これって……」

そう呟きながら、僕はそれを手に取って眺めた。

「レン。なにしてるんですか？」

「あ、レミリアさん。いや、ちょっとね。」

眺めていたら、レミリアさんが訊いてきたので、僕はそれを後ろに

隠しながら言った。

そんなことをするもんだから、レミリアさんは訝しげな表情をつくって、訊いてきた。

「後ろに隠したのはなんですか？」

うくん、隠しても良いけどどうせバレるからなあ。と黙ってしまっただので、僕は後ろに隠していたものをレミリアさんの前に出しながら言った。

「これだよ、これ。」

レミリアさんは僕が見せたものをマジマジと見ながら言った。

「ずいぶん古いのまでこの店にあるんですね。……でもどうして隠したんですか？」

「これを買おうとしたからだよ。母さんにね。」

仕方がないので、僕は正直に言うことにした。これは、母さんがよく使っていた化粧品だった。今ではあまり数が無いとかで別なものを使っているみたいだが、これに母さんは、すごく思い入れがあるようだ。

丁度値段が手ごろだったので、僕はこれを母さんのプレゼントにすることにしたのだ。っていうのを、これを見た瞬間に思った。

僕が言った言葉を聴いてレミアさんは、「だったら、私は別なものにしますね。」と言って僕の腕を引っ張りながら別なコーナーに向かった。

それから、その店でレミアさんは、僕の両親に贈るプレゼントを買った。僕は、母さんのだけを買った。

化粧品店を出てから、僕達はまた歩いていた。そしたら、庄一の家族と圭に出会った。

「よっ。どうした連。こんな所に来るなんて。しかも、レミアさんと一緒に。」

「それはごっちのセリフだよ。どうして圭と一緒にいるの？僕びっくりだよ。」

「…驚く理由は理解できるが、俺達も驚いている。」

何て僕達で話していたら、庄一のお父さんが話しかけてきた。

「久し振りだね、連君。」

「あ、久し振りです。」

「君のおかげで元通りになった気がする。いつも庄一がそちらの家に押しかけてるみたいだから、また遊びに来て構わないから。」

「ありがとうございます。」

「おい親父。そんなこと言うなよ。母さんが怒るだろ。」

「私は、池田君みたいな子だったら良いわよ。礼儀正しくて素直な子じゃない。」

そうやって話していたら、話題が最初の方へ戻った。

「そっぴや、どうしてお前とレミリアさんがここに？もしかしてお前……」

「……裏切り者？」

「いや、その表現怖いから。ていうか姉さんの発案でね、クリスマスプレゼントを買いに来たんだよ。そういう庄一たちは？」

「俺も似たようなとこだ。でもま、圭は違うみたいだがな。」

そう言えば圭の両親って、旅行でクリスマスにはいなんだっけ？なんて思いながら圭を見てみたら、

「……朝起きたらもう出発していた。」

と言った。え？てことは何？圭は今日からしばらく一人暮らしなの？

そう思いながら庄一を見ると、「俺もついさっき知ったんだ。ばったり会ったからな。」と言っていた。

レミリアさんは、僕達の話聴きながら圭が言っていた『裏切り者』の意味を理解したのか、顔が赤くなっていた。

「今日からどうするの？」

念のために僕が圭に訊いたら、

「私達の家泊まりに来て良いわよ。」

庄一のお母さんが、圭にそう提案した。

それに、庄一と庄一のお父さん、圭までもが驚いた。僕達は、これで決まりそうだと思ったから、その場を離れた。

庄一たちと別れて歩いていたら、レミリアさんが「もうお昼なんですね。」と、時計を見ながら言ったので、どこかで昼食を食べようという話になった。

それで来たのが、日暮食堂。通称日食。創業百年になる老舗だ。この町の人達には結構有名店だけど、他の所から来た人はそんなに知らない。その理由はあとで話そうかな。

日食は、値段が安いのが特徴。だから、平日でも結構人が来るし、休日になると行列なんてざらだ。

紹介もそれくらいにして、今の場面に戻ると……………。

「あれ？結構人がいない。」

「そうですね。」

日食の前に来てみたはいいけど、あまりの人のいなさに僕は驚いていた。いない、というか行列がそんなにできていないことに驚いた。どうしたのだろうかと思いつつ、僕は行列に加わることにした。

それから二十分くらいで、僕達は店に入れた。で、店に入って全体を見たら、カップルくらいしかいなかった。

「いらつしゃい連！！彼女連れか？」

「か、彼女……………」

「違うよ、大将……………それにしても、今日はやけに人が少ない？どうしたの？」

「ま、それは席に座ってから話す。カウンターでいいか？」

「うん。」

「や、やっぱり、レンはそう思っていないんですね……………」
レミリアさんは、僕と大将との会話で一喜一憂していた。彼女だと言われて嬉しくなつて、否定したら悲しくなつていた。僕と彼女だとみられて嬉しいのは何故なんだろうか？

何はともあれ、僕とレミリアさんはカウンター席で丁度大将の前に座ることとなった。

「で、どうしてこんなに人が少ないの？」

「ああ。今日はクリスマススイヴだからな。ほとんどカップルしか来ないんだよ。一人身の奴らは夕方くらいにしか来ないんだ。」

「ふん。」

僕は大将の話聴きながらメニューを見ていた。レミリアさんは、僕と一緒にメニューを見ていた。その顔を覗いてみると、なんだか嬉しそうだった。

メニューが二人とも決まったので、僕が大将に注文した。その料理を作りながら、大将が僕達に話しかけてきた。

「そっぴや、レミリアちゃんのドラマと違って、連は観てるのか？」「えー！？」

大将の話聴いた時、レミリアさんは驚いていた。どうして知っているのだろうか、という顔をしていた。いちいち説明するのも面倒なので、僕はレミリアさんの驚いた顔を無視して答えた。

「全然。姉さんの観た事あるけど、レミリアさんは観たことないよ。テレビは基本的に見ないから。」

「それもそうか。レミリアちゃんは連にDVDとか渡さないのか？」

「い、いえ！わ、わわ渡しませんよ！？」

「ま、色々あるか。・・・ほら、出来たぜ。」

「ありがとうございます。」「あ、ありがとうございます。」

大将が料理を出したので、僕とレミリアさんはお礼を言って、食べ始めた。

それから、食べながら僕達は大将と話した。ま、世間話なんだけどね。

そんな中、大将が僕にこんな提案をしてきた。

「なあ、正月暇か？」

「正月つて、いつごろ？」

「一月五日と六日だな。」

「その日は・・・どうだろう？神社巡りが二日と三日にやるから、暇と言えば暇だけど・・・」

「そうか。暇だと仮定して頼みごとがある。」
「何？」

「店を頼めないか？ちょっと空ける用事があつてよ。」

「また？今年二回やったじゃない？」

「その分バイト代払つてるだろ。」

「そうだけど……」

「で？どうするんだ？」

「うーん……」

僕が考え込んで黙つたら、レミリアさんが急に話に加わつた。

「駄目です！その日は予定があるんですから！！」

「ええ！！？」

そんなの初耳だよ！！？そう僕が思っていたら、大将の目がキラんと光つたような気がした。

「ほう。どんな予定があるんだ？」

興味津々、と言つた感じで訊いてくる大将。すっかり大将ペースだ。それに対して、レミリアさんは少し考えてから顔をちよつと赤くしていった。

「そ、その日は、わ、私といい一緒に遊びに行くんです！！」

「えええ！？ちょ、いきなりとんでもない予定が出てきちゃつた！

！凄いい初耳なんだけど！！？」

「当然です！！当日に驚かそうとしていたのですから！！」

このレミリアさんを見て、僕はちよつと不自然に思えた。どうして彼女はここまで必死に、僕のバイト話を断ろうとしているのだろうか。

でもそんなレミリアさんを見て、僕は決めた。

「大将。やっぱりやめとくよ、バイトの話。その二日間は休みにすればいいじゃない。」

その言葉にレミリアさんはホッと胸をなで下ろし、大将は笑いながら、

「そっか。ならいいや。その二日は休みにする。せいぜい楽しめよ、

連。」

と言ってくれた。根はやさしいんだけどね、大將は。なんて思いながら、僕は食べ進めていった。

二人とも食べ終え、会計をどうするかでちょっと喧嘩になりかけたけど、二人でカンパすることで決着がついた。

冬休み？（４）（前書き）

新年明けましておめでとございます。今年最初の投稿です。これからよろしくお願いします。

冬休み？（４）

店を出た後、僕達はプレゼント選びを再開させた。

父さんにはとりあえず髭剃り（電動）を買った。それでは、姉さんと互いのやつだけとなった。

「姉さんのどうしようか？」

「そうですね・・・。」

なんて歩きながら考えていたら、

「あ、連？ていうか、レミリアさんと一緒だなんて初めてだね。どうしたの？」

「あ、元？そっちは相変わらず凄い事になってるね。クリスマスの準備でもしに来たの？」

元たちと遭遇した。あっちは相変わらずの大所帯で、久実さんに董さん、レイジニアさんに花音さんもいた。

僕の質問に元は苦笑しながら答えてくれた。

「そうなんだ。実は結構前から話題には上がってたんだけど、ちょっと面倒なことが起こってね。今日しか準備する時間が無いんだ。そっいう連は？」

「僕もね、プレゼントを買いに来たんだ。今までそっいうの買ったことないから、困っちゃうんだけどね。」

何気なく言った僕のセリフに、元たちは驚いていた。やっぱり？

「本当に？」

「うん。プレゼント貰ったの、この前の誕生日会が初めてだから。正直に言ったら、さらに驚かれた。そんなに変かな？」

それを聴いたレイジニアさんと花音さんは、

「私は両親がいないけど、生きてる時には貰ったわよ。」

「私ももらったことあるよ。」

と言った。あ、やっぱり僕だけなんだ。プレゼント貰ったことないの。

なんだかひどい疎外感を覚えたけど、気にせずに話を進めた。

「庄一たちと会った？」

「うん。ついさっき来たようなものだから。」

「ふん。じゃあね。」

「またね。」

話をしたけど、早くに話が切り上がった。話題が何にもなかったからだと思っけど、女子からの変なプレッシャーが、僕達を刺激したのかもしれない。

元たちと別れて、再び二人になった。

「姉さんのどうしよう?」

「さっきも言いませんでした?」

「そうだけど、さ。」

そう言いながら、僕達は歩いていった。

結局、姉さんのを後回しにして、互いのプレゼントを買うことにした。

「どこで買おうかな?」

「バラバラで買いに行くんですよね?」

「そうだよ。わかつちやつたら面白くないじゃん。」

「面白さを期待する必要はないと思うんですけど……。」

「そう?」

「はい。」

そういうものかなあと思いながら、なんだかんだでレミリアさんと一緒に買いに行くこととなった。

それで着いたのが、アクセサリー店。僕はそういったものに興味はないけど、女の人が好きそうだから。

なんて軽い考えで来てしまったけど、今更ながらレミリアさんが女優だという事を思い出し、CMとかに出演する際にもらったりするんだろつなあと考え、急遽別な店に移動することにした。

その時レミリアさんが「あそこで良かったんですけど……。」
と言っていたけど、何となく遠慮した感じだったので、そのまま行

くことにした。

次に着いた店が、またもやアクセサリー店。あれ？さつきとは違う店だけどなんて似たような店に？なんて考えて別な所へ行こうとしたら、レミリアさんが僕の腕をつかんだ。

「ここにしましょう。このお店にしてください。」
どうして懇願されるのか分からなかったけど、何か気になることがあるんだろうと思いい店に入ることにした。

店に入って店内を観察した結果。

女性が多い。というか、明らかに女性向けの店だった。どうしよう、場違いすぎて帰りたくなった。

そんな僕の気持ちも知らずに、レミリアさんは店の奥へ僕を連れていった。そして、ある商品が入ったショーケースの前で止まった。「これ、このお店限定モデルのプレスレットなんです！デザインとかすごい可愛い、って評判なんですよ！」

その商品を指差しながら、レミリアさんは説明してくれた。凄いテンションが上がっているとこ悪いんだけどさ……………。

「これさ、完売してない？」

「ええ！？……………あ、本当ですね……………」

僕の一言で、レミリアさんのテンションが一気に落ちた。なんだかすまない気がしたので、僕は店員さんに在庫はあるかどうか訊いてみた。

そしたらその店員さんが、「少々お待ちください。」と言ってどこかへ行ってしまった。残された僕達はどうしようか考えていたら、その店員さんが手に何かを持って戻ってきた。

「こちらでございます。」

「え？あつたんですか？」

「え？」

店員さんが持ってきたのは、レミリアさんが欲しがっていたプレスレットだった。

でもこれ、完売してたんじゃないの？

なんて思っていたのがばれたのか、

「こういうのは、人を選ぶよう言われています。ですから、こうして買う気があるのかどうか試させてもらっているのです。」
店員さんが丁寧に教えてくれた。なんですか、その試の門みたいな設定。なんてツッコミたかったけど、ぐっとこらえた。

一方、それを見たレミリアさんの目がキラキラと輝いていた。それだけで、どれだけ欲しいのか分かってしまったので、僕はこういうのも悪くないのかな、と思いながら「あ、これ買います。」と言った。

レミリアさんは、僕の言葉に喜んだらしく思いつきり抱き着いてきた。抱き着かれた僕は、一瞬気が遠のくかと思っただけど何とかこらえた。

それを見た店員さんは苦笑しながら、「では会計の方をいたしますので、こちらに。」と言ってレジの方へ向かっていった。僕は、レミリアさんに離れてもらいながら店員さんの後を追った。

今日だけで一万三千円近く使っているという事実には驚きながら（中学生にとって大金）、僕は店を後にしようとしたけど、レミリアさんが「渚さんのプレゼントを買いたいと思います。」と言ったので、レミリアさんが買うまで店の中にいることとなった。

あ。ブレスレットは僕が持つてるよ。明日のプレゼントとして買ったから。

さて、僕は姉さんに何を買おうかなと考えていたら、レミリアさんの買い物が終わったらしい。「行きましょう。」とレミリアさんは言いながら、自然な動きで僕の腕に絡めるようにしがみついていた。

もう何度目かのパニックを起こしそうになったけど、ある程度余裕が出てきたのかあんまり動じなくなった。これが良い事なのか分からないけど。

店を出た僕達は、どうしようか話し合った。結果、姉さんのプレ

ゼントを買ってから、最後に僕のプレゼントを買ったという事になった。

姉さんのプレゼントはレミリアさんが買っている時に決まったので、迷いなく店へと行った。

そして着いた店が、

「ここ、本屋ですよね？」

「そうだよ？」

本屋だった。僕の近くにある商店街の本屋より広そうなので、本の数は多そうだと思う。

「どうしてここに？」

「ちよつと姉さんに直してもらいたいところがあったからね。」

「それって、部屋の事ですか？一応綺麗でしたよ？」

「そうなの？」

「はい。なんでも『連の奴、ついに見放したのか。ここの掃除一切しないなんて。』と言いながら掃除していました。」

なんと。知らないうちに、姉さんは自分の部屋を掃除できるようになったんだ。

そのことに僕は驚きながら、買うものがなくなったことに気付いた。

どうしよう、何かあったかな………？

悩んでしまった僕を見て、レミリアさんは「とりあえず中に入りませんか？店の前に居たら変な目で見られますよ？」と言った。それもそうかと思った僕は、本屋の中に入った。

中に入ったら、期待通り本の山だった。

僕は姉さんのプレゼントの事を忘れて、真っ先に家庭に関する本が置いてあるコーナーへ行った。これはもう反射的な反応で、レミリアさんは僕の行動の速さに目が点となっていた。

そのコーナーに着いた僕は、とりあえず料理本を手にとってペラペラめくり戻す、という行為を数回繰り返した。

読んだ結果特になかったなあと思いつつながら、僕は次になんとなく

マツサージ関係の本を読もうとした。そしたら、

「渚さんのプレゼントはどうしたんですか！」

レミリアさんの怒鳴り声で自分が何をしようとしたのか思い出した。あ、そうだった。姉さんのプレゼントを何にしようか考えていたんだった。

思い出したついでに僕は、そう言えば姉さんって、昔は大の可愛い物好きだった。という事も思い出した。

それで買うものが決まったので、僕はレミリアさんの手を握って「行くよ。」と言いながら本屋を後にした。レミリアさんの顔を視えなかつたけど、手から伝わる体温が温かつたので、顔が赤くなっているのだろう。

そこから数分歩いて、僕はある店に入った。その店とは……

「あ、これ可愛いですね！」

「うん。基本的にそういうものしか売ってないから、この店。」

デザインが可愛いとか、そういった『可愛いもの』専門のお店である。姉さんがよく僕にこの店のことを話してくれたので、場所ももう覚えている。

レミリアさんがそう言った物を色々眺めている中、僕は店員さんにある商品の場所を訊いてそこへ向かった。

その商品とは、来年のスケジュール帳とシャープペンシルのことだ。

普段、スケジュールをカレンダーとかに書かず、マネージャーさんに憶えてもらってそうなので、これで自分の予定くらいまとめてくればいいかなと思ったからだ。

いろいろな種類があったのでどれにしようか悩んでいたら、レミリアさんが今まで買ったものを持ちながら近寄ってきた。

「決まっただんですか？」

「買うものは決まっただけど、どれがいいのか分からなくてね。」

僕はスケジュール帳をどれにするか考えながら答えた。いろいろ種

類があつて迷うなあ。

そんな僕を見かねたのか、レミリアさんが一冊手に取って僕に押しつけた。

「これがいいんじゃないですか？これならその日の予定も分かりやすいですよ。」

押しつけられたスケジュール帳を手に取り、パラパラとめくった。その手帳はレミリアさんが言つとおり、一日一日の予定を書く欄が大きかった。

僕はレミリアさんにお礼を言つてから、シャープペンシルと手帳をレジへ持つて行き、会計した。

「ありがとう、レミリアさん。」

「そ、そんな。お礼を言われるようなことはしていませんよ。そ、それより、レ、レンのプ、プレゼントでも買いに行きましょう？」

「あ、そっか。」
店を出て再度お礼を言つたら、僕のプレゼントを買いに行こうとレミリアさんが言つてきた。

すっかり忘れてたなあ、と思ひながら歩こうとしたら、
「レンは何がいいんですか？」

レミリアさんに、プレゼントは何がいいのか訊かれた。

僕は少し考えてから、

「……………自分で考えて。」

と答えた。

「それじゃ困ります！ヒントくらい教えてください！！」

ヒント、ねえ……………うん……………。

「基本的に、欲しいものは自分で買つたりするからなあ。あえて挙げるとしたら……………」

「挙げるとしたら？」

僕がそう呟いたら、レミリアさんが食いついてきた。困った。特に何も欲しいものがない。

それはさすがにレミリアさんに失礼だなあと思いながら考えた結果、

「本？」

「本、ですか？」

本しか思いつかなかった。

だって僕、趣味が読書しかないんだもん。ゲームなんて暇がないから無理だし、家事は特技だし、これといったものが他にないから、なにもやりたいと思わないし。

僕の言葉に、レミリアさんは「本ですか……。もしかしてさつき本屋でのあの反応は……。」と呟いていた。……。スミマセン。あれ、反射的なんです。癖なんです。

なんて心の中で謝っていたら、レミリアさんが「戻りましょう。」と言って、来た道を引き返した。おそらく、本屋にでも行くのだろう。

マツサージの本でも読んでみたいなあ、なんてレミリアさんの後を追いつながら、僕は思った。

で、さっきの本屋に着いた。携帯電話の時計を見たら、時刻は午後三時くらいになっていた。

早く帰らないとなあと思いながら、僕はレミリアさんが店の中に入ってしまったのを見て、慌てて入ることにした。

「ここですね。」

「行動が早いね、レミリアさん。」

店に入ってすぐに、レミリアさんは僕がさつき居た場所へ向かっていった。僕はそのあとを追うことしかできなかった。

レミリアさんが探している中、僕はマツサージ関連の本をパラパラ読んでいた。

マツサージかあ、これまでできるようになったら庄一たちになんて言われるんだろう？今度こそ「執事にでもなれ。」とか言われるかなあ？

なんて本を読みながら思っていたら、

「レン。その本はやめてほしいです。」

いきなりレミリアさんにダメ出しされた。どうして？

「だって、その……」

理由を言おうとしているのに、まったく要領を得ていない。しかも、若干頬が赤くなっている。

彼女は何を想像しているのだろうか？

そう不思議に思ったが、僕は何となくためになりそうだったので、自分で買うことにした。

……あ。レミリアさんに何買ってもらえばいいんだろう？

結局。レミリアさんの好みで選ばれた料理本数冊が僕のプレゼントとなり、僕はマツサージの本と、ストレッチに関する本を買うことにした。

疲れた体を癒せそうだから、というわけではないからね？ ためになると思ったからだよ？

冬休み？（４）（後書き）

。 次回はクリスマス当日。 当然、 楽になるわけではなく……

冬休み？（5）（前書き）

クリスマス当日。当然、苦勞しないわけではありません。可哀想ですが。

冬休み？（5）

そして、クリスマス当日。

この日は両親が仕事、姉さんとレミリアさんはイベントに参加することになって、家には僕一人。四人とも夕方には帰ってくるらしい。

ということとは、

「今年も一人で飾り付けとかやらないと駄目か……」

。宿題は明日にでも終わらそう。」

そう。家に誰もいないから、僕一人ですべてやることになる。飾り付けから、料理やケーキ、お酒の注文まで。

いつもと変わらないと思っている人。一日でやるんだからね？
考慮してね？

「さくで、やるとしますか。」

僕は昨日寝る前に立てた計画表を見ながら、飾り付けから始めることにした。

飾り付け、と言ってもそんなに大層なことはいらない。ただツリーを物置から持ってきて、僕の誕生日会に使った通りに飾るだけ。所要時間はたったの三十分。どうしてみんなあんなに掛かったんだらう？

次に、買い出し。これは、今夜の夕食に出す料理とケーキの材料に、お酒の調達（商店街の人は事情を知っているので、特に何も言わない）をするため。

久し振りに大量に買うなあなんて思いながら、財布を持って商店街へと向かった。

商店街に着いた。いつもより人が沢山通っているのを見て、みんな面白い物に来たんだろうなと想像しながら肉屋の方へ向かった。

「いらつしゃい連！！今日はクリスマスだ！恒例のアレでいいか？」

「うん。今回は五人分だけだね。」

僕がそういうと、肉屋のおじさんは怪訝な表情を浮かべた。

「渚が帰ってきたはの知ってるが、他に誰かいるのか？」

「姉さんの仕事仲間だつて。」

「あの渚がねえ……………ま、いつもより儲かるからいいや！ほらよ！」

「あ、いつもより五百円安くして。」

いつものように僕が値切りの交渉をすると、

「……………毎度あり。ちゃっかりしてるな、全く。」

ちゃんと五百円引いた額を請求してきた。あっさり終わっちゃった、値切り交渉。

少し残念な気持ちを持ちながら、僕は言った。

「いいじゃない。本来なら、二千円安くしてって言うところだったんだから。」

「お前なら言いかねないな。」

僕の言葉に、そう言いながら苦笑する肉屋のおじさん。安くしてくれるのはありがたいなあ。

僕は安くしてくれたことにお礼を言って、次の店へ向かった。

最終的に。

大量に買い過ぎたため一人では持ちきれなくなり、段ボール箱三つ（内一個は酒入り）につめて台車で運ぶことにした。正直、使った額が恐ろしくて家計簿にかけない。

今までこんなに奮発したことないんだよなあ、と思いながら台車を押して商店街を抜けようとしたら、

「大変そうだね、連。」

「あ、千亜妃さん。仕事はいいんですか？」

遠藤千亜妃さんが声をかけてきた。

この人は商店街にあるボタン屋さんの一人娘で看板娘。姉さんと同級生で、クラスはずっと同じだったらしい。なので、中学卒業と同時に姉さんが女優になったことには同級生全員が驚いたらしく、緊急同窓会が行われたらしい。いや、同窓会より会議かな？

それはさておいて。千亜妃さんは高校を卒業後、自宅の仕事を手伝っているというか、継ぐと言っている。綺麗な上、独身。

……最後の方は要らないかな？ま、話を戻そう。

千亜妃さんはニツコリと笑いながら、

「今日は定休日なの。両親が『クリスマスにボタンの買い物をするやつなんていないだろうから、休みにしたって問題はない。』って言っちゃったからね。」

と言った。綺麗な人の笑顔って、癒されるね。

僕は台車を押しながら、気になったことを訊くことにした。

「どうして僕の所へ？何処かへ行く予定があるのなら、構う必要はないんじゃないですか？」

「行く予定はないの。誘われたけどね。」

僕のスピードに合わせて歩く千亜妃さん。どうして？

少し考えてから、世間話をすることにした。

「両親は結婚とかどう言っているんですか？」

「うーん。『お前が好きになった人なら構わない。』って言われた気がしたなあ。」

「きつと信頼しているんでしょうね。」

「そうね。……それにしても、今年は大量に買ったわね。どうしたの？」

「いや、ちよつとレパトリーを増やそうかと思いました。」

「熱心なことね。でもそれで何回か倒れたでしょ？無理はいけないよ。」

「そうですね。」

「……………」

一通り話が終わったので、黙る僕達。というか、千亜妃さん、ついて来る気？

どうもそんな気がしたので、僕はとりあえず訊くことにした。

「千亜妃さん。」

「なに？」

「今、姉さんはイベントで家に居ませんからね。」

「あ、そうなの？ 久し振りに渚と話してみたかったんだけどなあ。

ここに帰ってきてから一度も会ったことないから。」

「それでもついて来るんですか？」

僕がそう訊くと、千亜妃さんは悩んでからこう言った。

「うん……。そうかあ、渚今いないのかあ……。

。。じゃ、伝言頼まれてくれない？」

「伝言ですか？」

「そう。年末前までに同窓会したい、つて。」

同窓会か……。それは姉さんの喜びそうだ。

そう思ったので、

「分かりました。」

僕は頼みを聴くことにした。

「ありがとう！ それじゃ、またね！」

僕が了承したのを見て、千亜妃さんはそう言って戻ろうとしたけど、すぐさま僕の方へ戻ってきた。

「どうかしたんですか？」

まだ何か用があるのかな？ と思っていたら、

「そう言えば今日店が休みだから暇なんだった。ねえ連。君の家に行っても良い？ 渚ったら誰も家に招待しなかったのよ。ここで会ったのも何かの縁だろうから、ね？」

そう言いながら手を合わせてきた。別に家に招待するくらいなら構わないんだけど……。どうしようかな？

台車を押しながら悩んだけど、今日はどうせ誰も日中に来ないだろうと思っ頷くことにした。

その反応を受けた千亜妃さんは、「ありがとう!」「と言ってそのまま僕の隣を歩いていった。

それに気付きながら、僕は台車を押すことに集中した。

……これ、終わったら返さなきゃ。

冬休み？(5)(後書き)

大変なことになりそうです。

冬休み？（6）

家の近くまで来たら、玄関前に人がいた。どうも、僕が買い物に行っている間からずっと待っていたようだ。

寒いのによく待っていていられるねえと思いつながら、台車を押して玄関まで行ったら、

「よ、ようやく、来たか。どこ行ってつたんだよ、連……………」
「…というか、その台車に乗っているものはなんだ？それに、お前の隣にいる人は誰だ？」

「…………前に言っていた遠藤千亜妃さん。」
「庄一と圭がいた。ここでずっと待っていたせいか、温かい恰好をしているのにブルブル震えていた。え〜っと、ゴメンね？」

僕は心の中で謝りながら要件を訊こうとしたけど、千亜妃さんは庄一達とは初対面だし、ここで話していると寒いので、三人を家に入れることにした。

「家の中だと寒さが少し和らぐな。」

「…飾り付けが終わっている。」
「ここが池田家なんだ。初めてだけど、渚や連が今のうちに育つような家には思えないなあ。」

リビングに取り敢えず通して適当に座らせたら、各々がそんなことを言っていた。

僕はというと、台車の荷物をリビングに運んで、電気ストーブを点けて、キッチンに段ボール箱を運んで、ホットミルクを四人分作って三人にそれぞれ渡した。残ったのは、自分で飲むようだからね？

僕は段ボールを開けて中身を出しながら、庄一達が来た要件を訊くことにした。

「ねえ、どうして来たの？準備とかしなくていいの？」

庄一はホットミルクを飲みながら、

「そんなことより、俺達の紹介しなくていいのか？」

と言ってきた。

誰に？つて一瞬思ったけど、すぐさま思い至った。

「千亜妃さん。」

「なに？この二人は連の友達なんでしょ？」

「うん。岡田庄一と木村圭って言うんです。」

「初めまして。俺が岡田庄一です。」

「…初めまして。俺が木村圭。」

千亜妃さんの方を見ながら、庄一達は自己紹介していった。

二人の紹介が終わってから、千亜妃さんが言った。

「初めまして。遠藤千亜妃です。………それにしても、連が友達と一緒にいるの初めて見た気がするんだけど。でも、外国人の女の子と一緒にいた時はあったよね？確か、ミネルバさんを見た時色々言っていた子。」

その言葉に、庄一と圭の飲む手が止まった。あれ？どうかしたのかな？

僕は不思議に思いながら、千亜妃さんの言ったことに対して答えた。

「レイジニアさんのことですね。たまたまですよ。あの時は買い物を手伝っただけです。」

「そうなの？みんな言ってたよ、『連にもついに彼女が出来たのか』って。」

その言葉に、僕の動きが止まった。

「クラスメイトで友達っただけですよ。彼女にだって好きな人がいるんですから。」

「そうなんだ。つまんないなあ。」

そう言ってから、ホットミルクを飲む千亜妃さん。ズズズツと飲んだ後に「温まるね。」なんて言うから、なんだか癒される。

僕はちゃんとやることやってるよ？ホットミルクはさっき話している間に飲み終えて、段ボールの中身はすべて出して調理順に出してある。

時計を見ると十一時になっていたので、先にお昼を食べてからにしようと思い、冷蔵庫の中にあつたもので四人分のチャーハンをつくることにした。

十分でチャーハンをつくり終え、皿に分けてから、キッチンに近いテーブルに置いといた。

それを見た庄一たちは「さつき千亜妃さんが言っていたことが本当かどうか、あとで訊いてやる。」「…それより要件だが、今はこれ。」「私も良いの？ていうか、男の人の手料理ってお父さん以外だと初めてかも。」「言いながら、コップをテーブルに置いてチャーハンを食べ始めた。

僕はそれを見ながら、今日の夕食のメニューをつくり始めた。どれも初めて作る料理だから、正直上手くいく自信が無いなあ。

僕がつくっている間、庄一と圭は千亜妃さんの話し相手になっていた。主に、僕の話題で。

「へえ。連ってそんな風に過ごしてたんだ。」

「あいつの武勇伝は学校だけじゃないですよ。」

「…家はもちろん、スーパーなどにも存在する。」

「家の方は詳しくは知らないけど、いつも一人で重たい荷物を持っていたのは、印象に残ってたなあ。」

「ところで、渚さんってどんな人だったんですか？」

「渚はとっても目立ってたよ。それでも、いや、そうだからかな？家の事は一切話してくれなかったね。だから、連が一人で買い物をしているのを見るまでは知らなかったんだよね。」

「…連とはいつから？」

「うん。渚と一緒に買い物をして来る時からだから………
・連が五歳の頃かな？」

「うわ。そんな時から買い物してたんですか。」

「そう。渚が初めて来た時も驚いたけど、五歳の連が来た時はもっと驚いたなあ。……ねえ。連に何か用があつたんだよね？言わなくても良いの？」

「すっかり忘れてた。」

そんな会話をした後、庄一と圭が僕に呼びかけてきた。

「聴いてるか？」

「今から言う。」

僕は調理をしながら「さっさと行って。」とちょっと大きな声で言った。

「じゃ、言うぞ？……いや、いや。お前の今の状況を見たらなんだか誘い難い。」

「そう？」

「…そうだな。すまない。お邪魔した。」

そういうやいなや二人がリビングを出て行こうとしたので、

「要件ぐらい言うてからにしてよ。それに、もう少しで一品目が完成するから。」

と言つて二人を呼び止めた。

僕の言葉に二人は足を止め、何も言わずに戻ってきた。きっと、ちゃんと要件を言うつもりなんだろう。

一方千亜妃さんは、「連の料理を初めて食べたけど、とってもおいしかったなあ。渚も食べているのかな？」と感想を言っていた。今更なんですけどね。

一品目をつくり終えて、自分の昼を食べながら、僕は訊いた。

「なんであそこにいたの？」

すると庄一が、

「電話に出なかつたから来たんだよ。携帯電話にもかけてみたが出なかつたろ？」

説明してくれた。その口調が、やや怒っていたけど。

「携帯電話？……あ。電源切れてる。」

庄一の言葉を受けて携帯電話の確認をしたら、画面が真っ黒だった。そのことに庄一は呆れながら言った。

「ま、いいや。んで、用つてのは、今日カラオケでも行かないかって事だったんだが、お前を見ていると……無理そうだな。」

「ごめんね。あとケーキ含めて五品くらいあるから。全部作り終えたら夕方になっちゃうかもしれないから。」

何気なく言った僕の言葉に、要件は言ったから帰ろうとした庄一と圭、それに話を聴いていた千亜妃さんの動きが止まった。おかしなこと言ったかな？

そう考えながら食べ終わったので片付けをしていたら、圭が口を開いた。

「…ケーキも作るの？」

「何を言ってるの？ケーキは毎年手作りだよ？ちなみに、今年はチーズケーキ。いつもはショートケーキかシヨコラなんだけど、初めて作る料理しかないから、ケーキもそんな感じでいいかな、って。・・・あ、これ姉さんや両親たちには内緒にしててね？」

そう言っただけで庄一たちを見てみたら、口を開けたまま呆けていた。そんなに衝撃的だったのかな？今の僕の話。なんて思いながら僕は、次の料理を作ることにしたけど、先にケーキをつくった方がいいんじゃないかと思い、優先順位を変えチーズケーキをつくることにした。

レシピは昨日暗記するほど読み込んだので（寝る前）、手順を間違える気はしなかった。

やっている間に、庄一がポツリとつぶやいた。

「……俺、家帰って手伝ってくる。圭は？」

「…俺は庄一の家の手伝いをする。」

庄一の言葉に圭も反応し、「連、頑張れよ。」「…カラオケはまた今度。」と言っただけで二人とも帰ってしまった。気を遣ってくれたのかな？

一方千亜妃さんは、

「連はいつもこんなことやって、凄いな。尊敬しちゃうな。」と椅子に座ったまま言っていた。その言葉の中には、どこか優しさが込められていた気がした。

僕はそれを聴きながら、土台となる生地づくりをやった。

「ふう。とりあえずあとは冷蔵庫に入れるだけ……って、あれ？千亜妃さんは？」

チーズケーキを冷蔵庫に入れて冷やすだけとなって一息つこうとしたら、千亜妃さんがリビングにいなかった。

どこだろうと思つて玄関を見てみたけど、靴はそのまま。

じゃ、どこに居るのだろうと思ひながら、家の中を探してみた。

二階が上がつてみて部屋を開けて探してみた。そしたら、僕の部屋のベッドで寝ていた。

時計を見ると午後二時。すやすや寝てるみたいだけど、どうして僕の部屋で寝ているのか謎だ。ていうか、ここが僕の部屋だと分かってるのかな？

起こすのは野暮だったけど、このままにしておくとか変な騒ぎしか起きなさそうなので、僕は千亜妃さんを揺すりながら「起きてください。」と言った。

それが通じたのか「うっ、うう……。」と言ひながら目を開けてくれたのはいいんだけど、どうやら寝惚けているらしく、体を起こして周囲を見渡しから「あれ？ここどこ？」と言つていた。

僕はそれに呆れながら「千亜妃さん、起きてくれませんか？」と千亜妃さんの肩を揺らしながら言った。それが功を為したのか徐々に意識が覚醒したらしく、僕の顔を見た瞬間に「あ！ご、ごめんね！ちよつと眠たくて！」と慌てていた。すみません、千亜妃さん

千亜妃さんが無事に見つかったので、リビングに戻つてどうしてあそこで寝ていたのか訊いてみた。あ、コーヒー（インスタント）を出したよ。

千亜妃さんはコーヒーを飲みながら説明してくれた。

「最初はね、連がチーズケーキをつくつていてるところを見ていたんだけど、その内に退屈になったから勝手に探索してたの。あ、連の部屋以外勝手に入ってないよ？」

「どうして僕の部屋に入ったんですか？」

三品目をつくりながら千亜妃さんに訊いた。そしたら、

「えつとお、本当は渚の部屋が気になったんだけど、どこだか分からなくて。名前が無い部屋を開けようとしたら鍵がかかってたから、連の部屋をね。」

と答えた。しまった。姉さん達の部屋に鍵をかけるよう提案したのは僕だったんだ。その理由は、たまに部屋の外に物が出てくるから整理してくれば問題ないのになあ。

「でもさ、連の部屋ってすごい綺麗だね。男子の部屋って汚いつてイメージがあつたんだけど、それが一瞬で払拭されたよ。」

「物が無いだけですよ。」

「そうかな？それはともかくとして、部屋に入って本を数冊読んでみて眠気が襲ってきたから、さっきの状態になっちゃったんだ。ごめんね。」

「こちらこそすいません。退屈させてしまつて。」

「いやいや！こつちが勝手についてきたんだから、別にいいよ、気にしないで！……ていうか、喋りながらやって大丈夫なの？」

「あ、大丈夫ですよ。今切り終わったので。」

会話しながら刃物を扱うって危険な行為だけど、僕はもう慣れた。だつて庄一たちが遊びに来るときはいつもこうだから。

次の作業に移ろうとしたら、千亜妃さんが突然キッチンまで来た。

「どうかしましたか？」

今日だけでこの言葉を何度吐いたのか数えてないけど、僕の言葉に千亜妃さんは怪訝な表情をした。

「その言葉遣い、止めてほしいな。」

「え？」

「さっきの君の友達と同じように話してくれない？」

うん？千亜妃さんはどうしてそんなことを言うのだろうか？年上だから礼儀を弁えてるのに。

「どうしてですか？」

「だから、それをやめてほしいんだつて。」

そこまで言われるとおとなしく従っしかないと思ったので、止めることにした。

「これでいい？」

「うん。」

それじゃ気を取り直して。

「どうしたの、千亜妃さん？」

「私も何か手伝えることが無いかな〜って思ってたね。・・・あ。

「ヒーありがとうございます。」

「どういたしまして。・・・手伝えることっていわれても、基本的に一人でつくっているので特にないんだよね。」

「そうなの？」

「うん。」

僕がそう言ったのに、千亜妃さんは動かなかった。

「あの、千亜妃さん？」

「なに？」

「どうしてそこにいるの？」

「やることがないなら、連がつくっている姿を直に観たくて。・・・

・・・いいでしょ？」

まあ、調理場の邪魔にならない場所にいるんだから別にいいとは思っけど。・・・。

四品目をつくり始めながら僕は考えた末に出した答えが、

「・・・・・・・・分かったよ。そこが一番邪魔にならないところだから、そこに居てね。あと、退屈になったら帰っていいから。」

これだった。・・・厳しい答えが出せないんだよ、どうしてだろうね？やっぱり、相手が綺麗な人だからかな？と自問自答しながら作っていたら、

「ありがとう！今日の夜にでも参考にするよ！」

千亜妃さんが張り切っていた。・・・僕、同じクラスの人から「凄すぎて参考にできない。」って言われたんですけどね。

心の中でそう思いながら、僕は四品目をつくっていった。

作っている間、千亜妃さんは「凄いね……。」と呟いてから何も言わなかった。

集中できるからその方がありがたいけど、ここまでじっと見られると、なんだか恥ずかしさを覚えるよ。というか、女の人にここまでじっと見られたことは何度かあった気がしなくもないけど、その時は何人かいたし、他の人もいたから別に何とも思っていないかった。だけど、今回は千亜妃さん一人だけが見てるし、しかも家には二人しかない。

……二人？僕と千亜妃さんだけ？

今更感全開だったけど、なんだかヤバイことを考えそうになったので、とりあえず四品目をつくり終えた。

「参考になった？」
使った物を流し台に置きながら、僕は千亜妃さんに訊いた。そして、

「参考にしようとしたけど、レベルが違かったよ。本当にすごいね、連。」

なんて感想を言ってくれた。ありがとうございます。

それから、何気なく時計を見たら三時になるうとしていた。

「千亜妃さん、そろそろ帰ったら？」

僕は時計を見てから千亜妃さんに向けてそう言った。それにつられて時計を見たのか千亜妃さんが、

「本当だ！ありがとうね、連！！楽しかった！渚にもよろしくね！！」

と言って帰っていった。あ。見送りするの忘れたなあ。

千亜妃さんが出て行った後、さあ時間までに終わらせよう！と自分に言い聞かせて五品目を作り出した。

冬休み？(6)(後書き)

次回はクリスマスパーティー。短いです。

冬休み？ (7) (前書き)

遅くなりました。メリークリスマス？

冬休み？（7）

「あゝ終わった。．．．．．ていうか、チーズケーキちゃんと出来たかな？」

四時半になった。僕は一応料理を全部作り終え、いつも食べる時に使うテーブルに最初の奴だけ並べ、あとの料理を全部キッチンの方へ置き終えて、一息ついた。

その時に、食材費を家計簿に書いていないことを思い出した僕は、自室へ戻り皆へのプレゼントと家計簿用のノートを取ってきてリビングに戻ってきた。

プレゼントをツリーの下に置いて、僕は料理が置いていないテーブルの方で家計簿を書いた。僕がつけた中で最高の使用金額だった。．．．．．まだ黒字なだけさいわいだね。

家計簿を自室へ置きに行った時、僕は宿題の存在を思い出した。だから、姉さん達が戻ってくる間に宿題に取り掛かった。残りは二割半！頑張つてやろう！！

と思つたけど。．．．．．

やり始めて十分もしないで姉さん達が帰ってきた。

「ただいまー．．．．．ってあれ？連　？二階かー？」

「ただいま帰りました。」

やり始めてまだそんなに経っていないのになあと残念に思いながら、僕は一階に降りて姉さん達を出迎えることにした。

「お帰り、姉さん。レミリアさん。．．．．．イベントどうだった？」

「どうだったって、楽しかったと言えば楽しかったな。ただ、レミリアはコクられたらしいけどね。」

「な、渚さん！！？」

「へえ〜。やっぱりモテるね、レミリアさんは。」

「．．．．．バカ。」

あれ？素直に感心しただけなのに、怒らせちゃったみたいだ。

隣では姉さんが、「ハア。どうしてこいつは鈍いんだろうか？」と眉間を抑えながら呟いていた。どうして？

悩んだけど、千亜妃さんに言われたことを思い出したので、僕は姉さんに言った。

「姉さん。千亜妃さんから伝言があるんだけど。」

「なに？あいつから？」

「うん。なんでも、『年末前には同窓会をやりたい』んだって。」

「年末前か……。確か暇な日があったな。その日にでもしてもらうか。」

「今から行って来たら？……。って言いたいけど、明日商店街に行ったら？もうすぐ年末だし。」

「そうね。じゃ、私達は着替えてくるから。」

「うん。」

このやりとりの中、レミリアさんは一言もしゃべらなかつた。さっきの事気に障ったのかな？

「全く、レンだったら！！どうしてあんな平気な顔をしてられるんですか！」

部屋に入って早々、レミリアはさっきの連の態度について怒っていた。

「ま、連から見ればあんたは居候、という認識だからね。抱き着かれても、自分の事が好きなのでは？という事にまで思考が回らないのさ。……。頭の回転は速いんだけどねえ。」

そんなレミリアの態度を見て、渚は着替えながら言った。当然、それを聴いたレミリアは言葉を詰まらせた。

「うっ！や、やっぱりそうなんですか……。私、魅力ないんですかね？」

「そうしよげるなよ。焦らずに行けばいいさ。……ところで、これ着てくれないか？久し振りに着ようとしたんだけど、サイズが合わない

くて。」

落ち込みそうになっていたレミリアに、渚は励ましの言葉をかけた…… だけならいいのだが、とある服を渡した。

「え？・・・あの。この服って、サンタの服ですよ？しかも、どうしてミニスカートなんですか？」

その服を見て、レミリアは困惑した。なぜなら、彼女が言った通りサンタの服、しかも下がミニスカートだからだ。

それを聞いた渚は別な服に着替えながら説明してくれた。

「ああ、それ？それは、私が中学二年生の時に連につくってもらったんだ。サイズとかは、千亜妃に測ってもらったのを連に教えてな。六年ぶりに着ようとしたんだが、やっぱり着れなかったわ。で、サイズが近そうだから着てくれない？」

それを聴きながら、レミリアは渡された服を着るかどうか考え込んでしまった。そして、

「はあ。レミリアさん、怒っていたなあ。きっと今日はもう話してくれないだろうなあ。」

テレビを聞き流しながら、僕はさっきの事を考えていた。

どこがいけなかったのか分からなかったけど、レミリアさんを怒らせちゃった。どうやって仲直りしようかな？いや、そもそも仲直りが出来るのかな？

そんなことを考えながら、料理を温め直さないといけないと思いつき、テーブルに並べた料理を一人分ずつ（みんなで分ける料理はそのまま）レンジで温め直していった。

四人目を温めていたら、両親が元気に帰ってきてきて自室へ戻っていた、ちよつと顔が見えたけど、僕から見ても両親の表情は子供っぽかった。

最初に並べた料理が問題なくなったので、自分の席に座り他のみんなが来るのを待った。

僕が席に座って二分ぐらいで両親が来た。服装は完全に寝巻。どうやら、家から出る気はないようだ。そして、ツリーの下にプレゼントが置いてあることに気付いた両親は「あ。部屋に置いてきてしまった。」「私も忘れてたわ。」と言ってまた二階へ行き、今度はプレゼントを持ってきた。そして、ツリーの下に置いた。……その袋にデカデカと自分の名前を書く必要はないんじゃないのかな？それからさらに二分後。ようやく姉さん達が来た。ただ、レミリアさんが恥ずかしそうにしていたのが気になったけど、その理由が分かってしまった。

だって、姉さんが普通のサンタ姿で、レミリアさんがミニスカサント姿だったからだ。道理で恥ずかしがるわけだ。

……ってあれ？姉さんが着ている服は分からないけど、レミリアさんの着ているのって僕がつくったやつじゃない？僕が小三の頃に姉さんに注文されてつくったやつ。結局二回しか着なかったけど、まだとってあったんだ。

なんて思いながら、僕は文句を言いたしそんな両親をなだめて姉さん達に座るように促した。そして、姉さんが「座らせる前に感想くらい言ったらどうだ？人気の女優二人がコスプレだぞ？ファンだったら完全に叫ぶわよ？」と言って、クルリと一回転した。

僕は素直な感想を言った。

「どこからその衣装もってきたの？」

「お前はそれだけか！……母さんが前に着ていただろ？」

あの時の服だよ。」

その姉さんの言葉に、僕は思い出した。

「ああ！あの時のか！……うん。似合ってるよ。」

「ありがと。そういう素直な感想しか言わない、ってのはどうかと思うけどね。」

そう言っただけで姉さんは自分の席に座った。そんなこと言われたって、ねえ？

その後、レミリアさんの感想を言おうとしたら、自分の席に座っていた。その時のレミリアさんの顔が、怒っているんだけど恥ずかしそうという顔だった。

まだ怒っているんだなあと思いつながら、僕は勝手に酒盛りをしようとしている両親を注意してからこう言った。

「じゃいくよ！乾杯！」

それにつられて、レミリアさん以外はカンパイと言ってコップを突き上げてから、入っていたシャンパン（お酒じゃないよ！！）を飲んでいった。

こうして、クリスマスパーティーが始まった。

結論だけ言うね。

大変好評でした。

.....

だってこれ以上は何も言う事は無いからね？初めて作った料理を食べた皆の感想が「おいしい。」だけだったし、恒例のケーキに至っては、出す時に姉さんとレミリアさんが物凄く驚いていたくらいだもん。

ここから先はその時の会話です。

「え？これ、連がつくつたの？」

「うん。といつても、失敗したかもしれないんだけどね。」

「そんなことないですよ！ちゃんと出来てます！！」

「でも味がね.....。急ぎだったから味見していなんだよ。」

「そうなの？」「そうなんですか？」

「うん。」

以上、出した時の会話でした。

感想？「お前、なんでもできるんだな。」「おいしかったぞ？」

「そうね。」「おいしかったですよ、レン。」「で分かってくれるよね？」

これだけみると仲直りしたと思われるけど、実際は出来ていない。

いや、話のタイミングが合わなくてね。

で。今は、プレゼントを渡すという締めくくりの段階になります（それまでの間に片付けは済ませた）。

最初に、父さんが配っていった。僕に渡されたのは、マフラーだった。自分でつくったの、あるんだけどなあ。そう思いながら、僕は電動の髭剃りを渡した。

次は母さん。渡してきたのは、なんと辞書だった。なんでも、「勉強、頑張つてね。」らしい。ありがたいけど、なんだろう。こういう時に贈られるはずじゃない気がする。なんてことを思いながら、僕は母さんが昔使っていた化粧品を渡した。

その次が姉さん。「大事に使いなよ。」と言いながら渡してきたのは、小さいノートパソコンだった。ちなみに、ディスプレイ型のパソコンが父さんと母さんの部屋にあるので、僕はそれを使って本の注文をしていた。

これからはそんなことしなくていいんだと思いながら、僕は姉さんにシャープペンシル数本とスケジュール帳を渡した。

受け取った姉さんは「お前、あの店の事憶えていたのか。」と驚きつつも嬉しそうだった。両親も、嬉しそうだったり、懐かしがっていた。

最後に残ったのはレミリアさん。さっきの事があるから、ちょっと話しかけづらいし、話しづらい。

そんな雰囲気には苛立ちを覚えた姉さんが、両親と一緒に二階へ戻ってしまった。

え？このまま放置？どうしよう？

なんて考えながら黙っていたけど、ここは僕が先に言った方がいいと思つて勇気を出して言った。

「あの！レミリアさん、さっきはごめん！！」

その言葉を聴いて、何故だかレミリアさんが慌てていた。

「そ、そそそんな！！ね、レンが謝ることないですよ！！私が勝手に怒ってしまったんですから！」

「……え？」

レミリアさんの話を聴いて、僕はポカンとした。ちょっと待って。という事は何？レミリアさんが勝手に怒って、僕が勝手に謝ったって事？

そのことにちょっとだけ呆けていたら、レミリアさんが吹き出した。

「ちょっと！どうして笑うの!？」

「すみません。まさかこんなオチになるとは思わなくて……」

そう言いながら笑っているレミリアさんを見て、僕はヤレヤレと思っただ。そして、

「ハイ、これ。メリークリスマス、レミリアさん。」

「え？」

僕の声に一瞬キョトンとしたレミリアさんを尻目に、僕はブレスレットをレミリアさんの腕にはめた。

その事を理解できなかったのか、レミリアさんはまずブレスレットをはめた腕を見て、それから僕を見た。その数秒後、

「あ！ありがとうございます!!」

頬を赤くしながらお礼を言ってくれた。良かった。喜んでもらえて、それからレミリアさんは、「さ、さっきの後に渡すのは、ちょっとためらうんですが、これをどうぞ。」と言ってあの本を渡してくれた。

それを受け取ってから僕は「ありがとう。」と笑いかけていった。たったそれだけなのに、レミリアさんは「はう。」とか言って倒れそうになったので、僕は倒れそうになった彼女の肩を掴んだ。あ、あぶな。大丈夫なの？

ふと心配になってレミリアさんの顔を覗いてみたら、とても幸せそうな顔だった。そんなに嬉しかったのだろうか、僕のプレゼント。

僕は、このままにするのも可哀相だと思ったので、姉さんに「ドアの近くで見てるんだったら、レミリアさんを運んでよ。」とお願

いした。

すると姉さん達がドアの方から出てきて、「バレてたか。」「「やっぱり連は頭がキれるわね。」「そりゃ私達の息子だからな。」「と言っていた。悪趣味な人たちですね、全く。

それから姉さんがレミリアさんを運んだので、僕は風呂に入ってから自室へ戻り宿題をやって寝た。ミニスカサンのレミリアさん、可愛かったなあと思いつながら。

冬休み？（7）（後書き）

次はまあ、大晦日前日の話です。

十二 冬休み？（十二月三十日～一月十日）（前書き）

さあ、百二十話で十二章。区切りがいいといふかなんといふか……

十二 冬休み？（十二月三十日～一月十日）

それから日が過ぎて（宿題は終わらせた）、十二月三十日。

「さあ張り切って大掃除しよう！！」

「……え……？」

明日の大晦日にやらなくて済むように、僕達は家の大掃除をすることにした。

「え……？じゃない！！去年までは僕一人でやってたんだから、今年も楽だよ！！」

「……大変でしたね。」

「……すみませんでした。」

こうして僕達は大掃除を開始した。

僕達はまず役割分担をした。といっても、両親に掃除させるとさらに汚くなるので、ゴミ袋をまとめる係。姉さんとレミリアさんは自分たちの部屋とリビングとキッチンの掃除。それで、残りは僕。結局、去年より少なくなっただけ、それでも僕の負担は多いかな？でも女の子に多くやらす男の人って、最低だよな。僕はそう思う。そんな感じで、僕達は掃除を始めた。……両親は、掃除と言えないだろうけど。

掃除すること二時間くらい。いつもの掃除よりかかっている。だってそうでしょ？大掃除なんだから。

半分くらい終わらせたところで（風呂場とトイレ、両親と自分の部屋）、外にいた両親が僕の事を呼んできた。

どうかしたのかと思って外にでたら、庄一達が来ていた。ただ、一人だけこの場に似合わない、というより組み合わせ的には不思議な人がいた。

「庄一。圭。どうして花音さんが居るの？というか、今大掃除やっ

ているんだけど。」

僕がそう言ったら、庄一がポリポリと頬を掻きながら答えてくれた。「いや、本当は俺と圭だけで来るつもりだったんだ。大掃除の手伝いをしにな。去年もこの日にやっていただろう？大変そうだから手伝おうと思ったんだが……今年は休みだったんだな。」

庄一の答えに僕は納得して感謝したけど、花音さんが居るのが理解できなかった。

「で？どうして花音さんが居るの？」

その質問に対して、圭が答えてくれた。

「……ここに来る途中、一人でぶらりと歩いていた花音さんと遭遇した。本当はそのまま別れたんだが、「ヒドゥイ。」どうやら先にここに来ていたらしい。」

「目的地がばれてちゃ、そりゃ待ち伏せできるよ。」

圭の答えに、花音さんがそんなことを言っていた。

そうだよねと僕が頷いていたら、花音さんが近寄ってきた。

「どうしたの？」

そう僕が訊いたら、花音さんがニパツと笑ってから言った。

「えっとね、連の事を観察しに来たの。」

「……………ハイ？何と言いましたか、花音さんは？」

状況が理解できない僕は、周囲を見渡した。

庄一と圭は何やら僕を見てなにやらボソボソ話しているし、両親は両親で僕と花音さんを見て話していた。それだけなら良かったと、僕はすぐ思った。その理由は、

「……………レン？」

「レ、レミリアさん。ど、どうしたの？」

レミリアさんが玄関の方からひょっこりと顔を出しているからだ。

しかも、凄いプレッシャーを放ちながら。こ、怖いんだけど……どうして？

僕がビビっていたら、花音さんが僕の手を握りながらこう言って

きた。

「だってさ、連つて元に似て不思議な人なんだもん。家庭環境のせいか、基本的に人の頼みごとを断らないし、家事関係なら他者の追隨を許さない有能さ。そんな人がどうして生まれたのか、研究したいと思うでしょ？」

「あの、花音さん？結果が分かっているなら、研究する必要は無いんじゃないでしょうか？」

僕は花音さんに手を握られたまま、レミリアさんに何故か睨まれながら、競々（きょうきょう）とした感じで訊いた。だって怖いじゃん。もうヤダ、何この状況。

それに対して、花音さんが手を離して僕の周りを歩きながら答えてくれた。

「分からないよ？家庭環境だけじゃなさそうじゃない、こういうのは。人間関係とか、日常の過ごし方とか、色々よね？それに私は君の家庭環境を全部分かっているわけじゃないからね。」

「つまり……僕が普段どのような人たちと、どのように過ごしているかで、どうして僕がこうなったか研究したいわけ？」

「そういうこと。」

そう言った時、丁度僕の目の前に花音さんが止まった。なるほどねえ。……でもね。

「どうやって研究するの？ていうか、僕に言っているの？」

そう。こんなこと言うのはなんだけど、研究すると言われたら意識しちやうて駄目なんじゃ？

そう思ったら、花音さんがクルリと回って その時に白衣がフワリと浮いたけど、気にしなかった こう言った。

「その辺は気にしなくて良いよ。私が勝手にやるから。」

その言葉に、なんとなく僕は不安になった。何故だか知らないけど、そんな気がした。

「じゃね。」

全て言い終わったからか、花音さんは帰っていった。その間にも、姉さんは掃除を終わらせたらしく、

「どうしたんだ、あんたら？レミリアはどこか怖いし、両親たちは仕事の手が止まってているし、連の友達たちはそんな両親の仕事をしているし。………そういや、連はどうしてそこで立ち止っているんだ？」

と言っていた。

説明は、どうしよう？そう考えて、僕はすぐに結論が出た。

「あのね、姉さん。藤木花音さんって憶えてる？身長が百三十センチくらいの子。あの子が家に来たんだよ。」

「ん？そうなのか？………ああ！だからレミリアが怖かったのか！」

僕の説明に、姉さんは納得していた。え？そこでどうしてレミリアさんの話が出てくるの？

そんな僕の顔を見て、他の人達は一斉に溜息をついた。どうしたのかな？

ま、それはともかくとして。

「掃除でもしますか。」

僕は残りをやるべく家の中に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5693x/>

普通の人を送る日常

2012年1月13日23時50分発行